早大教授
文學博士 五十嵐力校閲
今井卓爾著

平安朝日記の研究

東京
啓文社出版

今井君の新著に序す

今井卓爾君は沈默の篤學者である。君の文學部に在ること三年、余は一時間として君の姿をわが教室の第一線に見出ださぬことがなかつたが、同時に殆んど一度も君の特別なる發言を耳にしたことがなかつた。かくして余は君の才と識とに全く留意することなくして君の學生期を看過ぐし、三年在學の最後に提出された卒業論文によつて、始めて君が特異の存在たるに驚かされたのであつた。

この『平安朝日記の研究』はその卒業論文に多少の改竄を加へて、昭和八年十二月に恩賜記念賞の候補論文として提出され、やがて審査全員一致のもとに第一位に推されたものである。大體は『土佐日記』『かげろふ日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』等の王朝日記につき、文藝作品としての本質、發生、環象、影響、地位等を考説したものであるが、その視野の廣き、說明の周到なる、裁斷の用心深くしてしかも適確なる、文章の明快なる、及び處々に秀でたる獨創の散見

したる、一つとして若き學徒の此の處女著述に光彩を添へぬものがない。就中、日記に對し相互影響の交渉をもつものとして、同時代の漢文學、和歌、私家集、消息文、歌物語、物語、紀行、歴史物語等につきて能所授受の關係を論じたる、日記の意義性質につき、一方に於いて後代諸家の所説を列擧し、他の一方に於いて王朝同時代の文學に散見した日記觀を收拾して內在批評を試みたる、また我が王朝の日記はロマンティックにあらず、リアリスティックにあらずして、二者の交錯するところに生まれ出でたものであるといひ、或は訴ふるにあらず、報告するにあらずして、告白するを本義とするといへるが如きは、特に獨創のひらめきを見るべきものであらう。

從來、或は註釋的に、或は考證的に、或は表面的に、或はバラ〳〵に引離してのみ見られてゐた王朝日記が、一體に引纏めて、文學史的、文化史的、思想史的の深邃なる研究を受けるやうになつてから、まだ日が淺いのであるが、今井君の新著の如きは、その種の研究の最も深く、新しく、面白く、獨創的なるものの一つとして、永久に此の世界に輝くものであらう。

昭和十年七月二十二日

五十嵐　力

序

平安時代の文藝は日本の文藝の中でも花々しい集大成をした文藝である。その文藝の中でかなり特殊な存在が日記といふものである。平安時代の日記が何故に文藝の一つの表現形式としての取扱を受けねばならないか、そして文藝の一つの表現形式としての日記が如何なる本質のものであるか、といふ點を闡明しようとしたのが、この「平安朝日記の研究」である。今、舊稿に若干の筆を加へて大方の批判を仰ぐ事になつた。

研究中は言ふに及ばず、本書の上梓に關しても、恩師五十嵐力博士の御厚意は永久に忘れることが出來ない。

昭和十年七月

今井卓爾

緒言

一、平安朝（時代）とは平安奠都（七九四）より平氏滅亡（一一八五）までとする。

一、こゝにいふ日記とは、主として平安時代の國文體の日記である。

一、「日記の本質」と「作品研究」とは兩々相俟つべきもので、一は綜合的歸納的、一は分析的演繹的である。

一、主要なる作品の詞章（テキスト）は左の系統のものによつた。

土佐日記……定家本　　更級日記……定家本
蜻蛉日記……契沖本　　讃岐典侍日記……群書類從本
紫式部日記……伏見宮本　　和泉式部物語……群書類從本

一、立派な說の見落しや咀嚼の足らぬ研究が多いと思ふ。叱正を乞ふ。

目次

第一部 日記の本質

第二部 作品研究

（目次終）

背・扉・五十嵐　力先生題簽

第一部　日記の本質

第一 序論

一 日記研究の意義

1

平安時代の文藝の中で割合に研究されてゐないものゝ一つが日記である。『古今集』・『伊勢物語』『源氏物語』・『枕草子』などは古來かなり廣く且深く研究されて來てゐるが、日記では『土佐日記』と『紫式部日記』とが多く注目され、研究されて來てゐる位のもので、其他は餘り人の注意を惹かずに今日に及んでゐる。これは一面日記といふ名稱が已に文藝以外のものであるといふ樣な感じを抱かせ、歴史の分野に入れられ勝ちであつたがためである。平安時代の文藝を代表する形式が、和歌や物語である事は今更言はなくてもよいであらう。然し是等の形式以外の作品で文藝的のものも相當に多い。その中で日記は代表的のものである。『古今集』や『源氏物語』や『枕草子』が平安時代の代表作であるといふ事は、他の幾多の作品と比較してこそ言はれ得るのであつて、其自身に具つ

てゐる一元的絶對的地位ではない。代表的といふ事は相對的といふ事でなければならない。從つてこゝに企てた日記の研究といふ事は、一つには日記それ自身を闡明する事であり、一つには他の作品の地位を再批判する事にもなるのである。一つの或作品が代表的のものであると決定されるには、あらゆる立場から吟味されねばならない。然しそれは不可能に近い。可能的に十分でなければならない。そこに日記などが當然新しい色々の問題を提供する事になるのである。

一體『源氏物語』などにしても、それが出る迄には、その土臺となつた數多くの作品があつたに相違ない。日記もその一部であつたかも知れない。『源氏物語』以前にどれだけ多くの作品があつたかは分らないが、名のみ傳はつて散逸してしまつた物語などでも相當の數に上つてゐたらしい事が推察出來る。其等を殆んど知る事の出來ない今日、其等と『源氏物語』との關係を考へる事は困難である。『源氏物語』は優れてゐたがために殘つたのでもあらうが、又殘つたがために今日優秀の作品とされてゐるのであるのかも知れない。あのむつゝりしてゐて、案外負けず嫌ひの作者紫式部が『源氏物語』の中で、

さるは、いといたく世をはゞかり、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。（源氏物語—帚木）

と言つてゐるのは、自作の物語の主人公源氏君と交野少將とを對立させて述べたのみではなく、『交野少將物語』と『源氏物語』との比較の意味も含まつてゐるのであるかも知れない。そして自作に或る引け目を感じてゐたのであるかも知れない。若し之から散佚した當時の作品が段々に明かにされて來るならば、餘りにも偶像視されてゐる『源氏物語』といふ作品も、もう少し徹底的に研究されるのではないかと思ふ。

歴史の資料とのみ取扱はれ勝ちであつた日記といふ樣なものも、文藝の一つの表現形式としての意義を吟味する事によつて、其自身が闡明せられると同時に、今日迄殘つてゐる材料の乏しい當時の文藝の動きが、少しでも餘計に明白にされて來るのではなからうか。これが日記の研究に課せられた一つの大切な問題であり、期待であらねばならない。物語が物語としてのみではその存在の說明は十分につかないし、和歌は和歌史のみでは其發展の狀態が明白にならない。平安時代の作品を一つでも多く取入れて、其處より歸納的に闡明されたものが、平安時代の文藝の本當の姿であると思ふ。一つの作品は、それのみで獨立し得べきものではなく、他との關聯のもとにこそ獨立し得べきものなのである。從つて或作品の把握には、文藝に於てのみならず、他の一般の文化現象との關係も、當然必要になつて來るのである。かういふ意味でも、文藝的に意義が少いからと言

つて、日記の研究が放棄されるべきものではない。——事實、從來日記が受けて來たよりもずつと大きな文藝としての意義が日記にはある。『源氏物語』や『枕草子』が早く其價値を發見されたが故に、日記がそれ自身持つよりも、より低い價値を持たされねばならないといふ事はない。——或は日記を再吟味する事によつて、現在行はれてゐる平安時代諸作品の地位が再批判されねばならなくなるかも知れない。日記研究は、日記が文藝の一つの表現形式としての意義をどれだけ持つてゐるかといふ事の闡明のみではない。平安時代の文藝の流れが、是等日記に如何に作用し反映し、或は是等日記が他の文藝に如何に作用し反映してゐるかを見る事によつて、諸作品の批判の一つの源泉ともなり、同時に日記自身の地位をも考究しようといふのである。日記の研究が從來比較的に閑却されてゐたのは、日記が積極的に他に働きかける事が少く、却つて働きかけられる方が多かつたゝめであらう。日記研究の重點は、珍しいがために日記を價値づけようとするのではなくして、日記といふものが平安時代の文藝、ひいては日本の文藝の上から、どれだけのものであるかといふ事を明白にして見ようとするのでなくてはならないと思ふ。

2

日記の中で今日迄最も多く研究されて來たものは『土佐日記』で、之についでは『紫式部日記』である。前者には『古今集』の編纂責任者紀貫之作といふ背景を持つ紀行であるといふために、後者は『源氏物語』の作者紫式部の作であるといふために、相當研究されて來た事は否めない。是等に反して『蜻蛉日記』などになると殆んど省られた痕跡がない。この作者は以上二つの様に特殊な背景をもたないし、殊に『土佐日記』などに比較すると頗る大部の著作で、其上難解の作品であるために、一寸喰ひつき難いといふ割の惡い條件があつた。『更級日記』は早く錯亂したゝめに、國文學の研究の盛んに起つた江戸時代にも研究が行きとゞかなかつた。最近に至つて此日記が大體元の姿にかへつたので、この研究が急に盛んになつて來た様に思はれる。『更級日記』に比較すると『蜻蛉日記』の方は、今日でもまだ〳〵不用意に取扱はれ勝ちである様に思はれる。『蜻蛉日記』は『更級日記』よりも優れてゐる、恐らく日記の中では最も注意されてよい作品ではないかと考へられるのである。然し此作品は古來喰はず嫌ひをされて來てゐるために、十分に吟味せられず、從つて未開拓の作品となつてゐるのではなからうか。

日記の意義を考察する上には、或作品が確かに日記であるといふ基礎の上に立つ事が非常に必要な事である。この作品は日記であると明記してゐるものは『土佐日記』と『蜻蛉日記』とである。

從つて日記考察の基礎が、この態度の明白な二つの日記の上に置かれてよいのは當然である。『土佐日記』は男の日記であり、『蜻蛉日記』の作者は女である。男の作であり且紀行文といふ特種な形をとつてゐる『土佐日記』は、或點から言ふならば、女の作である他の日記から區別されてもよいわけであるが、共に日記であるといふ點から考へて、出來るだけ區別しない方が正しいと考へられる。然し後に女の日記が澤山出たゝめに、自然中心が『蜻蛉日記』に移つて行く事は當り前の成行きであつて、兎角『土佐日記』が獨りぼつちにされてしまひ勝ちになるのは已むを得ない事である。

『蜻蛉日記』の注目すべき點は色々あるが、まづ第一に、この作品が美しい藝術品であるといふ點を指摘せねばならない。そして一箇所ならず日記であるといふ事が明かに書かれて居り、日記といふものゝ意義を考へる上からは確定的で好都合である事、非常に大部な作品であつて、色々の要素を含んでゐるから、他の作品との比較が自由に出來得る事、後世女の日記は數多く出たが、この日記は女の作としては現存する最古のものであつて、之より日記の發展狀態を見る便利が多い事も、歷史的見地から閑却する事の出來ない事である。『古今集』が出て以後、『源氏物語』を中心とする文藝の全盛時代になる中間的存在がこの作品であるから、この意味からも時代的に注目に價するものであるとしてよい。即ち文藝的にも、文學史的にも、『蜻蛉日記』は重要な作品であると思ふ。

だから文藝の一つの表現形態としての日記の意義を考察する爲には、大體として『蜻蛉日記』が中心になり、又ならねばならないのであると思ふ。

二　日記の要素

一

日記の持つてゐる要素を見るには色々の立場があるであらうが、日記が日記と言はれるためには時間的關心と事實的記述が根本であると考へられる。時間的要素が餘りに明白に現はれる所に今日普通に言ふ日記といふものが成立つて來る。今日言ふ日記の中にも自由日記といふものがある。これに於ては不必要な時間は出來るだけ省略して必要の事のみを記してゐる。時間の觀念から自由に解放されようとして居る傾向がはつきりと認められる。自由日記は毎日々々の事を記さないが、それでも日記である事には變りがない。思ひ出した樣に時々自分の生活記錄をして行つても、立派に日記と稱され得る。日記だからと言つて、何も機械的に毎日々々の事を記さねばならないといふ事はない。自由日記に於ては、日と日の間に間隙を置く自由性があり得ると同樣に、月

と月、年と年との間にも自由性があり得るわけである。かう解釋して來るならば、平安時代に於ける大部分の日記が、日毎の記載をしてゐないからと言ふ理由によつて、日記といふ事が出來ないとするのは、現在の自由日記と比較しても言ふ事が出來なくなるのである。日と日、月と月、年と年との間に隙間の出來てくるのは、日記を書く態度が今日の所謂日記とは異つてゐるためである。即ち當時の日記は、後から思ひ出して書いたといふものが比較的に多いからである。

かういふ態度であるから、時間的には大體の順序を追つて記してはゐるものゝ、記す時には或事柄を中心とする樣になる。時間の動きが、今日の所謂日記では、一日を單位としてゐるのに比較して、平安時代の日記は多く過去の思ひ出になる事件が單位になり、それが記憶によびさまされて來て書かれてゐるのである。これが最も自然の順序である。そこに日記ではあるが、月日を中心とするよりも、一つの事柄を中心にしたものが起り得るのである。日記を物語と呼びかへても差支なくなるやうに、日記が時間中心より事柄中心に移るのである。然し事柄が中心的であつても、其基調には時間の推移が重要な働きかけをしてゐる事は當然である。平安時代の多くの日記は、かういふ事柄を中心にした記述が、時間的制約を受けた所に生じたもので、之に更に空間的制約を受けると、所謂紀行となつて現れて來る。以上の樣に見て來ると、日記の根本的要素は、時間の觀念と事實

の記載とである事が知られる。勿論日記の要素を時間とか事實とか空間とかいふ樣に分類するのは便宜上の事であつて、何れの日記でもこの範疇の中にのみはつきり入れられるものはない。どの作品でも、多かれ少かれこの三つが相互的關聯をしてゐるのである。

2

日記の創作に時間的觀念が基調になつてゐる事は分つたのであるが、前述の樣に、思ひ出の形として書かれるものが多いのであるから、必ずしも毎日筆が取られたものでない事は、もう少し詳しく具體的に說明して置かれねばならない。そこで『蜻蛉日記』を中心とする幾つかの日記について、簡單にその組織の說明をなし、その創作態度を若干述べようと思ふ。即ち日記と銘打つてゐる所の作品を中心にして、日記の內容と其著述の態度とが如何なる關係にあるかを考察して見たいと思ふのである。

『土佐日記』作者の日記を書いた態度は、その冒頭の句によつて大體が知られるものとして、古來之についての論說は頗る多い。『土佐日記』を紀貫之が何時書いたかを明白に決定するのには材料が乏しいが、大體から言つてこの作品の內容がさうである樣に、この日記の日附に最も近い或時期

に、旅行中の若干の材料によつて書いたものではないかと思はれる。日毎に書き繼いで行つたのであると解釋すればさうも出來さうである。然しこの作品の全體が相當に均勢のとれたものである點から考へて、旅行後の或最も近い時期に、首尾一貫する樣な組織に加筆したものと思はれる。勿論男である作者が――そこには種々の問題があるが――漢文記錄的日次記事をしたからと言つて怪しむには足りない事であるには違ひないが、女の樣な顏をして筆をとつてゐる所に、彼の對漢文學の態度の暗示があるものと思はれる。無論彼の漢文學に對する態度は決定的のものではなくして、初期的形態をとゝのへた反漢文學的の態度であつた。この作品の持つものは、所謂今日の自由日記の樣な形のものではなく、もつと時間的に窮屈な、束縛されたものである。從つて他の日記とは相當異つた點が發見せられる。その由つて來る所は脫し切れなかつた漢文學の影響が大いにあるのではなからうか。同樣の事が空間的の事に、即ち地名に關しても言はれる。日にしても地名にしても、興味の薄かつた、記すべき事を持たなかつた日は簡單な記述であるが、とにかく科學的正確さを持つてゐる事は否定出來ない。其處に他の日記とは異つた所がある。即ちある興味ある一事を連續的に追及しないで、凡ての記述が斷片的になつてゐる。その根本には、時間といふものに意識的に左右されてゐた事が考へられてよい。亡兒への追想にしろ、和歌への興味にしろ、皆一部

分づつの記事であつて、一貫した熱意を明白に知る事は出來ない。そこが漢文學に養はれ、漢文記の洗禮を受けた男であり、學者である作者のどうにもする事の出來ない所であつたのであらう。この作品に於て、時間といふものや實際の經驗やが、如何に事務的記載を要求されてゐたかを見る事が出來る。『古今集』といふ理知的分類的の歌集が成立して幾何もない時、『源氏物語』が夢想だもされなかつたであらう頃、『土佐日記』のこの創作態度乃至内容は當然の事であつたらう。

3

『蜻蛉日記』が確定的に日記であつて、日記といふものを考へる上に重要な基礎を與へるものである事は、この著作が日記であるといふ事を、作中に再三明記してゐるからである。さういふ明白な態度をとつてゐる『蜻蛉日記』が如何にして作られ、どんな内容のものかについて考へて見る事は、日記全般に亘る重要な事である。『土佐日記』も同じく日記である事を明言してゐるが、之には男の作であるといふハンディキャップをつけて考へねばならない。平安時代の日記は女が中心的作者であつて、唯一の男の日記である『土佐日記』と相異する點も相當に多い。『土佐日記』が日毎の記載をしてゐて日記であるし、『蜻蛉日記』が日毎の記載をしてゐないでも日記である。この二つ

の事實の差は、漢文學を境界線とする男と女の著作態度の差である。然し『土佐日記』の記述が書き放しのまゝでなく、首尾相照應して一つのまとまつた作品にならうとしてゐる事は、作者の創作的立場を示してゐるものと考へられる。これのもつと明白になつたのが『蜻蛉日記』であると見てもよい。『蜻蛉日記』は記載の最も詳しい天祿二年又は三年頃に書かれたものではないかと考へられる。全體の成立年代は分らないし、この部分は何時書かれたと推定出來る所も少い。從つてこの作品が一時に出來たものであるか、又は若干づつ書き足されて行つたものであるかの決定は容易くは出來ないが、少くとも一時に之だけのものが出來たのではなからう。執筆の時が一年や二年であつたとは思へない。從つて『土佐日記』の樣な斷片的の所がないでもないが、時間的に機械的制限を受ける事が少く、內容が一つの事柄によつて進行して行き勝ちである事が認められる。最も記事詳細の天祿三年なども一時に書いたものではないらしいが、さりとて日次の記事ではない。曆の上の時間などには制約されなかつたものであるらしい。こゝが『土佐日記』などと相當に距離のある所であつて、言はゞ男と女の日記觀の相異と言へばさうも言へるし、日記觀の展開と言へば、又さうも解釋の出來る所である。時代的に言つて『蜻蛉日記』は大體『古今集』と『源氏物語』の中間にあつて、日記といふ立場をはつきりと持つてゐる。斷片的な歌を組織的に集大成した

『古今集』の樣なものでもなく、時に冗漫と言はれるストーリーを持つてゐる『源氏物語』の樣なものでもない。このどちらでもないが、又このどちらの傾向をも持つてゐる。

一體『蜻蛉日記』の作者がどうして日記などを誌す樣になつたのであらうか 個人的に言へば、徒然の餘りに認めたものが、かういふ形となつたのであらう。「かく有りし時過ぎて、世の中にいと物はかなく、とにもかくにも、附かで世にふる人ありけり。」と冒頭に書きしるさねばならなかつた根柢には、已に言はれてゐる樣に、不幸の半生を省みてゐる作者がある。その懷古的な態度が日記といふ形となつて表れたのである。「いさゝか昔の心地したり、」とか、「昔も心の緩ぶやうにも無かりしかば、」といふ樣な、昔の事を思ひ出す事が、更年期の女の心からは消す事の出來なかつた事であらう。そして作者をしてかういふ懷古的態度をとらしめたのは、過去に於ける何等かの花々しさと現在の不滿と未來に對する不安とである。この事は作者の周圍や環境と直接或は間接に色色と關係を持つて來る。地方官を父に持つた作者が、當代一流の勢力家で色好みの男との戀を全うし得る筈はない。何かにつけて女の方が不利の立場に置かれる事は明かである。之は一つの運命であり、宿世である。未來に希望のない者は過ぎたものを追求する。『蜻蛉日記』の作者のみに限らず、平安時代の日記の作者の多くが、社會的に當代第一流の人々ではなくして、地方官階級の女

などである事は特に注意しねばならないと思ふ。日記の作者などの持つたかうした懷古的な態度は、『源氏物語』などにも濃厚に表はれてゐる。それを作者のみの主觀と言つてしまへばそれまでの事であるが、華美と好色とに疲勞した人生の後には當然來べきものであり、圓熟した文化の終末には現はれて然るべき態度であると見てよい。

4

以上二つの日記の傾向は外の日記の傾向をも暗示してゐる。『蜻蛉日記』には適度の時間的要素と思ひ出といふ樣な形の叙述形式とが調和してゐる。異つた意味でこの作品と同樣な調和を持つものは『紫式部日記』である。この日記には所謂消息文と言はれる部分があつて、之が竄入したのか、しないのかといふ喧しい問題があつて定說がないが、假に其部分を除いた他の部分を見ると、『土佐日記』の樣に時間的の正確さが或程度まで要求せられてゐる。然し中心的記述から外れたものにまで其要求が示されてゐない所に異つた點がある。即ち『土佐日記』の樣に記述關係中の凡ての日を日次にあげる事はしないで、必要な所のみを抽出してゐる。これが『蜻蛉日記』の樣に過去的のものゝみであるかどうかは別として、二つの間に共通したものゝある事が知られる。『紫式部

日記』は客觀的描寫が相當に澤山にされてゐて、そこに『蜻蛉日記』などゝは毛色の變つた所が認められる。その客觀性も單なる客觀的描寫ではなくして、その陰には鋭い作者の主觀が、批判力が働いてゐる。これはこの作品の持つ大きな特色の一つであつて、日記としては他に之を求める事が一寸困難である。『土佐日記』の批判的態度が之に似てゐるとも言へる。『紫式部日記』の客觀の假面をはいだ内容のみが露はされたものが所謂消息文といふ部分である。然し之と他の部分との間に截然たる區別をつける事は、もとより困難な事であるのは言ふまでもない。

『紫式部日記』が自分の事は二の次にして他の人の事を細々と叙してはゐるが、其根本的態度は凡て自分の立場より見た事であつて、作品そのものゝ中で自分を第三者とはしてゐない。客觀的に描寫するとしても、凡て自分より見た客觀であつて、作者の人稱には移動がないのである『和泉式部日記』などには主人公であるべき作者の人稱が、第一人稱に移り、第三人稱に動いてゐる。主人公を女としても、それが作者の代辨者であるといふ點に於て、作者即ち主人公である。第一人稱である。然しこの作品の中には、作者の目から見た以外の世界が描かれてゐる。積極的にしろ、消極的にしろ、作者の實在的存在性が乏しい。其處に主人公の動搖があると思はれる。この點で『和泉式部日記』は他の日記とはかなり異つてゐるとしねばならない。

『更級日記』は『蜻蛉日記』と『土佐日記』とから止揚されたといふ形の作品である。又は『土佐日記』から『蜻蛉日記』に至つた傾向を、更に押し進めた所に出來たといふ形の作品である　長年月の記録である點から言へば日記中第一のものであるが、分量は『土佐日記』の約二倍、『蜻蛉日記』の四分の一足らずである。記事のある年とない年とが甚だ明瞭でない。何時の記事であるかがはつきりしてゐるのは、全體四十年餘の間の中でほんの七八年に過ぎない。二十數年は全く記事の分らないもので、僅かに十數年の記事が、或は連續的に、或は斷片的に記載されてゐる　かういふ所を以てしても、極度に或主題が强調せられてゐて、『蜻蛉日記』程散慢のものではない。從つて時間といふものが詳細には要求されないでもよいのである。時間の代りに事柄の變化が主な流れとなるといふ事になる。時間の觀念が『土佐日記』的に示されてゐるのは最初の上京の時の、所謂紀行文として取扱はれる部分であつて、其他は極めて雜駁であり、中には二三年、四五年と引きつゞいて起つた事でもないのに、續け樣に書いたので、引き續いて起つた事と思はれるかも知れないが實際はさうではない、といふ樣な斷りめいた事も書かねばならない樣になつてゐる。然し上京の記事以外に時間の觀念がないのではない。ある中心的の事柄が時間的に述べられてゐるのがこの作品である。然し老後に一時に引き續いて執筆したらしいこの作品に、時間的記憶の誤りや、前後の

錯亂が全くないのではない。時間の取扱ひといふ點から比較すると、『更級日記』よりも『蜻蛉日記』の方がより多く『土佐日記』的であると思ふ。

『讃岐典侍日記』は『紫式部日記』の態度・傾向を取つたものである。『紫式部日記』から、もう少し鋭い主觀の働きを取り去つて、客觀的な觀點を加へたものである。從來とかく歴史の資料としてのみ問題にされてゐたのであるが、この作品などは改めて文藝的見地から考察され直さねばならないもの〻一つであると思はれる。この作品の著述態度は最初にある序文めいたものによつて見ても、大體に於て歴史家のそれであると考へられてよい。然しその態度の中に所謂歴史家の態度ならざる態度、即ち文藝家としてとるべきものが認められる。そこにこの日記が問題となり得べき性質を有してゐる。

『蜻蛉日記』の樣な主觀の強い日記が『紫式部日記』の如き客觀性批判性を持つ作品になり、『更級日記』の客觀的事象――傳說などの記述を通つて歴史的な『讃岐典侍日記』に至る經路は、只日記についてのみでは考へきれない問題である。他の文藝の表現形式や、種々の文化現象と合せて解明せられねばならない問題であると考へられる。

三　日記研究史概要

一

今日一般に用ゐられてゐる日記といふ言葉は、日々の事を記すこと及び其記錄といふ意味である。之をそのまゝこの小論で考察しようとする平安時代の國文體の日記にあてはめる事は出來ない。日記の現代的用法をそのまゝ押し進めて古い時代の作品の解釋に及ぼすのは非常に危險であると言はねばならない。その意味で現今迄に平安時代の日記が如何なるものとして考察されて來てゐるかを、簡單に概括的に述べておかねばならないと思ふ。

日記そのものについて常に論點の中心をなすものは、何と言つても、日記の中で最も研究されてゐる『土佐日記』であり、それも「男もすといふ云々」の冒頭の一句である。だからこの第一句に對する從來の見解を見るならば、是迄の日記に對する諸研究家の所說の大體の所は分つて來るものと思ふ。この句ば色々の意味で注意せられねばならないのであるが、今、日記といふものといふ一つに限つてしまふ事にして述べる。北村季吟（一六二四―一七〇五）は、「日記とは、其每日の事を書き

しるすことをいへり。紀氏已前に、篁日記あり。其後蜻蛉日記、菅家日記、平仲日記、紫式部日記などあげていひがたし。」(土佐日記抄)と言つてゐる。日記といふもの丶範疇に『蜻蛉日記』や『紫式部日記』などを入れてゐるならば、日記とは毎日の事を記す事だといふことは出來ないわけである。日記といふ一般的の事を言はうとしてゐ乍ら、實は『土佐日記』の事のみを言つてゐるのである。『土佐日記』こそ日次の記事ではあるが、少くとも『蜻蛉日記』や『紫式部日記』を承認してゐる以上、季吟の日記に對する考へは決して正確なものとは言へない。まして『篁日記』や『平仲日記』をあげるに於てをやである。岸本由豆流(一七八九―一八四六)の説く所は、「今の世の人は、日記としいへば、旅の日記のみなるやうにおもふめれど、すべて日記といふものは、日々の事をしるせるをもていへる名なれば、旅の日記をのみいへるにはあらず。今いふ家々の記錄といふものを、ふるくは日記とのみいへり。されば、旅の日記をわけていはんには、路次記、あるは旅日記などこそいはめ。」(土佐日記考證)季吟より日記の範圍を一歩ひろめたものと見える。その結果として『土佐日記』の樣な作品は、路次記、旅日記などと稱した方がよいといふ結論にまでなつた。紀行に對しては、「この土佐日記をはじめて、つぎ〳〵紀行といへるもの更科日記、十六夜日記など、そのほか、いとおほかり。」(同前)と言つてゐるが、更級日記』は紀行のみではないし、又紀行の所だけ見ても、必ずしも

日次の記事ではない。この外の實例は見えないが、勿論季吟の擧げた樣な日記は日記として認めての解釋であらう。若し認めないとすれば甚しい手落である。季吟・由豆流、共に日記は如何なる態度で書かれるかは示してゐない。日毎の記錄といふ解釋だけであるのだから、どれだけ『土佐日記』其他の日記の、文藝としての意義を認めてゐたか曖昧である。同じ樣な『土佐日記』の註釋的研究をした富士谷御杖(一七六八―一八二三)はこの點に觸れて曰く、「日記はもと實事を記し置きて後のおもひ出にこそすべき物なれ。」(土佐日記燈)然し、この御杖も結局は前二者と同一の性質を日記に與へなければ滿足は出來なかつた。即ち「日記とは日毎の事を記して後のおもひ出にするをいふ也。」(同前)として『蜻蛉日記』や『篁日記』其他を例にしてゐる。今此處で問題にしてゐる樣な日記が、悉く日毎の事を記してゐるかといふに、必ずしもさうではない。むしろ日毎の事を記してゐない方が多い。『蜻蛉日記』は日記である事を明白に斷つてゐる。その『蜻蛉日記』は日毎の事を記してもゐないし、又後の思ひ出にするのを目的にして書いたかどうか。御杖の說も、一般的に日記の性質を述べようとしたのに、何時の間にかその對象となるべき作品の間に動搖がおきてしまつたものと解してよいと思ふ。從つて不完全の說明ではあるが、實事を記しおくものだと言つてゐる所は注目せねばならない。香川景樹(一七六八―一八四三)は「日記は、日々の事をしるせるの稱な

らん事、名義あきらかなるべし。」(土佐日記創見)と言ひ、田中大秀(一七七七—一八四七)は「日記といふものゝ事」といふ項目で可なり詳しく述べてゐるが、結局は、「日記とは、凡て日次の記錄を云へり。」(土佐日記解)といふのであつて、別に新しい說も資料も提供してゐてはくれない。

以上の人々は日記といふ言葉にとらはれすぎて、日記は日毎の事を書くものだといふ考へからぬけてゐない。この考へから、『土佐日記』以外の作品の多くは、日記として歪んだものとせねばならなくなるのである。足立稻直(一七九九—一八二二)は『紫式部日記』を論じて曰く、「壺井氏の傍註にいはく、此書本非日次之體而呼之日記者未審姑且依舊題不輒改之云々といはれし如く、げにことごとく日次にしるせるにはあらず。されど又日記といふべき處々もありて、この書は寛弘七年の春先つとしの事どもを、里居のつれ〴〵に思ひ出でつゝ書きつらねしものにて、かならず寛弘より同七年の春までをおこたらじと、日次に記したるにはあらず。そは一の卷に「かばかりの事のうち思ひ出でらるも有り、其折はをかしき事の過ぎぬれば忘るもあるはいかなるぞ」などあるにてしるべし。日次にしるしたらんには何しにかくはいはるまじきぞかし。猶かゝる事とも多かるを、其處々にいふべし。さて按に日次おとさずしるさねばとて、日記といふまじきにはあらず。蜻蛉日記・和泉式部日記・讃岐典侍日記などの日記も、みな此定めなるぞや。」(紫式部日記解)

こゝに言ふ壺井義知（一六五七—一七三五）の説く所は季吟以下の説く所と同一傾向である。『紫式部日記』を日記として否定しようとするのでなくて、もう少し廣く、『紫式部日記』から日記を考へるといふ態度になつて來てゐる。日記を或決定した觀念で演繹的に見るのでなくて、ある觀念を構成する一つの要素として歸納的に見てゐる。この二つの立場の相違が即ち義知と稻直の差となつて現れて來た。或決定した立場から作品を見るのではなく、作品の方から何物かを決定しようとした態度がこの稻直の說をなさしめた根本である。

2

平安時代の文學史の最も優れたものとされてゐる『國文學全史』には日記に就いて抽象的に、「日日の記事を錄するは、わが國の慣習なり。」と簡單に述べてゐる。芳賀矢一博士が『更級日記』について言つた所に、「日記として後より回顧せる過去の事を記せるは他の日記に同じ。總じて當時代の日記といふもの、必ずしも日々の記事にはあらざるなり。」とある。明治から大正にかけて、この外與謝野晶子氏や和田英松博士等によつて日記の種々の意味が研究せられた。與謝野氏は自傳を三人稱で書いた短篇小說の『和泉式部日記』のやうなものをも日記として承認した。和田博士は歷

史家の立場に於て廣汎な研究をなし、日記の意義については種々の考證をものしてゐる。廣い意味で言ふ日記といふものゝ持つ種々の意味は此處に至つて大體開明せられたと言ふ事が出來る。その研究の對象は主に漢文體の記錄ではあるが、和文體の日記の研究にも色々の意味で參考となる點が多い。和田博士の論文が發表された頃からは、日記を單純に考へる人が少くなつた樣である。例へば「日記が、はじめから終りまで、その日その日に書かれたものでなく、あとから、自叙傳のやうに思ひ出してかゝれたものが多かつたことは、議論の餘地のない所と思はれるのである。（和泉式部日記は）三人稱でかゝれ、物語といはれるのによつても、この日記が、その日、その日の日錄ではないことが明かである。しかし、他の女流日記の多くが、やはり、あとから思ひ出して書いたものらしいのであるから、日錄でないことは、別にこの日記だけの特質ではない。」又和田博士は日記を種々に分類してゐるが、それは漢文體の記錄が大部分の材料になつてゐるのだから、特に言つて置く事もない。只國文體の日記は其日々々と書き繼いでゆく漢文體の日記のやうなものでない事が注意されゝばよいであらう。漢文體の日記は歷史の資料となる場合が大部分であるが、國文體の日記には文藝として考察しねばならないものが大部分である。文藝として研究される可能性を持たねばならないのが和文日記である。日記といふものが口誦的性質の物語文學に對して、

記載文學の性質を有する語であつて、つまり初めから、日々の記錄を漢文で書き記すといふ事がその本質であるといふ說もある。然し平安時代の文藝は、物語と日記のみではないのだから、必ずしもかう斷定してしまふわけにはゆかないと思ふ。だから、日記とは實際の事を年月の順序を追つて書いたものであるといふのが、平凡の樣ではあるが、要領を得た言ひ方である。

3

平安時代の日記が、單に日次の記事であるといふ樣な考へから、次第に根本的に考察される樣になるまでには、長い年月と澤山の人々の努力があつたものと想像せられる。日記の發生などが文藝的に考察される樣になつたのは最近の事である。その一つに曰く、「平安の堂上人が日記をかき隨筆をものするといふ思想に變つて行つた事は、萬葉と古今の歌を比較することによつても明かとなる。即ち刹那の享樂から、意識的に感傷的に其刹那を一層深く味はむとして焦燥する。鮮明な色調から幽婉な情趣へ、實感から內省的に想像に、理窟に傾いて來た。換言すると、興味の中心が刹那から連續へ移り、實感の率直な告白から內省、想像による構成的な表現へ轉じた。この傾向から日記などが生れた。」何時の時代の文藝でもさうであらうが、文藝の研究は、作品そのもの

を離れては存在しない。作品に基礎を置かない抽象論は、それが如何程論理的のものでも何にもならない。科學のみならず、文藝の研究にも、具體的な實例が示されて然るべきものである。この說も日記の發生に關する一つの考へであるが、具體性が乏しいので輕々に承服は出來ない。「切那的な感情主義から反省にめざめるところに萬葉集から平安朝の歌物語へ、更に日記文學への內面的展開が見られるのである。」と說くのも、餘りにあらゆる文藝の表現形態に注意がなさすぎはしまいか。土居光知氏が、「當時の人々が日記をつけたことは、彼等がはじめて反省的になり、自我を連續の相のもとに見出さんとしたがためであらう。」と言つてゐるのは尤ものことである。これは日記發生の一つの面を示してゐるが、これだけではない樣に思はれる。以上の諸說は大體同一の傾向にある。又、「現實の自己を直に詩中の人物として見ることを好む一特質がある。」とか、「筆者自身が自己の生活を客觀化して觀るところに、一種の興味を有つてゐたからであらう。」といふ樣な說もあるが、十分でない事は言ふまでもない。と同時に、「當代の日記の筆者は、わが閱歷をも客觀的に振り返り(蜻蛉)、第三者の立場から自己凝視を試みて(和泉式部日記)興深げに眺め入つてゐる態度は、即ち「詩」に生きんとする感情中心の生活態度であり、物語はやがてわが住む世界の鏡又は世界そのものに外ならなかつた。」といふ王朝文學感情中心說にも十分の滿足を得ることは

出來ない。平安時代の文學を「寫實的から浪漫的への展開」と見る久松潛一博士は、「日記隨筆は生の經驗をそのまゝに表現してゐる點に於て美的もしくは文學的範疇以外のものであつたと思ふ。結果として文學的ではあり得ても、制作動機の上から見ると、文學的であり美的であるためには餘りに現實的であり、寫實的であつたと思ふのである。」と述べてゐる。之は日記の發生が文學と如何に結びつくかといふ問題を解いた一つの見解である。この外與謝野晶子氏あたりから日記と現代文學とを比較しようとする傾向が見えはじめ、佐佐木信綱博士なども『更級日記』について、「今の世ならば、心境小說などゝいうて、躊躇せずに、これを小說の部類に入れるであらう。」と言つてゐる。

4

日記が文藝的立場から根本的に研究されはじめたのは最近の事である。その最も代表的のものが自照文學といふものである。これは日記及びこれと同類の作品を自照文學なる名稱乃至範疇で一括し、他の文藝形態と對象的にして其本質を闡明しようとするものである。この說の起原に就いて久松潛一博士の言つてゐる所によると、「自照文學といふ名稱はかつて垣内松三氏が日記隨筆

試論等の文學形態に用ゐられ、次いで池田龜鑑氏の自照文學史が發表された。」との事である。今こゝで述べる所は池田氏の所說に依る。自照文學といふものゝ概要を說明しておくには池田氏の說を見るのが好都合だからである。自照文學といふものゝ序說とも稱すべきものが『日記紀行文學の本質』といふ論文であるから、先づ之より述べる事にしたい。この論文に於て凡てものゝ取扱ひ方が精神的抽象的である事がまづ注目せられねばならない。そしてこの方面から文學の色々の分野に於ける日記の位置、その發達過程に何等かの意味づけを企圖してゐる。即ち、「抒情詩を生み出す心持と小說を生み出す心持又は日記を生み出す心持とはどこか特殊な性質の存在する事が疑はれない」ものとなし、「日記紀行の文學は自己自身を告白する形の文學であつて樣式から言へば哲學的な文學の一類型である」ものと說いてゐる。日記の發生が如何なる狀態のもとに行はれたかゞ說明されないでゐるし、抒情詩・小說・日記を生み出す共通的な心持といふものも、もう少し具體性を持つ樣に說明されなければ充分ではない。以上の考へが根本にある事によつて、當時の漢文學と密接な關係にある記錄類と國文體の女の日記との交涉について、「女流日記文學は家記即ち男性の日記とは全然異れる要求と態度との中に生れ出たものであつて之が精神或は本質を究明する事は日本文學史上に於て自照的哲學的な一系列の文學の本質を闡明する鍵となり得る事と考

へられるのである。」と說かねばならない樣になるのである。之が可否は後にゆづる事にして、次には幾つかの日記文學の本質的屬性をひろひ出して見たい。其主なるものは、(1)、對象が過去にある事。(2)、新しい文化の先鋒となつてあらはれることはない事。(3)、自我の意識が强烈である事。(4)、自己の體驗を主題とするのであるから空想的分子が少い事。(5)、他の外的條件に制約されないから無技巧である事。(6)、時間と空間の制約を受けなければならない事。(7)、獨語となることが多い。從つて自照的な性質を多分にもつ事等々である。是等の總決算として述べられてゐる事は次の通りである。「日記文學は自照的文學の中心となつて分烈し頽廢した個性を統一にまで導く潜勢力となつたのである。文化が爛熟して不健全な世紀末的な倦怠が社會の各方面を蔽ひつくす時に魂の全一を思慕し追求する個性が焦慮と懷疑との中から生み出したものが日記、紀行、隨筆、試論、評論、金言、警句等の文學である。」この結論を自照文學の範疇の中にある平安時代の日記にのみ當てはめて見ても必ずしも共通的妥當性を可能的普遍的に持つてはゐない。『土佐日記』は平安時代の文藝の上からは初期のものと考へて差支はないし、社會的に言つてもこの時を世紀末的な倦怠期に入つてゐる時とは思へない。從つて日記の發生を前記の樣に說明する場合は、この日記などは說明漏れになりはしないであらうか。世紀末的倦怠期とは、平安時代に於ては道長時代以後に

於てこそ言はれる事になりはしないであらうか。日記の發生は道長時代から可なり遡るべき性質のものであると思ふ。勿論前說が全く誤りであるといふのではないが、相當不十分の所がある樣に考へられるのである。

この自照文學といふものゝ歷史的な展開の究明を企てたものが『自照文學史』であつて、前の論文と表裏をなすもの、或は同一のものと考へてよい。この中で自照文學の意義について、「自照文學とは作者の個性が常に Ich の形に於て、自己自らの眞實を、最も直接的に語らうとする懺悔と告白と祈りとの文學の一系列をさすものである。」と述べてゐる。自照文學一般に共通すべきこの言葉が、實際の作品を目の前に置いた時、必ずや意味の不分明と限界の不徹底に到達するであらう。この說明は餘りに觀念的にすぎはしないであらうか。これは前の論文と同樣に恐しく所謂精神的であり、具體性に乏しい觀念的性質を多分に具有してゐるためであらうと思ふ。自照文學の特質の所では、「抒情詩的な憧憬と、思索的な懊惱との中に、卒直に表現せられた「我」の叙傳である。」と言ふ詞が發見される。自照文學と他の文學形式との關係は最も興味の深い問題の一つであるが、抒情詩・叙事詩・劇・哲學等々あげられてゐる中で、果してどこに日記が、否自照文學が位置すべきかは詳細に說明されずにゐる。一般的な文學形式についての所論があるのみで、この中心問題に

は明白に觸れられずにゐる。又自照文學が如何にして發生するのであるかについて、自照文學を生む心の所で、「自照文學を生む心は、一切の理想を現實にうち樹てんとする努力である。そこには、統一的な全體的な魂の發展がみとめられる。」と說いてゐるが、具體性の乏しい抽象論で、觀念的な妥當性はあるとしても、そこに作品そのものに立脚した立場にゐないために、純理論に終つてしまひさうである。同樣の事が日本に於ける自照文學の派生と展開の所にも言ひ得ると思ふ。平安時代の所を見ると、「ブルジョア文化は、かくして次第に爛熟し、腐敗し、人心を統率する權威を失ひ、こゝに大いなる倦怠を招くのであるが、その混亂の半ばに於て、全一なる魂の原鄕に復歸せんとする詩的憧憬が生れたことは注意すべきである。」と述べてゐるが、全く疑問なしに之を讀過する事は出來ない。「この自照的精神の萠芽は、先づ第一に後宮天才の間に認められる。一は我に沈潛し、我を內省批判する哲學的思索の態度であり、二は形式的因襲的文化に對し、自我の解放を求める憧憬的、浪漫的態度である。前者は諸家の日記隨筆を以て代表せられ、後者は式部集に於ける和泉式部の抒情的、戀愛的生活であり、源氏物語に於ける紫式部の理想生活であり、更級日記に於ける孝標女の夢幻的美化の生活である。」

以上でもつて自照文學といふものゝ輪廓が分つたことゝ思ふが、雙手をあげて贊意を表する程

文藝的に十分整備されたものではないと思ふ。日記を含む自照文學といふものが果して可能であるかどうかは別の問題として、とにかく是程までに研究をすゝめた事は、一つの進展であると考へてよい。然しこれが自照文學のための自照文學の理論であつて、平安時代の日記を根本的に研究した、乃至は研究する基本的具體的依據が薄弱であるため、折角の理論を曖昧なものにしてゐる。從つて自照文學なるものゝ解明によつて平安時代の日記の本質とも言ふべきものが明白にされたと考へるのは早計であると思ふ。德川時代に於ける日記の研究は、主に註釋的であつて、文藝的ではなかつた。そのために、日記といふものが單純に解釋せられてゐたのであるが、明治時代から大正時代になるに從つて、文藝的な角度から日記が考察される樣になり、遂には體系立つた一つの理論を要求する程にまでなつて來た。

第二　外面的考察

——日記と他の文藝との關係——

一　漢文學

1

日記と漢文學とは如何なる關係を持つてゐるであらうか。一體國文體の日記を文藝作品として取扱はうとする場合に、漢文體の日記記錄は如何に處置すべきものであらうか。漢文體の日記類が凡て文藝作品として取扱はるべきものであるか否かは大體判斷の出來る事である。國文體の日記と男の漢文體の日記類との二つの間に、大體の區別はつけておいて差支へはないが、平安時代初期に漢文學の隆盛を見た事であり『土佐日記』作者の如く、男であり乍ら早くも國文體の日記を書いた樣なものも存在する事でもあるから、兩者の關係は一應は考察されて然るべきものである。

男もすといふ日記といふ物を、女もして心みむとてするなり。（土佐日記）

といふ『土佐日記』の冒頭の句は頗る簡單なものゝ樣ではあるが、日記研究の上からは、色々な意味

で大切な一句である。この句が古來如何に注意せられて來てゐるかについては前にも觸れたが、ここで再びとり上げて其意味を闡明しねばならない。この一句は單に『土佐日記』の成立に對する問題を含むのみではなく、日記そのものゝ成立及び男と女の日記の關係の問題にまで波及する可能性を持つてゐるものである。男のするといふ漢文體の日記と、女のものとされ勝ちである國文體の日記との關係が、この一句を基として考へられてよいのである。廣く一般に、漢文學と國文體の日記との關係にまで推し進められて行つてよいのではないかと思ふ。

漢文學が日本にはひつて來て、實用に供せられる樣になるまでには、相當の年數が必要であつたらう。まして之を繰縱して日常の出來事を記錄する、即ち所謂日記をつけるといふ樣になつて來るのは自然の成行の樣ではあるが更に後の事である。是等のものは、使用に不便があり、從つて學問といふ事に關係し得る人々——專ら男に使用されてゐた事も明かの事である。物を記錄する事は男が先で、女が後である事は、別に異とするに足りない。女は書くべき方法を持ち得なかつたのだから。それならば漢文で書いた男の日記の後にどうして女が漢文で書かなかつたであらう。外國文の驅使の困難が最も大きな理由であつたと思ふ。そして女が日記をつける時分には已に假名といふ入り易いものが發達してゐたものとしてよい。だから貫之の如く漢文で誌してもよい記事

を國文で書いても、それは或は當り前の事であつたのかも知れない。何も貫之でなくても、結局は誰れかのやつた事であつたに相違ない。只それを當時の男であり、且漢文學にも造詣の深かつたらしい貫之がやつたからこそ種々の物議をかもすのである。男である事をかくしたのも一つはそこに理由がある。尤も此作者女性化の原因に就いては古來種々な說が行はれて一定しない。事實自身を女にして誌してゐるのは、只書き出しの所だけの事であつて、內容はよく男の作である事を示してゐる。亡兒を悼む餘り、或は貫之は亡兒の母たる自分の妻の代理といふ樣な心持で、序の所だけあゝいふ樣にしたのではなからうかと考へられない事はない。さうすれば當時の女が已に日記を假名文で書く能力を持つてゐたと言ふ事が裏書されるものである。『萬葉集』では女で長歌を作つたものがあつた。『土佐日記』以前の人で自撰の家集を持つてゐると思はれるものがある。してみると、女の日記は何も『蜻蛉日記』の出現をまたずとも、已に存在の可能性はあつた筈であると思はれる。そして『土佐日記』が、結果こそ假名文弘布の源泉の一つとなつたとしても、初からその目的があつたかどうかは分らない。作品の冒頭にあゝいふ事を書くのであるから、男の日記——即ち廣く言つて漢文學に對して、丁度『古今集序』が暗示してゐる樣な、何等かの積極性のあつた事が考へられてよいであらう。『土佐日記』が直接漢文學の延長の上にあるか否かは別としても、『土佐

日記』の初頭にかくの如き事が示されてゐる以上、『土佐日記』と漢文學との關係、更に推し進めて日記と漢文學との關係を若干なりとも認めねばならない。即ち日記の發生に第二義的に漢文學が與つて力のあつた事を認めないわけには行かない。『土佐日記』が國文體の日記である事は確かな事であるが、この國文體の日記は、後に多く出た日記に直接的感化を與へてゐるか否かは知らないが、間接的感化を與へてゐる事は容易に想像し得られる事である。といふよりもむしろ『土佐日記』の存在を許容した客觀的情勢が、爾後の日記の發生にまで延長したと見る方が適切である。兎に角日記の發生期の一つの存在としての『土佐日記』が、漢文學と如何なる交渉をしてゐたかと言ふ事は、廣く日記が漢文學と發生的に如何なる關係にあるかといふ事を明かにする一つの方法でもあるのである。然しこの場合、後に出た日記の殆んど凡てが女の作であり、女は男に比較して遙かに漢文學との交渉が稀薄であるといふハンディキャップを持たせねばならないし、又其等の日記が『土佐日記』の影響の下にのみあつたのではないといふことも考慮に入れて置かねばならない。從つて後の日記の多くが漢文學との交渉を『土佐日記』程著しく持つてゐるものがなくても差支へはない筈である。だから日記の初期のものとしての『土佐日記』が、漢文學と關係を持つてゐたといふ事は、必ずしも後の日記が同樣な關係を持たねばならないといふ事にはならないのである。若し

『土佐日記』が日記である事を言明してゐないならば、或はこの事は言ひ得ないかも知れないが、初頭に日記である事が明白に書かれてゐるのだから、かう言つてもよいのではないかと考へる。

2

『土佐日記』は記載の多寡こそあれ一日も缺かさず書いてある。之によつて如何に時間的に制約されてゐたかゞ分る。そしてこの態度が廣い意味の日記の中に含まるべき記錄、即ち漢文體の日記に如何に近いものであるかゞ分る。漢文體の日記類も、必ずしも凡てが日次ではないが、大體一日一日が單位になつて書き繼がれてゐる。若し『土佐日記』に創作的な首尾をつけなかつたならば漢文體の日記類と幾何の差があるであらう。貫之が漢文學に關係のない樣な態度で執筆はしてゐても、その書き方は已に漢文記錄類との著しい相似を暗示してゐるものと思はれる。日記の中で『土佐日記』がこの點に關して最も著しいものを持つてゐるとは言つても、之は漢文體の日記の和文譯に止るものではない。漢文記には、特に作者と密接な事でも、個人的に亘る事は省く傾向があり、從つて反省的の所が少いわけであるが、『土佐日記』には歷史的事實の記載といふよりも、むしろ貫之と離れては存在の意義を失ふ事が大部分で、其處に反省的作者が具象化されてゐる。この事は

即ち『土佐日記』が漢文記錄類の影響にのみよる飜譯でない事を示してゐる。かくの如く『土佐日記』は後の日記と重要な共通點を根本的に持つてゐるが、大體から言つて日記の祖であるとはしても、過渡的先驅的存在に外ならない事は他の日記と比較すれば分つて來る。

『土佐日記』の先驅的立場が爾後の日記に如何に反映されてゐるであらうか。例へば『蜻蛉日記』の雜纂的な所は『土佐日記』とても持つてゐる所である。『土佐日記』が時間的制約のもとに書かれたものであるから、內容的一貫性に乏しいのは當然の事である。『蜻蛉日記』も一時に書いたものではないらしいから、從つてどうしても種々の記事が竄入せられて來る樣になる。かういふ方面から見て、この二つは完全に遊離した存在だとは思はれない。又『土佐日記』には澤山に歌があるが、歌を中心にした作品ではない。貫之は歌に對して頻りに批判的態度をとつてゐるが、『古今集』の撰者であつた事を考へるならば當然の事である。日本の和歌を盛んに問題にしてゐる反面には漢詩に對抗せんとした潛在意識があつたものと思はれる。貫之は「からうた」、「からうた」とうるさい位漢詩の事を氣にしてゐる。或時には漢詩はこの作品には書かないとも言つてゐる。又或時には漢詩と和歌とを並べて評論したりしてゐる。かういふ樣に漢文學から絕緣的無關心的態度に出ようとする事が、反つて反對に彼にとつて漢文學といふものが如何に重大な關心事であ

つたかを示してゐるものと思ふ。丁度『古今和歌集序』に於て、漢詩文に對する樣な立場をとり乍ら、其實漢詩文の顯著な影響を受けてゐる樣に。事實『土佐日記』に漢詩のはひつてゐるのは一ヶ所にはとゞまらないのである。それに、使はれてゐる漢字音も、他の日記に比較するならば多いといはねばならないかも知れない。『蜻蛉日記』などにも漢文學の影響によるものらしい所が發見出來るが、その取扱ひ方が『土佐日記』の樣に神經質ではない。『更級日記』の中にも漢字音もあれば支那文學の感化によるものらしい事も見えてゐるが、それが日本のものに對すると同じ態度であり、特に漢文學だといふ事に意識的でない。そこが『土佐日記』と相當異る點であると見てよい。

漢文體の日記記錄は所謂文藝的な記錄よりも事務的な、後になつて必要な客觀的歷史的資料となり得る樣なものとなり勝ちである。そのために筆者にとつては何のかゝはりもない不必要と思はれる人の名を明かに書き留めて置くとか、年中行事を示して置くとかする事が、相當に重大な事になつて來る。『土佐日記』にさういふ目的が積極的にあつたとは考へられないが、さういふ態度にあつた事は充分に認める事が出來る。作者が意識してゐたか否かは別として、貫之の日記としては必要のさしてない人々の行動を事務的に誌しつけてゐるものが相當に多く、其等にしても性格などいふ事は二の次になつてゐる。又年中行事の書き方にしても『枕草子』などに見るものとは

その趣が異ふ。やはり漢文記錄類的臭味が強いと言はねばならない。

かういふ樣に『土佐日記』では漢文學をしりぞける心算で、半ばそれを否定したつもりでものしたらしいのであるが、その結果から見ると、餘りにも漢文學にとらはれてゐる所の多い事が知られる。一つのものに反對する心算でやつた事が、結局其反對のものと最も關係の深いものであるといふ事が示されてゐる。之は日記といふ形式の草創時代の作品としては避ける事の出來なかつた事である。そして『土佐日記』と後の日記との關係も、かういふ意識的な積極性を持たなかつたゞけに漠然としたものとなり勝ちである。『蜻蛉日記』が『更級日記』に比較して『土佐日記』的の點の多い事は、『更級日記』に年代不明の記事の多い事、從つて一時に書いた可能性の強い事や、家記的に時間的正確さの少い事などによつて暗示されてゐる。一は殆んど毎年の記事があり、一は時期不明のものが多い。この意味から言へば『更級日記』が最も漢文學と緣が遠いわけである。『紫式部日記』はこの點漢文記的日記類に近い。即ち自己の日記には不必要と思はれる人々の名前が明示されてゐたりしてゐる。漢文學に造詣の深かつたらしい紫式部の書いた日記が、當時の日記の中でも『土佐日記』的家記的のものであつた事は、必ずしも偶然ではない。『紫式部日記』的延長上にあるものが『讃岐典侍日記』である。

二　和歌・私家集

一

平安時代の文藝作品で和歌と關係のないものは殆んどない。當時の文藝と和歌とが如何に密接の關係にあつたかは、どの作品をよんでも直にうなづける事である。日記のみについても、和歌と全く交渉を持たないものは一つもない。勿論中には歌が非常に少いものもあれば、殆んど歌のみによつて成立してゐるといふ樣な作品もある。

今假りに和歌をよむ場合に相手を豫想してよむ場合と然らざる場合とに分けて見るならば、平安時代には前者が多くて後者は比較的少かつたであらう。前者の大部分は即ち贈答歌や題詠の歌である。平安時代の和歌が如何なる發展をして來たかは別として、相手を豫想する是等の詠歌が、『記紀』に見えた樣な合唱歌の形式から、平安時代以後に多くなつて來る獨詠の歌との中間に位するものであると考へる事が出來る。大勢で歌ふ歌から獨りで詠む歌に至る歷史的過渡的存在が、是等相手を豫想する歌と見る事も出來よう。ともあれ平安時代の和歌から贈答歌と題詠とを除い

てしまつたならば、殘るものは案外少いのではないかと思ふ。贈答歌は原則的には相手を一人に限るものであり、題詠・屛風繪・歌合等は相手を一人以上豫想するものである。

又歌を別の方面から考へて見るならば、撰集と家集とを擧げねばならない。この場合にはつきりと公私に分ける事は出來ないから便宜的の分類である事は無論であるが、撰集は、殊に勅撰集は大體公的のものであり、家集は大體私的のものであると考へてよいと思ふ。漢文體の記錄ならばいざ知らず、日記は少くとも一人のものであり、私的のものである。かういふ意味からして日記と獨詠の歌、贈答歌及び家集との關係は當然考察されて然るべきものである。日記が歌中心となるか否かは夫々の作品によつて異る所であつて、一概に言ふ事は出來ないから、こゝでは主として歌が中心である日記か、然らざる日記かをいふよりも、歌が日記にはひり込んで來ねばならなかつた過程を中心にして說明しようと思ふのである。歌と日記との關係を、現象的といふよりも發生的に考へようとするのである。

日記は原則的には自己一人のものである。私家集も亦大體さうである。家集は歌を集錄したものであつて私の家の歌の集である。日記の中には歌が多數含まれてゐる。家集の中にも日記の中にも獨詠・贈答歌・題詠と色々のものがはひり込んでゐる。のみならず日記と言ひ家集と言はれる

のは、たゞ大體の事であつて、同一作品にして兩樣の名稱を持つてゐるものもあり、又家集であつて日記と同性質のものも見受けられるのであるから、歌と日記との關係は、家集と日記との關係に還元し得られて差支へはないのではなからうか。從つて日記と家集との相似性が認められて然るべきものであり、その根元にまでさかのぼる事が、即ち兩者の關係を闡明する最も近い道である。

2

私家集は少くとも人間の歴史の上に於て自己認識が起つて來たから出來たものであらう。『萬葉集』時代、又はそれ以前に既に『柿本人麻呂集』・『笠金村集』・『高橋蟲麻呂集』・『田邊福麻呂集』の如き私家集が存在したであらう事が推測せられ、又第五卷は山上憶良及び大伴旅人、第十七卷以下は大部分が大伴家持の歌である事などから、是等の人の私家集が『萬葉集』の基本になつたのではなからうかとも思はれる。殊に十七、十八卷の如きは、或廣い意味から言ふならば、日記であると考へてもよいと思ふ。今十七卷の一部を例にとつて見るならば、

同じき二十年二月二十九日、大伴宿禰家持の作れる歌二首

沽洗二日、掾大伴池主更に贈れる歌一首并に短歌三首

三月三日、大伴家持、掾大伴池主に送れる七言詩一首幷に序
四日、大伴池主、守家持の詩に和し奉れる歌二首幷に短歌
五日、掾大伴宿禰池主、守家持に答ふる詩一首幷に序
同じき五日、大伴家持の短歌二首
（萬葉集）

自分で誌したものか、他人が書いたものか知らないが、とにかくかういふ様に時日を明示して、或は長く或は短く說明をつけてゐる所は全く一つの日記らしいものとしてもよいであらう。一體奈良時代は自我の目覺めた時であるから、その結晶として『萬葉集』の様な作品が生れ出たのであつて、「記紀歌謠」の様な普遍的な詠歌態度から、個人を基礎にした態度になつて來たのである。さうした具體的の表現の集積したものが即ち『萬葉集』である。然し當時は自我に對する覺醒はあつても、文藝に對する覺醒はまだ〳〵かすかであつた。從つて『高橋蟲麻呂集』の様なものは、たとへそれが家集であつたとしても、甚だ客觀的なもので、一人を標準にしたものではなかつたらしい。十七卷以下の家持の家集の如き體裁のものも自由に他の人の歌が出入してゐる。それは『萬葉集』といふものが全體として個人歌集でないからといふ理由もあらうが、この勅撰集の基になつたであらうと思はれる諸家集も、一個人に限定された歌集ではなかつたであらう。

一つ一つの歌の優劣は別として、私家集といふ一つのまとまつた作品と見て、文藝的に優れたものと思はれるものは、男のものよりも女の家集に多い様に思はれる。どうしてかういふ事になつたかといふ事については分らないが、多分男と女との立場によつて客觀的に規定されてゐる或るものがあるのではなからうか。即ち男の文藝上の表現形式は主に漢文であり、形式的にもせよ政治や經濟に直接關係する男は、勢ひ事務的理知的になり、漢詩文の影響もある所から、卒直な自己表現は出來ない。この點女に一歩をゆづらねばならない。又一つには男の歌は歌合だの、題詠だのが多く、類型的批判的で、自己一人の感情をそのまゝ示すといふ歌は、女よりも少いと言へる。この時代の歌には大體斯樣な分野の和歌の兩面に亙つて行はれるものが謂ふ所の贈答歌である。この時代の歌には大體斯樣な分野があつたものゝ樣に思ふ。作者を問はず、家集に是等のものがはひつてゐるのであるが、そのはひり方によつて種々のものが出來るのである。

3

私歌集には自分で撰んで編纂したものと他人のしたものとの二種がある。私家集は個人の歌集であるから、自分で編纂するのが一番當り前の事であるには違ひなからうが、ある一人の歌を他人

が編纂したと思はれる場合もかなりに多い。例へば『遍昭集』などは之であらうと思はれる。自己をさへ客観的に眺めようとする人々のあつた時代であるから、只單なる歌の集積でなく、物語風の所もあるこの集の様なもの丶存在も許されるのである。他撰の私家集でも、その當時成立したものもあるであらうし、後世になつて編まれたものもあるであらう。又編者も親近の人の場合も、全く他人の場合もあつたであらう。そしてそれにはそれだけの理由が當然附隨してゐたであらう。

私家集といふからには自撰のものが他撰のもの丶場合よりも注意せられねばならない。自撰の家集も色々の方面から考へられるが、今は家集を編纂する時の態度を中心にして考察して見る事とする。自撰の私家集を組織の方面から考へて行くと、先づ組織的立場をとつたものと然らざるものとが考へられる。組織的と未組織的とが便宜上考へられる。

未組織的な家集といふのは、題詠であるとか、贈答歌であるとか、獨詠の歌であるとかゞ大した組織配列もなく雜然と集録されてゐる形のものであつて、題詠を比較的多く含んでゐるもの、贈答歌を多く持つてゐるもの、是等の要素を兼ねてゐるものなどがある。そしてどれか一種の要素をのみ持つてゐるといふものは殆んどなく、大低のものは色々の要素をもつてゐる。どんな要素を多くもつてゐるかは夫々の個性によつても決定されるし、その目的によつてもちがふであらうが、

一方ではさういふ結果にさせる客觀的な事情もあつたと考へられる。題詠の歌を多く持ち得る地位の人々は男に多いであらう。旅の人には旅の歌が澤山あるであらう。かうした雜然たる編纂ぶりを他に求めるならば、歌物語があり、『枕草子』がある(現存本を原著とするといふ意味に於て)。是等には全く統制がないとは言へないが、比較的中心となる組織に乏しい。『伊勢物語』などは昔男を中心に緊密な組織をもつてゐるとも言ひ得ようが。『萬葉集』は雜歌・相聞歌・贈答歌・戀愛歌・正述心緒歌・寄物陳思歌・譬喩歌、等々の組織があると言へばさうとも言へるが、ないと言へば又ないとも言へる。準組織的な『萬葉集』から組織的な『古今集』に至る展開は、又未組織的であつたであらう原始私家集から組織的私家集になる道でもあつたらう。さうして又形式的に段々と完備してきた所の平安時代の一般の文化組織の狀態の一つの反映であるのかも知れない。

4

組織的な私家集は二つに分けて、一つは分類によつてゐるもの、一つは大體年代順に並べてゐるものとする。歌を分類する事、即ち一つの歌集を組織立てる事は已に『萬葉集』にその萠芽をあらはし、『古今集』に至つて決定した。この傾向は私家集の方面にも現れて來てゐる。今その代表として

『古今集』の編纂の責任者である紀貫之の家集を見ると、全九卷の中で、第一より第四までは大體に於て四季の歌、第五は戀、第六は賀、第七は別、第八は哀傷、第九は雜である。『古今集』の春夏秋冬・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・大歌所御歌と比較すると、勿論小異はあるが大體に於て似通つてゐると認めてよいであらう。『貫之集』の組織は『古今集』のそれと根本的に同じ態度である事が考へられる。貫之が『古今集』の編纂責任者であり「序」の作者でもあるらしい事を考へるならばこの態度は容易にうなづける。『貫之集』では四季の歌を可能的に年代順にしようとしてゐる。之は、春夏秋冬に分類し、更に主題によつて順序立てをしてゐる『古今集』とは若干異るが、貫之が『土佐日記』の如き時間的な要素の多い作品を殘してゐる點から見てあり得べき事と考へる。『古今集』と『土佐日記』との中間にあるのがこの『貫之集』である。この集には詞書の長いのも相當にある。殊に注意すべきは、主に雜の部ではあるが、一つの歌の兩端に地の文が說明としてあることである。之は『古今集』と家集と『土佐日記』とが根本的に連絡したものである事を考へるのに大切な點であると思ふ。『古今集』の形式は『新古今集』にまで連續して踏襲された。その頃の歌人俊成卿女の家集を見ると、分量が『貫之集』程もないためもあらうか、それ程まで明白ではないが、春・夏・秋・初秋・冬・戀・雜・霞・花・暮春・郭公・五月雨・月・紅葉・氷・忍戀・あはぬ戀・後朝戀・あうてあはざる

戀・恨戀・旅・山家・眺望・述懷・祝等、集中に小題目をあげて歌を集錄してゐる。

組織的な家集を分類によるもの、年代順によるものとに分けたが、之は便宜的のものであつて、この兩方にまたがるものゝある事は『貫之集』の四季の歌を見ても分る。『散木奇歌集』は全體が『古今集』風の分類をやつてゐる。四季は更に月に分類するなどの精密さである。從つて歌は長或は短の詞書と共に夫々の斷片的の存在である。秋の所には一つの序がある。然し羇旅や雜になると連續的になつてゐる所が幾つか發見出來る。殊に悲歎の所などは、全體が一つのまとまつた日記であり紀行文である。

家集を組織的にするといふ模範は多分『古今集』であらう事は考へられ、この形のものが割合に男のものに多い事は、一つには男が女よりも理知的で分類的だからであつて、時間といふ反省的な觀念は漢文記錄に止つてしまつて、創作方面にまでは十分及ばなかつたのであらうと思はれる。

5

之に反して女の家集には時間的要素を持つたものが頗る多い。今その主なるもの若干について要點のみ少しづゝ述べて見る事にする。

『檜垣嫗集』　地方の遊女檜垣嫗の作であるといふ。京都からやつて來る人々を相手にしてゐた遊女の身であり乍ら、當代の宮廷の人々に伍して決して遜色のない歌を殘し、其上特色ある家集までである事は外に例のないことである。この集は三十餘首の歌を中心にした記錄であつて、所々斷片的になつてゐるが、大體に於て連續した一つの記事である。時間といふものに鋭敏であるとは言へないが、家の集とか、歌の集とかにしてしまふには、少し歌のはひり方が地の文に比べて少く、日記の樣な執筆態度を暗示してゐる樣に思はれる。

『伊勢集』　藤原繼蔭の女、中務の母である伊勢の作と言はれる。この集は、

いづれの御時にかありけむ、大御息所と聞ゆる御局に、大和に親ある人侍ひけり。（伊勢集）

と書き出しをしてゐる三十餘首の歌物語風の、又は日記風の部分にはじまり、物語繪の歌『長恨歌』の屛風の歌、賀の屛風の歌等の內容をもつてゐる。伊勢は寛平の御時の更衣であつたとも言はれ、當時の宮廷に於ては花々しい存在であつたらしいが、それだけに又數奇な生涯であつたかも知れない。その伊勢の、家集らしくない家集の冒頭の句や編成敍述の態度に就いては、色々と考ふべき問題がかなりに多いのではないかと思ふ。『伊勢物語』や『土佐日記』等に見える人物の第三人稱化がこゝにもあると言へようし、又昔物語風に漠然と言ひ出すのは『伊勢物語』や『源氏物語』其他に

も見られる例である。然し『伊勢集』の中でかういふ種々の問題を出してゐるのは初の部分だけの事であると見てよい。後の方も傾向としては同一であるが、所謂歌集的に扱はれてゐる。この集は家集でもあり『和泉式部日記』の樣な意味に於ける日記でもあり、又物語でもある。

『加茂保憲女集』　作者の傳を詳にする事は出來ないけれ共、大體紫式部や清少納言前後の人と考へられる。父は暦博士其他に任じた歌人であつた。この集の最も大きな特色は近代的意味に於ける論說的のものが冒頭にある點である。現存する如き一文が本當にその人の作であるとするならば、『方丈記』の樣なもの丶先驅は夙にこ丶に出てゐた事にもなるであらうし、諸作品より論文的であるとされてゐる『枕草子』よりも更に著しいものであるとしねばならない。この作品の存在によつて『源氏物語』中の種々の論の存在性も十分に可能になるわけである。日記といふよりも、むしろこの點で注意してよい作品である。この集の後半は『古今集』に則つた分類法で自己の歌を記載してゐる。

『小大君集』　三十六歌仙の一で三條院が東宮の御時の女藏人であつた小大君の作と言はれる。この集には幾つかの纏まつた記事が含まれてゐる。丁度『伊勢物語』の樣な工合である。自分の事を或時間的基礎の上に立つて述べてゐるし、「をとこ」、「をんな」といふ取扱ひをした人物の事をも

記してゐる。『伊勢物語』は自己の名を出さなかつたし、『土佐日記』も亦さうであつた。『蜻蛉日記』は日記としての立場から他人の事を書くのに斷つてゐた。この集にはさうした神經質の所はなく、どちらかと言へばより多くとり入れてゐる。物語的の日記と稱する事が出來るかも知れない。

『和泉式部集』　作者は奔放な歌人和泉式部である。この集では各々の歌に殆んど同じ位の詞書をつけてゐて大體濃淡がない。頭初の部分は春夏秋冬に分けてゐるが、之に於ても日記の樣な所がないのではない。詞書が短く、何となく未組織的ではあるが、日記といふものを何となく暗示してゐる。特に爲尊親王との死別のあたりは、或は日記といつても差支へはないであらう。又この集には紀行文風の所もあれば、日次に書いてゐる所もある。殊に歌を中心にして日を追つて書かれてゐる終末の部分は、地の文こそ短いが全くの日記である。この集は組織的の所があり、未組織的の所があり、時間的の所、分類的の所と種々の要素をもつてゐて、家集と日記との關係で、更に物語との關係で暗示を受けるものが頗る少くない。

『相模集』　相模守大江公資の妻で、伊勢や和泉式部の樣に相當自由な生活をした女の作品である。最初に序文らしいものがあり、一と塊をなした歌——相模に下つた時の歌、箱根權現奉納の歌——や贈答歌が大體年代順に配列されてゐるらしく、地の文に相當長いものがあつたりして、可な

り日記的な要素を多く含んでゐる。が中心はあくまで歌にあるらしいのであつて、歌を分類的に取扱はうといふ態度もよく示されてゐる。殊に終りの方になると、幾回か繰返して四季の歌や、さいはひ・いのち・子をねかふ・うれへ・おもひ・心の中・夢・雑等と分類して記載をしてゐる。この集は日記であると同時に、分類をしてゐる所は歌集的である。

『赤染衛門集』 作者は大隅守赤染時用の女で、後に大江匡衡の妻となつた赤染衛門で、當時和泉式部と並び稱された歌人である。『赤染衛門集』は歌が中心になつて大體年代順に編纂されてゐるらしいから『赤染衛門日記』とよびかへても不當ではない。が所謂日記といふものよりは地の文の働き方が消極的である。この作品は記載年代のかなり久しい間の記録であるらしく、中には尾張に夫と共に下つた時の如き、之だけを獨立させれば立派な一つの紀行となり得る部分もある。總じて歌が中心で、時日などには餘り綿密に注意してゐないが、之に對する注意は相當に拂はれてゐるらしい。題詠といふものを採錄しなかつたために、倘更かういふ形をとり易くなつたものでもあらう。そして題詠は男に專らであれ、女、殊に地方官の女などには餘り機會の豐富なものではなかつたであらう。女の集に日記風のものゝ多い理由の一つはこんな所にあるのかも知れない。ひいては日記そのものについても。

『右京大夫家集』　建禮門院の女房、藤原伊行の女の著作である。この家集は家集とは言ふものの今迄の家集とは餘程其趣を異にして、家集らしい要素は非常に少いとも言へる。むしろ之は日記といふに最もふさはしい內容と形式とを持つてゐる。歌を中心の樣にしてはゐるものゝ、地の文が主となつてゐる。然し作者は日記を書くつもりではなく、家集をものする心算でゐる。即ち

家の集などいひて、歌よむ人こそ、かきとゞむることなれ。さればゆめ〳〵さにはあらず。たゞあはれにも戀しくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることどものあるをり〳〵、ふと心におぼえしを思ひ出でらるゝ儘に、我がめひとつに見むとて書きおくなり。（右京大夫家集）

時代が平安時代末であるだけに、日記といふ概念も日記發生當時とは變つて來てゐるのかも知れない。この意識的に家集をものしようとするのを否定する態度は、逆に家集に則つて之を書いたのだといふ事になるのではあるまいか。集の內容は平家滅亡の裏面にまつはる一つの悲しい人生の記錄である。

『成尋阿闍梨母集』　成尋阿闍梨は平安時代中葉の僧、この作品はその母の著である。『右京大夫家集』よりは早い時代のものであつて『更級日記』の記載年代の十年程後の時代の事を記してゐる。之を家集と考へる時、日記と果して幾何の距離をおいてよいか分らなくなると思ふ。かういふ事

は日記が家集より發生した一面のある事の最も大きな具體的の證據にもなる。實際之などは日記と同樣に扱つて差支へないと思ふが、『右京大夫家集』の著述態度と考へ合せて見ると、集であつてもよいわけであると思ふ。（二九七頁以下參照）

この外『出羽辨集』其他がある。大體以上の樣な女の作品に比較すると、男の方は少いが、かういふものが全くないわけではない。『公任卿集』などはその一例である。之は分類法によらないで年代順に順をおつて歌を編纂するといふ立場に立つてゐるから、中には紀行文としてよい樣な部分もある。それなどは獨立させれば一つのまとまつたものとなり得るもので、『土佐日記』や『庵主』などと併せ考ふべきものである。

簡單に解說をして來た以上の諸作品は、私家集ではあるが時間的要素が濃厚であつて、まとまつた部分をとり出せば、日記乃至紀行と考へてもよささうなものがその殆んど全部である。之等の具體的な實例でも分る樣に、家集に時間的觀念が入れられる樣になるならば、日記との距離は考へ得なくなる。之は如上の家集が歌を中心にしてゐるのを、歌を第二義的にした所に、又はしようとした所に生じて來るものが所謂日記と言はれる形式と內容とを持つたものであつて、家集と言つても上の如く日記に近いものもあるのである。家集に時間の觀念のはひる事が即ち日記發生の一

つの重大な原因であつて、日記には歌合の歌だの、題詠の歌だのが多くの場合問題にならないで、贈答歌や自己を端的に表現した樣な私的のものが重要な點となつてゐると同樣に、以上の家集にも亦かうしたものが要點になつてゐる。又かうした歌を入れるためには、どうしても分類といふ形よりは時間的の要素を織り込んだ形が、より適當とならねばならなくなるのである。

以上述べて來た事を總括すると、私家集を便宜上自撰と他撰とに區別し、自撰私家集は組織的と未組織的とに分け、組織的を更に分類別にしたものと年代順にしたものとの二つの場合を考へ、年代順の場合、即ち家集に時間的要素の濃くはひつた場合に日記との區別が不分明になり、此處に日記の發生の一つの大きな基礎をおいたのである。

三 消息文

一

日記の中にはかなり頻繁に消息文がはひり込んで來る。一般に平安時代の文藝の中で、消息文は餘り高い地位を認められてゐない樣ではあるが、隱然として可なり重大な役割をはたしてゐる

と考へられる。之について日記の中で一番問題になるのは何と言つても『紫式部日記』である。この日記の中には所謂消息文といふものが混入せられてゐると言ふ說と、ゐないといふ說とがあつて未だ確定してゐない。然し果して消息文がまぎれ込んだのかどうかといふ事には相當の疑問がある。この作品全體が、或は消息文——人に贈つた書であるのかも知れない。

平安時代の文藝を考へる上に消息文の研究は忽にする事は出來ない。『枕草子』に、

文といふことなからましかば、いかにいぶせく暮れふたがる心地せまし。（枕草子）

と言つて、消息文の缺くべからざる事を述べてゐる。それならば消息文といふものは平安時代に於て著しく發達したものであるかと言ふに、必ずしもさうではないらしい。が文藝の上に表現せられる樣になつた消息文では、平安時代がかなり著しい時代であると言はねばならない。そしてそこには當然何等かの理由がなくてはならない。

消息文が文藝の上に重要な地位を占める理由の最大なるものゝ一つは自我の覺醒である。公の記錄としてのみ止めて置かれた『古事記』や『日本書紀』其他のものが、やがて家集・日記といふ個人的のものとなつたのと同じ樣に、神と人間との間を結ぶものとしての「宣命」や「祝詞」といふ樣なものが、人間と人間との間を疎通させる消息文といふ形になつて來た。平安時代の消息文が初か

ら所謂今日言ふ樣な形のものであつたのかどうかは分明でないが、多分和歌の贈答の樣な事から次第に成長したものではないかと思ふ。この外にも消息文に影響を與へたものが相當にあつたものと思ふが、『萬葉集』に於ける漢文で書かれた詞書や物語の祖と稱される『竹取物語』などによつて、支那文學形式の、從つてその記述的な內容も消息文に感化を與へてゐるといふ事は見逃し得ない事實であると考へる。支那小說の幾つかを粉本にしてゐると言はれる所の『竹取物語』の消息文を讀むならば、何處かに日本の文章になり切つてゐない所のものがある樣に感ずるであらう。殊に右大臣に對する王卿の文二通の如きは一層この感が深い。その一つは、

火鼠の裘、我が國にたきものなり。音には聞けど、いまだ見ぬものなり。世にあるものならば、この國にてもまうで來たまし。いと難き商なり。然れども、若し天竺にたまさかにもて渡りなば、もし長者の邊にとぶらひ求めむに、なき物ならば、使に添へて金をば返し奉らむ。（竹取物語）

これに於て消息文に於ける漢文學の影響が暗示されてゐる。これには平安時代の多くの文に見る樣に、和歌がはひつてゐない。和歌のはひる餘地のないこの樣なものは、後には多く出てゐるが、それが此處で決定されたとは言ひ得ないであらう。

消息文發展の中心となるべきものと考へられる和歌と詞書との變遷はどうであるかと言ふに、先づ四つ乃至五つに分ける事が出來ると思ふ。歌のみの場合、歌の前に詞書の副つてゐる場合、歌の後に詞書の副つてゐる場合、歌の前後に詞書の副つてゐる場合、更に二つの歌の間に若干の詞書の如きものゝある場合も考へ得られる。

2

歌のみが消息文として用ゐられる事は、所謂贈答歌といふ形でもつて『萬葉集』あたりにもざらに見る事の出來るものであつて、これ以後平安時代の文藝の殆んど凡てに亘つて現れてゐる現象である。一つの歌は一つの歌として立派な消息文を成立させてゐる。刹那的抒情のみであるならば歌のみでもよい。然し稍〻複雜になつた、理知的の事を先方に傳へるためには、一つの歌のみでは用が足りなくなるのは當然の事となつて來る。こゝにまづ一つの歌の簡單な解說として詞書がつけられてくる事になるのである。

詞書には大體二通りのものが考へられる。一つは歌につけてやるのであり、一つはあとから歌につけたものである。後者は全くの備忘的說明的のものであつて、私家集や日記の一つの起原が

此處にあると言へる。前の場合はもつと公開的のもので、歌と一緒に相手方に書いてやるものである。この兩者發生の先後は分明でないが、『萬葉集』あたりには已に歌の詞書と見るべきものがあり、又歌物語といふものには歌につけた詞書は非常に多いのであるが、歌そのものにつけて書いてやつたとしてある詞書は不思議に思ふ位少い所などを以て推測して見ると、有機的に歌にくつゝいてゐる、即ち消息文の一部をなしてゐる詞書といふものは別な發達をしたものではなからうか。『古今集』を見ても同樣の事が言ひ得る。『竹取物語』で帝が姫におくる文は丁度この形式に相當するものであるが、この文は『伊勢物語』などにはとても見られない散文である。形は當時已にあつたものであらうが、消息文としてこれだけのものをつける事を承認させたのは、やはり漢文學の影響ではなからうかと思ふ。單に詞書のみからの發展とは考へられない。この形はこれ以後の色々の文藝に示されて來るが、『古今集』の詞書や歌物語の散文の部分が段々にこなれてくると共に、消息文中の歌の詞書も段々こなれてきてゐる。

消息文中の歌の詞書で、歌の前にあつたものが歌の後にくることは、『蜻蛉日記』あたりから目立つて多くなつて來てゐる。この詞書は前の歌のしめくゝりをし、意味を強めるといふ樣な役を持つてゐるものが多く、例へば、

白川の關のせけばや來ま憂くてあまたの日をば引き渡りつる

明後日ばかりは逢坂。　　　　　　（蜻蛉日記）

丁度『萬葉集』などに見る長歌のあとにくる反歌の樣な役目をもつてゐるもので、それがこゝに形をかへて復活したと見て見られない事はないであらう。この詞書には短くて氣のきいたものがあつて、大體に於て口語脈のものが多いらしい。是等の日記の時分には寫實的傾向の多かつた時代であるから、かういふ詞書の發生が、外にも理由はあらうが、一層容易であつたものと考へられる。又一方では長歌から反歌が次第に獨立して行つた樣に、かういふ詞書が和歌よりも中心的となり、焦點となつて、段々と歌が第二義的地位を餘儀なくされる傾向を辿る事の端緒が、已に見えはじめてゐるのではなからうか。

歌を中心にして、その前後に詞書のつくこと、即ち一つの歌を中心にして一時にこの兩方の詞書のつく事が消息文の形態として取られる樣になると、二方面の詞書の持つ力を一つの歌に集中する事になつて、歌の効果がそれらの運用によつて高まるといふ事は考へられる。これは『蜻蛉日記』『落窪物語』・『宇津保物語』・『源氏物語』等に多く發見出來る例である。そしてこの形態が次第に寫實的傾向をもち得るといふ事は否定出來ない。前記の作品のそれは、或程度までこの事を證

據立てゝゐる。一方さうなると必然的に散文の方が多くなり、歌は景品の様な地位に置かれ、第二義的に考へられて、散文が中心となる傾向をとるのは當り前の事であつて、和歌の存在性の危い例は多く數へる事が出來る。この結果消息文が散文のみのものとしての能力を發揮する樣になつて全く歌を含まないものまで成立することになつて來る。又別の場合として歌が二つ或はそれ以上簡單な詞書で結びつけられ得る場合も若干あるが、むしろ例外的のものであらうかと思ふ。

以上の如く消息文中に於ける歌と詞書との關係の變遷は、時間的には極めて短時日に行はれたものであらうし、時間的に、以上四つの場合が明確な區劃は多分持たなかつたものであらう。從つて四者の變遷は時間的には違ひなからうが、寧ろ心理的變遷であると言つても差支へはないと思ふ。歌と詞書との關係は、以上四つ乃至五つの場合に悉くはひるのであるが、一つ樣式の次に又一つの樣式が出來ると互に相錯雜して、結局は明白な時間的區劃はなしがたいと思ふ。然し大體は以上の如く時間的に、心理的に、消息文に於ける歌と詞書との關係が變化して來たものと考へる。

3

はじめは歌が主であつたのが次第に歌の後に詞書がつく樣になると、歌と詞書とが略々同等の

地位となりつゝあつたと見る事が出來る。歌の前後に詞書のつく樣になると稍〻歌がおされ氣味であつて、——一寸見ると中心が歌にある樣であるが、——前後が詳細になればなる程歌の存在性が怪しくなつて來る。これが極端になると歌はほんの形式的附屬的のものに過ぎなくなつてしまつて、遂には全く歌の存在が忘られてしまふに至る。こゝに至ると歌から出發した消息文は完全に歌から離れてしまつてゐる。そして形に於ては、最初に見た『竹取物語』の消息文と、從つて支那文學の感化を被つてゐるもとの一致を見る。然し内容する所のものは異つてきてゐる事勿論である。歌と別れてしまつた消息文は、言はゞ『竹取物語』の消息文と和歌とによつて止揚されたものであると言つて差支へない。文藝の上に現れてゐる消息文が全く歌を含まなくなつた頃には、理知的な批判的な『古今集序』や『土佐日記』の出來た頃であつたらう。從つて貫之を中心とする風潮は彼一人ではなくて、少くとも漢文學の匂をかいだ者の持つてゐた所であつた。之が消息文にも流れ入る事になつた。從つて消息文の内容が豐富になつて來た事は『蜻蛉日記』・『落窪物語』・『和泉式部日記』・『源氏物語』其他を見れば自から明かになつて來る。とにかく消息文の中には『竹取物語』に見た要素と和歌より發展したものとが混合し合つてゐて、こゝに純粹の散文としての消息文が完成する樣になつたものであらうと思ふ。この事をもう一層明かにするために、和歌を含ま

ない消息文を含んでゐる色々の作品を引合に出して見たいと思ふ。
歌を全く含まない消息文がどういふ種類の作品に多いかを見ると、『竹取物語』などは物語の長さに比較して多い方だと言へよう。五つある消息文の中で四つまでは全く歌を含まないものであるし、他の一つも歌は中心的存在ではない。『蜻蛉日記』を見ると消息文が非常に多い。日記の中でこの右に出るものはない。『和泉式部日記』にも同じく消息文が多數あるが、中心が贈答歌にある。『蜻蛉日記』のは歌に關係しない文が全體の消息文の半數はある。五十に達しようとする位夥しくある。それはこの日記が現實の生のまゝの材料をそのまゝ用ゐようとした事を明白にしてゐるものではなからうか。『落窪物語』にも同樣に多いが或卷に割合に集中されてゐて『蜻蛉日記』の樣に散在してゐない。『源氏物語』では「宇治十帖」が注目すべきであらうか。『和泉式部日記』は贈答歌などを多く含んだ、廣く言つて消息文でのみ成立してゐるのであるが、歌を含まないものは比較的少數である。消息文と言ふものは色々の形態をとつてゐるのであるが、其形態の異るに從つて、表現される內容も種々である。『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』の樣なものに於ては散文の部分が長い形をとり得ず、抒情的で、口語的で、述懷的であるのに對し『竹取物語』や『落窪物語』のそれの樣に叙事的、報告的である場合には形態も長くならねばならないのである。消息文の內容は各々の作

品によつて種々のものがあるべきである。長い消息文としては『源氏物語』「若菜」にもあり、『濱松中納言物語』には、唐の后が中納言に託して日本の母に寄せた長文のものがのせられてゐる。かういふ樣に考へて來ると、『紫式部日記』中の消息文と言はれる部分の存在の必然性もあるのである。

以上でもつて、大體日記の中にある消息文は如何なるもので、又相當有力な要素である事が分つたと思ふ　自分の歌のみでなく他人の消息文をも遠慮なく挿入してゐる所に、やはり日記を全然個人のみのものとは考へなかつた事を示してゐるのではなからうか。日記の中で消息文の多いのは『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』とであつて、この外の日記には『紫式部日記』以外特に注目すべきものがない。『讃岐典侍日記』中の消息文は段々に今日の手紙の樣な形をとりつゝあるし、『更級日記』には只一つ地方に出張中の父より作者に宛てた「子しのびの森」の手紙がある許りである。『成尋阿闍梨母集』にも歌を作はない消息文が幾つかはひり込んでゐる。消息文を基にして日記が書かれたと明かに考へられるものはない樣であるが、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』にはさういふ所が若干ある樣である。『紫式部日記』は別に考へねばならない作品である。

一體消息文がどうして日記の中になどはひつたかと言ふに、『蜻蛉日記』には亡母の文を見た事が誌してあり、『源氏物語』の雨夜の品定の所には、蓄へておいた女からの手紙を見るといふ所があ

り、「幻」には源氏が出家の準備に文殼を燒く所がある。「橋姫」にも手紙を一袋記念にもらつたといふ樣な事がある。これ等によつて略ゝ見當がつくと思ふが、消息文が過去をかく時の材料になつた事は當然の事であると思ふ。『枕草子』には、人のやりすてた文を見るに、おなじ續きを澤山に見つけたと言つてゐる所があつて、文のまとまつてゐたことを裏書してゐる。

四　歌物語・物語

一

平安時代の日記が必ずしも時間の正確な記載の要求のもとに書かれたものではなく、一つの主題によつて進められてゐるものである事は前に述べておいた。かういふ傾向にある文藝の表現形態として、當時物語があつたことは言ふ迄もない。物語といふものが如何なるものであるかを今こゝで早急に結論する事は出來ない。現代的意味に於ける物語 Romance でもなければ、と言つて小說 Novel であると言ふわけにもゆかない。物語の概念を豫め決定しておいて、そこから物語と日記とを比較するといふ演繹的態度はこの際避けて、意味を漠然とさせたまゝ兩者の比較をなし、

そこから歸納的に得られる所の差異を物語と日記との差異とし、ひいては物語の意味を考へ、日記を闡明しようと思ふのである。

物語の祖は『源氏物語』にも言はれてゐる樣に『竹取物語』であるかも知れない。然し一方所謂歌物語といふものは一體どんなものであるかも一應考へる必要がある。或意味で『竹取物語』も歌物語の形態をとつてゐるものであると言はれない事はない。赫夜姬を中心にした幾つかの歌物語の集つたものが『竹取物語』であると考へてよい。歌物語と言はれる『伊勢物語』は業平自身の手で作られたと考へるよりも、段々に色々の歌物語が一篇づつ集積されたものであるとしてよい。尤も『伊勢物語』は未組織的な――もし組織的で時間的であつても時間に制限を加へられる事をさけた樣な――一つの業平の私家集で、彼の撰であつたのが膨脹したのかも知れないが、とにかく歌物語となつてからは自撰の要素は失はれてしまつたと考へられる。私歌集より歌物語は出ても、歌物語より私家集が出る可能性は少いのであると思はれる。歌物語は歌と物語とが歌を主にして半有機的に結合したものである。他撰であるらしい歌物語は、文藝の形態上如何なる位置をとるべきものであらうか。『伊勢物語』の如きは、或點は組織的で、時日こそ明記してないが、時間の觀念がはひつてゐて日記と考へるべき所もあるし、東下りの如きは一つの紀行文として取扱つても差支

へはなからう。かう見て來ると歌物語は組織的の樣でもあるが、又未組織的としねばならない所もある。殊に同じく歌物語とされてゐる『大和物語』などに於ては。して見ると歌物語の材料の一部は私家集が提供してゐようが、廣くこれ以外からも材料を集めてゐるらしい。物語の展開は歌から歌物語へ、更に物語へである。然しこれのみではなくて、色々の要素の離合がその間に存在する。

歌物語の發生について、私家集以外に撰集が考へられねばならない。『伊勢物語』が一人の人の歌のみを問題にしてゐるかどうかは知らない。然し『大和物語』は必ずしも一人の人の歌のみを問題にしてはゐない。撰集例へば『古今集』の雜や戀の所の各々の歌に物語的な背景をもつ詞書をつけたものが十分に歌物語となり得るのである。歌物語は私家集に材料を求めたであらうが、一つの私家集の物語化をはかつたかどうか。私家集の或種のものゝ詞書の延長の結果が日記發生の大きな一つの要因となつた樣に、發生的には撰集の樣な態度をもつた歌集の物語化されたものが歌物語になつたのではないかと思ふ。勿論二つの場合に交渉はあるだらうが。そして『伊勢物語』がより私家集的であり、『大和物語』がより撰集的である事は、『伊勢物語』が日記に近い性質を持つてゐる事によつても示されてゐると思はれる。

物語の成立に重大な領域を占めてゐると思惟せられる歌物語は、日記と全く離れた存在ではない。それならば、次に物語と日記が如何なる關係を持つてゐるかを考へて見たい。日記と物語との區別を主觀・客觀、又は抒情・叙事などより説明する事は不可能に近い。物語でも、日記でも、皆同一性質のものゝみではないのだから、その間に幾何學的な一線を明白に引く事は出來ないと思ふ。日記と物語とは相互に色々な要素を分け合つてゐる事が種々な點から考へられる。二つを同一のものとして取扱ふ事も不可であると共に、全く別のものとして取扱ふ事も亦不可であると思ふ。この意味で『蜻蛉日記』などを『落窪物語』的な寫實的物語であるとする事には、若干の疑問があると思ふ。『蜻蛉日記』などを又自叙傳小説とする説があるが、この作品などは勿論小説ではない。物語でもなければ自叙傳小説でもない。最も適切に言つて日記である。何故かと言へば、『蜻蛉日記』は日記であるから。日記と言ふので不完全であつたならば、『蜻蛉日記』を檢討することによつて、日記といふものを明かにすべきである。この日記の中に寫實的物語の要素も、自叙傳小説のそれも認める事が出來るのであるが、それのみではない。そして日記の凡てが寫實的自叙傳的要素

を多分に含有してゐるとも限らないのである。日記と物語とを直接關係づける事は、その各々の發達が單純でないだけに困難である。日記の中に物語的要素もあれば、物語の中にも日記的要素がある。前者は『蜻蛉日記』や『更級日記』などに、後者は『源氏物語』などに於て見る事が出來る。

一體私家集と日記と物語とが如何なる關係にあるかをもつと具體的に知るには、『伊勢集』・『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『源氏物語』の書き出しの所若干を比較して見るとよい。『土佐日記』の餘りにも有名な句は明かにこの作品の序文である。『蜻蛉日記』の初の部分もこの日記全體の、或は第一卷のみの序文であると考へられる。『土佐日記』の序文の意味は前述の如くで、貫之が性を異にしようとしたのは漢文學に對する揶揄であつて、ふざけて女になつたといふよりも、女のものとされ勝ちの和文を書く事によつて、漢文學に對する彼の態度を具體的に暗示したものであらう。がかういふ序文をつけるといふ事自身が、已に漢文體の諸著書に範をとつたものであるのかも知れない。この意味からすると、女の日記の最初のものとされてゐる所の『蜻蛉日記』に、等しく序文のあるのは、直接か間接かは知らないが、漢文學の形式を全く脱し切つてゐるものであるとは思はれない。この序文はかなり分り難く、從つてこゝに明白に其意義を斷言する事は出來ないけれ共、古物語に虛事の多い事を言つたり、「天下の品たり(か?)き(女?)やと問はむ例しにもせよかし、」などと言つてゐる

所を見ると、やはり何等かの目的が存在してゐた如く感ぜられる。是等二つの序文が自己を直接あらはさないで漠然とさせてゐるのは、『伊勢集』の書き出しや『源氏物語』のそれや、『伊勢物語』の「昔男ありけり」等と共通の所である。殊に『伊勢集』の、「いづれの御時にかありけむ。………ありけり。」と、『源氏物語』の、「いづれの御時にか………ありけり。」とはあまりにも甚しい類似である。この點からのみすれば、私家集と物語との間には何等の區別もなし得ないと言はねばならないと思ふ。

3

日記は原則的には自己の事を記すのであるから、第一人稱であるのが當然である。日記の原始形態を主に私家集に求めるならば、この原始形態からして己に自己の第三人稱化が行はれてゐた事は『伊勢集』を見れば明かになつて來る。『伊勢物語』に於ては主人公は昔男である。之が全體を通じて或一人の男であると言ふ事は信ぜられない。まして在原業平一人であるかどうかは尙更疑問である。然し一代の風流士業平が昔男の幾つかに相當してゐると考へる事は出來、又之が一に『在五中將日記』(狹衣)と言はれてゐるからには、業平は客觀的存在として、第三人稱として示され

てあるものと見てよい。つまり業平は、又はこの作者は、業平を第三者の形で昔男の中に忍ばせてゐる事が想像せられる。そして大體に於て時間的要素が稀薄であるから、挿話の集成の形となつたのであらう。然るに明白に日記と標傍してゐる所の『土佐日記』は、自己を第三者として描いてゐる許りでなく、性をもかへてゐる。かうする事によつて彼の批判力を自由にしようとしたのである。第三人稱にしねばならない理由は、理知性を滿足させ、批判を自由にするためであつて、この點『伊勢物語』と異る。然し乍ら貫之のこの企ては所々に統一を缺いてゐる。貫之は自分を第三人稱に取扱はうとしてゐるが、時として第一人稱、第三人稱の關係が混同してゐる。之につゞく作品である『蜻蛉日記』は本當の女の作品である。之にも自己を第三者に見ようとする態度が暗示されてゐる。然しこれが『土佐日記』の樣な明白な意圖があつたものであるとは考へられない。從つてその第三人稱と言ふものも常に動搖してゐた。ちゞめられた情熱と理知とを持つてゐた道綱母には、完全に或意識を以て自己を見る事は出來なかつた。『和泉式部物語』の人物は第三者の形として現れてゐるが第一人稱の代辨であるか否かは疑問である。之に比較すると『多武峯少將物語』などは明瞭に主人公以外の人の手になる作品であると言ふ事が分る。『更級日記』にも初の方に自分を第三者と見る樣な形跡がある。

以上の様に日記の中に現れて來る作者の立場は必ずしも第一人稱ではない。日記の中に事柄を中心にした要素の多い事は、かうした所にも現れてゐるのではないかと思ふ。單なる日次の記錄であるならば、人稱などの問題は起らないかも知れない。物語の人稱は、當時に於ては第三人稱の形が適當であらう。是等二者の中間的存在が即ち日記であつて、自己を第三人稱化する事によつて、何等かの客觀的雰圍氣にひたらうとした所が大部分の日記の作者にあつたのではなからうか。

4

次に日記の作者が物語といふものを如何に見てゐるかを一瞥したい。『土佐日記』は漢文學と和歌とにかたまつてしまつて物語にまで及ぶ事は出來なかつた。それはこの當時未だ物語と言ふものが文壇的に大した人氣をもつてゐなかつたからかも知れない。『蜻蛉日記』が物語に對してとつた態度は序文に示してあるものが殆んど唯一である。

唯臥し起き明し暮すまゝに、世の中におほかた古物語の端などを見れば、世に多かる空言だにあり。(蜻蛉日記)

柴垣し渡してある家どもを見るに、いづれならむ、よもの物語の家など思ひいくに、いとぞ哀れなる。(同前)

物語に空事のある事は承認してゐるが、物語そのものは否定してゐない。特別に深い興味を寄せてゐるとも見えない。物語と日記とを對立させて、自分の書く日記の地位を確定しようとしたものであるらしく、物語に對して批判的で、從つて全身を以て之に打ち込んでゆくといふ態度ではない。關心はあるが、それに對して或る距離をもつてゐる。物語と自己との間に距離をなくなした時、自己の中に物語を引きづり込んだ時、日記と物語との區別がつかなくなるのではなからうか。自己を物語の中に入れないで、稍〻批判的に理知的になつた時、紫式部の樣な作家の態度になる。已に存在する物語の中に自分を置かうとするのが『更級日記』の作者である。日記の中でこの作者程明白にその對物語の態度を示してゐる者はない。そしてその態度の變遷の跡も明かにされてゐる。物語に對する憧憬から之を得た喜び、それと共に自己を物語の中においてする自己滿足、現實の世界は物語の世界でない事が分つてからの幻滅と現實の認識、更に物語を否定する所にまでつき進んでゐる。この否定的態度が『蜻蛉日記』のそれと異る事は自明である。『成尋阿闍梨母集』などには、

むかしものがたりの、あはれなるも、をかしきもありし、そらごとにはあらざりけりとおぼゆ。(成尋阿闍梨母集)

と言つて物語を客観的に承認してゐる。日記などの作者が物語に對してとつた態度は決して一樣

ではないけれ共、日記が物語と接近し、又離れて行つた事が暗示されてゐるのではないかと思ふ。日記と物語とが同一のものだと考へてゐるものはない様であるが、それが同一のものだと考へ得られたであらう頃は、多分『源氏物語』の出た頃ではなかつたらうか。『和泉式部物語』が事實和泉式部の作であるとしたならば、これなどがその頂點を示すものでゞもあらう。何れにしても日記といふものゝ方が一歩手前で現實に目覺めさせられてゐることを知る。物語に對して日記の方が現實的のものである事が言ひ得るのであらうが、勿論明白に一線を劃することは出來ない。『源氏物語』などが如何にこの日記的の所を持つてゐるかは、例へば「若菜」の巻二つをよんでもはつきりとする。その中には、「年も暮れぬ。」、「年も返りぬ。」、「年かへりぬ。」といふ様に年の變化に鋭敏であり、その記事も日記のそれとかなり類似してゐる。「幻」などもこれだけを獨立させるならば、一年間の創作的日記になるのかも知れない。『源氏物語』が冗漫な作品であるといふ批評を受ける反面には、一貫したストーリーのない日記と如何に近しいものであるかゞ暗示されてゐると思ふ。

5

當時の文藝の表現形態の殆んど凡てが讀者と言ふものを豫想してゐたらしい。物語がさうであ

る事は言ふまでもない。平安時代の文藝の核心となつてゐる和歌の中で、贈答歌や歌合の歌などは目前に讀者をもつてゐた。日記は自分一人のもので、讀者など全然考へてゐなかつたであらうか。日記にも他の作品の樣に讀者が豫想されてゐたと考へねばならない。明白にさうした態度を示してゐるものもあれば、果してさうかどうかさへ分らない樣な微かなものもある。日記の發生を考へる上に缺くべからざるものである私家集にもかういふ讀者を考への內に入れてゐる態度のあつた事が分つてゐる。日記と言つてもよい作品だと前に述べた『赤染衞門集』の最後に、

關白殿に集どもあつめさせ給ふとて、こゝにもあらむ、まゐらせよ、とおほせられたれば、皆わすれにけるを、たゞおぼゆる限りかきいでてまゐらするおくに、

これならでおもふことのみ數なきをかきあつめてぞ君にみせばや（赤染衞門集）

とあるのを見ると、私家集と言ふ樣な形のものも、單に自分自身のために集めておいたものではなくて、人の求めに應じて書いたものもあるのである。『成尋阿闍梨母集』などにも讀者を考への中においたらしい痕跡が見える。かういふ工合であるがために後世にも傳はる可能性が多かつたものであらう。若し全く讀者を考へてゐなかつたとすれば、日記とか家集とかいふ樣な作品が、何故に現今まで夥しく傳はつてゐるか、一寸見當がつきかねる。まして當時の女の社會的地位といふ

ものは決して今日考へる程自由のものではなかつたのだから。外出さへ自由に出來ない限定せられた生活を思つて見れば、どうしても是等の作品と讀者との關係を考へないわけにはゆかないのではなからうか。

『土佐日記』が其劈頭に「男もすといふ云々」と述べてゐる以外にも讀者に關係のありさうな言葉は所々に見える。

それならず多かれど書かず。（土佐日記）

忘れ難く、くちをしきこと多かれど、え盡さず。とまれかうまれ、とくやりてん。（土佐日記）

などにもかうした態度が示されてゐるのではなからうか。『蜻蛉日記』の作者が序文とも思しき所に示してある事や、

是れも怪しよしも知らねど、斯く記し置くやうは、かゝる身の果てを見聞かん人、夢をも佛をも用ゐるべしや、用ゐるまじや、と定めよとたり。（蜻蛉日記）

などと書いてゐるのを見るならば、その相手は内輪の者のみでなく、餘程廣かつたものではなからうか。即ちこの日記の創作動機には『土佐日記』程明白でなくても、とにかく或意識があつたものとするのが當然だと思ふ。『紫式部日記』に於て讀者の問題になつてゐた事はその消息文と言はれ

る部分は勿論のこと、その外の日記と言はれる部分にも、

詳しくは見知らぬ人々なれば、僻事も待らんかし。（紫式部日記）

などあるのは、やはり讀者を考慮に入れての言ではあるまいか。消息文の相手が誰であつたにしろ、この作品は讀者をもち、この作品が一つの作品としてまとまつてゐたと考へてはいけないであらうか。この作と前後して出た『枕草子』にも、

世になき事たらねど、皆人知りたらむ。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草子を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はむ事のかぎりを書かむとてありしなり。（枕草子）

と草子を見る人の事を否定してゐる所に、かう申譯をしてゐる所に、實は反對にこの草子を見る人を豫想してゐるからである。かう見て來ると、日記は讀者を考への中に入れて執筆してゐるものであつて、ある人々の考へる樣に、決して自己一人のものとばかりしてゐたのではない。日記は他の當時の文藝の諸形態と同じく讀者をもつてゐたのである。

漢文體の記錄は事務的の意味で之を讀む人を考へてゐた事は想像出來るし、發生的には日記がこの種の記錄の影響を受けてゐることも考へられるのであるから、かういふ點で全く感化がなかつたものとも言ひ得ないのである。漢文體の記錄が他人の事を記すことは、何でもない事であつ

た。『紫式部日記』などは餘りにも多く他人の事を誌してゐる位である。『蜻蛉日記』などが他人の事を書き入れるのは、原則的には不當であると言ふ樣な事を言つてゐるが、他人の事が日記中には ひる可能性も多かつたのであらう。

6

平安時代の作品とされてゐるもので日記と物語と兩方の名稱を持つた作品が相當にある。その最も代表的のものが『和泉式部日記』である。『和泉式部日記』は一に又『和泉式部物語』とも言はれる。この名稱の由來ははつきりとしない。現存する作品の中で物語の最古のものは『竹取物語』である。日記は今の所『土佐日記』を以て最古のものとしてゐる。この二つの間に存在するものは歌物語と言はれる『伊勢物語』である。これは又『在五中將日記』と言はれてゐたらしい。『竹取物語』と『伊勢物語』とは、それが有機的に連絡してゐるか否かの相違はあるが、兩方共に或意味からは歌物語である點に於て共通してゐる。『竹取物語』が有機的に歌物語の結合してゐる事は物語である所以であり、『伊勢物語』がその點明白に有機的でない事は備忘的であり、從つて歌物語である。『伊勢物語』が日記と呼びかへられても不思議でないのは、昔男の初冠から臨終に至るまでの事を

誌したまとまつた形のものであると考へられるからである。昔男の一生の大部分を年代的に首尾を合せてゐるからである。『土佐日記』の一日々々の記事と『伊勢物語』の一つの物語とを比較すると、丁度『伊勢物語』と『竹取物語』とを全體として見たと同じ樣な事が言ひ得る。『伊勢物語』は『土佐日記』に比較すれば確かに物語的であり、『竹取物語』にくらべると日記的でもある。『和泉式部物語』はこの『伊勢物語』の一つの物語の延長されたといふ形のものである。作者も和泉式部であるか否かについては大きな疑問があると思ふ。この點も『伊勢物語』と共通的である『伊勢物語』にしても『和泉式部物語』にしても、他人が書いたものであつて、それが日記だと言はれるとしたならば、存在的事實であつたか否かは論外として、とにかく事實といふ事を重んじて書いた所に所以があると思ふ。現實的事實を尊重する上に於ては當然日記でぁり得るのであるが、それを自分で書くのではなくて、他の人が書く所に物語である所以があるのではなからうか。

『伊勢物語』と『和泉式部物語』以外に日記と物語との二つの名稱を併有してゐる作品としては、『篁物語』・『平仲物語』・『多武峯少將物語』などがあげられる。各々『篁日記』・『平中日記』(貞文日記)・『高光日記』などの名稱をもつてゐる。是等の作品の中で『伊勢物語』的形態を持つてゐるものは『平仲物語』である。或意味で『大和物語』的であるとも言へるが、『大和物語』程主人公に雜多性が

ない。やはり『伊勢物語』的であると言つておいてよいが、時間的に首尾を符合させたと言ふ所がない。『和泉式部物語』的形態のものは『多武峯少將物語』であるが、一貫した物語となつてゐるか否かは一寸疑はしい。『篁物語』は是等の中間にあるものとしておいてよいと思ふ。日記と言はれ物語と稱される樣な以上の諸作品の共通した特色は、內容そのものが物語的であると同時に、その書き方、即ち作者の立場によるものであるらしく思はれる。是等の中で『伊勢物語』は一寸異色のものではあるけれども、他は一括して見てよいと思ふ。何れもその著作時期は判明しないが、大體に於て平安時代中期又は後期であると思はれる。是等の作品はその主人公と作者とが一致するならば、當然日記とされてよいものである事は無論であるが、第三者の手に成るものであるらしいから、從つて人物の描寫の角度が必ずしも主人公自身の目を通した第一人稱の主觀からのみではないのである。人物描寫の角度が、或は第一人稱に、或は第三人稱になつてゐて、その錯雜が即ち二つの名稱を持たねばならなかつた一つの大きな原因である。そして是等の作品は第一人稱の主觀に終始する日記と、第三人稱として客觀的敍述をもつ歷史物語や說話物語の出て來る時代との一つの創作上の楔となつてゐるのであると思ふ。日記物語兩名稱併有作品は日記と物語との關係を暗示すると共に、歷史物語や說話物語の發生を豫告してゐるものと思はれる。

五　紀　行

一

日記と紀行との關係は、事新しく言ふまでもないことであるけれ共、一應はやはり言つて置くべきものである。一體紀行として取扱ふ作品には如何なるものがあるかと言ふと、差當り『土佐日記』と『庵主』以外にはまとまつたものはない。平安時代以後には『十六夜日記』其他があるが、今こゝではふれない事にしておく。以上の二作につぐものは『更級日記』である。作全體が紀行の仕組ではないけれ共、この様な要素の多分に含まれてゐる所がまとまつてゐる。『蜻蛉日記』にも旅行の記事の多い所から紀行の時には考慮しねばならないと思ふ。この外日記でない作品でかういふ取扱ひを受けるべき作品、記事が所々にあるが、主として日記に就いて述べる事は言ふまでもないことである。

紀行が日記と如何に區別されるかは便宜的のものであつて、二つの間に截然たる區別がある筈がない。日記といふものゝ要素は色々考へられるけれ共、その中の空間的要素の比較的多くはひ

つてゐるものを紀行と稱するのである。即ち紀行は日記の中の特殊の一部分であると見做してよい。時間といふものから全く離れては存在し得ないのであるが、必ずしも科學的に正確でなくてもよい。『土佐日記』に於ては時と所とが機械的に一致してゐる。漢文記錄類との關係が云爲される『土佐日記』であるから當り前の事かも知れない。それには時間的要素と空間的要素とが典型的にはひり込んでゐる。從つて長短その宜しきを得てゐるが、何處となく退屈を感ぜさせるものがないでもない。この點をよく示してゐるのが鎌倉時代の『十六夜日記』である。『土佐日記』は漢文體の影響の下に時間と空間との束縛より脫する事は出來なかつたが、增基法師の作とされてゐる所の『庵主』になると、同じく男の作ではあるが、よほど樣子が異つてゐる。この作品は『熊野紀行』と『遠江の道記』とより成つてゐるものであるが、『熊野紀行』の方が日記乃至紀行としての性質を充分に具へてゐる。『庵主』全體として『土佐日記』に比較すると、この方は私家集といふ體裁である。私家集の一部が獨立してかうなつたとしてもよい樣なもので、歌が主になつてゐる。『庵主』には『土佐日記』に見た樣な序文めいたものがつけてあり、自己を漠然とさせてゐる所は『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『伊勢集』などと共通的のものを持つてゐる。『庵主』は私家集的であるが、それは殊に後半に於て著しい。『庵主』が私家集的である事、廣く紀行が、日記が私家集的である事は不思議で

はない。日記と私家集との關係は前に述べたから、私家集と紀行との關係について少し述べる。

2

紀行は日記の範疇にはひるべきものであるから、日記と私家集との關係が明かにされるならば、私家集と紀行との關係は改めて問題にしなくてもよいのであるが、特に紀行といふ名稱で特別視されてゐるから、この關係を解明する事も亦必要である。私家集の中で紀行に關した歌は斷片的には多く見出すであらう。まとまつた形のものとして、私家集全體が紀行にのみ使はれるのであるならば、私家集と言ふよりは紀行である。私家集の中にまとまつた形で紀行的のものがはひつてゐるものが相當に多い。今、日記的私家集二つを例にとつて見ると、

二月晦がたに、物に詣づる道なる法住寺のさくら見むとていりたれば、花もまださかざりけり。知りたりし僧のありし、とはするものもなし。

咲きぬらむ櫻がりとて來つれどもこの木のもとのぬしだにもなし

山しなといふ所にて、くるしければ休む。そのいへあるじの心あるさま見ゆれば、いまかへさに聞えむなどいひて、

かへるさをまち心みよかくながらよも尋ねではやまじたの里
（和泉式部續集）

をはりへくだりしに、七月ついたちごろにて、わりなうあつかりしかば、相坂の關にて、しみづのもとにすずむとて、

越えはてば都も遠くなりぬべし關のゆふ風しばしすゞまむ

おほつにとまりたるに、網ひかせて見せむとて、まだくらきよりおりたちたるをのこどもあはれに見えしに、

朝ぼらけおろせる網のつな見ればくるしげに引くわざにありける
（赤染衞門集）

和泉式部のこゝにあげた二つの歌の間にはまだ三首ばかりの歌が若干の詞書を伴つてはひつてゐるし、「かへるさを」の歌の次にも幾つか續いてゐる。赤染衞門のはまとまつた紀行の一つと見てよい部分のはじめを示したものであつて、全部十四首の歌を中心にした一つの紀行文である。若しこれだけを別個に獨立させるならば、立派な紀行となるべき素質のものである。かういふ樣に私家集と紀行とは不可離の關係にある事が分る。『土佐日記』や『庵主』が男の作であり、女の私家集にかういふもののある事は、やがて『更級日記』の初の部分などの出て來ることの發生的必然性があると思ふ。

3

『更級日記』の中で紀行として取扱はれる最も重要な部分は、九月に上總を出立して、十二月に京都に入る迄の記事で、或は傳説をまじへ、或は歌を入れてかなり自由なとらはれない立場から書かれてゐる。京都に來てから暫くは物語を追求する文學少女であつたが、後には佛まゐりを頻々とする樣になり、淸水・初瀨・石山・鞍馬・太秦等に何回か行つてゐる。その度に何程かの記事を殘してゐる。中でも永承元年十月二十五日に大嘗會の御禊を見すてゝ初瀨にまうでた時の記事はかなりに詳しいものである。前の上京の時に、時間といふものが大きな條件となつてゐないと同じ樣に、この初瀨詣での時も出發の日を示してあるだけで、あとは日の明示はしてない。その代りに場所の明記はかなりにしてある。宇治殿・やひろうち・にへのゝ池・初瀨川・奈良坂・宇治のわたり等々である。日時の記載はなくても、日記の範疇内に於て旅をしたといふ事實の具體的表現があれば、それで立派な紀行であると思ふ。『土佐日記』の如く時と所とを明示してゐるものゝみが紀行であるとは言へない。『更級日記』作者は、以上の外に和泉に下つたこともある。その時の事もよく日記に示されてゐる。

日記の中で『更級日記』に次いで紀行文の注目すべきものは『蜻蛉日記』である。この作者も頻りに物詣をしてゐる。孝標女と共通のものも多い。伏見稻荷・賀茂・泊瀬・御嶽・辛崎・石山・西山・八幡・淸水・鳴瀧・等々。たゞでさへも旅行は印象强いものである上に、萬事不便の時代のそれであるから尙更心に强くのこる。そこに日記なり紀行なりが出來る。『蜻蛉日記』の旅行の記事の中には例へば天祿二年六月四日西山に行つた時の樣な良いものも相當に多い。『土佐日記』や『庵主』にくらべると、ずつとこなれてゐる事は言ふまでもない。

以上の外の日記——『紫式部日記』や『讃岐典侍日記』などには、共に紀行とすべきものが見當らない。『枕草子』には長谷寺・賀茂・太秦・淸水などに詣でた事はあるけれ共、日記又は紀行とするには若干の躊躇がないでもない。その一つの例、

八月晦日がたに、太秦に詣づとて見れば、穗に出でたる田に、人多くて騷ぐ。穗刈るなりけり。「早苗とりしかいつのまに」とはまこと。げにさいつ頃、賀茂に詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかな。これはめもまじらず、男の片手に、いと赤き稻の、もとは靑きをもたりて、刀か何にかあらむ、もとを切るさまの安げに、めでたき事に、いとせまほしく見ゆるや。いかでさすらむ、穗をうへにして並みをる、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。（枕草子）

『源氏物語』などにも紀行文としてよいものが相當に含まつてゐるが、今は略しておいて、『伊勢物語』について一寸言ふ。『伊勢物語』には業平東下りと言はれてゐる所がある。業平が果して東下りをしたか否かは問題外として、とにかく一種の紀行文である。『遠江の道記』と同様に、歌を中心にしたものである。增其の紀行は其序に示されてゐる通りの目的であらう。然し業平の東國行きの理由は知らない。或は地方の所謂莊園の主となるためであつたのかも知れない。

歌物語・日記・私家集、是等のものは紀行の方から言つても、切つても切れない緣につながつてゐる事が大體以上で明白になつたことゝ思ふ。

この時代の人々は全く足を奪はれてしまつてゐた。『萬葉集』などに見る様に、あれ程頻々としてゐた旅行が、帝都の固定と共に――これには色々な原因があるであらうが――せまい京都盆地のみに殆んど限られてしまつた。空間的に縮められてしまつた生活にとつては、僅かの旅も其當事者にとつては非常に顯著なことであつたに違ひない。男でも長い裾を引き摺つてゐる生活にとつては、旅といふ事は全く不便な、從つてつらいものであつたことは當り前である。旅のみならず固定した生活をしてゐる人々にとつて、動くものは凡て印象强いものになるのは自然の事で、當時の人々が四季折々の變化には頗る銳敏になつてゐたのは怪しむに足りないことである。たまにした

旅は印象强い。日記の中に紀行文のはひるのは當然である。日記に紀行文を殘してゐない紫式部にしても、讃岐典侍にしても、その傳記をしらべて見ると、皆或程度の旅はしてゐるらしい。さういふ人々にこそ日記が出來たのではあるまいか。平安時代の文藝家の多くは旅の經驗があり、少しでも京都以外の景物を知つてゐたものらしく思はれる。然し平安人の地理に關する知識の少かつたことゝ、それを充さうとする意識のあつた事は、『枕草子』に「山は」。「河は」などといふ事を記さねばならなかつた事によつて知り得ると思ふ。

六　草　子

一

草子とは如何なるものであるかと言ふ事を、今こゝで結論してしまふ事は出來ないが、常識的意味に於ける草子といふものは、『枕草子』や『紫式部日記』などに記されてゐる所より推定する事が出來得ると思ふ。即ち草子といふものは、其形態の方面より言へば、卷物の書籍ではなくして綴ぢた書籍を言ふのであるらしい。『紫式部日記』を見ると、中宮が宮中に還御の事も近くなつたの

で人々は共準備に忙しく落つきもないが、「御前には、御草子つくりいとなませ給」と言ふので、私紫式部は夜が明けると中宮の御前に伺候して、色々の紙をえりとゝのへて、物語の本どもを副へて、各々然るべき所に書寫の依頼狀を書きくばり、一方それを「綴ぢ集めしたゝむる」のを仕事に毎日暮したと述べてある。又同書に、

手筥一雙、片つかたには、白き色紙、作りたる御草子ども、古今、後撰集、拾遺集、その部どもは五帖に作りつつ、侍從の中納言、延幹と、おの〳〵草子ひとつに、四卷をあてつゝ、書かせ給へり。表紙は羅、紐、同じからの組、かけごのうへに入れたり。下には、能宣、元輔やうの、古今の歌よみどもの家々の集書きたり。（紫式部日記）

之などによつて、草子を內容の方面から言ふならば、假名文の書籍をさすのであるらしい。かういふ內容と形式とを兼ね備へたものが平安時代の草子と言ふものである樣であるから、一般的のものであつたには相違ない。然し「枕にこそはし侍らめ」と言つて草子に色々と書きつけた淸少納言の『枕草子』が、草子とは如何なるものであるかを本質的に示してくれるのではなからうか。

2

草子と名のつくもので現存するのは、平安時代では『枕草子』だけであらう。『枕草子』は隨筆と

言はれてゐる。日記隨筆と普通に併稱されてゐて、日記との關係が暗示されてゐるが、實際は多くの場合孤立してゐる」文學史的にも平安時代に於ける『源氏物語』につぐべき文藝作品である事は屢々言はれてゐるが、多くは何百年か後の『徒然草』に、又はそれ以前の『方丈記』などに關係づけられる作品である。『枕草子』の中には、例へば雪山の段などの如く立派に日記の一部として見てよいものなどがあつて、日記と密接な關係のありさうな事が知られるこの作品の創作態度を示した最後の段を見ると、

この草子は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、（中略）怪しきを、故事や何やと、盡きせず多かる紙の數を書き盡さむとせしに、いと物覺えぬことぞ多かるや。大方これは、世の中のをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事、なほえり出でて、（中略）おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、（中略）只人に見えけむぞねたきや。（枕草子）

これと『蜻蛉日記』其他の當時の日記とを比較するならば、日記と草子との異同が明かになつて來る。これを書いた個人的動機は徒然であるためであつて、多くの日記と異る所はない。只草子には記載事項の選擇が十分に行はれるといふ事が根本にある。然しこの選擇の行はれるには鋭敏な主觀の働きがなければならないのであつて、當時起りはじめた文藝批評や『紫式部日記』等の鋭い

批評眼とてらし合せて見たならば、當然存在し得べきものであつた。それならばこの草子に徹底的選擇が行はれてゐたかどうか。

をかしき事を取り立てて書くべきにあらねど……。（枕草子）

これはあはれなる事にはあらねど、御嶽のついでなり。（枕草子）

わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行き着かざらめど、心ゆく心地こそすれ。（枕草子）

などを見ると、選擇は行はれてゐたには違ひないが、それが自分の書かうと思つてゐる以外にまで發展して行き勝ちであつた事を示してゐるのではなからうか。即ち稍ゝもすれば日記の樣になりがちの事を示してゐるのではなからうか。屢々言はれる樣に日記は平凡の事を書いてゐる樣ではあるが、又一面より見れば、平凡でない、即ち變化のある所に日記といふものが生じたのではないかと思はれる。平安時代の日記の樣に、過去に書かるべき事があるが故に日記が出來るのである。全く書く事のない平凡人には日記はない。選ばれる事があるが故に日記が出來得るのである。必ずしも日次に書くのではない平安時代の日記は、選擇された事どもの時間的連續である。選擇された或事を斷片的に書いた『枕草子』とはこの點にも共通點があると言へる。この日記と草子との關係は、時間的私家集と分類的私家集及び撰集、物語と歌物語、歴史物語と說話物語との間にも見

る事の出來る平安時代を通じての文藝の普遍妥當的傾向の二元性であると見てよい。

七　歴史物語

1

平安時代後期の文藝の表現形式である歴史物語又は說話物語と日記とは全く無關係のものであらうか。歴史物語や說話物語の形態も、それらが突然に現れたものではなくして、その出現には何等かの必然性のあつたらう事が考へられてよい。各方面にその萠芽が見えるであらうが、日記のみについて見ると、その最も具體的の表れが『紫式部日記』と『榮花物語』との關係である。『榮花物語』「初花」卷に『紫式部日記』が材料となつてゐる。その一部を比べて見ると、

紫式部日記	榮花物語
秋のけはひたつままに、土御門殿の有樣、いはんかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水の邊の草	秋の氣色に、入り立つ儘に土御門殿の有樣、いはむ方たくをかし。池のわたりの梢、遣水のほとりの

むら、おのがじし色づきわたりつゝ、大方の空も艶なるに、もてはやされて、不斷の御讀經の聲々、あはれまさりけり。やう／＼涼しき風のけしきにも例の絶えせぬ水の音なむ、夜もすがら聞き紛はさる。

叢、おの／＼色づき渡り、大方の空の氣色のをかしきに、不斷の御讀經の聲々哀れまさり、やう／＼涼しき風のけはひに、例のたえせぬ水の音なむ、夜もすがら聞き通はさる。

『紫式部日記』は、日記としては自分以外の事が相當に色濃くはひり込んでゐる。從つて一般的の事が多くはひつてゐる作品である。客觀的描出の陰に鋭い主觀の閃きがあるが、これを除き去つた所に所謂歴史物語といふものゝ發生を見る事が出來る。『紫式部日記』と『榮花物語』との比較によつて、日記の中には充分に歴史物語の素材となり得るものゝあることを認め得るのである。尚言ふならば、日記の延長した所に歴史物語が可能にされるのである。或意味からは日記と歴史物語とが同一であるとも考へ得られる。それは只『紫式部日記』のみではなく、『讃岐典侍日記』にも大差なく言ふ事が出來よう。この作品は今迄歴史の材料としてのみ取扱はれて來てゐて、文藝としての研究對象にはならなかつた。歴史の材料といふ事は、一私人の無名の記録でない事を意味してゐる。當時の歴史を考へるのにはなくてはならない人物や事件を書いてあるからこそ歴史

の對象になり得るのである。無名の一私人の私行は、公人の行績よりは遥かに一般的歴史的價値の低いものである。従來『讃岐典侍日記』に認められて來た所は堀河帝を中心とすることであつて一私人としての『讃岐典侍日記』の文藝ではない。そこに一つ作品に對して二つの見方が存在し得るわけで、兩立した意見のある理由は、即ち日記と歴史物語との距離のあまりないと言ふ事を裏書してゐる　『讃岐典侍日記』の樣な作品が幾つか集つて一つにされるならば、或は歴史物語とも言へようし、『榮花物語』の如き作品の或部分を獨立させれば、或は日記と稱され得るかも知れない。日記に歴史物語的要素のあると共に、歴史物語にも亦日記的要素があると思ふ。『紫式部日記』などもさうである樣に、叙事の多い事などは、日記が抒情的な歌のみより出發したものでなからう事を暗示してゐると思ふ。どこかで叙事的傾向がはひつたと思ふ。

歴史物語と言ふものが元々漢文體記錄類の日本化である事が容易に考へ得られてよいことであるが、歴史物語の出現が漢文體記錄類のみに引き繼がれねばならないものであらうか。歴史物語の存在も幾多の文藝や文化の本流支流を合して、出來たものであると考へられてよいのであるから、その支流の一つが日記であると考へてもよい。以上二つの日記の外に『蜻蛉日記』などにも他人の事を書いてゐる。

世の中にいかなる咎まさりたりけん。てんげ(の脱?)人々流る(さ脱?)ゝとのゝしる事出で來て紛れにけり。二十五日六日の程に、西の宮の左の大臣流されたまふ。（蜻蛉日記）

この態度が漢文體の記錄の感化かどうかは明瞭でないが、これが後の『紫式部日記』の如きものを出す先驅的一例にはなつてゐると考へられる。又この日記の兼家に關する記事と『榮花物語』や『大鏡』と材料的に關係がないとは必ずしも言ひ得ない。『更級日記』にも大納言の姬君の事などが載つてゐる。かうして『讃岐典侍日記』が出て來たのであらうが、この日記は已に或意味からは歷史物語になつてゐる。『成尋阿闍梨母集』などにもこの傾向が濃厚に認められる。これ等は日記や家集が客觀化され、歷史物語化されることを暗示してゐる。

2

平安時代の日記の中で最も長年月に亘つてゐるものは『更級日記』と『蜻蛉日記』とである。これら二つを內容の發展の上から比較して見るならば、『蜻蛉日記』には、丁度漢文體の記錄がさうである樣に心境の歷史的な發展といふ事は餘り認められない。その時々の心理狀態の羅列に過ぎないとも言へる。然し『更級日記』の方には一個人の心の生長の跡がまざ〳〵ときざみつけられてゐる

のを見る。この點『更級日記』の方が内容に於て本質的歴史的展開を持つてゐる。記事の羅列のみでなく、その間に發展が認められる。『更級日記』のこの精神的展開について或人は日記の精神は三段に分けて考へる事が出來ると言つてゐる。その一は浪漫主義、二は希望の失はれゆく幻滅、三は神秘主義である。作者自身は一を主とし二を從とし、三は殆んど自覺してゐなかつたかも知れないが、浪漫主義者の當然落付くべき進路を示して居り、作品としても三段の變化が明瞭で性質の異るもの丶相互作用によつて各々の性質が昂揚されてゐる。思ふに孝標女の精神的發展は、大體廣意義での浪漫主義から現實主義への展化であつたらう。平安文化の爛熟期以後に出た作者をして、無暗に浪漫主義者とする事は避けねばならない。作者はロマンチストの樣に見えてはゐるが實はニヒリストであつたのかも知れない。果して最後に佛に救はれたであらうか。近代的意味に於けるのでなく、もう少し廣い漠然たる意味でのロマンチシズム、リアリズム、アイデアリスチック・ミスティシズム―ニヒリズムが孝標女のとつた過程であつたらうと思ふ。そしても一つ、この日記の最後の部分などから考へて、この最後のものになつたのではなからうかと想像する。かうした心境の展開を示した所の孝標女は、日記作者の中で、或は唯一の本質的な歴史家であつたのかも知れない。この日記の書かれた時分は、將來的なものがくずれてしまつて、從つて人々の間に浪

漫的な心持の段々に失はれた時である。過去の浪漫的な心持を反省する程、已に浪漫的でなくなつてゐたと言ふ事は、この日記をよむ上に相當重要な事であると思ふ。孝標女がロマンチストであつたのは初の間だけで、現實意識の強くなつて以後、この作品を筆にする頃は、已に過去のそれを客觀的に見得るまでになつてゐるのである。

八　說話物語

1

說話物語と歷史物語とは可成距つた存在である樣に聞えるが、さう大して異るものではない。どちらも過去が基調になつてゐる所に一つのものゝ最高潮期が過ぎて、次第に衰頽に近づく時に起る過去憧憬讃美の聲である所にかはりはない。日記は少くとも原則的に一人の記憶によるものであるが、『大鏡』になると二人の人物が記憶を辿り辿り語り出るといふ形になつて、丁度或日記作者の態度を二人でしてゐることになつてゐる。『今昔物語』などの如き說話物語は二人以上の人の記憶が基礎になつてゐる。多くの人々の記憶にある興味ある問題がかういふ形をとつたのだと思

ふ。即ち歴史物語と日記との關係が前述の如くであるし、歴史物語と說話物語との間にも或關係があることが察せられる。

平安時代に於ける說話の起原は、『古事記』・『日本書紀』はさておいて、『日本靈異記』に求めるべきものである。『伊勢物語』や、殊に『大和物語』なども亦考察されねばならないであらう。然し今は日記を中心にしてゐる場合であるから是等には深くふれない。古くさい事は凡て嫌ひなと言はん許りの『枕草子』、當時の貴族及び中流の生活振り——家庭的のそれではない——を書いた新しがりやの清少納言も時代の潮には反抗が出來ない。圓融院の御時の『古今集』の逸事を述べて古いものへの興味は相當に示したのであるが、之よりも尙一層その傾向を明白にしてゐるものは蟻通傳說である。これについては紀貫之も「蟻通の神に奉る和歌序」をものしてゐる。序である關係もあらうが、貫之は「ありどほしの神」といふ事に興味の中心があつて、その由來を書かうとしてゐないのに反して、淸少納言が由來を書かうとした所に懷古的の所がある。『枕草子』にこの傳說のあるのは「社は」の段である。この段としては昔話は必ずしも必要ではない。蟻通傳說と言ふのはかうである。昔ある帝の御時、老人は不要のものだから棄てる樣にとの勅が出た。當時某國よりこの國の才能を試さうと言ふので、上と下とに穴のある七曲の玉に糸を貫く方法を求めて來た。

皆當惑したが或人が一老人に之を問ふた所、片方の穴に蜜を塗りつけ、他の穴より蟻の腰に糸を結びつけて入らしめれば、自ら糸を貫く事が出來るといふ返答があつた。之を聞いた帝は大いに喜ばれ、以後老人を棄てることをやめた。この昔話の部分はそのまゝ『今昔物語』などに入れてもよい樣なものである。貫之は『土佐日記』中の「いけ」といふ所の記事にもその由來を書かうとはしてゐない。『蜻蛉日記』になるとかういふ冷淡の態度ではないが、『枕草子』の樣な態度でもない。その一例が「みゝらくの島」の記事である。一體說話といふ樣なものに興味をもつのは、一つには文藝の素材に苦しむ樣になる、といふよりも創作力の減退せざるを得なくなつた、或一つの文化の最高潮以後の――人間の一生で言へば老後の――文藝現象に現はれるものの萠芽と見る事が出來るのではないかと思ふ。末期に於ては、活潑な創作力の減退と不安を增大して來る文化的環境に對する危懼から、當然起つて來べき既成材料の整理が、一つは歷史物語に、一つは說話物語に起つて來たものであると考へられる。平安時代の末期をかなり鋭敏に知つてゐたらしい『更級日記』の作者に、色々の傳說々話の多いのは、決して偶然でもなければ不思議でもない。

2

『更級日記』の作者は物語に異常な興味を持つてゐた。さういふ現實にある物語に異常に心を惹かれる人であるならば、形となつてゐない口誦の物語にも亦憧憬れるのは當然のことである。孝標女が幼くて上京する時にきいた傳説は三つある。蜻蛉日記や『枕草子』に見るものもさうであるが、是等も皆人の話にしてゐる。これは後の『説話物語』とも共通の特色である人の話とする事によつて作者自身がかくされ、自己の創作としないで、責任を普遍的にしてゐる態度である。同様の態度は『源氏物語』にも所々に見える。三つの傳説と言ふのは、「まのゝ長傳説」・「竹芝傳説」・「富士川傳説」である。「まのゝ長傳説」は沒落したものに對する哀愁である。僅かな名殘をのこして西海の藻屑と消える平安時代の最後の一つの縮圖である。「竹芝傳説」をよんですぐに思ひうかぶのは『伊勢物語』の芥川の話である。まだ見ぬものに憧憬れるお姫様は浪漫的な存在である。然しその浪漫的な事が田舎から京都を考へるそれでない事は注目すべきであると思ふ。京都の人々の地方観が如何なるものであつたかについて喋々しないが、京都から田舎の見ぬものに憧憬れるといふ事は、京都といふものに對する幻滅を示すものではなからうか。孝標女が京都を慕つたのは、其處にて物語が自由に見られるといふ好餌があつたからであつて、華美な生活に憧憬してゞはなかつた。そこにこの傳説と一脈相通ずる何物かがあると思ふ。「富士川傳説」が地方官の任免

に非常な關心を持たねばならなかつた境遇の作者にとつて、現實的興味の深いものであつた事は、說話の取捨に當つて、作者とその說話との間に如何に密接な關係があるかを考へさせられる適例であると思ふ。『更級日記』の中にはこの外傳說としてもよい記事がある。夢を擬人した物語がこの代表的のものであり、中でも猫の話がその尤なるものである。この作者と『蜻蛉日記』作者の間の距離はその夢の見方によつて最も明白である。前者はどこまでも夢を信じねばならない立場の時代にあり、後者は夢を信じなくてもよかつた時代の人である。

以上でもつて日記と說話物語との間に何等かの關係のある事が分つたと思ふ。日記と歷史物語とが不可離の關係にあると同樣に、日記と說話物語との間にもそれがある。日記の中に說話をとり入れると言ふ事は、時代思潮の一つの必然的反映であり、『更級日記』が數多くの傳說をとり入れると言ふ事は、それのみを獨立させて考へるならば、後の說話集と何等の變りはないのである。二つは或意味からは同一のものであり得るのである。『更級日記』のさういふ部分の集積がやがて『今昔物語』の如きものとなつたとは考へ得られない事であらうか。說話物語にも夢の記事は數多くはひつてゐる。かういふ意味でも『更級日記』などは一つの說話集と見て見られない事はない。從つて平安時代の說話が、『日本靈異記』から何百年かをへだてゝ『今昔物語』に何等の必然性をも說

かれないでつながる考へ方は、相當に疑問としてよいのではないかと思ふ。『日本靈異記』と『今昔物語』其他のものとのつなぎをなす素材の一つが日記にあると思ふのである。だから、歴史物語が『古事記』や『日本書紀』から直接『榮花物語』につゞけて說かれるべきものでもないし、說話物語の說明が『日本靈異記』から中間的必然性を無視して『今昔物語』等に關係づけられるべきものでもないのである。

第三　內面的考察

――平安時代の日記觀――

1

これまで縷々述べて來た所は平安時代の文藝が日記と如何なる交渉を持つてゐるかと言ふ事であつたが、今こゝでは以上の如き事を別の方面から考察して見ようと思ふ。即ち平安時代の人々が日記といふものを如何に見てゐたかを明かにする事によつて、日記を內部より闡明する事によつて、平安時代の日記が文藝の上でどんな地位にあつたと考へられてゐたかを見ようと思ふ。實際日記がどんなものであるかを考へる場合に、日記そのものを研究したのみでは片手落と言はねばならない。當時日記が如何なるものと考へられてゐたかといふ事は缺くべからざる根本問題である。當時の日記觀を度外視しては、日記研究は不完全である。日記の本質を明かにすることは、或意味からは平安時代の日記觀の徹底的考察に外ならないとも言へる。この考察のためには日記と他の文藝との關係といふ現象的な一面の研究も基礎條件でなくてはならない。日記の本質と言

ふものは、この二つが兩々相俟つてはじめて基礎が出來るものである。

平安時代に日記の研究としてまとまつたものはないらしい。從つて當時の日記觀を見るには色々の作品等に散在してゐる日記觀を集めねばならない。日記觀の材料を最も多く提供してゐてくれる『蜻蛉日記』が、同時に日記であると言ふ事は非常に好都合である。日記を書くと言ふ意識を最もよく示し乍ら日記を書いたのであるから、『蜻蛉日記』はどこまでも日記研究の主要な對象でなくてはならない。これに次いでは『源氏物語』が注目さるべきものである。以下是等を分析綜合して出來るだけ平安時代の日記觀を闡明したいと思ふ。

2

世の中におほかた古物語の端などを見れば、世に多かる空事だにあり。人にも有らぬ身の上まで書き日記して、珍らしきさまにも有りなん。（蜻蛉日記）

これは『蜻蛉日記』の序文とも見られる部分の一部である。當時どれだけ澤山の物語が存在してゐたのかは明かでないが、色々の書物に載つてゐる名前によつて見ても、物語は餘程の數に上つてゐた事が分る。當時物語として如何なるものがあつたかを、この作品よりは少しく時代の下る作品

ではあるけれ共、『枕草子』・『源氏物語』・『狹衣』・『更級日記』などより抄出して見ると、

〔枕草子〕　住吉・空穗・殿うつり・月まつ女・交野の少將・梅壺の少將・人め・國ゆづり・うもれ木・道心すゝむる・松が枝・狛野の物語。

〔源氏物語〕　住吉・空穗・交野の少將・狛野の物語・芹川・とを君・はこやの刀自・正三位・からもり。

〔狹衣〕　大津の王子・おほゐ・芦火たく屋・かはほり・隱簑・から國・袖ぬらす・玉の緒・ふせご・みづからくゆる。

〔更級日記〕　とをぎみ・せりかは・しらゝ・あさうづ・かばね尋ぬる宮。

『蜻蛉日記』に言ふ古物語が如何なるものをさすのであるかは分らないが、とにかく『竹取物語』と言ふ樣な超現實的物語であつた樣に想像される。其等が何等の現實的實在性眞實性を有しないものであつて、作者の如き深刻な現實的問題にぶつかつた人間にとつては、餘りにも意味のない空虛なものに思はれたのであるかも知れない。現實生活から足の浮び上つた幾つかの物語が意義を失ふと同時に、現實の生活に緊密に關係のある問題が當然文藝に取り入れられて來ねばならない。

この作者が自己の赤裸々の生活を描かうとして日記を書いた事は、その誌してゐることによつて

疑ふ事の出來ない所である。『蜻蛉日記』は嘘のある物語の反動として起つて來たもので、それがニュース・ヴァリューのない一平凡人の告白であること、即ちこれまでの物語と對稱的立場に立つものである事を示してゐると思はれる。これは『蜻蛉日記』以前の物語に對する道綱母の考へであるが、この作品以後の物語は段々と『蜻蛉日記』的に、かなり著しい變遷をしてゐると見られる。それらに現れてゐる物語觀を見るならば、道綱母の立場が一層明白になると思ふ。物語の中でも、最も色々の問題を持つてゐる『源氏物語』の中に示されてゐる物語觀の要點を示すならば、

昔物語などにこそかゝる事は聞けど、いと珍らかにむくつけゝれど………。（源氏物語―夕顔）

かの昔物語に、殊さらに作り出でたるやうたる御有様なり。（源氏物語―賢木）

昔物語などを見るにも、世のつねの志ふかき親だに、時に移ろひ人に隨へば、おろかにのみこそなりけれ。（源氏物語―眞木柱）

後の世の例にいひ出づる人あらば、昔物語などに、殊更に鳴滸めきて作り出でたる物の譬にこそはなりぬべかめれ。（源氏物語―總角）

物語の姫君の、人に盗まれたらむ朝のやうなれば、委しくもいひ續けず。（源氏物語―蜻蛉）

鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもていぬらむ、いと昔物語の怪しき物の事のたとひにか、さやうなる事も

いふなりしと思ひ出づ。　　　　　　　　　　　　　　　　　（源氏物語―蜻蛉）

さる所には隱れ居けむかし。昔物語の心地もするかな。　　（源氏物語―手習）

『源氏物語』の昔物語觀はその非現實的なのに反對する立場をとつてゐる。この事は即ち『源氏物語』が現實的である事を暗示してゐるものではなからうか。この態度と『蜻蛉日記』の態度との間に幾何の距離をおいて考へるのがよからうか。二つの物語觀の間には根本的差異は認められない樣な氣がする。結論的に言へば、時間的に後の作品である『源氏物語』が『蜻蛉日記』的になつてゐる事を示すものである。『源氏物語』が非現實的傾向よりも現實的傾向をより多くもつて居り、且それを意識してゐる所に日記との接近が考へられてよい。物語觀を中心にして考察する時『蜻蛉日記』と『源氏物語』とは現實的同傾向にある。『源氏物語』にはそれ以前の物語の影響は多いであらう。然し全くそれに追從したものでない事はその物語觀によつても知られる。日記といふものの發生が現象的に私家集などゝ深い關係にある事は前に見た所であるが、內在的に物語に反動したと言ふ形にもなつてゐる。然しこの反動といふ事は、それの惹く注意が其對象に最もあることによつて、それと最も深い關係にある事を示してゐる。日記と物語との深い關係は再び說くまでもない。

猶物はかなきを思へば、有るか無きかの心地する、かげろふの日記と言ふべし。（蜻蛉日記）

他の幾つかの日記は、その名稱の由來が多くの場合所（土佐日記・更級日記）や人（紫式部日記・和泉式部日記・讃岐典侍日記）によつてゐるのに、この日記は日記の內容である所の自己の生活現象の一比喩を以て命名してゐる。他の日記が名稱の由來を明記してなく、從つてその命名者が不明の場合が多いのに、これのみは明白に自己の著述に命名してゐる。この日記がかくまで明白に日記である事を述べてゐる裏には、當時の日記といふものは、文藝の一つの表現形態である事が十分に認められてゐなかつたがために、一度ならず日記といふことを强調してゐるものであらう。そしてこの事によつて道綱母の日記創作の態度が奈邊にあつたか考へられもするのである。

大臣も法師になり給ひにけれど、强ひて帥になし奉りて追ひ下し奉つる。其の頃ほひただ此の事にて過ぎぬ。身の上をのみする日記には入るまじき事なれども、なし（か脱？）と思つたり（た？）しも誰ならねば記し置くなり。（蜻蛉日記）

これは源高明が流された時の事を日記に書き入れた折の言ひわけである。日記は第一人稱である自分のことをのみ誌すのが本來であるのであるが、こゝには破格的に他の人の事をも書き入れると言つたのである。即ち日記と言ふものは、多く漢文でしるされた記錄類とは異つて、客觀的事實の記述よりも、主觀的な事をその創作動機として重大視してゐた事を暗示してゐるのである。

「人にもあらぬ身の上まで書き日記」すると言ひ、「身の上をのみする日記」と言ひ、共に日記は個人的獨占的のものであつた事を示してゐる。だから日記といふものが日毎、月毎、年毎と時間的の確實さに於てものせられねばならない必要はなかつたのである。

男もすといふ日記といふ物を、女もして心みむとてするなり。（土佐日記）

男が漢文で書いてゐた日記を、男が國文で書いたのが『土佐日記』であつて、從來の日記なる概念はこの日記の形式が日次的であることによつて最もよく示されてゐる。この日記のいふ如く男が女に代つた所に『蜻蛉日記』の樣な作品が出來たのであつて、表現形式も作者も變ると共に、從來の日記とは本質的差異を内容にも生じてきたのである。『土佐日記』のこの句については幾度か前にのべておいた。

日記の中で日記と明示してゐるのはこの『土佐日記』と『蜻蛉日記』のみであつて、日記觀の要點は以上四つの場合に略〻つきてゐる。以上の外にも日記觀として見るべきものが若干づつ當代の作品に散在してゐる。

3

唯ありつることを、物語の樣に書きしるしつゝ、其の折の歌どもを付けたり。面白き所々も、悲しき所々もあり。

（宇津保物語）

この句には日記と明示してないが、日記の事であると考へられる。人に見せるためであると否とに不拘、日記が物語的の性質をもつものである事は、この文句によつても分ると思ふ。日記の中には物語的構成をもつたものがあるし、中には同一の作品で日記と物語兩樣の名稱をもつてゐるものも見出す事が出來る。これは日記と物語との相互關係を具體的に示す一例であつて、日記が物語に對して立つた樣なものゝ、尙それから全く脫する事が出來ず、それと結合した事を示す一材料である。こゝに示されてゐる物語との關係は現實の物語化であつて『更級日記』に見る樣な物語の現實化ではない。

いかでかく空に通ふ御心ならむ、二條の后も、物のあはれに慰む方なく覺え給ふ折々、同じ樣に繪にかき集め給ひつゝ、やがてわが御有樣を、日記のやうに書き給へり。いかなるべき御草子どもにかあらむ。

（源氏物語）

日記はあくまで現實的のもので、事實の記載といふ事は不可缺の事である。自分の有樣を日記の樣に書いたと言ふことは、事實と言ふ事が如何に日記と言ふものゝ重要な點であるかを示してゐ

ると思ふ。又これによつて、日記は必ずしも後になつて全部を反省的に誌したものではなく、その折々に記したものである事や、日記をものするのが無爲で徒然であることなどを知る事が出來る。『蜻蛉日記』にも、

我れは春の夜の常、秋のつれ〴〵、いと哀れ深き詠めをするよりは、殘らん人の思ひ出にも見よ、とて繪をぞ書く。（蜻蛉日記）

といふ樣な事が見えてゐる。道綱母が日記を書いた心持はこゝで繪をかく心持と同じであつたらうと考へられる。そして日記も「殘らん人の思ひ出にも見よ、」と思つて書いたのかも知れない。かういふ徒然なる態度は、生活に倦怠を重ねに重ねた當時の藤原氏を中心とする人々の――就中女の當然行きつくべき所であつて、日記の如きも當時の狀態の生きた一面が反映されてゐるのである。明日の生活に希望のない女達が、徒然のまゝに自己の生活を反省し、筆の立つものは日記などを書く樣になるのは當り前の事である。此處に見える日記は、單に文字によつてのみ表現されてゐるものではなくして、一層物語的要素を含んだ所の繪日記である事が知られる。それは、

その世に、心苦し悲しと思しゝ程よりも、おはしましけむ有樣、御心に思しけむ事ども、只今のやうに見ゆ。所のさま、おぼつかなき浦々、磯の隱れなく描き現はし給へり。草の手に、假名の所々書きまぜて、まほのくはし

き日記にはあらず、あはれなる歌なども混れる趣ゆかしう、誰も異事思さず。さま〲〵の御繪の興、これに皆移りはてゝ、あはれに面白し。（源氏物語）

に於ても見られる所である。平安時代の文藝の研究は繪畫を無視しては成立し得ないだらう事はかういふ所にも見られるのである。現存するものにも『紫式部日記繪卷』や『枕草子繪卷』の如き物語以外のこの種の文藝作品にも繪の伴つてゐたことが分る。『土佐日記』にも繪に描かれたものがあつたらしいとの事である。繪日記と言ふものゝ具體的なものは如何なるものであつたかは知らないが、平安時代の文藝が繪と密接な關係を持つてゐた事は、『源氏物語』のこの記事によつて自明である。この日記は漢文體の日記ではなく、もつと自由な立場で書かれたものであるらしく、『蜻蛉日記』以下の作品が具體的な例としてあげられてよいと思ふ。個々人の生活記錄にとつて不必要な所はどし〲〵省いたものが日記の本當の姿であることを示してゐるのであつて、この時代には最早漢文體記錄類と日記とは性質の異つた種類のものであつた事が分る。

我が世にありける事ども、月日たしかに記しつゝ、日記してさるべき所々は繪にかき給へり。（狹衣）

さて土御門殿に渡らせ給ふに、宮の御おくりものに、何わざをして參らせむと思しけるに、何事も珍らしげなき世の有樣となりにためれば、中々なりとて、村上の御時の日記を、大きなる草紙四つに繪にかゝせ給ひて、詞

は佐理の兵部卿の女の君と、延幹の君とに書かせ給ひて、麗はしき箱一具に入れさせ給ひて、さべき御手本など具して奉り給ひければ、宮は萬のものに優りて、嬉しく思召されたり。（榮花物語）

『狹衣』の記事は前後の關係より見て、全く前の『源氏物語』の構成を模倣したものであることが知られる。『源氏物語』にても、これにても、日記は飽くまで現實の姿そのものを寫し出す事にある事が分る。「月日たしかに記」するのは日次の日記をさすかどうか。『榮花物語』の日記は國文體か漢文體か明記してないが、詞を女に書かせた所などを以てするならば、多分國文體のものであつたらう。これも同じく繪日記である。又『在五中將日記』と『伊勢物語』とが果して同一のものかどうかは分明ではないが、

この繪どもを見給へば、在五中將の日記をいとめでたう書きたるなりけりと見るに、……。（狹衣）

の樣な記事が見えてゐる。以て日記の繪畫化の樣子が餘程廣かつたものであることが分るのであり、繪畫と密接な關係をもつ物語と日記とが、繪畫を中心にして如何に深い關係にあるかを想像し得ようと思ふ。繪畫といふ方面より考へても、日記と物語との混合性、化合性を認めねばならないであらう。

御繪ども調へさせ給ふ中に、かの須磨の日記は末にも傳へ知らせむと思せど、今少し世をも思し知りなむにと

思し過して、まだ取り出で給はず。（源氏物語）

これも同じく繪日記の事を言つた所であるが、源氏が自作の日記を後世に傳へようとしてゐた事は、日記に讀者が豫想せられてゐた事と一致し、且日記が現今まで傳へられて來てゐる一つの反證であると考へられる。日記は自己一人のものとして引き込ませておくものではなくして、公然と人に讓りなどしたものであるらしく、日記を書く時にそれを考慮に入れる事は當然である。

かの旅の御日記の箱をも取り出でさせ給ひて、このついでにぞ女君にも見せ奉り給ひける。（源氏物語）

日記は人に讀ませるために書いたものかどうかと言ふ事は一樣には言へないが、よむ人を考への中に入れて書いた事は認めねばならない。この記事などは日記を人によませた事を最もよく示してゐるものゝ一つである。鎌倉時代の『十六夜日記』には、

下りしほどの日記を、この人々の許へ遣はしたりしを、よまれたりけるなめり。（十六夜日記）

とあつて、明白に讀む人を意識してゐる。『紫式部日記』なども同樣に考へてよいのであるけれ共、積極的には何等の意志表示はしてゐない。『蜻蛉日記』の附錄が何時のものであるかゞはつきりしないので、明白な證據とはなり得ないが、參考までに見ると、

其の子の日の日記を、宮にさぶらふ人に借り給へりけるを、……又の年、春かへし給ふとて、……、（蜻蛉日記）

如何なる日記であつたかは分らないが、『源氏物語』などに日記を傳へさせる事を言ひ、こゝには日記を借りる事を述べてゐる。貸借が行はれてゐた。かういふ事があつたからこそ日記といふ樣な一寸後世に殘りさうもない作品が流布され、現今まで澤山に傳はつてきたのだと思ふ。

これ迄述べて來た外にも日記に關した記事が見えるが、其等は果して和文體のものをさすのか、漢文體のものをさすのかはつきりしないので、確實な材料とはなり得ないが、參考のために一寸述べて置きたい。

家の古集の樣なる者に侍り。俊蔭の朝臣の唐土に渡りける日より、父の朝臣の日記せし一つ。詩、和歌しるせし一つ。その亡せ侍りける日まで、日づけしなどして置きて侍りけるを、俊蔭の朝臣歸りまうでける日まで作れることも、その人の日記などなむ、その中に侍りし。（宇津保物語）

これを漢文體のものとしても、或は生硬なものではなかつたかも知れない。かなり大部のものであつた事が考へられるが、或は『土佐日記』の樣なものを漢文體でものした樣なものであつたかも知れない。何れにしても詳細不明である。同じ樣に、

集ども、日記どもをなむ讀ませて聞くべき。（宇津保物語）

これも不明であるが、集と對稱的に考へ、又よませてきいた事等から推して國文體のものであつた

とも考へられない事はない。日記は誌す事に於ては主觀的獨占的であつても結果として生れたものは、必ずしもさうではなかつた。

にはかに空くらがり、雨しきりにくだりしかば、立ちこみつる人、足もとりあへずぬれにけり。雨四日つゞき、民よろこびをなしけりと、父の朝臣も日記にしるしおかれけり。（經信卿母集）

これは漢文記らしいが同じく日記がよまるべき結果を生じてゐる。平安時代の作品ではないが說話物語などには、

一切經をかきて、供養をとげたる人なり。佛に同じとて拜せらるゝとぞ、かの日記には侍る。（古今著聞集）

上古に一度ありけるよしその時も沙汰ありけれど、慥かならぬことにや。その日の日記に侍りけるは、池の水千年の色をたゝへ、岩の苔萬代をへたるけしきなり。（古今著聞集）

この事いづれの日記に見えたるとはしらねど、古人申し傳へて侍り。（古今著聞集）

とある。是等は多分漢文體の日記であらう。平安時代末期の漢文記錄類が次第に和文化しつゝあつた事は『御堂關白記』や『明月記』を見ても分るであらうし、又和漢混淆文の出現にてらしても明かな事である。從つて『古今著聞集』の如き說話集の材料を日記が提供した事は容易に考へられてよい事である。

4

以上述べて來た事は日記を考察する上に必要不可缺のものである事は改めて言ふまでもないのであつて、日記の闡明はこの基礎の上に立たねばならない。然し何分にも材料が極めて少く、說明の未熟の所も多く、從つて意味の不明の點も相當に多い事と思ふ。日記といふものが、當時如何なるものと見られてゐたかを出來るだけ多くの材料によつて見たのである。以上述べた事は、外面的考察と表裏をなすものであつて、根本的に背馳した事の言はれる筈がない。この內面的考察と外面的考察とを合せてはじめて平安時代に於ける日記と言ふものゝ地位が示されるのであると思ふ。この二つの考察の一致した所に日記と言ふものゝ本質的姿がある。この基礎の上に立つて改めて日記の本質が究明されねばならない。

第四　發生的考察

——文藝的意義——

文藝とは各時代々々に於ける社會的集合生活者の包懷するイデオロジイ(Idéologie)の端的直接な、併し一定の組織構成を備へた具體的な表現である。(吉江喬松博士)

1

文藝は文化の一つの分野である。如何なる時代の文化と雖もその時代の社會から切り離されたものではない。社會の反映でない文化は考へ得られない。文化の一つの分野が文藝である以上、文藝も亦社會とは切り離すべからざるものである。社會は段々に變化し、文化は段々に動いて行く。從つて文藝現象といふものも靜止してゐるものではない。若し日記といふものを社會の一表現である所の文藝の中の一つの表現形式であるとするならば、日記も亦人間社會と共に動いて行くものである。日記の意義又は本質と言つても、絶對的なある觀念を見出すことではなくして、日記がその時代の文化と如何なる關係をもつて移つて行つたかと言ふ事を闡明することであると言

ひ得ると思ふ。

日記が如何なる客觀的事情の下に生じねばならなかつたかは、恐らく人間に文藝的自覺が何時如何にして明白な形になつたかと言ふ事にもなると思ふ。『萬葉集』に於ては個人我の自覺のあつたのを見る事が出來る。然し文藝に對して自覺的認識的であつたかは可なり疑問であると思はれる。『萬葉集』中に引ける所の『類聚歌林』が歌の評論をしてゐるとは言ふものゝ、その內容は果して文藝を根本的に認識しての事であるか否かゞ疑はれる。同じく文學論として空海の『文鏡秘府論』や藤原濱成の『歌經標式』が擧げられるかも知れない。前者は六朝及び唐代の詩文の評論、格式を論じ、後者は歌病、歌體を說いてゐるが是等には支那文學の影響を受けた跡が歷然としてゐる。『類聚歌林』にした所が支那文學の感化を無視する事は出來ない。何れにしても文藝に對する自覺が支那文學によつて啓發されつゝあつた事が明瞭である。『萬葉集』及び其以前の作品が大低個人の作になつてゐないで、漢詩文に至つてはじめて空海の『三教指歸』・『文鏡秘府論』・『文筆眼心抄』・慈覺大師の『入唐求法巡禮行記』・都良香の『都氏文集』・島田忠臣の『田氏家集』・菅原道眞の『菅家文草』・『菅家後草』の如き個人的作品が出來て來たといふのも如上の事を裏書してゐるものである。私家集と言ふものが物せられる樣になつたのは是等以後の事であつて、文藝に對する自覺が段々

にある形をとる樣になつてきた結果であらう。私家集や日記は個人我の覺醒とそれに伴ふ文藝への自覺によつてもたらされたものである。『蜻蛉日記』の中に日記には他人の事を入れるべきではないと言つたのは、當時まだ他人の事を入れる日記が一方にあつた事を示すもので、日記が如何にして發生してきたかを示してゐる意義ある一つの詞である。日記類の盛に出る以前に文學論として『古今集序』がある。之の中にも支那文學の影響がかなり濃く反映されてゐる。旁々文學に對して全く自覺的認識的になつたのは、平安時代の末期以後、日本的な歌道と言ふものゝ成立を見た時に於てゞあると考へられる。日記は其過渡時代の具體的な一つの實例であるのかも知れない。

2

日記が全盛を極めたと見てよい平安時代の中期後期といふ時代は如何なる時代であつたか、そして何故にかくの如く日記が澤山に出たかを考へて見る。大化改新に於て確立された中央集權制は、社會の變化するに從つて次第にその缺點を現はし、その隙に乘じて所謂莊園制度といふものが徐々に成長して來た。これも形式的には京都在住の人々に隷屬してゐたとは言ふものゝ、實質的には都の人々と遊離した存在となつて來てゐた。莊園は地方に分散してゐて、地方的勢力の物質

的基礎とはなり得ても、京都の人々のそれとはなり得なかつた。「雨夜の品定」にて源氏君が、

すべて賑はしきによるべきななり。（源氏物語）

と言つたのは、經濟的危機に瀕しつゝあつた人々の詐らざる詞であつたと見る事が出來よう。これが爭ふべからざる當時の人々の眞情であつたのであると考へてよい。即ちこの簡單な言葉の反面には、地方的勢力が經濟的にも政治的にも段々と基礎が確立して來た時代があり、やがて是等實力を持つものが京都の人々の勢力爭ひに參加する事が暗示されてゐるのではなからうか。

平安遷都（七九四）以來次第に生長してきた藤原氏を中心とする文化が道長の時に至つてその頂點に達した時には、已にこの藤原氏に代るべき新しい勢力をもつもの――武士が地方に確乎たる地盤を持つてゐた。形だけ整つて內容のくずれはじめた藤原氏を中心とする人々は、新しい飛躍もなし得ず、なしくづしに無聊な不安な日を送らねばならなかつた。平安時代の人々は飽滿しきつた現實に滿足する事も出來なかつたが、さりとて明日への出發を新にするといふ事も勿論出來なかつた。環境がそれを許さなかつたばかりではなく、段々に閉ぢ込められた生活を餘儀なくされる樣になつた。そこに爲すこともなき倦怠を如何にもてあましたかは想像以上のものがあつたのではないかと思ふ。日記の中に現れて來る是等の事情は實によくうつされてゐる。日記の發生

も多分かういふ環境より生じねばならなかつたものであると思ふ。爲すこともない寂寥は、やがて人々をして筆を動かさせ、歌を詠ましめた。又或人々には物語を追求させ、戀愛に走らしめた。好んでなした物語でもかういふ現實逃避の一つの方法でもあつたのである。この時代のどの日記にも殆んど出て來る「つれ〴〵」といふ事を、どんなに心苦しく感じてゐたかは分らないが、それを又どうする事も出來なかつた。

見所もなきふる里の木立を見るにも、ものむづかしう思ひ亂れて、年來、つれ〴〵にながめあかし暮しつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋に行き交ふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時來にけりとばかり、思ひわきつゝ、「いかにやいかに」とばかり、行末の心細さは、やる方なきものから、はかなき物語などにつけて、うち語らふ人同じ心なるは、あはれに書き交し、少しけ遠きたよりどもを、尋ねてもいひけるを、たゞこれを樣々にあへしらひ、そゞろごとに、つれ〴〵をば慰めつゝ、世にあるべき人數とは思はずながら、さしあたりて、恥かし、いみじと思ひしるかたばかり、のがれたりしを、さも殘せる事なく、思ひ知る身の憂さかな。

（紫式部日記）

『萬葉集』に私家集的及び日記的の要素のある事は、奈良時代から平安時代に、上古から中古にかけて環境的に著しい變動のなかつたために、文藝に對する自覺が自我への覺醒につゞいて徐々に生れてくる事になつた事を示してゐると考へられる。上古から中古にかけて段々に發展して行つ

た莊園と言ふものは、個人を、も少し廣く家を基礎にしてゐた。從つて『萬葉集』に個人の自我の覺醒のあるのは當然である。平安時代に於ても、殊に前期に於て個人の存在が認識され、從つてそれに伴ふ文藝への自覺の結果は私家集や日記の如き形式の文藝を創作させる事になつた。莊園制度はある意味では封建制度を建設する苗床でもある。かういふ社會的情勢は平安時代末期になると次第に色濃くなつた。封建社會では個人の存在は第二義的である。かういふ社會の完成に伴つて文藝も亦變化せざるを得なくなつた。日記と言ふ樣なものも初期のものより末期のものに移るに從つて個人の主觀のみが中心でなくなり、說話さへ入れるとか、自分の日記であり乍ら他人の事を中心にして書くといふ樣にかはつてこねばならなくなつた。

3

外面的考察及び內面的考察によつても略〻考へられる如くに、日記は所謂浪漫的のものでもなく所謂現實的のものでもない。この何れにも限定されるべきものではない。若しどちらかに限定して——浪漫精神云々といふ說明は屢〻見る所ではあるが——日記の意義又は本質なるものを考へるならば、實際の作品にあたつて具體的な說明をする時に、きまつてその缺點が暴露される。そ

れは根本的に日記の發生を考へないからである。日記といふものが現はれるのは浪漫的な傾向と現實的な傾向とを持つてゐる時に多い。日記及びこの種の作品は、是等二傾向の境界線上を彷徨するものである。而して日記がどの傾向により強く傾くかは、作者の個性と、その個性を客觀的に制約してゐる所の環境とである。

平安遷都以來の固定し安定した社會より起つた京都の人々の浪漫的傾向の作品は『竹取物語』であると言はれてゐる。遣唐使を廢止する程まで支那文化を吸收してしまつた當時の文化は、同時に未知のものに對する憧憬も失つてしまつた。未知の世界であつた支那の文化が存分に吸收されてしまつた以上、憧憬の世界を目前に見るに等しい。當然の結果として自分達の立場の反省が要求せられる。浪漫的な精神は失はれてしまつて次第に現實意識が强くなる樣になる。日記及びこの種のものゝ生れ出る社會的乃至文化的必然性の一部はこゝにある。現實及び現實と對照的の過去を見る。漠然と將來的な何物かを把握しようとする浪漫的傾向から、現在を熟視せざるを得ない現實的な傾向との中間、即ち現在に立脚點をおき乍ら現在に至るまでの何物かを求めるもの、現在にまで至らずに只過去を求めたまゝのものが生ずる。浪漫的な心境から現實的な心境に目覺めはじめた第一歩、そこに日記などの出發點があると思はれる。この二つの傾向は急速に轉換する

ものではなく、徐々に變化するものである。その過程が即ち自己告白的な日記の如き種類の作品となつて現れてくるのである。『萬葉集』以來自己に對する覺醒は已にあつたが然し文藝に對する自覺はまだ積極的認識的ではなかつた。從つて前の二つの傾向も積極的に自覺的のものではなく漠然としたものであつて、近代に於けるそれらの様に限定されたものではなかつたと思ふ。

平安時代の社會狀態が封建制度確立の一つの過渡的存在であつて、其自身の顯著なものを持たなかつたと同樣に、文藝の方面に於ても徹底的なそれは持ち得なかつた。この事は文藝がまだ明白に認識的でなかつた事にも一つの反映があるものと思ふ。近代の如く文藝運動が積極的に自覺的になり得てゐなかつたゝめに、その各々が獨特の立場にある事は出來なかつた。何等かの點でこの色々の傾向がまじり合つてゐた。かういふ時代であつたからこそ幾多の日記の如き種類の作品がものせられたのである。又ものせられねばならない條件が具つてゐたのである。日記の樣なものも、單純に不意と出て來たものではなくして、それには又それ相當の理由があつたのである。

現實の上に立脚して(自己の)過去を省みる所に生ずる日記は、單にアッピールする事でもなく、單にリポートする事でもない。この中間にあつてデンケンする事である。一種のコンフェッションである。自己の省察を自由自在に表現するためには告白錄の形式が最も適當であり、この形式を

選ぶ事によつて最も自己を明かに示す事が出來得るのである。現在にあり乍ら過去を考へ現在と過去との照應をやり乍ら、過去を遠くから眺め得るだけの距離をもつて正確に把握する事が、とりもなほさず日記である。この意味に於て日記作者の態度は又歴史家の立場にあるとも言へる。即ち洞察・思考・表現の三つが日記を構成する重要な創作的要素であつて、その一を缺くも日記は成立し得ないのである。日記の作者が直接當時の地方の生活に接し得る機會のあつた人々が多く、彼等は地方と京都との中間にあつた。そして彼等がより京都的であつたと同じ樣に、その日記は過去的の要素が多く浪漫的のところも多分にもられてゐる。が日記の中で最も浪漫的のものとされてゐる『更級日記』に於ても、その著述態度は決してロマンチストのそれではない。

日記と同種類のものとしてあげてよいのは紀行・消息文などであるが、消息文はともかくとして紀行は全く日記の範疇にはひるべきものである。消息文は日記といふ獨占的なものよりももつと解放的公開的のものである。この外に草子といふものがある。草子が如何なるものであるかを遂かに明かにする事は困難であるから、只日記との比較によつてその異同の要點を述べて見ると、作者の心を捕へた事象の時間的連續性を有するものが日記であり、然らざるものが草子といふ形をとると考へておいてよいと思ふ。

4

平安時代の日記と言ふものが漠然たる意味に於ける浪漫的傾向から現實的傾向への過渡の時期に出來て來てゐる事を述べたが、今如上の事の傍證を他に求めて見ようと思ふ。明治時代以後の文藝に於てはその運動がかなりに意識的であつた。殊に外國文學の新しい影響を受けてからは十分に積極的であつた。從つてその變化にも際立つたものが短時日の間に形作られてゐる。明治文學の中でロマンチシズムの運動は二十年代であり、それも『文學界』を中心とする二十年代末である。リアリズムの運動は三十年代以後であり具體的には田山花袋の『蒲團』などが代表的にあげられる時以後である。勿論之れ以前に自然主義の前期があつた。三十年代の大半が之に相當する。浪漫主義から自然主義への過渡期とも稱すべき時は二十年代末から三十年代末までゞあり、この時代に最も顯著な活躍をした人が作家國木田獨歩である。獨歩がロマンチストであるかリアリストであるかについての說は區々であるが、實際はこの區々の意見の出る所に獨歩の作品の地位があるのだと思ふ。獨歩は抒情詩から出發して小說にはひつた人である。初期の小說は抒情詩的な味はひの豐かな作品であるが、後には段々にこれが失はれてきてゐる。獨歩の作品の多くに見う

けられる形式としては思ひ出がある。初の頃は「私」なる人稱の語る思ひ出話であるが、後にはその第一人稱が第三人稱になつてしまひ時間的にも過去のものゝみではなくなつてゐる。中には是等のものが巧みに掬へまぜられて渾然たる一つの作作となつてゐるものもある。獨歩が自然主義作家としてふさはしい作品を書く樣になるまでには、極大體から言つてかういふ樣な創作形式上の、乃至は内容上の變化があつて以後の事である。ロマンチックな抒情詩より出發してから自然主義的作品をものする樣になつて歿した獨歩の生涯は、浪漫主義から自然主義の過渡の時代にのみ活動した人と見ても差支へない。その獨歩の作品には思ひ出といふ形のものゝ多い事は注目してよいと思ふ。獨歩程明白に二傾向の交流してゐる狀態を示してはゐないが、同じく抒情詩より出發した田山花袋や島崎藤村に自叙傳風な作品のあることは獨歩と同傾向にないと言ひ得ようか。浪漫主義から自然主義へと變化する時に、かういふ傾向をとり得る事は、直に凡ての作家作品がさうでなくてはならないといふ事ではない。只かういふ傾向をとり得るといふまでゞある。

明治時代以後の日本文學に於て告白的な文藝の多く現はれたのは浪漫主義から自然主義への時代である。二つのイズムの中間交替期の表現形態の一つが告白的な文藝の形となつてゐるのである。この事を直に平安時代の文藝の變遷に當てはめる事は危險である。何故かと言へば、文藝を

決定してゆく客觀的情勢が夫々異るからである。平安時代の文藝の變遷によつて歸納的に得られた結論が、極大體から言つて明治以後の日本文學に一致する事が認められるに過ぎない。即ち平安時代に於ける日記の發生的考察によつて得たその存在の必然性の傍證が明治以後の文學であると云ふのである。文藝に對して積極的認識のなかつた平安時代に於ては、浪漫的傾向も現實的傾向も明白な形はとり得なかつた。平安時代にては日記の形をとり、明治以後にては小説の形をとつたのは、このためであつた。平安時代にはこの二傾向の混合も容易に行はれ、その交替期も漠然としてゐた。從つてこの二傾向を混合的に、又は化合的にもつ日記も、かういふ文藝界の情勢であつたからこそ發生し發達する餘裕が十分にあつたのである。日記の文藝的存在が許容せられ得たのである。然し日記の存在が可能にされる時代は前に述べた樣に、明日への期待を持つ若き時代ではない。從つてこの日記は個人の心境上の展化を示すにとゞまつて、新しき文藝への創造にまで押し進められてゆく樣な種類のものではない。積極的に働きかける體のものではない。そこにこの形態の消極性がある。

5

平安時代に於て文藝と言ふものが段々に意識的に自覺的になつて來た事は色々の方面から考へる事が出來るが、然しそれが徹底的のものでなかつた事も認められねばならないであらう。平安時代の文藝の中で、どうして日記といふ樣な形の表現形式が生じ、又生じねばならなかつたかといふ點に就いては已に述べて來た通りであるが、其點を具體的に作品にふれながらもう少し他の方面から言つて置かうと思ふ。

かう樣のことも歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土もこゝも、思ふことに堪へぬ時のわざとか。（土佐日記）

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。（土佐日記）

文藝と言ふものは普遍的のものであつて、その創作は決して其自らの目的をのみ持つものではなくして、思ふ事に堪へられない、心に物のつまつて悲しい時に發生するものである。嬉しい時に、即ち心の動きの大きい時に歌が多いとするのも、文藝の創作が何等かの現實的事象に起因するものである事を示してゐる。これは何も貫之一人に限つた事ではなくして、平安時代の人々全體に亘つて見られる所であると思ふ。限定された生活環境にある人々にとつては、毎日々々の思惟が常に「つれ〴〵」が基本にならねばならない事は前に一寸ふれた所であるが、さういふ生活の中に

あつて、例へば紫式部が言つてゐる樣に、

かばかりの事の、うち思ひ出でらるゝもあり。その折はをかしきことの、過ぎぬれば忘るゝもあるは、いかなるぞ。（紫式部日記）

いかに見苦しかりけむと、後にぞをかしき。（紫式部日記）

といふ創作時期を暗示する言葉の反面には、日記の創作と言ふものが心に衝動を與へた其當時より幾何か後にそれを振り返つて見た所に發生する事を示してゐるのではなからうか。そしてその根本的背景は道綱母なども持つてゐた「ながめ」・「つれ〴〵」であることは言ふまでもない。日記創作の根本的現實性は「徒然」であると言つてしまつても大過はないであらうと思ふ。『和泉式部日記』に、女――和泉式部が大曆霧の立罩めてゐる空をぢつと物思はしげに眺めてゐる內に、夜は段々に明けはなれて來る、その曉起きの感興を「はかなきものに書きつ」けた事が書いてある。そして「この手習のやうに書きたるもの」を相手の男に贈つたのである。かういふ創作環境は即ち平安時代の人々の共通的に持たされざるを得なかつた――客觀的に制約されてゐた現實生活より抽出された已むを得ざる逃避場であつたのだと思ふ。時間的にも空間的にも固着した環境に於ける生活を餘儀なくさせられてゐた平安時代の人々の衰へかゝつた創作の捌け口が、一つには日記な

どゝいふものゝ存在をより可能にしたのではないであらうか。創作の目的を殆んど意識しない無目的的目的であつたらしい日記といふものも、やがては有目的的の存在とならねばならなかつた。

事のありさま思ひ出でらるゝまゝに書きたるなり。もどくべからず忍びまゐらせさらむ人は何とかは見む。我は唯一の所の御心のありがたく、なつかしう、女房しうなどこそ、斯くはおはしまさめと覺え給ひしか。忘らるゝ世なく覺ゆるまゝに、書きつけられてぞ。（讃岐典侍日記）

第五　結　論

1

平安時代の日記と言ふものが當時の文藝と如何なる關係にあるか、又日記と言ふものが其時代に如何なるものと考へられてゐたかと言ふ事は日記の本質を考へる二つの決定的な基礎である。この二つの礎石の上に立つて、日記が如何なる客觀的情勢の下に發生し、存在し得たかと言ふ事がこれまでに述べて來た所の主要點である。最後に以上の事を綜合する意味に於て日記の歷史的な發展の狀態を簡單に述べて置きたい。

日記の發生が日記以前の多くの文藝と關係のある事は已に述べて來た所であるが、どんな工合に關聯して來てゐるかを、更めてもう一度歷史的に見直して見る事にする。日記の要素が早くも『萬葉集』に存在することは、日記の發生的考察によつて明かになつた事であるし、漢文學と日記とが如何なる關係にあるかは『土佐日記』の檢討によつて分つた。即ち漢文體の記錄が日記の發生に

働きかけた力はかなり大きなものがあり、直接としては漢文學反對が、少くとも『土佐日記』に於てはその創作動機を刺戟してゐる。『土佐日記』以後の日記が直接『土佐日記』に刺戟されて出來たものであるとは斷じ得ぬ事であるが、『土佐日記』がさういふ立場を取つたといふ其事は、やがて日記發生の客觀的必然性がそこにある事を示してゐるといふことが出來るであらう。『土佐日記』と殆んど同様な客觀的情勢の下に生れた日記が、やはり發生的原因の遠因の一部をこゝに持つてゐたとは考へられてよい。『土佐日記』前後に夥しく發生したらしい私家集や歌物語といふ表現形式などが、日記に積極的或は消極的に作用した事は容易に考へられる事であり、多くの實例の示す如く私家集の延長の上に最も色濃く日記の發生が見られねばならない。私家集程密接なものではないが消息文が日記の發生に素材的に與へた影響はかなり大きなものがあると考へられる。日記全盛以前の文藝より日記の受けた影響は直接間接に可なり重要なものがある。否是等を重要視しないならば、日記が如何にして出來て來たか、日記が如何なる意味のものであるかゞ明かにされない。

日記と大體に於て時を同じくする物語とは如何なる關係にあるか。『宇津保物語』の幾つかの卷の現實的傾向や『落窪物語』の寫實的傾向、是等は同じく現實的、寫實的傾向にある日記と同様のものである。從つて日記と物語との混同が屢々繰返されて來得るのである。『和泉式部日記』の持

つ物語的の傾向と『和泉式部物語』のもつ日記的の傾向とは同一のものなのである。日記と言ひ、物語と稱されてゐる作品の事を考へて見るならば、『源氏物語』は、源氏君と薫大將との客觀的日記であるといふ事も出來得るのである。二主人公の一生の中でストライキングの事を及ぶ限り年代的に書いてゐるのが『源氏物語』で、形から言へば短篇物語の綜合となつてゐる長篇物語である。『伊勢物語』の樣な形のものを、もつと時間的年代的に敷衍して並べてゐると見てもよい。日記は過去のストライキングの出來事を斷片的に書いて時間的に結合したものである。『源氏物語』と日記との間に幾何の根本的相異があらうか。日記と言ひ、物語と稱しても、その間に明白な差異の認められなかつた場合が多かつたのである。日記と物語とは時によつて混合もし、化合もし合つてゐたのである。日記と物語とは相關關係にあつたのである。

物語が衰へて文藝の主要な表現形式が歷史物語や說話物語になると、日記との關係が次第に明白な形をとる樣になつてくる。即ち日記も歷史物語や說話物語も同一の材料が主觀的と客觀的との差によつて扱はれる樣になつて來た。日記も是等の表現形式も當時の文化の密接な反映としての方向を辿る樣になつて、二つの關係がはつきりしてはゐる樣なものゝ、普通の物語と日記との間に起つたとは別の意味の混淆がなされてゐた。即ち日記と物語との關係は相關關係にあつたので

あるけれ共、こゝまでくると、日記の範圍が却つて新しい表現形式である歴史物語や說話物語に蠶食されてくるといふ傾向をもつ樣になつて來た。日記の中の要素が歴史物語や說話物語に吸收される樣になり、關係は相關的の樣に見えてゐても、實は次第に一方的になりつゝあつた。日記の發生當時はその要素を漢文學や私家集、又或場合には物語などから吸收したのに、即ち成長への一方的關係であつたのに、日記と物語の相互關係となり、平安時代の末期に近づくに從つて再び歴史物語や說話物語との關係が一方的に移つた。といふよりは日記自身がさういふ樣に變化してきた。然しこの一方的關係は衰退への一方的關係であつた。『讃岐典侍日記』の歴史物語、『更級日記』の說話物語との要素的關係は夫々の重要な部分を歴史又は說話に吸收されてゐる事になつてゐる。歴史物語又は說話物語の中にはひり込んでしまつた日記は、こゝに至つてその存存が不明確になつてしまつた。歴史の資料として日記が扱はれる樣になつてしまつたのは不思議の事ではない。鎌倉時代まで命脈を保つてゐる日記は、平安時代的環境の人々の手によつてゞあつて、それらは最早平安時代に於ける樣な潑剌たるものではなくなつてゐる。只文藝の一つの表現形式として後まで殘つたものに過ぎなかつた。それも平安時代の末期的傾向を多分にもつものとして。即ち或意味からは、純粹の創作力が減退して、歴史物語や說話物語が生れる樣になつてきた、その過程の一

つにあるのが日記といふ文藝形式であるとも言へる。

以上の様に、日記は發生に於ては幾つかの要素を吸收して、當時の文藝に相當大きな意味をもつた存在となつたのであるが、その表現母體となる文化の動搖と共に、再び他の新しい文藝表現形式の中に吸收されてしまつた。そしてその極盛期が、これと最も關係の深い物語のそれでもあるのである。

2

『蜻蛉日記』が平安時代の日記の中で最も注意せられねばならない事は前に所々に述べておいた通りで、『蜻蛉日記』は女の日記としては最初のものである點がまづ注目されねばならないのであるが、それよりもこの日記が平安時代の日記とは如何なるものであるかを最も明白に示してゐてくれる所に重要な點がある。この日記の中に漢文學の影響は『土佐日記』程明瞭な形をとつてはゐない。作者が男であるのと、女であるのとの差がかうなつたのでもあらうが、一方では當時の相當の所の女は殆んど宮仕をし、そのために漢文學の素養をもつてゐたであらうのに、道綱母だけは宮仕をしないで居たためでもあらう。道綱母にどれだけの漢文學の素養があつたのかは分らないの

であるが、或は案外深いものをもつてゐたのであるかも知れない。一方『土佐日記』に發した日記が漢文學との絶縁を不知不識の内に抱いてゐた事にもよるであらうが、さしづめ自己の反省的告白録をものするのに、漢文學の素養はさして必要ではなかつたであらう。漢文學の素養をもたないでも書ける所に日記の一つの意義があり得たのである。日記の發生に重大な役割をしてゐる和歌及び私家集が、『蜻蛉日記』と不可離の關係にある事は言を俟たない。私家集の轉化が日記の發生に重大な意義をもつてゐる事は、ひとり『蜻蛉日記』のみには限らないことで、若し私家集なるものがその存在をなくす場合には日記の發生に關する考察に重大な障碍をもたらす事は明白である。平安時代の最も出色のものが和歌であり、物語であつて、『蜻蛉日記』には和歌の反映のみでなく、物語の反映も見る事が出來るのである。否さういふよりは、現實的傾向の中より出た日記と、同じく現實的傾向をとらずには居られなかつた物語とが相近接したのである。從つて『蜻蛉日記』などが『源氏物語』の寫實的傾向に影響したとも見得るのであるが、さう見るよりも、かういふ傾向が同一の客觀的情勢より生じ、それが各々の作品に反映したのであると見る方が適當であると思ふ。『蜻蛉日記』は和歌の時代と物語の時代との中間にあるものである。即ち『古今集』・『源氏物語』といふ二大作品の中間的存在が『蜻蛉日記』であつて、これには『古今集』と『源氏物語』等との傾向を

或程度まで生のまゝで持つてゐる。即ち日記の中の和歌と現實的傾向とである。かうして『蜻蛉日記』は平安時代の文藝の大なる一つの橋渡しをしてゐると同時に、又獨自の立場をもつてゐるのである。和歌集でもなく、物語でもなく、日記と言ふ立場をもつてゐるのである。これを寫實小説として物語にくつゝけたりする事は、『蜻蛉日記』が日記であると言ふ明白な立場を無視するものである。寫實小説的ではあつても寫實小説ではなく、寫實小説的であるのが日記の一つの意義であると解釋がしたい。さうするのが正しいと考へる。寫實小説であると言はれる程寫實的な日記の態度は歴史の態度でもある。が『蜻蛉日記』にはこの態度は明白に表はれてはゐない。只他人の事をも言ひ譯をし乍らのせてゐる所などがさうである事を考へさせるに止まる。もつともこの態度には漢文體の記錄の影響がはひつてゐるものとも考へられる。漢文體の影響ではあるとしても日記にかういふ事がはひるべきでないといふ事を言ひつゝも尙入れてゐる所をもつてすれば後の日記が段々に歴史物語的になる萠芽は已に『蜻蛉日記』にも見えてゐると考へてよい。歴史物語が平安時代の文藝の後期の表現形式であると同時に、說話物語も亦さうである。『蜻蛉日記』に歴史物語の萠芽が見えてゐると同樣に、說話物語のそれも微かに見えはじめてゐる。かういふ工合に『蜻蛉日記』のもつ他文藝との關係要素は意外にも廣汎に亘るものであり、平安時代の文藝の主な

る表現形態と、多かれ少かれ相當の關聯をもつてゐるのである。就中『蜻蛉日記』の創作時代の文藝と最も深い關係をもつてゐる事は言ふ迄もない事である。

3

『蜻蛉日記』のもつ文藝的要素は頗る廣汎なものであり、その要素の多くのものが日記の發生に關するものであることは、この作品の時代の然らしむる所であると同時に、發生時代の日記である事を語つてゐる。然し平安時代末期の要素を全く持つてゐないのではない。この兩方に夫々の亘りがついてゐる。そこに『蜻蛉日記』の日記として完成されたものがあると考へられるのである。即ち當時の物語との密接な直接或は間接の影響關係が考へられてくるのである。『土佐日記』の中に見る事の出來るものは日記發生の序幕的の部分であり、『更級日記』や『讃岐典侍日記』には日記といふものゝ終末が暗示されてゐる。『紫式部日記』はその中間的の鋭さをもつてゐる。日記の歴史を見る時に、『蜻蛉日記』ほどその集大成的な張りと力とを持つてゐるものはない。和歌などと異つて、日記の考察、歴史は日記それ自身のみでは殆んど成立しないのであつて、この點日記といふものがその獨自のものが消極的であつた事を示してゐるのである。これは極盛期に於ける日記

が物語に對して如何なる地位をもつてゐるかを考へるならば、容易に分つて來る筈である。同時に物語にも日記を除外しては闡明出來ない所の多い事をも示されるのであらう。かういふ工合であるから、日記が平安時代の文藝の上に要求して然るべき地位は相當に高いものがあると考へる。日記の中で最も注意すべき『蜻蛉日記』は、和歌の『古今集』、物語の『源氏物語』及び『枕草子』と並んで認めらるべき作品ではないかと考へる。かういふからと言つて、日記に不當の地位を要求するものではない。何となれば、日記は他の表現形式と異つて未完成のまゝで終つてしまつた樣な、積極的に乘り出す事の出來ない樣な性質のものだからである。『蜻蛉日記』は『古今集』や『源氏物語』や『枕草子』などと並んで、平安時代にともかくも存在するだけの意味のあつた文藝の一つの表現形式であると認めて然るべきものではなからうか。和歌・物語・草子・日記と並んでの意味に於て認められねばならないものであると考へる。平安時代の文藝全般の上から見た日記は、表面的のものであるよりも裏面的内在的のものである。平安時代の文藝の表面的推移を裏面から映し出してゐるものが、日記といふ一つの、或意味では綜合的な文藝の表現形式である。

4

從來の文學史の多くは平安時代の文藝作品を單獨に解題して、作品と作品との間に存する關係は餘り深くほりさげて考へなかつた。たとひ作品と作品との關係を有機的に考察したものがあつても、同一種類の間のものゝみであつた。和歌は和歌同類の發展なり轉回なりが說かれてゐたのであつて、異つたものゝ間に有機的變化があるといふ事は餘り說明されてゐない。從つて表面的な、そして長い發展過程をもつものゝみが重要視されて來た。これは當然の事で、多分さうあるべきであらう。然し一方如何なる作品もそれのみが單獨に孤立して存在するものではない事が考へられねばならない。それは文藝を文化現象の一つと見る立場に於ては許さるべき態度ではない。一つの時代の一つの文藝は、直接的か間接的かに於て、當時代の凡ゆる文化と密接な關係を持つものであり、その文化と共に推移するものである。ましてもつと狹い文藝の世界に於ける關係は、もつと密接である筈である。平安時代に發生して平安時代に衰退したと言ふ形になつてゐる日記といふ文藝の一表現形式が、その活動が自覺的に表面的でなかつたが爲めに、從來の樣な研究態度に於ては認められないのは寧ろ當然である。然し從來の研究態度が甚しく便宜的のものであつて、根本的に文藝を明かにする事が出來ないのを知つてゐる。時代の文藝をその時代のあらゆる文化現象との關聯のもとに眺める事によつて、別な新しい文藝に對する評價・價値判斷が出て來るので

はないかと考へる。そこに日記などが注意せられ得るのである。

日記と言ふものを明かにするために、日記以外の文藝が如何に必要であるかといふ點は、今迄見て來た所によつて自明の事と思ふ。和歌の様に、日記は同一形態をのみ取るものではなく、種々な綜合的形態をとつて居り、その形態の異るにつれて內容も亦千差萬別である。かういふ日記に一律的固定的意義を與へる事は不可能である。日記といふものを明かにする道は、日記が如何に變遷して行つたかを見るに在る。この變遷といふ事は相對的の事であつて、比較になるもの——他の文藝作品の必要になる事は當然の事となつて來る。日記の歷史的發展はどうしても其自身の間のみでは不可能で、他の文藝作品があつてこそ成立するのである。そして日記の本質はこの歷史的發展の過程に於て始めて明かにされるのである。そして日記の本質がかういふものであることは、日記が文藝的消極性をもつものであると言ふに外ならない。即ち日記は平安時代の指導的代表的文藝の表現形式ではなくして、あくまで隨伴的であり乍ら、然も獨自のものをもつ文藝の一つの表現形式である。

第二部

作品研究

第一　土佐日記

一

『土佐日記』は紀貫之（？—九四六）が承平四年より同五年（九三四—九三五）にかけて、其任國土佐より上京する時の事を誌したものである。この日記の作者が貫之であるか否かといふ點は、男もする日記といふものを女もして見ようと思つてこの日記を書いたのであると最初に斷つてあるのを正直に受けとるか否かによつてきまるのであるが、『貫之集』に、

延長八年土佐國にくだりて、承平五年に京にのぼりて、左大臣殿しらかは殿におはします御ともにまうでたるに、歌つかうまつれとあればよめる

百草の花の影までうつしつゝ音もかはらぬ白川の水　（貫之集）

とある事などから考へて、古來傳へられて來てゐる樣に紀貫之の作としておいてよからうと思ふ。只女の書いたものである樣な事が示されてゐるが、內容から言ふならば、男の書いたものである事は疑へない。ではどうして女の書いた樣な事を言つたのであらうか。『古今集』の主任撰者として

當時の代表的歌人である貫之は、漢文學に對立する意味に於て、漢文體の日記に追從するわけには行かなかつた。何か言ひわけをしねばものする事が出來なかつたのであらう。日記は書きたいのだが自分の立場からは易々と物するわけには行かなかつた。多分この日記は貫之が其妻の代筆といふ心持で書いたのではなからうか。この作品に言ふ「昔の人の母」・「昔の子の母」、即ち土佐で亡くなつた貫之の娘の母―貫之室の心持になつて記したものであらう。だから貫之自身を表すのに―父・前守・舟人・舟君・舟の長しける翁・舟君なる人―といふ樣に言はねばならなかつたのだと思ふ。執筆時期は多分上京後の或時で、まとめて書いたものであらう。

2

歌人又は評論家としての貫之は、『古今集』は勿論の事『土佐日記』の中にも色濃く出てゐる。この日記の中で、自分は貫之であるといふ事を不明にして置き乍ら、尙貫之である事に相當の意識をもつて書いてゐる。貫之が歌人又は評論家である事は、歌があれば必ず一言せずには居られない事によつて明白である。

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。(十二月二十六日)

この歌は、所を見るにえまさらず。(一月九日)

この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて人々忘れず。(一月十一日)

をさなき童の事にては、似つかはし。(一月二十二日)

海にて子の日の歌にては、いかゞあらん。(一月二十九日)

自分の詠草に對してはさうでもないが、他の人の作に對しては常にかういふ批評的態度をとつて居り、歌の作者をも明かに示さうと意識的にしてゐる所が見える。かういふ所は『古今集』の編纂者であり、「序」の作者と推定される貫之としては當然の事であつて、この日記が男の作らしく簡潔に見えると言はれる理由の一部は、又こんな所にあるのかも知れない。貫之が評論家であつた事は在原業平論や安倍仲麻呂論をこの日記に示してゐるのを見ても分る。業平論は、

こよひ月は海にぞ入る。これを見て業平の君の、「山のはにげて入れずもあらなん」といふ歌なんおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、「波立ちさへて入れずもあらなん」ともよみてましや。(一月八日)

これむかし名高く聞えたる所なり。故惟喬の親王のおほんともに、故在原の業平の中將の、「世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。(二月九日)

貫之は業平の歌を出すにとゞまらず、その歌をこの場合にあてはめて、訂正しようとしてゐる。こ

の場合だつたら、業平はかうも詠んだであらうと憶測する所に、單なる歌の愛好者であるのではなく、歌そのものを通じて何等か自己の主張を示さうとしてゐる事が認められる。歌のよい惡いを言ふに不止、或任意の場合に原作者の詩想を想定する程、貫之は批評と同時に創作にある自負心を持つてゐたのであるかも知れない。さうでなければかういふ事は言ひ得なからう。二月九日の記事は別段貫之でなくても書きさうな事である。渚の院と言へばこの歌が泛ぶ位は、或は當時の常識に近かつたのかも知れないが、貫之の歌に對する造詣の一端として見てよいであらう。仲麻呂論は貫之の歌の評論の態度をこの業平論の如く際立てゝゐるものではないが注目すべきものである點に於てはかはりはない。殊にそれは貫之の漢文學論を端的に示すものとして特別に考へられねばならない。以上三つのものゝ根據になつてゐる歌は、凡て『古今集』にあるものであり、京で生れた自分の子供が任國で亡くなり、行く時は一緒であつたが歸りには一緒でないといふ悲しみを、同じく『古今集』の歌「北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて來し數は足らでぞかへるべらなる」に寄せてゐるなど、當時に於て『古今集』以外に權威ある歌集がなかつたのかどうか知らないが、かく自己の編纂した歌集より多くの引用歌を『土佐日記』にとるといふ事は、『古今集』撰進の抱負と自負心を示すものとは考へられないであらうか。若干の缺點は指摘され得やうとも、とにかくはじめてまと

まつた形としての歌論をものした貫之の『古今集序』は、後の歌道の根柢をなすものであり、歌學成立以前の準備的好論說であつた。その中に示してある業平論は、

ありはらのなりひらは、そのこころあまりて、ことばたらず。しぼめる花の、いろなくて、にほひのこれるがごとし。（古今集序）

貫之が『古今集序』に述べてゐる「みそもじあまりひともじ」の形が段々に形式化し固定化しようとする最も具體的な例がこの日記の中で二三個所許り見える。

その歌、よめる文字、みそもじあまり七文字、ひと皆えあらで、笑ふやうなり。歌ぬしいとけしきあしくてゑず。まねべどもえまねばず、書けりとも、えよみすへがたかるべし。（一月十八日）

舵取ふなこどもにいはく、「みふねよりおほせたぶなり朝北の出で來ぬさきに綱手はや引け。」といふ。此のことばの歌のやうなるは、舵取のおのづからのことばなり。舵取はうつたへに、われうたのやうなることいふとにもあらず。聞く人の「あやしくうためきてもいひつるかな」とて、書き出せれば、げに三十文字あまりなりけり。（二月五日）

黑鳥といふ鳥、いはの上に集まりをり。其のいはのもとに、波白く打寄す。舵取のいふやう、「黑き鳥のもとに白き波をよす」とぞいふ。そのことば何とにはなけれども、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば、と

がむるなり。(一月二十一日)

一には定形以外の歌は認める事が出來ないといふ事であり、二には口語の歌を、言文一致の歌を同じく認めないといふ意味であり、三には口語詩は默殺するといふ事である。和歌の形式に關することは『古今集序』にも言及してゐるが斯の如き事は當時一般的常識であつたらう。がこれを日記の中に特に書き留めて置く所はやはり評論家としての貫之であつてこそした事であらうと思ふ。現代の常識から言つたならばこの三つの場合どれでも皆詩乃至歌として立派に認められねばならないものである。貫之にしても、形式の方から否定してゐるのであつて、夫々美は認めてゐるらしいのである。

3

貫之の『古今集序』が漢文學の反動によつて生じたか否かは別として、『土佐日記』の中には漢文學に對する何物かを意識してゐる。この代表的のものが安倍仲麻呂論である。

二十日の月いでにけり。山の端もなくて、海のなかよりぞ出で來る。かやうなるを見てや、むかし安倍仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて歸り來ける時に、舟に乘るべき所にて、彼の國人うまのはなむけし、別れ惜

みて、かしこのからうた作りなどしける飽かずやありけん、二十日の夜の月いづるまでぞありける。其の月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし、「我が國はかゝる歌をなん、神代より神もよむたび、今は上中下の人も、かやうに別を惜み、よろこびもあり、かなしびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠のやまにいでし月かも

とぞよめりける。彼の國人聞きしるまじうおもほえたれども、ことの、男もじに樣を書き出して、こゝのことば傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になんめでける。もろこしと此の國とは、ことことなるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じ事にやあらん。(一月二十日)

少し引用文が冗漫すぎたが、貫之は仲麻呂をこゝに出す事によつて日本と支那との比較を試み、當時勢力をもつてゐた漢文學と和歌とを對照させ、和歌が決して漢文學に劣るものでない事を示したと考へられる。こゝにいふ男文字といふのを『古今集序』の小野小町論にある「つよからぬは、をうなのうたなればなるべし。」と比較させて見れば、歌であつても男のものは漢文學的の强さのあつた事が知れると思ふ。そして和歌にしても漢文學にしても、形式の差こそあれ、その本質的なるものには相通ずる點があるとするのが貫之の所論で、これはこゝの外にも見える。以て文藝の普遍性を認識してゐた貫之を見るべきである。

それでは「やまとうたは、人の心をたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。」と言つた貫之が漢詩をこの日記の中で如何に取扱つてゐるかを見よう。彼は、

からうたは之にえ書かず。（十二月二十六日）

と言つてゐるから、この日記には日本の和歌を專らのせたかつたのである。然るに、實際はどうであらうか。この日記の中で漢文學を根據とした文章は決して一ヶ所には止まらない。例へば、

むべも昔のをとこは、「さをはうがつ波の上の月を、船はおそふ海のうちのそらを」とはいひけむ。（一月十七日）

日記に書かないと言ひ乍ら漢詩を出してゐる所に矛盾がある。貫之は漢文學から脫却しようとすればするほど、それにとらはれねばならなかつた。この事は『古今集序』の所論についても言ひ得る事ではなからうか。漢詩を頻りに氣にしてゐるのは、漢文學に引きづられる自分をどうする事も出來ない焦慮を示してゐるものと思ふ。若しさうでなかつたならば、漢文學などの事は眼中におかないでもよかつたのである。排擊は明白にその原據を豫想させる。排擊が大きければ大きいほど、それだけ原據も亦大きいわけである。かういふ事に意識的であつた貫之は、決して漢文學そのものゝ埒外に完全に出る事は出來なかつた。そのためか、「解由（げゆ）」、「具（ぐ）す」などの如き、「屠蘇（とうそ）」、「白散（びやくさん）」などの如き詞も用ひてゐる。貫之が漢文學に對して反對的態度を持してはゐたけれ共、事

實は決して漢文學と絶縁したものではなかつた。それは當時の文化人として、殊に男としては漢文學の素養を絶對的に必要としたから、已むを得ない事であつたらうし、文藝の普遍性を認めてゐた貫之が漢文學を完全に否定する事は出來ない筈である。若しこの日記の作者が實際に女であつたならば、漢文學に對して決してこれ程鋭敏にはならなくて濟んだであらう。それに一方、漢文學に素養を持つてゐた男であつたからこそ左の如き言葉の上の洒落も出たのであらう。

船路なれど馬のはなむけす。（十二月二十二日）

一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。（十二月二十四日）

西國なれど甲斐歌などいふ。（十二月二十七日）

海は荒るれども、心はすこしなぎぬ。（一月九日）

『土佐日記』以前に國文體の日記があつたかどうかは知る由もないがこの作以前に國文が行はれてゐた事は、『古今集序』によつても明かであるし、『竹取物語』や『伊勢物語』が已に作られてゐたと考へられもするから、貫之がこの日記を書いたのは決して突然のことではない。

4

紀貫之の生活乃至性格について一寸觸れて置かう。『土佐日記』の中には種々の人々から色々のものを貰つた事が書いてある。當時の地方官位の人々の生活費がどれ位のもので、正當の收入が幾何あつたかは知らないが、この日記に示されてゐる貰ひ物も相當の分量に上つてゐる。之に對して貫之は、

物によりてほむるにしもあらず。（十二月二十三日）

と言つてゐるが、實際から斷らねばならない身になつて見ると、事實はこの正反對であつた事が分る。貫之が物を貰つた事を頻りに言つてゐるのは嬉しかつたからで、その根柢には經濟に對する細かい心の働きのあることは見逃せない。

昌連、酒、よき物たてまつれり。このかうやうに物もて來る人に、なほしもはあらで聊けわざせさす物もなし。にぎはゝしきやうなれど、まくるこゝちす。（一月四日）

之は人から物を貰つた時の一例である。もらつたものゝ内で最もよろこばれたのは何と言つても酒である。是等を貰つた時の貫之の心持の中には、この旅の責任者としての人がにじみ出てゐる樣な氣がする。以上と反對に、貫之が人に物をやつた時の心持には、もつと實際的なあるものを含んでゐる事を知る。貫之が久し振りで京都の我家に歸つて見ると豫想外に荒れ果てゝゐた。それ

を見て貫之の頭に最初にうかんだ事はどんな事であつたらうか。

さるは便ごとに、物もたえず得させたり。今夜、かゝる事と、聲高に物も言はせず、いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。

序のある毎にそれ相當のお使物をしておいたのに、あんまりひどい様だと貫之は思つた。又貫之たちが舟行中に海が荒れた。舵取の言ふのに從つて奉幣したのであるが風波が收まらないので仕方なく鏡を海に奉つた事があつた。その時貫之は、たつた一つしかない鏡を神に奉つてしまはねばならなかつた事を殘念がつてゐる。鏡を棄てるのは惜しくてたまらなかつた。單なる迷信的行爲であつて、殆んど神に對する宗教的敬虔的心持のある事が見られない。是等が當時の地方官連中の本當の心持であつたのかも知れない。經濟的に常に不安定な生活をつゞけてゐたであらう地方官は、正規の收入のみでは、とても生活が支へきれなかつたのかも知れない。京にゐて貧乏してゐるよりも、地方に行つて特別の收入の道を拓かうとした人が案外に成功したらしいのも、或はこんな所にその一面が現れてゐるのではないかと思ふ。當時の俗謠、

よむべのうなゐもがな、ぜにこはむ、そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにも持て來ず、おのれだに來ず。

（一月九日）

これによつて貨幣が一般化してゐた事をも知る事が出來るし、殊に賤業といふことまでが行はれてゐたのをも知る事が出來る。然もそれが貫之自身の經驗ではなくて一般化した俗諺の中に示されてゐる所が一層注意せられる。そして貫之の注意を惹いたのが外の所でなくして經濟に關係した部分である點が、彼の生活を考へる上に相當の參考になると思ふ。

貫之が數年振りで歸る事の出來た家の大きさは、この日記の示す所によると、大したものではなかつたらしい。中垣こそあつたが、一つ家の樣であるから、お隣の方から望んで預つて與れた家であると言つてゐる。平安時代の第一流の歌人紀貫之の家は、四足門か何かのついた立派な家に考へたい。然し實際は今日言ふ所の借家住ひの樣な程度のものであつたのではなからうか。地方官の住居は凡そこんな位のものであつたらう。當時で言へば、これは上流の下又は中流といふ所であつたと思ふ。以て一般人の生活は推察に餘りある。貫之が家に歸つて最も悲しかつたのは、何と言つても亡兒への愛慕の悲しさである。

思ひ出でぬ事なく、思ひ戀しきが中に、此の家にて生まれし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。

貫之及び其室が亡き兒に寄せた追慕の情は所々に切實に表れてゐて、この日記の中でもかなり重要な、特色のある文章となつてゐる。然しこれのみによつて『土佐日記』の創作意圖を考へるのは

どういふものであらうか。『土佐日記』には老人の諧謔の陰に亡兒に對する悲しみが滲み出てゐる。然し『土佐日記』は亡兒への悲しみのみを中心記事にしようとしたものではないと思ふ。

5

『土佐日記』の中には舵取がかなり貫之と交渉がある。貫之が之に對してどんな態度をとつてゐるかは、一つには地方官の人々の一般民に對する態度をも暗示してゐると思ふ。航海の事に關しては貫之は一切舵取にまかせてゐたらしい。波の靜まらない時に大事な鏡までも海に投じてしまつたのは、海神に對する迷信を表してゐると共に、舵取の言を容認しねばならなかつた貫之の不安があつた事を示してゐる。然し全般的にかういふ態度をとつてゐるのではない。物の哀も知らない舵取は自分さへ鱈腹酒をのんでしまへばそれでよいので、早く行かうと思つて、「潮が滿ちて來ましたよ。風の樣子も變だ。」とせき立てた。舵取を物の哀れ知らないものとするのは、多分當時一般の京都人の 地方人に對する 態度の一つを具體的に表してゐる一例であらうと思はれる。かういふ樣に自分達とは別なものとして見てゐる貫之も、旅行や天氣の事などに關しては一切その言ふが儘にならねばならなかつた。夜更けて西東も見えないので天氣の事は萬事は舵取に一任し

た。或時、夜も漸く明けて行かうと言ふのに舵取等が、「黒雲が急に出て來た。風も吹くだらう。舟をかへさう。」と言つて舟をかへした。又或時、「今日は風雲の樣が甚だ惡い。」と言つて航海しなかつた。然し一日中海上平穩。「此の舵取は日もえはからぬかたゐなりけり」と貫之は鬱憤を述べてゐる。舵取が頻りに天氣の事を氣にし、又貫之等も之に從つてしまはねばならないのは、當時の航海が少しも天候に抗する事が出來ず非常に困難のものであつた事の證據である。この當時の航海と言つても海濱傳ひのものであつて、この時も亦さうであつた。土佐から京都まで歸るのに、今日では一寸豫想もつかない程の日數を費してゐる。當時の旅行が多くの日數を費さねばならなかつた他の理由は、地方官となつて赴任する時にはその家族を引きつれて行くのが例で、單獨に旅行する樣に氣輕くはゆかなかつたからで、この大家族の異動が旅行を一層不安なものにした。乘物が不完全であつた上に、一歩京都を離れると無警察狀態、物情騷然としてゐたのが實狀であつたらしい。この日記の中に頻りに問題になつてゐる海賊なども、是等の大家族異動に附隨する財産が目當であつたのであらう。貫之の恐怖もそこに原因してゐたであらう。

『土佐日記』の中で海賊に對する恐怖心はかなり中心的なことになつてゐる。土佐から京都に來るのに終始海岸傳ひには來られない。一度は海に出なければならない。海賊のねらひ所はそこで

あり、旅行者達の心配するのもそこである。『土佐日記』に現れてゐる海賊の記事を少し見ると、國を出る時から海賊が貫之等の歸路を待ちかまへて報いをするといふ噂をきいてゐたので、いざ海に出る段になつて非常な恐怖心をもつた。海賊の心配のありさうな所は神佛を祈つて通過するし本當に海賊の追擊をうけてゐるといふので夜中に舟を出し、手向する所に奉幣して安全を祈つた事もあつた。

三十日、雨風吹かず。海賊は、よるありきせざなりと聞きて、夜なかばかりに舟を出して、阿波の水戸を渡る。夜なかなれば、西ひんがしも見えず。男女からく神佛を祈りて、この水戸を渡りぬ。………今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。（一月三十日）

貫之がどうしてこんなに海賊を恐れたのであらうか。或は貫之はその在任中に海賊に對して何かしら怨を買ふ樣な事をなし、そのために不知不識の間に報復の恐怖觀念を持つたのではなからうか。恐れ多くも京都の禁中にさへ竊盜のしのび込む樣な世間一般の狀態の時にあつては、地方に海賊の橫行する位の事はむしろ當り前の事であつた。地方官などがよし海賊根絕を企てた所で、實力をふるふ事の出來ない人たちではどうする事も出來なかつた。貫之たちに實力のなかつた事は、その恐怖の有樣によつて明白に知る事が出來る。彼等は海賊が來るときくと、一生懸命神佛を

祈つた事も之を明白に語つてゐる。若し海賊に對抗するだけの實力をもつてゐたならば、神佛のみを賴りにしなくてもよかつたであらう。自らの腕で排撃する事が出來ない所に彼等の弱さがあつた。貫之等が海賊の襲撃も受けずに和泉國まで到着した時には、「海賊ものならず。」といふ不安の安心をしてゐる。やれやれよかつたと胸をなで下したのは當然であつた。之に反して舵取等の海賊に對する態度は別に記してはないけれ共、一歩あやまれば是等の人々も海賊と化する可能性の十分にあつた人々であつたから、心の中では卑下してゐたとしても、天候の事にしろ、何にしろ、實際は相當おとなしくして居なければならなかつたのであつたと思ふ。一行の責任者としての貫之の心は、相當に緻密に働かねばならなかつたであらうと思ふ。

海賊の騷擾事件とも言ふべき純友の亂は、之から數年の後に起つたのであつた。

6

『土佐日記』の中には上に述べて來た樣に色々の內容を含んでゐて、この日記の中心的の記事、乃至は創作意圖といふ樣なものが奈邊にあるかを決定する事は頗る困難である。只貫之は任終つて久し振りで歸京する旅行の雰圍氣を描かうとしてゐる事だけは言ひ得ると思ふ。この旅日記は、

その內容から、言はゞとりとめもない樣なものであつて、一貫した或創作意識又は貫之の觀念形態が明白に表示せられてゐるとも考へられないし、況んや或觀念形態表現の下にものした作品であるとも考へられない。この作品はさういふ不明白なとりとめもない表現が核心であつて、若し何か特定の一事象又は一觀念を表現せんとしたのであるならば、恐らくその興味は餘程減ぜられるであらう。『土佐日記』から何程かの觀念形態を歸納する事は可能である。然しその觀念形態は恐らく執筆してゐた作者貫之の明確に意識しなかつたものであらう。さういふ無意識的な觀念形態の一つの分派としての形が『古今集』的な歌論となり、又は誹諧的な笑ひや洒落となり、人の親らしい悲歎となり、或は海賊に對する恐怖となつたのであるが、就中彼一個人のみでなく、もつと外延的なものに、即ちこの日記と社會との連關のある所にこそ作者の意識しなかつた大きな觀念形態があるものと思はれる。然し今それを具體的に抽出する事は出來ない。出來ない所に作者がこの日記に一貫した觀念形態を持たせなかつた事が半ば證明せられると思ふ。結局する所、この樣な日記は、貫之にしてはじめて著述し得た所であつて、彼以下又は彼以上の社會的文化的地位の人は誰もかういふ作品は作れなかつたのであると考へられる。

『土佐日記』の文藝的な地位が今更云々せられるまでもないかも知れない。然しこの日記が文藝

としてどれだけの價値があるかといふ事は決して決定せられた問題ではない。この作品の地位は常にその歴史的な文章、もつと適切には其文體にあつた。國文體の日記であるといふ歴史的な價値と『古今集』の責任撰者である歌人の作である事とによつて、演繹的にこの日記の文藝的價値が決定せられ勝ちである點は否定出來ない。一つの作品の歴史的價値と文藝的、即ち藝術的價値とは必ずしも一致するものではない。『土佐日記』が其文體故に藝術的價値までが決定せられねばならない理由はない。『土佐日記』の文體が屢々純粹の國文である樣に言はれる。然し事實は決してさうではない。簡潔である所以は、不知不識の間に漢文學的な所がはひつてゐるからである。『古今集』の眞名序を假名序にした程度であつて、決して純粹なる「やまとことば」そのものゝみではないと思ふ。漢文學に反對的立場をとつた貫之故に、その文章も完全に漢文學から離れてしまつたと考へるのは早計である。『土佐日記』の本質的價値も、それが完全に漢文學と袂を分つてゐない所と、そして作者の鋭い觀察力の自由な表現がそれと完全に一致してゐる所とに存するのである。決して和文體の最初の日記であるからといふ點にのみ眞の價値があるのではない。

第二　蜻蛉日記

1

『蜻蛉日記』は右大將藤原道綱の母と藤原兼家との夫婦生活を描いたこまかい記錄である。天曆八年兼家が二十六歲の時に通ひはじめ、一子道綱が生れた。兼家の愛が次第に冷めてゆく煩悶がやがて母性愛に慰められる樣になり、道綱二十歲の天延二年の事で終つてゐる（九五四―九七四）。作者はこの日記及び諸種の記錄の上から藤原倫寧女―道綱母であるとされてゐる通りであらう。

この母君（道綱）きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿（兼家）の通はせ給ひけるほどのこと歌などかきあつめて、かげろふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。（大鏡）

この作品の名稱は上卷の終りの句によつて明白であるが、「かげろふ」が蟲の事であるか、陽炎の事であるかの點は問題になつてゐる。

夕暮蜻蛉の物はかなげに飛びちがふ（源氏物語）
物はかなきを思へばあるかなきかの
かげろふのあるかなきかにけぬる世（後撰集）
心地するかげろふの日記と言ふべし（蜻蛉日記）

この『源氏物語』と『後撰集』の「かげろふ」とこの日記のそれとを比較して考へて見ると、『蜻蛉日記』の「かげろふ」は、夏や秋の夕暮などに多くは水邊等に飛んでゐる命の短い儚い蟲の事であるとして置いてよいと思ふ。

『蜻蛉日記』が何時成立したであらうかといふ問題に對して、現存本を基として少し考察して見たい。『蜻蛉日記』は二十年に餘る長年月の記錄である。この日記の中には天德三年、同四年、應和元年の三ヶ年の記事が缺けてゐると言はれてゐるが確定的ではない。其他の年には多かれ少かれ記載がある。その中でも最も少いのが應和三年であり、最も多いのが天祿二年である。この兩年の分量の比は凡そ三對八十である。以て各年の間に非常の粗密のある事が分る。上卷の終りである安和元年がそれ迄の間で最もこまかい記載をしてゐるのは、こゝで一段落であると言ふ證左であうか。中下兩卷は比較的皆豐富な記事があるが、天延元年のみ少いのは一つの疑問である。別に甚しい脫漏があるとも考へられない。

『蜻蛉日記』は日記であるから、時といふ觀念が附きまとつてゐるのは當然である。天曆八年から安和元年に至る上卷の中で、日といふものが明記されてゐる場合はほんの數回しかない。それ

も非常にとび〳〵であつて、日次の記事だとは思へない。中卷になると日といふものが段々に明記される可能性を多くして來て、記事の分量に從つて一年々々多くなつてゐる。然し分量と日の記載とは必ずしも一致してはゐない。記事の分量が少くて日の記載の最も多い天祿三年こそ、時間の觀念の最も精密に働いた所謂日記的な年として注意すべきであらう。この年などに、或はこの作品が執筆されたのかも知れない。この年までの凡てが執筆されたとは言へないが、少くともこの年の記事は、記載時間から大きな距離のない時に書かれたものであらう。又明白に日を記さないで何日頃とするのは、過去を思ひ出す時によくする事である。朔・晦・十餘日・二十餘日などは日に次ぐものとして注意しねばならない。最も時間の觀念がこまかに働いたと考へられる天祿三年にもかういふ使用が相當にある。だから、或る事項はまとめて書いたであらう事が想像せられる。日について述べたから、月について少しく說明する。日に比較すると、月はその包含する時間が長い丈に、稍〻漠然となる事は當然の事である。日の記述の全くない年であつて、月の記載の多い年が目立つのも決して不合理ではない。天曆十年などは日月共に書いてある、上卷としては一寸異色の年である。月よりも一層時間的に廣いのは四季の區別である。四季の區別は自然といふものに異常の關心を持つてゐた平安人にとつては色々の場合に過去を思ひ出す手懸りとなり得た

であらう。この作品の中で四季の記載は殆んど上卷に限られてゐるといつてよい。日や月の記載のない康保元年の如きに最も多く見うけられるのも當然である。以上述べて來た事によつて、日記が日毎に書いたものでない事と、この日記の著作時期を推定する事は相當に困難な事である點などが分つたと思ふ。この日記は何年かかゝつて少しづゝ書き足されて出來上つたものである事が考へられる程度で、何處は何時と明示し得る所は極めて僅かである。

『蜻蛉日記』には現在を基調にした言葉が所々用ゐられてゐる。今日とか、昨日とか、明日とかいふ様な言葉の使ひ方を多くしてゐるのは天祿三年であつて、中下卷に殆んど限られてゐる事は、中下卷がこの日記の著作の基礎的時期になつてゐる事を示してゐるものと考へられる。今日・明日等は時間的に現在を基本にしてゐるのであるが、又の日、二三日ありて等の用法になると、現在を基とするよりも、ある時間的背景をもつ事柄を基本にしてゐる様に考へられる。時間的に順序だつて執筆されたのでないらしいこの日記には、以上の用法は散在してゐる。又今月とか今年とかいふ事は、その月や年の内に執筆されたであらう事が想像せられる。天祿三年にこの用法が相當にある所を以つてすれば、この年の記事は少くとも天祿三年中に書かれたものだらうと思はれる。然しこれ迄を天祿三年に書いたか否かは明かにする事は出來得ない。のみならず天祿二年、三年

には日よりも更に細かい時間が述べられてゐる。かういふ所を見てもこの二ケ年はこの日記製作の基本的な時となるのであるが、全體が何時書かれたかは容易に分らない。

この日記に於て記事の不明の年の前後を除いては、年と年との境は明瞭か否かの差はあるが、大低それと斷つてゐる。まづ連續的に書いたものと察せられる上卷を見るに、

其の年はかなく暮れぬ。正月ばかりに、……。(天暦八―九年)

年かへりて三月ばかりにも成りぬ。(天暦九―十年)

年また越えて春にもなりぬ。(天暦十年―天德元年)

等と明かに斷つてゐるのもあれば、一方では、

秋はてゝ、冬は……過しつ。三月晦がたに……。(康保三―四年)

師走晦がたに、……明けぬれば、……。(康保四年―安和元年)

などゝ漠然それと察せられる場合もある。かういふ樣な年の記し方は、一年々々と區切つて誌してゐるものでないことを示してゐる。上卷のみでなく、中下卷でも略〻同樣な事が言はれる。上卷と中卷の續き方を見ると、

猶物はかなきを思へば、有るか無きかの心地する、かげろふの日記と言ふべし。かくはかなながら、年立ち歸

る朝にはなりにけり。(安和元―二年)

とあつて、上卷と中卷とが明白に區別されてゐるものではなく、何處かに連續したものゝある事が考へられる。最も注意すべき年である天祿二年と三年とを見ると、

共の月見たるばかりの程にて年は越えにけり。共の程の作法例の如なれば記さず。さて年頃思へばなどにか有らん、朔日の日は見えずしてやむよ無かりき。(天祿元―二年)

年の終りには何事につけても、思ひのこさゞりけんかし。かくて又明けぬれば天祿三年に云ふめり。(天祿二―)

その日その日でなくても、とにかく一番現在に近い時を描いた年がかういふ續きを持つてゐる事は、どちらにしても日記が時間的に機械的制限を受ける事が少く、從つて共内容によつて進行して行くものである事を示してゐると考へられる。天祿三年は年號を明示した唯一のものである。この年の記事が何時書かれたものであるかは、左の引用文によつて察知し得ると思ふ。今といふ樣な言葉も屢々用ゐられてゐる。

今日は二十三日、まだ格子は上げぬ程に、……。(天祿三年)

今日より四日、かの物忌にや有らん……。(同)

今日は二十七日、雨昨日の夕べよりくだり、風の後花をはらふ。(同)

十日に成りぬ。今日ぞ大夫に附けて文有る。（同）

今しも時雨降りみ降らずみ日ねもすに此の山いみじう面白き程なり。（同）

是等によつて想像すると、天祿三年と雖も一年全部を一時に書いたものではなく、月々に誌したものでもなく、さうかと言つて其日々々に記したものでもない。暦の上の時間などには制限されないで、創作意欲の起つた時にものしたのであらう。天祿三年のこの執筆態度は、又この日記全體の著述態度でもあると考へられる。

2

『蜻蛉日記』の中心となつてゐるのは道綱母と兼家との關係であるが、其他の記事も相當にはひつて居り、殊に康保元年の記事の如きは兼家との關係はほんのつけたりで、中心は母の亡くなつた前後の事となつてゐる。兼家との關係の記事でも、兼家と戀を語りはじめる頃の事は割合に少く、二人の關係が成立した以後の事が著しく詳細になつてゐる。孝標女なども『更級日記』の中で、俊通と結婚したあたりの事は書いてゐない。道綱母がこの日記を書いたのは、兼家との仲が面白くなくなつた時であるに違ひないから、二人の甘い戀を誌すに堪へなかつたのであらう。それに二

人共初戀ではなかつたらしい事が一層印象を不鮮明にしたのであらう。二人が馴れ染めた時には兼家には已に本妻腹の子供があつたのであるし、道綱母の方にしても、兼家以前已に戀人があつたらしい事が日記の中に二三暗示されてゐる。兼家との交渉がはじまる頃の記事にも見出されるし兼家との仲がまづくなりはじめた時分にも書き誌してゐる。かういふ「すきごと」を兼家のみの好色と解釋すればともかく、道綱母の方にも忘れられない男があつたと見てよいと思ふ。殊に兼家との仲が面白くなくなつた時に昔の戀人を思ひ出すといふのは、あり得べき事である。

この日記によつて見ると、道綱母と兼家との交渉のはじまりは、別に取り立てゝ言ふ程のロマンスがあつたのではなく、兼家が道綱母に何等かの興味をもつてしかけた戀であつたらしい。如何なる所に惹かれたかは明かでないが、道綱母は相當に聞えた歌人でもあるし、且本朝第一美人三人の内に數へられる程の美人であつたと傳へられてゐるから、享樂的な當代の貴族青年の注意をひいたものではなからうか。この日記を書いたのは晩年であつて、兼家との若々しい思ひ出のなし得ない不如意の時であつたらしいから、初期の道綱母の兼家に對する態度は、若干の割引をして考へねばならないかも知れない。事實はどうか知らないけれ共、この二人の關係は全く男の方から働きかけて結んだものであり、最初の文に對しても、女は、

紙なども例のやうにもあらず。至らぬ所無しと聞き舊るしたる手も、あらじと覺ゆるさで惡しければ、いとぞ怪しき。（天暦八年）

と客觀的批判的に眺めて居り、度々よこす歌も柳に風と受け流してゐた。餘りにうるさいので代筆で歌を返すと、「共れをしもまめやかに打ち喜びて、繁う通」はしたと言つて稍〻嘲笑的な態度をとつてゐる。即ち道綱母は、初には兼家に對して何等の感激も感じてはゐなかつたのであるが、一度關係を結んでしまふと男に對する愛着が強くなり、殊に二人の間に道綱といふ子供が生れてからは男に對して積極的に執着する樣になつて來た。その頃兼家には別に通ふ所が出來てゐた。道綱母も當時の遊戲的な戀愛を求める貴族靑年の一つの相手をしてしまつたに過ぎなかつたのである。

歎きつゝ獨ぬる夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る。（天暦九年）

兼家は外に女が出來て後にも道綱母への愛を全く淸算してしまつたのではなかつた。然し新しく通ふ所が出來れば、古い所に足の遠のくのは自然である。弱い女であるならばこゝで泣き寢入りをしてしまふのであるが、道綱母はさうではなかつた。道綱母を相當我の强い女にした一面の理由は、兼家に他に通ふ所のあるのを知つたからである。他に通ふ所があると知つて引込んでしま

ふ樣な女ではなかつた。兼家の妾の所で男の子が生れたのを知つてから三四日經つて、兼家が平氣な顏をしてやつて來た。それに對して、何だつてまあよくも來られたものだと思つて相手にしなかつたので、兼家はとりつく島もなく度々歸つた、(天德元年)と書いてゐる。この樣に道綱母が兼家を拒否したのは、決して兼家に對する愛着を斷念したのではなく、迎へ入れて語らふ以上に強い執着心をもつてゐたからに外ならない。反對的態度に出て、男の愛を自分の方に逆に惹きつけようといふ一つの狂言に外ならない。道綱が十二歳にもなつた頃、心長閑に暮してゐた或日、不圖したつまらない事をお互に惡し樣に言ひつのつた擧句、兼家は怨み言を言ひ殘して歸つてしまつた。歸りがけに道綱を呼び出して、「自分はもう今後此處には來まいと思ふ。」など言ひ置いて出て行つてしまつた。それから五六日許り日が經つたが兼家は音沙汰もない。愈々兼家は來なくなつてしまつたのではないかと思はれる。「あゝ氣も狂ひさうだ。戲談事だとばつかし自分は思つてゐたのに。賴み少い二人の仲であるからひよつとしたらこのまゝ關係はなくなつてしまふのではあるまいか。」さう思ふと心細くて、ぼんやりしてゐると、兼家の歸つた日に使つた泔坏(ゆするつき)の水がそのまゝあるのに不圖目がとまつた。上には塵がついてゐる。(康保三年)二人は心にもない事を言ひつのつた結果遂に痴話喧嘩になつたものと見える。女を操縱する極意を心得てゐた兼家をおこらせて

しまつたのだから、道綱母は相當にひどい事を言つたのかも知れない。これで二人の關係はぷつつりきれてしまつたのではないが、日記には暫くの間兼家との交渉の事が見えてゐない。道綱母が兼家に對して絕ち切れない愛着をもつてゐた事は、兼家が道綱を呼んで「俺は今後來まい。」と言つて歸つてしまつたのを其儘承認する事が出來ないで、戲談だとばつかし思つてゐたのによつて分る。道綱母の嫉妬と、その結果として現れるすね方には這の女になれた兼家も相當に手古摺つたものと見える。

「心の怠り(に脫?)は有れど、いと事繁き頃にてなん、夜さり物せんに如何ならん、恐ろしさに。」など有り。「心地惡しき程にてえ聞えず。」と物して思ひ絕えぬるに、つれなく見えたり。あさましと思ふに、うらもなく戲ぶるればいと妬さに、こゝらの月頃念じつるを言ふに、如何なるものと、たへて答もなくて寢たるが、打ち驚くさまにて「いづらはや寢たまへる。」と云ひ笑ひて、人わろげなるまでも有れど、岩木の如して明しつれば、翌朝物も云はで歸りぬ。(天祿二年)

兼家が下手に出るとつけ上るし、高飛車に出ると收拾がつかなくなる。この日記にはかういふ心理的の掛引が細かく描寫されてゐる。道綱母などは客觀的な情況から結局成る樣にしかならないものを、どうにかしてきり拓いて行かうとする努力をしてゐる。そこに現狀に安定する事の出來

ない惱悶がある。切り開かうとしても到底だめとさとつた時、はじめてかういふ憂鬱なものが人生であると現狀を承認せねばならなくなつた。そこに、

古を思へば我がめにしも有らじ。心の本性にやありけん。雨風にも障らぬ物と習はしたりしものを、今日思ひ出れば、昔も心の緩ぶやうにも無かりしかば、我が心のおほけなきにこそ有りけれ。（天祿元年）

といふ寂しい述懷の心持が出る樣になり。

今年も憂きもつらきも共に心地晴れて覺えなどして、……天下に悄き人有りとも思ひなほらじなど、しめりて思へばいと心やすし。（天祿三年）

と雄々しくも思ひ定めねばならない樣になつて來る。

道綱にはそろ〳〵配偶者をみつけねばならない年になると共に、自分の年老いた事を知り、そして兼家に對する愛が次第に形の上のものとなつて來る時にこそかういふ心地になるのである。一子道綱の方により强い愛がそゝがれる樣になつて來るのである。然しこの作品の最後まで兼家の愛が自分につながれる事を願ひ、兼家の來ない事を佗しがつてゐる。この日記の中には二人の身分の事は『和泉式部日記』の樣に餘り言はれてゐないが當時としては兩家は相當の距離が社會的にあつたものではなからうか。父倫寧は冬嗣の後裔であるとは言へ、年がら年中地方勤めをしてゐ

る人であるから、當時第一流の人とは言へなからう。道綱は父兼家の引立によつて社會的に立派な地位を得るが、倫寧を父に持つた道綱の叔父達は決して立派な地位になつた人たちのみではない。かう考へて見ると、道綱母は兼家に思はれてゐたゝめに兄弟一番の出世をしたのかも知れない。そしてこの作品の中でさういふ點に關して少しの引け目も感じてゐないのは、兼家に對して自分の愛を強く要求したゝめであらうか。道綱母の目からは兼家は一個の人間であつて、太政大臣にまでなつた偉い人ではない。そこに又『紫式部日記』に見える紫式部と同樣に、藝術家としての道綱母の本領があるのだと思ふ。

3

道綱母が兼家の妻妾に對して如何なる態度をとつてゐたかは、かなり詳しくこの日記に誌されてゐる。概して反抗的態度をとつてゐたらしいが、本妻と考へられる時姫（中正女と同一人か）に對してだけは妥協的同情的態度をとつてゐたらしい。時姫には道綱母が兼家と關係する前に道隆といふ子が生れて居り、其以後にも道兼、道長などがあつた。詮子も或は其子かも知れない。時姫はこの日記の中で言ふならば「年頃の女」とか、「子供のある所」とかゞそれに相當する人であらう。『榮

花物語』などに「對の方」と言はれてゐるのは國章女で、綏子の母の事である。日記に言ふ「近江」がこれであると推定され、天延二年の條には綏子の生れた時の事が見えてゐる。近江は好色な女で、道綱母の心をかなり痛めた存在であつたらしく、道綱母が最初に發見した兼家の妾の「町の小路」に勝るとも劣らない女であつたらしい。不圖した機會に町の小路にやる兼家の文を發見し、道綱を生んで間もない母の心は嫉妬にもえ上つた。人をつけさせて見ると確かにそれと知る事が出來た。この女には天德元年に男の子が生れた。只でさへ隱かでない心の所へ男の子が生れたと聞いて、一も二もなく憎惡の的となつた。然しその子は幾何も經たないで死んでしまつた。嫉妬にもだえてゐた胸がすつとしたのはもつとものことである。

かのめでたき所には子產みてしよりすさまじげに成りにたべかめれば、人憎かりし心（に脫?）、思ひしやうは、「命はあらせて、我が思ふやうに押し返し物を思はせばや」と思ひしを、さやうになりもていて、はては產みのゝしりし子さへ死ぬものは（か?）。尊王の僻みたりし御子の落胤なり。いふかひなく惡ろき事（こゝ?）限りなし。唯だ此の頃の知らぬ人のもて騷ぎつるにかゝりてありつるを、俄に斯くなりぬれば、いかなるうちかはしけん。我が思ふには、今すこし打ち勝りて歎くらん、と思ふに今に（ぞ）胸はあきたる。（天德二年？）

この二人が道綱母の憎惡を最も多く受けた人であつて、この外に「先帝の皇女」、即ち村上帝の女三

宮保子や、「小野宮の召人」などがあげられるが、特に重大な關心が持たれてゐたと言ふのではない。更に道綱母の養女になつた女の母である兼忠女は、同じく兼家の妾の一人ではあるが、兼家と兼忠女とが關係してこの養女が出來る事を客觀的に日記に書いてゐる程、兼忠女に對しては平和な心持が持たれてゐた。この日記の中には隨分と傍系的な記事があるが、この兼忠女と兼家の戀愛などもその一つである。『蜻蛉日記』に出てゐる兼家の妻妾は大體以上の如きものであるが、この外に『大鏡』や『榮花物語』などによつて、忠幹女・大輔・中將の御息所などを知る事が出來る。實際の所兼家の妻妾となつた人々は以上の外にも相當あつたものと考へられる。現在判明してゐる兼家の子供の殆んど凡てが『蜻蛉日記』時代に出生して居り、それらの母の主要なものは日記にも出てゐる。

道綱母は兼家と關係しはじめてからは他の男に特別の關心を持たなかつたらしいから、從つてその生活は自分と兼家とが中心に、又は兼家が中心になつて來るのは當然の事であるけれ共、兼家の方から言ふならば、妻妾は決して道綱母一人のみではないのであるから、その生活は道綱母によつて多くの束縛をうけない事無論である。まして道綱母は正室ではないのであるから。『蜻蛉日記』を讀む場合に稍〻もすると兼家の妻妾の一人としての道綱母の地位が非常に大きなものに考

へられるけれ共、それは誤りであると思ふ。道綱母にとつて兼家は全體であつても、兼家にとつて道綱母はほんの一部分にしか過ぎないからである。兼家の愛は日記の最後まで全く絶えてはゐないが、それにはこの日記を執筆した場合の心境も考へねばならない。美人ではあつてもコケティッシュでなかつたらしい道綱母に對して兼家は、女としての享樂を殆んど感じなかつたものであらう。二人が相知つてから道綱が生れるまでの短い間が最も圓滿に行つた時であるらしいが、そもそものはじめから女の方でどれ程の愛を男に感じてゐたであらうか。男に對する執着は、むしろ子供が生れた事と、別の女の所に繁々と通ふ事を知つた事によつて反動的に高まつたものと思はれる。然しその時には男の心は次第に女から離れつゝあつた。

4

道綱母の最も關心を持つてゐたのは言ふまでもなく共夫兼家であるが、それにも劣らない關心を持つてゐたのは一子道綱のことである。『蜻蛉日記』の中には父母兄叔母叔父のことなどが相當に見えてゐる。父や兄は地方勤めで留守勝ちであつた。兼家となれそめた頃、父が赴任する時には別れ難く悲しかつた。叔母は母亡き後に母代りにと思つた人であつた。康保元年に母の亡くな

つた時の悲しさは、この日記を通じて最も大きな悲しみである。

女親といふ人、在る限りは在りけるを、久しう煩ひて、秋の初めの頃ほひ空しく成りぬ。更にせん方無く佗しき事の、世の常の人にはまきりたり。あまたある中に、是れは遲れじ〳〵と惑はるゝも著く、如何なるにか有らん。足手など唯だすくみにすくみて、絶え入るやうにす。（康保元年）

この年は兼家の事なども僅かしかなくて殆んど全部母の死の事に費して追慕の情を描いてゐる。葬式もすみ中陰もやがて明ける。四十九日の間は人々が集つて來てゐるから、寂しい様なものゝ何となく心に賴りのある様な氣がする。それがすぎてしまふと、皆夫々に離ればなれになつてしまつた。それにつけても一層自分は心細くなつてどうにも仕方がない。兼家はこの心細さを思つて以前よりも繁々とやつてくる（康保元年）。兼好法師が『徒然草』の中で中陰の佗しさを言つてゐるが、道綱母の佗しさもやはりそれと共通である。母の亡くなつた時に道綱を呼んで、「われはかなくて死ぬなめり。」と言つて母のあとをも追ひかねまい事を言つてゐる。母の死が一つの契機となつて死や出家への希望を絶えず持つてゐたと思はれるが、只後髮を引かれるのは可愛いたつた一人の道綱のことのみであつた。

よからずばとのみ思ふ身なれば、露ばかり惜しとには有らぬを、たゞ此の一人ある人（道綱）いかゞせん、とばかり思

ひ續くるにぞ涙塞きあへぬ。猶あやしく例の心地に違ひて覺ゆる氣色も見ゆべければ、やんごとなき僧など呼びおこせなどして試みるに、更に如何にも有らねば、斯うしつゝ死にもこそすれ。俄かにてはおぼしき事も言はれぬものにこそ有なれ。かくて果てなばいと口惜しかるべし。ある程にだに有らば、思ひ有らんに違ひても語らひつべきをと思ひて、脇息に押しだか（かゝ?）へりて書きける事は、……。（安和二年）

このあとにつゞけて兼家に宛てた消息文が長々とのせてある。一種の遺書と見る事も出來る。平安時代の遺書の中では大きいものである。その中には道綱母は兼家に對して道綱の將來の事を書き綴つてゐる。又或時などはつく〲と物思ひをして、死にたいとは思ふがこの道綱一人を一人前にして相當の配偶者に添はせない内は、どうしても死ぬ事は出來ないと言つてゐる。尼になつてしまはうと言へば道綱もはら〲と泣いて、お母さんが尼さんになれば、私も法師になりませうと言ふ。又西山に籠つて、夕暮の入相の聲、蜩の音、めぐりの小寺、小さき鐘ども我も〲と叩きならし、法師たちの讀經の聞える頃、端近く出て物思ひに沈んでゐると道綱が來て、「お寢なさい。お寢なさい。」といふ。多分物思ひに耽らせたくないからであらう。そしてこゝでも死ぬべき我が身であるが道綱一人がほだしとなつて死んでも死にきれない心持を述べてゐる。吾が子への愛に惹かされて自分の去就に迷つてゐる道綱の母。『蜻蛉日記』に表れてゐる母性愛といふものは、他の

例を擧げるまでもなく以上で十分であると思ふ。

『蜻蛉日記』の中に道綱の生れた時の事は、

なほも有らぬ事ありて、春夏惱み暮らして、八月晦に、とかう物しつ。(天暦九年)

と簡單に記してゐるだけである。『竹取物語』の五つの寳物として子安貝がある樣に、當時の出産は相當に重かつた。子安貝は安産のお守りであるから、一般にお産が重かつた事が裏書きされるわけである。その當時の女としては生死にも關係する事であるのに、たつたこれだけしか誌してゐない。苦しかつた記憶だから書かなかつたのであらうか。『更級日記』にも孝標女自身のお産の事は書いてゐないし、お産の記事の詳しい『紫式部日記』も自らの經驗ではない。然るに道綱母は兼家の妾の所で子が生れる事はかなり力強く書いてある。これは道綱母の憎い戀敵であるから嫉妬の目を以てかいてゐるのである。この頃の家庭では多くの場合出産があると乳母が來たものらしいが、道綱母は自分で子供を育てたのであつたものらしく、別に乳母のある事は見えてゐない。

道綱母が家事には相當秀でゝゐた事は、裁縫の上手だつたことによつて察せられる。當時男の衣食は女の方で都合する習慣になつてゐたのであるが、兼家には正室以外に幾人もの通ふ所があるのに、此所に衣服の事を言つてよこしたのは度々である。

古き新らしきと一領づゝ引き包みて、「是れせさせ給へ」とてはあるものか。見るに目くるゝ心地ぞする。古代の人々は「あないとほし、彼處にはえ仕うまつらずこそあらめ。」生心ある人などさし集りて、「すゞろはしやえせで惡ろからんをだにこそ聞かめ。」（天德元年）

これは兼家との仲が面白くなくなつた頃、妾の所に男子の生れた年のこと。この外數箇所に同樣のことが見えてゐる。是等をよんで感ずるのは『落窪物語』の姫君の事である。裁縫などをしげしげと頼まれるのは、どうせうだつの上らない家刀自であつたのかも知れない。兼家が全く見切をつけてしまはなかつたのは、享樂生活の反面に家庭的なるものを欲して居り、世話女房がなくてはならなかつた爲であると解釋するのは酷であらうか。淡々しい人間はその反面には必ずどこかにしんみりとした落付きのある心の休息所を欲してゐるものと思ふ。

5

兼家との仲が面白くなくなつてからの道綱母は屢々物詣をしてゐる。この日記に現れて來る物詣は、伏見稻荷や賀茂社にまうでゝ御幣や歌を奉つた時をはじめとして、其後は長谷・石山・清水・鳴瀧・其他に實施してゐる。これらの物詣や旅行を何故にしたかといふ事は、相當に考へねばなら

ない點であると思ふ。一般にこの當時の物詣は、特別の人々を除くの外は殆んど全部が遊山氣分旅を樂しむといふ氣分であつて、宗教的敬虔さから出たものではない。『枕草子』を見ると、說教を聞きに行くのでさへも物見の氣分で行くのである。勿論物詣をする人々が、その目的地に於て何等かの宗教的雰圍氣を樂しむ事を喜んだのは言ふまでもない。道綱母が最初の物詣をしたのは、兼家と痴話喧嘩の末、戲談だと思つてゐたのに、本當に兼家が來なくなつてしまつた直後のことである。

「世の中をかしからん、もの人詣でせばや。から物はかなき身の上も申さん。」など定めて、いとしのび、或る所に物したり。（康保三年）

これが物詣の動機・原因・目的などであつた。現在の生活に不滿を持ち、そこから何等かの逃避を企てんとするのである。勿論本當に宗教に歸依するといふ心持は少く、困つた時に神佛を否應しにたのむといふ、あの心持である。道綱母のそもそもの心持はかういふ出發をしてゐるのであるが、後には眞劍に死や出家の事を考へた。然し結局一人の子供の將來といふ現實的の問題で行きつまりを生じてしまつた。物詣や旅行の出發が大低の場合不安定不滿足な現在の生活の逃避にある事は日記の所々に見る事が出來る。

心地せん方知らず。怪しく置き所無きを、いかで涼しき方もや有ると、心も延べがてら、濱づらの方に祓もせんと思ひて、辛崎へとて物す。（天祿元年）

兼家の道綱母に對する愛はどうしたのか「夜見る事は三十餘日、晝見る事は四十餘日」にもなつた。頼りにするものは兼家である。その夫が長い間省みてくれない。このまゝの生活にはとても堪へられない。沈滯した生活への一つの清涼劑として物詣などがしたくなるのである。この時は辛崎に祓をしに行つたのである。兼家の妾には小野宮の召人がある、近江がある、先帝の皇女があるなどゝ色々と疑つた末、

「とも有れかくも有れ、たゞいと怪しきを、入る日を見るやうにてのみやはおはしますべき。此處彼處に參でなどもし給へかし。」など、たゞ此の頃は異事無く、明くれば言ひ暮るれば歎きて、更にいと暑き程なりとも、實に然云ひてのみやはと思ひ立ちて、石山に十日許りと思ひ立つ。（天祿元年）

この時の動機もこの文によつて分る樣に、前のと大同小異である。かういふつかまり所のない淋しい、見捨てられた侘しさがかり立てゝ物詣へ、旅へと出さしめたのである。

さきのやうに悔しき事もこそ有れ。猶暫し身を去りなん、と思ひ立ちて、「西山に例の物する寺あり。其方物しなん、彼の物忌果てぬさきに、」とて、四日出で立つ。（天祿二年）

兼家は他の女の所に許り通つてゐて自分を顧みてくれない。實に不愉快でたまらない。暫らく西山にでも行つて來よう、さう思つて出掛けた。道綱母の物詣が、純眞な宗教心より出たものでない事はたしかである。この不快な現實を一時でも忘れる事の出來る所、それを求めたのであつて、宗教そのものを深く追求したのではない。偶々さういふ人生への寂寞觀が宗教的雰圍氣と現實的に結びついたのである。この女がもつと根本的に人生を觀照するならば、そしてこの人生そのものを逃避せんとするならば、必ずや宗教に沒入するだけの事はしたかも知れない。道綱母の單純な態度は、この時代を通じての態度であつた。積極的に男の愛を得ようとしないで、男の愛が薄らぐのを見て徒に嘆き、その悲しみを逃れるために物詣をして慰める。この態度は決して新しい活力に充ちた人のそれではない。生活に倦み疲れた、又は疲れやうとしてゐる人々の態度である。この意味で道綱母は平安時代の人々の歸着點を代辯してゐるものとも考へられる。平安時代の末期の人々が人生に對して道綱母の樣な態度をとる時、當然宗教、就中佛教への歸依が積極的に行はれて來る。佛教が平安時代末期から眞劍に考へられはじめてゐるのは、藤原氏を中心として具現せられた美しい人生に幾多の不安が釀成されつゝあつたからで、その不安を進んで切り開かうとせず、退いて逃れやうとした無氣力の傾向を象徴してゐるのであると思ふ。

當時の旅行が今から考へると不便極まるものであつた事は色々の記錄、例へば『土佐日記』や『更級日記』などによつても容易に考へられるが、この日記の中でもさういふ事が言はれる。然し道綱母は貫之や孝標女などの樣に長い旅行はしてゐないのであり、旅行と言つても京都附近で、人々の多く行く、從つて道のひらけた所であるから、苦しい旅の經驗はないわけである。平安時代の女の旅がいかに仰々しいものであつたかは一寸意外の感じがしないでもない。

我が同じやうなる人、また供に人一人ばかりぞあれば、たゞ三人乘りて、馬に乘りたる男ども七八人ばかりぞある。（天祿元年）

辛崎に祓に行つた時の旅で、極簡略な旅であつたらしいが、それでもこれ丈の仰々しさである。この日記に見える宿所は、寺めく所、いとものむつかしき家、宿院等である。寺院民家が主な宿所であつたらしい。都にのみ閉ぢ籠つてゐた人々が見なれない廣い世の中に出ると思はぬ所で思はぬものを見るものである。一つ二つ拾つて見ると、泊瀨に詣でた時、

きこうじたる下衆ども、（や脫?）あしげなる柚や梨などを、なつかしげに持たりて食ひなどするを（も?）あはれに見ゆ。（安和元年）

乞食どもの坏鍋など据ゑてをるもいとかなし。下衆ぢかなる心地していけ（と脱？）おとりしてぞ覺ゆる。（安和元年）

旅に出ると自然一般の人々の生活にも接するわけである。そして其等は都人士にとつては緣の遠い存在であつた。又石山に詣でた時には死人が河原に伏してゐるといふ事をきいた。走井で食事をしやうとしてゐると、恐しく先拂ひをした者が來た。誰だらうと思つてゐると、日頃兼家のもとにひざまづいて來る若狹守であつた。幕をはりめぐらして辨當を使つてゐたのに、「下衆ども東の口につけるも、さ有らぬも、此の幕近きわたり寄りつゝあみ騷ぐ（け？）ふるまひの無禮う覺ゆる事ものにかず（似？）。」（天祿元年）その振舞が癪に障つた。是等の記事は教養ある文化人としての道綱母の立場から見た地方の一般的狀態の具體的の姿である。

6

『蜻蛉日記』の中には時々夢の事が出て來るけれ共、是等の多くは物詣と何等かの關係のあるものと見てよい。石山に參籠した時、

御堂にて萬づ申し泣き明して、曉方にまどろみたるに、見ゆるやう、此の寺の別當とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て來て、右のかたのひざに入りくと見る、ふと驚かされて、佛の見せ給ふにこそは有らめと思ふに、ま

して物ぞ哀れに悲しく覺ゆる。（天祿元年）

又道綱と共に長精進をはじめた時の事を誌してある中に夢の事が二つある。一つは自分の頭をとりおろして額を分けるといふ夢、一つは自分の腹の中の蛇が肝を食ふ、これを治すには面に水を注ぐとよいといふ夢である。これに對して道綱母は、その夢が善いのか惡いのか知らないと言つてゐる。或る時、石山に詣でた時に知合になつた法師の所から、「私はあなたが兩手に月と日とを受け、月を足の下に踏み、日を胸に抱いてゐるといふ夢を見ました。夢解をする者に解かせて御覽なさい。きつとよい夢ですから。」と言つてよこした。變だと思つたので直にとかせもしないで其儘にしておいたが、偶々夢解をする人が來たので他人の事だと言つて解かせて見ると、非常な吉夢であつた。これに對して道綱母の態度は、

されぱよ。是れが虛合せには有らず。云ひおこせたる僧の疑しきなり。あなかま、いと似氣なし。（天祿三年）

と言つて、夢といふものを信じないと同時に、人をも信ずる事が出來ないものとしてゐる。又或者が、「お宅の門を四足門にする夢を見ました。大臣公卿の出る瑞相です。御子息の將來を暗示してゐる夢です。」などゝ言つた。自分の右の足の裏に男門といふ文字を書きつけるといふ夢を見たといふ事を話せば、それも吉夢だと言ふ。大抵良い加減の事だとは思ふけれ共、ひよつとすると道綱

の將來はよいのではないかと思つたりした。道綱母は夢を妄信してはゐない。これに對して批判的態度をとつてゐる。人がいゝと言つてもそれを率直に受け入れるだけの度量をもつてゐない。それだけ夢などに左右されなくともよかつた境遇の人であつたのか。それともかの兼家との愛に破綻が出來てから後はうか〳〵と人の言を信じ得なくなつたのか。とにかく完全に宗教にひたりきる事の出來なかつたらしい道綱母は、同じ様に夢を信じ、それに沒入する事も出來なかつた人であつたと思ふ。

夢の記事などはこの日記の中の一つの小さくまとまつた記事——挿話と見做す事が出來る。『蜻蛉日記』の中には種々のものが雜然とはひつてゐて時間といふものによつて統一されてゐる樣であり乍ら、その包含するものは實に多種多樣である。さういふ雜然とした中に時々美しくまとまつたものがある。夢などもその一例であるし、蟬と翁の記事(天祿三年)や垂氷くふ人の事(天延元年)などもあげる事が出來る。かういふ美しいものを捕へる事の出來る作者に、優れた自然描寫のあるのは當然の順序である。『蜻蛉日記』の自然描寫の中には『源氏物語』などにも劣らない樣なものがある。その代表として左の一つをあげておくことにしたいと思ふ。

夜打ち更けて、外の方を見出だしたれば、堂は高くて下は谷と見えたり。片崖に木ども生ひ凝りて、いと木暗

かりたる。廿日月夜更けていと明けれど(ば?)木蔭にもりて、所々にきへ方ぞ見え渡りたる。見下したれば、麓にある泉はかみ(が脱?)の如見えたり。勾欄に押し掛かりて、とばかり守り居たれば、片岸に草の中に、そよ／＼しらし(み?)たる物怪しき聲するを「此は何ぞ、」と問ひたれば、「鹿の云ふなり、」と云ふ。何どか何の聲には鳴から(衍?)さらんと思ふ程に、さし離れたる谷の方より、いとうら若き聲に遙かにながめ鳴きたなり。聞く心地空なりと(た?)云へばおろかなり。思ひ入りて行なふ心地、もの覺えで猶あれば、見遣りなる山のあなたばかりに、お守りの物追ひたる聲、いふかひなく情け無げに打ち呼びたり。（天祿元年）

7

『蜻蛉日記』の最も大きな特色は心理描寫であると思ふ。勿論自然主義作家の様にこれを意識的にしてゐたかどうかは明かでないが、平安時代は文藝現象が凡て積極的に認識されてゐなかつた時代であるから、この心理描寫も意識的ではなかつたと思ふ。自己の心理の解剖をもつと意識的にやつたならば、或は『蜻蛉日記』はもつと別の形をとらねばならなかつたかも知れない。この作品の記載がまち／＼で、一見非常に氣まぐれである様に見えるのは、一つにはこの自己分析を不知不識の間に行つてゐたからであつて、そこに『土佐日記』などの様な日次の體裁をとらなかつた原

因の一つが存すると考へられる。そして綜合するまでに至らなかつた所に物語的にならなかつたのであると思ふ。『蜻蛉日記』の心理描寫はこの時代のどの文藝作品にも見られない程深刻なものであつて、この點『源氏物語』に勝るとも劣らない作品であると言へる。勿論この日記は『源氏物語』以前の作品であり、内容としても兩者の似てゐる所は少しづゝは目につく。例へば道綱母の養女の半生は玉鬘的の半生であるし、風を媒として結ばれた女三宮と柏木の關係は、この養女と右馬頭の關係でもある。『源氏物語』の作者が『蜻蛉日記』からかういふ素材の一部を利用したかどうかは別問題として少くとも『源氏物語』の心理解剖がある以前にかういふ秀れたものゝ存在したことは、その影響の直接間接は不問、當時の文藝の進行に大なる意味をもつてゐたと見ねばならない。『源氏物語』の大作は決して忽然と現れたものではないと思ふ。若し『源氏物語』以前の文藝界にかういふ傾向がなかつたならば、恐らく『源氏物語』が文藝としてもつ價値の若干はなくなつてゐたかも知れない。『蜻蛉日記』がそれ程深く『源氏物語』に影響した事を言はうとするのではなく、『蜻蛉日記』的傾向が、又は『蜻蛉日記』が代辯してゐる樣な傾向が―單に心理描寫といふ一事にとゞまらず、當時の文藝界にあつたからこそ清紫時代の到來があつたのであると思ふ。

『蜻蛉日記』の心理描寫が鋭いものである事はこの作品を見れば分る事であるが、この心理描寫

は『源氏物語』などに比較すると發展性といふものが少い。或一つのもの丶まわりをぐる〳〵と描いて居る様で、同様の事が繰返されてゐる様な氣がする。『源氏物語』などは一つ〳〵新しい發展の下に描寫されては居ないであらうか。これは『蜻蛉日記』の創作態度が『源氏物語』と異つてゐるためであると言ひ得るであらう。一方は心理が解剖されたまゝであり、一方は解剖された心理が綜合せられてゐるためではなからうか。この作品の創作意圖が奈邊にあつたかについて明答する事は出來ない。已むにやまれぬ純眞な創作意欲によつて著述されたものであるかどうかは知らない。具體的に言ふならば、夫兼家との鎼のはひつた關係に何等かの批判を與へ、且出來得べくんば何程かの結論の附與が動いてゐなかつたと言へるであらうか。道綱の成長に伴つて兼家との關係には當然幾何かの客觀的視野が必然的に必要とせられた。後年に於ける比較的落付いた心境がこれを物語つてゐはしないであらうか。『蜻蛉日記』の創作意圖の示されてゐるのは、冒頭の序文とおぼしきもの丶中にある。この序文は單に『蜻蛉日記』のみではなく、廣く日記の創作意圖が奈邊に存するかをも暗示してゐる意味の重大なものである。

『蜻蛉日記』が文藝として幾何の價値をもつものであるかの問題は、從來殊に不徹底に取扱はれて來た。平安時代の文藝の中で、この作品は最も讀み難いもの丶一つとされてゐる。素性のよい

傳本がないためであらう。この作品を讀んで行くと文意不通の所は澤山に出て來る。然しこの作品に漲つてゐる藝術的雰圍氣は不明難讀の行間に於ても察知する事が出來る。この作は『源氏物語』に比較して文藝的に劣ると言はれるかも知れないが、又これが日記であるといふだけに、物語である『源氏物語』の及ばないものを持つてゐる點をも見ねばならない。道綱母といふ一人の藤原氏を中心とする貴族の文化の洗禮をうけた作者が、貴族的背景を典型的にもつてゐる男の妻妾となつて、その二人の生活から生ずる種々樣々の雰圍氣を平安時代の觀念形態を以て認識的に、現實的に描いてゐるのが『蜻蛉日記』であつて、作者の體驗によつて得た生々しい空氣が巧まない筆で誌されてゐる。日記といふ一聯の多くの作品の中では、文藝としては勿論のこと、文學史的に言つても、恐らく最も注目してよい作品であると思ふ。

第三　紫式部日記

一

『紫式部日記』は寛弘五年の秋より同七年正月まで(一〇〇八―一〇一〇)、中宮彰子が父藤原道長の第で皇子を出生される間の事情をこまかくうつしてゐる部分と、朋輩其他を批判してゐる所謂消息文と稱せられてゐる部分とより成立してゐる。この作品の作者が紫式部(九七八?―一〇一五?)であることはこの日記自身の上からも、他の作品との比較の上からも推定の出來る事であつて、大體間違ひはないと思ふ。紫式部にはこの作品の外に大作『源氏物語』がある。『紫式部日記』といふ名稱は、多分紫式部の著した日記といふ意味であらう。この作品が何時書かれたものであるかは明かでない。この作品の著作時期の決定にあたつては、その形態に關する大きな問題―現存のものと原作との關係を決定してかゝらねばならない。然しこの問題は全く未解決のものであるから從つてその著作時期も推定する事は困難となつて來る。この日記の成立に關する重な說をあげて見ると、現存する『紫式部日記』は、

1. 原作と同じもの、(足立稻直等)

2. 原作の抄本に消息文を添へて他に寄せたもの、(中根香亭等)

3. 原作の殘簡に消息文を合せたもの、(木村正三郎等)

4. 原作の殘篇となすもの、(安藤爲章等)

である。以上の諸説も確證あつての説ではなく、殆んど推定のものであるから、果してどれが正しいか否かは分らない。が現存のものに後人の加筆がないとするならば、必ずしも原作と異るものとするにはあたらないと考へられる。

2

『紫式部日記』の內容は通常二つに分けられるが、同一人の書いたものであり、且連續してゐるものであるから出來るだけ共通的のものとして見ねばならない。二つの部分をばら〳〵に考へるべきではないと思ふ。この作品に示されてゐるのは紫式部といふ當代の知識階級の女性の見た世界であつて、自己を認識するといふよりも客觀的の事を記し、共蔭に鋭い批判力を働かせてゐる。自己の姿は丸の儘では表はさず、自己以外の事を語り乍ら、それを通して自己といふものを表はさう

としてゐる。單なる客觀的事實の記載と考へるのは誤りである。その最も顯著な例として着衣の描寫の事をとつて見る。この作品の中で衣服の事を言つてゐるのは非常なもので、或時はこの作品がさういふ方面の研究の重要な對象となつた事によつても分る。衣服の事をこま〲と言つてゐるのは、日記草子などの中ではこの日記と『枕草子』が最も著しい。そして何故にかういふ方面の觀察力が強くなつたかと言ふならば、その最も大きな理由の一つは多分宮仕であらう。宮仕をしてゐると當然大勢の人々の中にあり、當時の最上の流行の中に生活してゐる事になり、そのために聊かの流行おくれや缺點も目立つのである。そこに比較研究――批評が生ずるのである。『蜻蛉日記』などの如く、衣服を多く見る事をしないでもすんだ人々にはこの衣服に對する批判力が極さらつとしたものとなつてゐるのである。紫式部や清少納言は衣服に關して無關心では居られない環境の中に生活してゐた。まして是等の人々は文藝に關係のある人々である。自己の風采はさておいても人の事は批評せずには居られない人々である。

葡萄染の織物の袿、裳、唐衣は、さきの同じこと。いとさゝやかに、をかしげなる人の、つゝましげに、少し包みたるぞ、心苦しう見えける。扇よりはじめて、好みましたりと見ゆ。領布は棟緂、夢の樣にも今宵のたつ程、よそほひ、昔天降りけむ乙女子の姿も、かくやありけんとまでおぼゆ。

衣服の事から附屬品、全體の樣子まで述べ、更に比喩まで引いてゐる念入りさである。誰はかういふ着物をきてゐたといふだけなら、單なる報告であつて、客觀的正確さはあるかも知れないが味といふものがない。形だけのものであつて生きてゐない。衣服の事でもそれに呼吸をさせれば生きても來るし、味も出て來る。筆者が女でなくて、もつと科學的な男であるならば、多分かういふ批判は出來なかららう。そしてそれは結局單なる歷史的乃至は風俗史的材料を提供するに過ぎなかつたであらう。着物の事は一々例を引いてゐては大變であるから、もう一つだけ參考にしたい。

かの君は櫻の織物のうちき、赤色の唐衣、例の摺裳著給へり。紅梅に柳の唐衣、裳のすりめなど、今めかしければ、とりもかへつべくぞ、わかやかなる。

前のは紫式部の直接の言葉がはひつてゐないのであるが、これには「とりも換へつべくぞ」と言ふ紫式部の心をそのまゝに示す言葉が出てゐる。衣服の事のみならず有職故實の事もかなり多い。御湯殿の儀などはその尤なるものである。かういふ事なども全く客觀的の描寫、否報告が出來るものであるが紫式部はさうしてゐない。さう出來なかつたのであらう。客觀的に見てゐる樣で決して批判的の目は離してはゐない。主觀といふものを丸出しにして對象に左右されないが、人々の動きなり、物事の有樣なりをぢいつと見つめてゐる。その中にとけ込まないで一歩手前に止つ

て見てゐる。若し飛び込んで行つてしまつたならば、それは歌の世界であつて散文の世界ではない。紫式部が日記や物語に素晴らしい力を見せたのはかういふ動的のものを靜的立場から見てゐたからに外ならない。和泉式部などに散文を書かせやうとしても無理であつたらう。動的のものは動的立場で見ねば承知の出來ない人であつたのだから。淸少納言なども紫式部と共通的立場にあつたものと思ふが、紫式部は客觀的のものに對して直に烈しい影響を被らなかつたらしいが、淸少納言の方は外部的刺戟に直に反應した人らしい。二人の性格の離反はこんな所にもあつた。

北の御障子と、御帳とのはざま、いと狹き程に、四十餘人ぞ、後に數ふれば居たりける。

この「後に數ふれば、」といふ言葉さへなければ極平凡のものであるが、この言葉があるがために紫式部が門外漢的立場に立つて人々の動きを冷たく理智的に見てゐる事が分る。紫式部も宮仕人の一人であるから、宮仕人らしい意識をもつてよいのであるが、さういふ意識は陰にかくしてしまつて只管人々の動きを靜かに見ては、何等かの批判を下してゐる。道長に對する態度などにもこれを見る事が出來る。客觀的事象に對しては決して露骨に主觀を示さない。そのためにこの作品の主人公が一定しない樣なものになつた。紫式部といふ人間がこの作品の中で積極的存在性を有してゐないがために、この作品の主人公を曖昧なものにした。紫式部は積極的に自己を主人公とし

て自己中心に書いて行けない人間である事は前述の通りである。そのために殊に初の方、宮の御産がはじまる迄の記事は、書いてゐる作者と離れてはゐないが、作者はその中に積極的に登場して來ない。靜かに世の種々な相態を見てゐる。そしてそれを筆にした。この日記の中に登場する人物の多いのは一つにはこのためであり、紫式部が際立つた存在になつてゐないのもこのためである。そして人物は單なる名前のみでなくて、相當に性格的に動かしてゐる所に紫式部の力があると思はれる。

3

『紫式部日記』の中の所謂消息文といふものが、初は全くこの日記から切り離されてゐたものであつて、後からつけられたものであるか否かの問題は暫くあとにして、この消息文の部分が『紫式部日記』に存在する可能性乃至必然性について少しく述べて見たい。この部分は全文字殆んど人物批評に終始してゐる事に異論はないと思ふ。この日記に登場する人物は驚くほど多く、それを適當に扱つてゐるのは是等の人物を紫式部が客觀的にしてゐるからである。是等の人物の或特定の人を取り上げて論ずる時に消息文と言はれてゐる部分の人物月旦になるのである。然しこの部

分の批評態度は日記の他の部分にも隨所に見られる所である。例へば、

大かたの世の有様、小少將の君の、いとあてに、をかしげにて、世を憂しと思ひしみてゐ給へるを、見侍るたり。父君よりこと始りて、人の程よりは、幸のこよなくおくれ給へるなんめりかし。

などもさういふ心持がある事と思はれる。殊に消息文といふ部分のすぐ前あたりの宰相の君の記事や、大納言の君・宣旨の君などになると全く消息文中の態度と同一であることが分る。大納言の君の所を引いて見ると、

大納言の君は、いとさゝやかに、小しといふべきかたなる人の、白う美しげに、つぶ〳〵と肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髮たけに三寸ばかりあまりたる裾つき、髮剌などぞ、すべて似るものなく、細やかに美しき。顏もいとらう〳〵しく、もてなしたるなどらうたげに、なよびかなり。

一人の人物についてまとめて書いたから、かういふ樣な工合になつたのであるが、これを斷片的に記載してゐるのが日記の部分である。尤もこゝに引いた所は日記の部分とされてゐる所である。小少將の君が貴にをかしげであるのも、大納言の君がらうたげになよびかであるのも、言はんとする根本は同じである。これを書いてゐる作者の態度は同一である。大納言の君と比較するために消息文といふ部分に示されてゐる一人、宰相の君を引いて見る。

宰相の君は、北野三位のよ。ふくらかにいと容體こまめかしう、かど〳〵しきかたちしたる人の、うち居たるよりも、見もて行くに、こよなくうち勝りらう〳〵しくて、つらつきに、はづかしげさも、匂ひやかなる事も添ひたり。もてなしいと美々しく、華やかにぞ見え給へる。心ざまもいとめやすく、心美しきものから、またいと恥かしき所添ひたり。

この二つの人物批評の根本的差異を認める事は困難である。一つは日記、一つは消息文と言はれてゐる部分に含まれてゐるものであるがこれ等を夫々取り替へても成立する。それ程この二つの間には差が認められない。更に推論して行くならばこの二つを背景にもつ所の日記と消息文との各部分の境界が不分明であることになる。二つの部分の境界の書き方を見ると、作者は決して別々のものとして取扱つてはゐないし、又さうしやうとしたものとも斷定はしかねる。即ち宣旨の君の批評をしてきて、最後に、

あてなる人は、かうこそあらめと、心様ものうちのたまへるも覺ゆ。この次に、人のかたちを語り聞えさせば、物いひさがなくや侍るべき。唯今をや、さしあたりたる人の事は煩はし。いかにぞやなど、少しもかたほなるはいひ侍らじ。

これにすぐ續いて宰相の君の批評となつてゐる。この文中の「この次に」云々からが消息文と言は

れてゐる部分である。この詞が後の人によつて書き入れられたものでない限り、「この次に」以下を特別視するには當らないと思ふ。「この次に」以前に全くこれ以下の樣なものがないならば、特別のものがはひつたと考へてもよいのであるが、二三の人物を極自然に批評して來て、さて次に序だからもう少し人々の噂でもしやうといふのであると解釋をして差支へはないと思ふ。若しこれをさう解釋しないならば消息文の冒頭についた言葉といふ事になる。こゝの人物評論の出方が極めて自然であるから、特に後から綴り込まれたとしなくてもよいと思ふ。人物評論以後の記事も全く初の記事とばら〳〵のものではない。やはり渾然たる一つの作品と見てよいのではゐるまいか。この部分が他人に宛てたものであることは、

御文にえ書き續け侍らぬ事を、よきもあしきも世にあること、身の上のうれへにても、殘らず聞こえさせおかまほしう侍るぞかし。………え讀み侍らぬ所々、文字落しぞ侍らん。それは何かは。御覽じ、漏らさせ給へかし。

とあることによつて分る。この部分のみが消息文とすれば、やはり殘簡であつたらしいから、何が書いてあつたか分らないが、「よきもあしきも世にあること、身の上のうれへ」などいふ言葉はこの部分以外の日記をも指してゐると解せられないであらうか。『紫式部日記』全體を作者の意識して

ゐた誰かに―女の大貳三位か―贈つたものと考へてよいのではないかと思ふ。

紫式部の人物批評の內容的方面に關しては前に二三の引用文を示しておいたが、人物各々について述べる事は出來ないから、紫式部と並び稱された淸少納言について一言しておくに止める。

淸少納言こそ、したり顏にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、眞字書き散らして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬこと多かり。かく人に異ならんと思ひ好める人は、必ず見おとりし、行く末うたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすごうすゞろなる折も、もの〻あはれにす〻み、をかしきことも見過ぐさぬ程に、おのづからさるまじく、あだなる樣にもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らん。

紫式部の見た淸少納言といふ女はかういふ女である。二人の性格の間に相常大きな共通點もあるが、同時に相違點もある事は前述の通りである。然しこれは單に二人の性格の離反のみで解決してしまふ事は出來ない。紫式部がどんなにひどく淸少納言を批評しようとも、淸少納言の名聲がそれ程でなかつたならば、紫式部にしても猜みはしなからうし、第一かうした批判の對象にはしなかつた筈である。對象にしてゐる事は、却つて淸少納言の大きな名聲を紫式部が證明してやつて

ゐる様なものである。二人は殆んど同じ時代に活躍した人であり、清少納言は中宮定子に、紫式部は中宮彰子に仕へてゐた。二人の間にはこれ丈の背景が自然意識されてゐたものと考へられる。當時中宮定子と中宮彰子とは對立の形になつてゐた。清少納言と紫式部が兩後宮の代表的才女であるから、自ら對立の形となるのは別に異とするに足りない事である。紫式部の清少納言論にもかういふ背景があり、又そのために歪められた點のある事も考へて置かねばならない。紫式部と同じく彰子に仕へた和泉式部が酷評を受けてゐないのも、一つは同一主人の下に働く朋輩同志であつたからであると思ふ

4

紫式部は客觀的事象を靜視して、その裏に鋭い批判を働かせてゐると共に、主觀的事象に、即ち自分の內省的事象にも靜視の目を向けて自己批判なり、省察なりをしてゐる。外部批判と共に內部批判をもしてゐる。紫式部はひとりになると自己といふものに靜かに目を移した。云はゞそこで初めて主觀を露骨に表し得た。自分自身を生地の儘に表した所は相當にあるが、中にも消息文と言はれてゐる所は、見方によつては凡てこれであるとも言へる。紫式部は人の事をぢつと見て

ゐる様に自分の事もぢつと見つめたらしい。そこに沈んだ、人間としてはとりつきにくい、むつゝりとした人間となつてしまつたのであらう。

げに老いもしぞきぬべき心地するに、なぞや。まして、思ふ事の、少しもなのめなる身ならましかば、すきぐしくも、もてなし若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし。めでたき事、おもしろき事を見聞くにつけても、たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、もの憂く、思はずに歎かしき事のまさるぞ、いと苦しき。いかで今はなほ、もの忘れしなん、思ひ出もなし、罪も深かりなど、あけたてばうちながめて、水鳥どもの、思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見む我れも浮きたる世を過ぐしつゝ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかりなんと、思ひよそへらる。

これなどに見える紫式部はしんみりとした落付いた人である。自己を認識するだけの餘裕を持つてゐた人である。自分といふものを一つの客觀としてそれを靜かに觀察しようとする人である。紫式部は主觀を表すにも客觀化した主觀を表してゐる。

師走の二十九日參る。はじめて參りしも今宵の事ぞかし。いみじくも夢路に惑はれしかなと、思ひ出づればこよなくたちなれにけるも、うとましの身の程やと覺ゆ。………。

年暮れて我が世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

客觀的事象をぢつと見つめて、そこから鋭い批判的な態度を持つた紫式部の異つた面には、自己を視る丈の力を持つた人間があつた。更に進んで自己を徹底的に解剖する事も出來た女であつた。自分の持つ意見を積極的に示す事も出來た女であつた。それ等を通じて一貫した態度は對象と一緒に興奮してしまはないで、あくまで一歩離れて靜かに見てゐることである。靜視してゐるからこそ徹底的に批判的になり得るのである。所謂消息文と言はれてゐる部分が最もこの典型的のものである。幾多の人々の事を言つた終りに、

一ふしの思ひいで、取るべき事なくて過ぐし侍りぬる人の、殊に行く末の頼みもなきこそ、慰め思ふ方だに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。その心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、端に出でゐてながめば、いとゞ月やいにしへほめてけむと、見えたる有様を、催すやうに侍るべし。云々。

と述べてゐるのがそれである。紫式部自身を自ら反省し、批判し、最後にこの消息文といふ部分の受取人への結論を記してゐる。この部分に至つて紫式部といふ人間の眞面目が示されてゐると思ふ。人の事をぢつと見乍ら冷静な態度で批判してゐる所謂日記の部分はこゝの人物批評に相當するものであり、客觀から主觀に目を移して行つた態度が、大勢の人物を評論した揚句自己批判をも

行つてゐる所に相當すると思はれる。日記の部分と消息文の部分との行き方は同じであつて、共に紫式部といふ人間を中心にした批判的記錄である。

紫式部は多くの人を見てゐて、その性格といふ樣なものを描かうとしてゐる樣な所がある。「同じもの、同じ白さなれど、しざま、人の心々見えつゝしつくしたり。」と言つてゐる樣に、共通的のものゝ中に異つた點を發見し得たからであると思ふ。

中宮が內裏に入られる時の事、

馬の中將と乘りたるを、わろき人と乘りたりと思ひたりしこそ、あなことごとしと、いとどかゝる有樣、むづかしう思ひ侍りしか。

と言つてゐる。朋輩同志の間がとかくうまくゆかないのは平安時代に限つた事ではないのであるが、大勢の人々が一緒に生活してゐたので殊に甚しかつたらしい。紫式部もその例にもれず好惡の情が人一倍ひどかつたものと見える。かの人物評論の中で自分に對する世の思惑を辯解して言ふには、

いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、そばそばしき樣して、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はずねたげに、見落さんものとなむ、皆人々言ひ思ひつゝにくみしを、見るには怪しきまでおいらかに、こと人かと

なんおぼゆる。

紫式部は確かに世間からはかう見られたであらう。凝と人を見つめてゐては批判するのだから。そして自省してゐる様に確かにさういふ性格を相當强くもつてゐたらうと思はれる。『源氏物語』の事を所々にほのめかし、「日本紀局」と言はれた事、男であればよかつたと父が言つた事、『白氏文集』を中宮に進講した事などは、一見控へ目の物言ひの様ではあるが、その反面にはかなり得意の所があつたのではなからうか。まして誰かに與へた部分に書かれてゐるのだから。清少納言を眞名書き散らしと言つたのは、自分より漢文學の素養もないくせにといふ卑下の心持の含まつてゐる事は否みがたい。漢文學を生かじつてゐる者を皮肉の目で見たのである。そして反面に自己の漢文學に對する造詣の深さを誇つたのであつたかも知れない。紫式部はむつつりとしてゐて案外親しみ難かつた女であつたらうと思ふ。清少納言の方が遥かに近代的朗かさを持つてゐたのではなからうか。

紫式部の仕へた彰子の父は藤原道長であり、この作品の舞臺も多くは道長の第であるから、自然

道長と紫式部とは顔を合せる機會も多かつたであらう。紫式部が道長の妾であつたか否かについての說は確定してゐない。この日記などが主要な材料となるわけであるけれ共、かういふ事は極デリケートな問題であるから、依然眞相は分らない。この作品の中で道長の事は所々に見えてゐる。醉つぱらつた揚句、「歌を一首詠め」と紫式部に言つた事もあつた。紫式部より見れば、彰子腹の皇子を愛すること限りない道長は、普通の好々爺と何等の變りはない。道長は夜中でも曉でも終始やつて來られては乳母の懷をお搜しになる。若宮がぐつすりお寢みになつてゐる時などは、何心もなくおぼほれて目をおさましになるのもいとほしく見える。まだ心許ない程の若宮を十分おいつくしみになるのも尤もの事で結構である。或時は若宮が道長に尾籠な事をしかけられたのを、紐を解かれて几帳の陰で衣服をおあぶりになつた。「あゝこの若宮のおしつこでぬれるとは、ほんたうにうれしい事だ。この濡れたものを焙るのこそ實に滿足の至りだ。」とお喜びになつた。

顏を合せる機會の多かつた紫式部と道長との交涉は一體どんなものであつたらうかを、『紫式部日記』に出てゐる所によつて見て置かう。或時『源氏物語』が御前にあるのを道長が御覽になつて、いつもの御戲談事を言つた序に、梅の枝にしいてあつた紙に、

すきものと名にしたてれば見る人の折らですぐるはあらじとぞ思ふ

と書いて紫式部によこされたので、

人にまだ折られぬものを誰れかこのすきものぞとは口ならしけむ

めざましう

と返事をした。又渡殿に寢た或夜の事、誰か戸を叩く人があるとは知つてゐたが、恐しさのあまりまんじりともせずぢつとして其夜を明した。次の朝、

夜もすがら水鷄よりけに鳴く〳〵ぞまきの戸口にたゝきわびつる

と道長が歌をよこされた。その返事に、

たゞならじとばかりたゝく水鷄ゆゑあけてはいかにくやしからまし

道長が紫式部に心のあつた事は分る。戯れたのみではなく、なびかせようといふ心持はあつたと思ふ。これに對して紫式部は受け外してゐた。

紫式部の道長觀は決して其地位によつて多くの束縛を受けてゐないものであり、單に男が愛を求めて來た位にしか思はなかつたらう。紫式部はどこまでも道長を客觀的に見てゐたのであつたらしいから、道長の求愛に易々とのつて行かなかつたと思ふ。人間の心理を知つてゐた藝術家だつたから。惡く言へば紫式部は男を男とも思はない、すれた女なのであつたかも知れない。結婚

といふ事を外から見る事はしても、夫と死別した今日、結婚そのものを再び繰返す事は出來なかつたのである。貞操云々で解決すべきでない事は勿論で、自尊心の强いであらうかういふ女は、結婚そのものゝ實行に興味を失つてゐたものと見てもよいと思ふ。

6

紫式部の宮仕へは夫宣孝と死別した後の事である。宮仕とは言つても詰切りに局にゐるのではなく、時々里に下つたものらしい。宮中を中心とした平安時代の文化は、一度共圈外に出ると餘程低かつたものらしい。『紫式部日記』は、勿論里に於ける紫式部の經驗ではなくて、貴族邸乃至宮中に於けるものである。その生活でも裏面のものではなく、表面のものである。裏面が積極的に描かれる程、未だ表面の生活に破綻が來てゐなかつた。里、即ち各々の自分の家の事は極斷片的にしか描かれてゐない。一寸里に歸つて二日ばかり經つと霜雪がうんと降つた。見所もない田舍の木立を見るにも物むつかしく思ひ亂れたとか、田舍ではもう寢るのに、この履音の多いこと、さすがに宮中はちがふ、と述べてゐる。當時の文化圈以外の所に大きな興味を持たないのは、平安時代の文化がまだ人に滿足させるだけの力を持つてゐた事を示すものであり、藤原氏を中心とする貴族

文化の行き詰りから自然への融和を、即ち里の生活への興味をもつてくる樣になる後の世とはかなりの差があるものと見ねばならない。里は決して紫式部の能力を滿足させる所ではなかつた。都會生活の飽滿が自然や田園への歸復を必要とする樣になると同じ經路がこれ以後の視野の變化に見られる。かと言つて貴族の内部生活が表面程花々しいものでない事は、この日記の中にも所々に見えてゐる局生活によつて知る事が出來る。こまかい感受性を持つた女の集まる女中部屋、そこに美しい憧憬の生活のみのある筈がない。只表面の生活がそれを滿足させてゐる間だけがそれ等の生活の魅力のあつた間であつた。

なにばかり耳とどむる事もなかりつる日頃なれど、五節過ぎぬと思ふ内わたりのけはひ、うちつけに淋々しき。

花やかだと言はれる生活の一面にはかういふ『徒然草』的な寂寞が已に經驗せられてゐた。この五節を大きく見て平安時代の文化とするならば、それの終末に近づいた時に、かういふ寂寞が人に迫るのはあたり前の事であつた樣に考へられる。

『紫式部日記』を形式の上から見ると歌の少い事が先づ目につく。二十首足らずの歌が入れられてはゐるけれ共、この作品の上から言へば、歌の存在はさして重要なものではない。この日記から歌をとり去つても成立する程この作品の中で歌の存在は小さい。この作品の樣な內容を盛るには歌が必要かと言へば、必要でないとは言へないが、不可缺のものではない。何物かに託して自己を述べるのであるならば、歌といふものゝ存在價値は大きいのであるが、この日記の樣に、客觀乃至主觀を靜視し、それを批判的に見ようとする態度にあつては、歌が最上の表現形式でない事は明かである。歌が、即ち或意味では贈答歌が必要不可缺のものでない事は、同樣にこの日記の中に對話といふ形の少い事にもなり得るのである。この作品の文章が直叙的であり、且理知的である事は、形の上からも想像する事が出來る。自分の考へる事を其對象にぶつゝけて行くために最も必要な形は論文的な形である。この作品は論文ではない。然しかの人物を評論する所などは論文的であると言つて差支へない。そして『紫式部日記』全體が大體に於て人物評論と同じ樣な態度であることも考へられるのであるから、この作品に歌が少く、あつたにしても重要な位置を占めてゐない事や―一つ一つの歌の文藝的價値は別として―對話といふ形の少い事などが、その內容の表現に當つて當然とられるべき形態であつたことが分る。

『紫式部日記』が歴史的な、又は文化史的な資料とされ勝ちであつたのは、當然の理由が存するのであるが、單にさういふ取扱ひにのみ終始するべき作品ではない。この作品にかういふ重要な價値のある事は否定することは出來ない。殊に服裝や有職故實の方面の研究對象である事は言ふまでもないが、この作品にさういふ事實的正確さのある記事がなくても、藝術的價値に重大な影響を及ぼすとは思へない。即ち或事實を通じて作者の主觀の直線的の表現のある所にこの作品の藝術的の價値のある所以である。この日記を藝術品として或完成をもたらしてゐるのは、全體を通じて作者の態度が批判的である所に生じてゐる。然しかういふ態度の作品が凡て文藝的に成功してゐるとは言へない。何故にこの作品が成功してゐるかを客觀的に具體的に示すことは出來ない。只この作品の成功は、こゝに示されてゐる文字が作者紫式部と離れた存在になつてゐないといふより外はない。作者の觀念形態を離れた空虛な文字がない。紫式部のもつてゐるもの、又は言はんとするものが文字といふ形を通して一つの渾然たる雰圍氣を作つてゐるとでも言ふより外はない。紫式部といふ女は寡婦暮しの子供をかゝへた女であり、才能こそあつたとは言へ、女房であるから、さう著しい意識形態を持つてゐる筈もない。それは當時の貴族的な、又は貴族追從的なものであつて、それがこの日記になつて表れて來てゐるにすぎない。大作『源氏物語』の作者であると

いふハンディキャップによつて、無批判に紫式部を偉い人間にしてしまふことは出來ない。自分でも半ば分つてゐた樣につんとすましした、一寸意地の惡い知識階級の女であつた事を見ねばならない。そこでこそ始めてこの日記などに意味が出てくるのではないかと思ふ。文學史的に言へば『土佐日記』や『蜻蛉日記』程問題的の作品ではないかも知れない。然しこの日記は文藝としては勿論のこと、文學史的にも前二者と共に逸する事は出來ない。

第四　更級日記

一

『更級日記』は父と共に任國に行つてゐた菅原孝標女が、十三になる年に上京し、物語に憧憬した夢多い青春から次第に現實に目覺めて行く體驗凡そ四十年間許りを書き綴つた記錄である(一〇二〇—一〇五九?)。この日記の作者が菅原孝標女(一〇〇八—?)である事は其内容及び若干の記錄の上から容易に推定出來る事である。作者はこの日記以外に『夜半の寢覺』・『濱松中納言物語』・『みづからくゆる』・『あさくら』等の著があるとされて居り、『新古今集』以下の勅撰集に歌のゝつてゐる歌人である。『更級日記』といふ名稱の由來は明かではないが、姨捨の故事をふまへた卷末の甥の歌と、亡き夫の任國信濃に因んで更級(科)と命名したものであらう。夫に死に後れて生き殘つてゐる老いた身はまさに姨捨の身である。この日記の書かれた時期は何時であるかはつきりは分らない。この日記の最終の記事が何年であるか決定するのが困難であるために、其著述時期の推定も困難となるのであるが、殆んど自分の一生が終る樣な頃になつて、過去を振り返つて誌したも

のであらう事だけは分る。多分五十歳以後であらう。この日記の記事には所々に客觀的正確さを缺いてゐる所がある。最初の上洛の記事の中に地理に關した誤りのある事や、天喜三年の夢のことが天喜年代以後に出て來て時間的に統一のないことなどは、この日記が科學的に時間をおつて次々に誌して行つたものではなく、思ひ出すまゝに書いたものである事を示してゐる。

2

『更級日記』の內容は相當複雜であるが其中で戀愛に關した事は殆んどない。僅かに竹芝傳說がそれであると思はれる位のものである。孝標女と資通との關係は、事實は果して如何であつたかは知らないがこの作品で見るとやはり戀愛ではないらしい。孝標女には子供があるのだから、夫たるべき人のある事無論であるが、二人が如何にして結ばれたのかについてこの日記には見えてゐない。どうしてかういふ樣に戀愛の事がないのかは一つの疑問である。物語を愛好し且其中に理想的な男を夢みたのであるから戀愛が全く分らなかつたのではないと思ふ。この日記を書いたのは晚年と推定せられ、その晚年には戀愛などといふものには見切をつけてゐた時であるから、從つてこの中にもそれがはつきり現はれなかつたものであらうか。孝標女は眞面目な女であつたら

しい事は想像せられるのであるが、戀愛などを初から否定してゐた樣な女ではなくて、知つてしまつた所から生じた否定であると思ふ。これは物語に對する態度の變遷と同一であると見てよい。孝標女の物語に對する態度は初と終りでは非常な相違がある。今それを示すと、

世の中に物語といふものゝあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、……等身に藥師佛を造りて、手洗ひたどして、人まにみそかに入りつゝ「京にとくあげ給ひて、物語の多く候なる、あるかぎり見せ給へ。」(寛仁四年)

「物語もとめて見せよ、見せよ。」(寛仁四年)

乳母も、三月ついたちになくなりぬ。せんかたなく思歎くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。(治安元年)

物語の事をのみ心にしめて、…… 光るの源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。(治安元年)

物語の事を、晝は日ぐらし思ひつゞけ、夜も目のさめたる限りは、これをのみ心にかけたるに……。(治安元年)

その後は何となくまぎらはしきに、物語の事も、うちたえ忘られて、物まめやかなるさまに、心もなりはてゝぞなどて、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物詣をもせざりけむ。(長元初年)

昔より、よしなき物語、歌の事をのみ心にしめで、夜晝思ひて、おこなひをせましかば、いとかゝる夢の世をば見ずもやあらまし。(康平初年)

この世の中に物語といふ面白いものゝある事を知り、それが知りたくてたまらず、藥師佛を作つて一生懸命に祈つたのは、まだ上總に居た十三歳になるかならない時の事であつた。京都に來てから物語追求の心は一層募つた。時に乳母の死などによつて物語の床しさを失つた事もあつたが、それはほんの一時的の現象であつて、年頃になると『源氏物語』中の人物を現實化させようとする程熱中して來た。夜晝思ふことは、只物語の事のみで、物語をしてもそれが忘れられなかつた。然し段々に年をとるにつれて、この世間の現實を認識する様になると、物語の世界が現實と如何に離反してゐるものであるかを悟り、一つには現實の生活に逐はれる様になつて、物語とは段々に遠のいて來る様になり、遂にはそれを否定するといふ態度にまでなつて行つた。孝標女の最も耽讀したのは『源氏物語』であり、それに對する關心の變遷も大體以上のものと一致してゐる。そも〳〵物語に興味を持ちはじめたのは上總國にゐた時、姉や繼母などが光る源氏の事などを話し合ふのをきいた事にはじまつてゐる。上京しても見たくてたまらないが見せてくれる人は誰もない。太秦に籠つた時にも『源氏物語』を一の巻より全部見せて下さる様にと祈つた。丁度折よく伯母が來て『源氏』五十餘巻と其他の物語をくれ、貰つて歸る心持は何とも言へなかつた。

はしる走る、わづかに見つゝ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに

打臥して引き出でつゝ見る心地、后の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともして、之を見るより外の事なければ、おのづからなどは、そらに覺え浮ぶを、……。(治安元年)

『源氏物語』をよむに從つて、自分は今は餘り美しくないが、年頃になつたら美人になるであらう。さうしたら夕顔君や浮舟君の樣にありたい。光源氏の樣な男を年に一度でもよいから通はせ、浮舟の樣に山里に隱し置かれて心細い生活をし、時々は男からの文を貰へたらなどと思つた。然し環境は孝標女をして夕顔にも浮舟にもしなかつた。

このあらましごとゝても、思ひしことどもは、この世にあんべかりける事どもなりや。光る源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薰大將の宇治にかくしすゑ給ふべきもなき世なり。あな物狂ほし、いかによしなかりける心なり。(長元初年)

孝標女の『源氏物語』に對する幻滅はこれで頂點に達してゐる。然し後に初瀨に詣でた時、宇治殿を見て、浮舟のゐたのはこんな所であつたのかしらと思ひ出して居て、源氏を全く否定しきつてはゐない。只現實生活によつて美しい夢が破られたのであつて、時には昔の美しい夢が甦つて來たらしい。『源氏物語』は、それが作られた道長時代には存在の必然性乃至可能性が現實的にあつた物語であらうが、文化が頂點をすぎはじめた『更級日記』の時代には、已にかういふ現實的破綻を餘

儀なくされる程必然性又は可能性が缺けて來てゐたと思はれる。全く時代の離れたものであるならばかういふ幻滅は起らない。存在の可能性が考へ得られる時代であつて、已に其時代が昨日となつてゐる時、孝標女の樣な讀者が出るのである。孝標女の樣な地位にあつた人も、浮舟や夕顏の如くなり得た事は、初期の『源氏物語』觀によつて推定せられる。

孝標女の愛好した『源氏物語』が『更級日記』にどれだけの影響を與へてゐるかは未知數であるけれ共、日記冒頭の句や終末に近い歌にふまへられてゐる歌、

あづまぢの道のはてなる常陸帶のかごとばかりもあひみてしがな

わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に出る月を見て

などが『源氏物語』にも屢々出てくるといふ程度のものではなく、もつと深い感化を見る事が出來る。浮舟は陸奥守で後に常陸介になつた人の繼子であるし、孝標女は上總介で後に同じく常陸介になつた人の實子である。浮舟は繼父と實母と共に東國で人となり、孝標女は實父と繼母と共に東國で幼時の若干を過した。かういふ境遇上の類似が浮舟への傾倒を刺戟したものであらう。東國育ちの浮舟が當代第一の男に思はれた。孝標女にして見れば自分と浮舟とを置き替へる可能性

實在性は全くなかつたのではない。現實味の強い憧憬であつたらう。浮舟といふものによつて自分が東國育ちであるといふ自覺を強く持たされたのではあるまいか。

源氏物語

いでや、ありきは、東路を思へば、いづこか恐ろしからむ。

若うより、さる東の方のはるかなる世界にうづもれて、年經にければにや、……。

館のうちにも置い給へらざりしかば、東の人になりて、……。

見し東路の事なども思ひ出でられて、……。

更級日記

立ち返りつゝ見し東路よりは、……。

東路の道の果よりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、……。

東の國、田舍人になりて惑はむ、……。

たゞ東路のみ思ひやられて、……。

『源氏物語』の筋や·章句を宙に暗記して心に泛び出てくる事を日記の中に言つて居るのとこれとを合せ比較して考へて見ると『源氏物語』と『更級日記』とはかなり共通的である。偶然の符合である

と言つてしまへばそれ迄の事、然し浮舟に絶大の興味をもつてゐた孝標女が、東といふ事を自覺した根本には、浮舟の東國育ちである事を除くことは出來ないであらう。意識的に『源氏物語』、殊に「宇治十帖」を眞似たか否かは知らないが、無意識にもかういふ類似をもつ以上、二つの感化關係を認めて然るべきであると思ふ。浮舟は『源氏物語』の中でも最も消極的退嬰的人物の一人である。自己といふものを明示し得ない、環境に左右されてゆく人物である。後年『源氏物語』などに孝標女が幻滅を感じたのも、浮舟自身に感じたのではなくして、浮舟の對象になつてゐる薰君や、薰君と同じ樣な地位にある源氏君に感じたのである。是等の男は道長時代の人には實在性があつたらう。然し極盛期をすぎた當時の文化的水準には已に實在性を失つてゐた。その反面には浮舟の如き凋落する女が本當の姿となつて來たものと思ふ。孝標女が浮舟などに共鳴したのは單なる憧憬ではなく、もつと現實的のものであつたと考へられる。

3

孝標女の物語追求の一つの別な方面の表れとも見られるのが傳說說話への興味である。主なるものは竹芝傳說と富士川傳說とであるが、この外「まのゝ長」傳說や在原業平の故事などをあげる

事が出來る。

竹芝傳說　火たく衞士の獨語を姬宮がきいて興味を持ち、二人で衞士の鄕里武藏國に行つてしまつた。帝や后は大いに驚き、早速あとを追はせたが姬宮は何と言つても歸らないので、仕方なく二人をそこに住ませた。姬宮がなくなつたので、そこを寺にしたのが竹芝寺であるといふ話である。これは勿論姬宮の衞士に對する戀慕である事は否定出來ないが、その戀愛なる事を露骨に出してゐない。二人は一緒に逃げたのであるが、京都から地方にかくの如きことを決行せしめたものは、已に相當の行き詰りをもつてゐた京都の文化ではあるまいか。單なる傳說ではあつても、其時代に存在する可能性は當然あるべきである。當時の文化がこの傳說によつて何等かの批判がされても差支へないと思ふ。

富士川傳說　先年よそに行きました所、大變に暑かつたものですから、富士川の邊に休み乍ら眺めて居りますと、川上の方から黃色のものが流れて來て物に引つ懸かりました。見ると反故でした。拾ひ上げて見ますと黃色い紙に朱で濃く端麗に何か書かれてありました。不思議に思つて讀んで見ますと、來年國守の任ぜられる國々を、丁度縣召除目の樣に全部書いて來年國司が交替する筈の國には、二人の國司の名が認めてありました。不思議だ、あきれた事だと思つてそれを乾して

しまつて置きました。所が翌年の司召の時にはこの反故に書かれてあつた事が一つも違ひませんでした。此の國の國守もその通りでしたが、三月の内に亡くなつて、其交替に來た人も傍に書きつけてあつたその人でした。かういふ不思議な事がありました。來年の司召の事などは、今年この富士山に澤山の神々が集つて相談してきめるのであつたと思ひました。珍しい事ですね、と駿河の人が語つた。孝標も作者の夫も、地方官になるにはかなりの苦心をした事が日記の中に出て來る。司召で父が何處かに任官するかどうかと思つて心待ちに待つてゐたが、遂に何所にも任官しなかつたことや、父が相當の出世をすればその女である自分も立派になれるのであるがと思つてゐたのに、漸く常陸介になつた淋しさが書かれたりしてゐる。夫の任官にも一通りの關心ではなかつた。『枕草子』には獵官運動の素破抜や任官漏れの家の淋しさなどを同情を以て書いてある。孝標女が富士川傳說をきいて强く印象に殘つたのは、單に面白さうな話だつたからではなく、司召に對しては人一倍關心を持たされねばならなかつたために、特に注意が惹かれたものと思ふ。傳說は單に傳說としてではなく、それを誌さねばならなかつた理由が現實的に存するものと思ふ。この意味で富士川傳說は孝標女とは離れる事の出來ない傳說であつたと考へられる。

4

孝標女の物語を求める一つの表れとして傳說のあるのと同じ樣な意味に考へられてよいのが夢である。『更級日記』に表れてゐる樣な夢が如何なる變遷をとつてこゝまでこぎつけて來たかは別として『更級日記』程多くの夢を記してゐるものは少い。主なるものをかぞへて見ても、

法華經五の卷を疾く習へといふ夢。
天照御神を念じませといふ夢。
病氣臥床中の姉の見た猫の夢。
青き織物の衣の僧が行先のあはれならむも知らずと言つた夢。
僧の見た孝標女の悲喜の相の現れた夢。
丈六佛の夢。
中堂より御かう賜はりぬといふ夢。
山邊の寺にての夢。
稻荷より賜はるしるしの杉の夢。

阿彌陀佛來迎の夢。

是等の夢は皆その內容を具體的に示して居り、そして殆んど凡てが孝標女から離れる事の出來ない內容を具へてゐる。往々其意味の不分明のものもあるが、大體に於て一つのまとまつた形を具へてゐるのが是等の夢である。そして『蜻蛉日記』にて道綱母が夢に對してとつた樣な懷疑的な態度は認められない。初こそ夢が何だといふ樣な所が見うけられるが、後にはそれを後悔する樣になつてゐる。

初瀨にて前のたび稻荷よりたまふしるしの杉よとて投げ出でられしを、出でしまゝに稻荷に詣でたらましかばかゝらずやあらまし。年ごろ天照御神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御乳母して、內わたりにあり、みかど、きさきの御陰にかくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかど、その事は一つかなはでやみぬ。たゞ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心うし。（康保初年）

この樣に夢といふものを信じなかつた自分に强い反省をしてゐる。初の頃は物語で心が一杯になつてゐて、從つて若々しい心には未來といふものが美しくかゞやいてゐた。實生活の中に何等かつかまり所のあるものがあつた。夢などを信用しなくても、夢の中になど生きなくてもよかつた。現實を確實に認識した時に物語の世界は實在の世界ではないといふ事が分り、現實生活の足場が

亂れはじめた。現實生活の基礎がゆらぐと共に、過去に於て捨てゝゐたものが甦り、當時の一般的傾向と合流して宗教に夢に心が移されて行つた。夢をさへ信用しなければ生きられない程現實生活に破綻が來た。具體的內容を持つた夢は一つの物語的取扱ひが可能であり―殊に猫の夢の如き―そこに又作者の心理的な發展が悲觀的に餘儀なくされた。ロマンス追求のみに夢が終始すべきものではなく、夢をさへ信じねば生きられない程の實生活の分解、不安が結論されねばならないと思ふ。

『更級日記』に表れて來る夢の中で最も面白いのは―甚だ主觀的な詞ではあるが―作者の姉の見た猫の夢である。夢のみではさう面白くもないがその背景になつてゐる經驗が大切である。五月頃の或夜のこと、物語を讀んでゐると何處からか一匹の猫が來たので、姉と二人で人に秘めて飼つてゐた。猫も大變二人になついたがその內に姉が病氣になつたので十分愛してやる事も出來ないでゐた。すると姉の夢にこの猫が現れて、自分は侍從の大納言殿の亡き姬の生れ代つたものである。あなたの妹君とは生前親しくしてゐた緣でこゝにゐるのであるがこの頃餘りかまつてくれないので大變に佗しい、と言つた。この夢以後二人は猫を大切に取扱つたが、翌年火事のあつた時に燒死してしまつた。姉もお產から亡くなつてしまつた。平安時代に猫が愛玩動物であつた事は

『源氏物語』や『枕草子』にも見えてゐる。孝標女が暗記するほど耽讀した『源氏物語』の猫の事についても一寸述べたい。女三宮が柏木の不義の子を生むそも〳〵の初は猫といふものゝ運命の戯れであつた。猫が簾から飛び出し、その隙より柏木は女三宮の美しい姿を見て、病みつきとなつてしまつたのであるのみならず、柏木が女三宮を犯した時の夢に猫が現れて、女三宮が柏木の胤を宿した事を暗示してゐる。『更級日記』作者の姉はお産で死んだ。『源氏物語』を愛讀したことから考へて、若干の連想があつたものかとも思ふ。

5

孝標女には初期に於ては浪漫的の所があつたけれ共、『更級日記』といふ作品から言ふならば、決して浪漫的の作品ではない。浪漫的といふのは知らない世界に何かを要求し、その要求がかなへられると思ふ樣な心持であつて、初期の物語追求は即ち之である。作者の姉が十三夜の月明き夜中の頃、空をつく〴〵と眺めてゐたが、ふと、

ただ今ゆくへなく飛びうせなばいかが思ふべき。(治安二年)

と言つたとあるが、これなどは所謂浪漫的な心持の具體的表現である。平安時代の人が赫夜姫に

月を憧憬させたのも、かういふ心持の一つの表れであると見てよい。『更級日記』といふ作品が全體的に浪漫的であると解してならないのは、後になつて現實を認識して居り、その現實の上から過去を見てゐるからである。一生一度の見物だといふ大嘗會の御禊を見捨てゝ物詣に出掛けたのは決してこの心持から出たものとは言へない。夕顔や浮舟を理想的な女と考へてゐた若い時代の記事にも、過去の浪漫的の自己を批判的に見てゐるほどその態度が已に浪漫的ではないのである。現實にぶつかつた後にこそこの批判が出るのである。過去の自己の心持を最も否定してはならない時にかくの如く否定してゐる程この日記の立場は現實的なのである。

物語に對したと同樣の事が宗敎に對する態度にも言へると思ふ。初は宗敎に對して何等の魅力も感じなかつた。

この頃の世の人は十七八よりこそ經よみ、おこなひもすれ。さること思ひかけられず。(萬壽年間)

只々物語々々で日を送つてゐた。當時の祈禱的佛教は當初に於て物語を見たい一少女をして藥師佛に祈らしめた。父が常陸介になつて下つて行つた後には、

「たひらかにあひみせ給へ。」と申すは、佛もあはれと聞き入れさせたまひけむかし。(長元五年)

と言つてゐる。孝標女は阿彌陀佛來迎の夢を非常によろこび、賴みにしてゐたらしいが、果して最

後に宗教に救はれたであらうか否かは疑問の餘地がある。この作品は尼なる人との歌の贈答で終つてゐるが、佗しい晩年の生活心境から考へて、結局本當の宗教にはふれられなかつたものではなからうか。出家したのかどうかも分らない。佛教といふものが本當に宗教的に考へられる様になつたのは、何によつても人々の心が靜まらなくなる平安時代後期のことで、孝標女などはその踏石の一つの具體的表出であるかも知れない。その文藝觀が作中の人物に感傷的な憧憬をもつ位のものであり、物語と現實とが一致するものでない事に氣がついて、それを否定するが如き程度のものであつたと同じ様に、宗教に對しても多分その域を脱しなかつたものと推定せられ、從つて宗教に對して眞に敬虔に歸依の心を持つまでには至らなかつたものと思はれる。『更級日記』に表れてゐる物詣の記事の中で代表的のものは永承元年の初瀬詣である。十月二十五日大嘗會の御禊だと言つて田舍からも續々と見物に出掛けて來るといふのに、

物見て何にかはせむ、かゝる折に詣でむ志を、さりともおぼしなむ。必ず佛の御しるしを見む。(永承元年)

と言つて出掛けた。外に日がないのでもないし、今日出かけるとは、と言つて嘲る人もあつたがかまはずに行つた。物詣の目的が宗教にある事無論であるが、その宗教觀には相當考へるべき點があるのであるから、物詣の目的が宗教そのものゝみにあるかどうかは大體うかゞひ知られる。こ

の時の詞によつても知られる様に、相當功利的であつた事が否めない。物詣の記事が途中の事から參詣の事までを書いて居り、殊に行き歸りの記事の細かい興味のあることによつて、單に宗教的雰圍氣に包まれようとしたものゝみではなく、旅といふ事に心が惹かれてゐた事が知られる。そして『蜻蛉日記』などに見た現實の慰藉をそこに求めてゐた事が考へられてくるのである。强盜の事などが憎惡の感なく書かれてゐるのもそのためではあるまいか。盜賊などで有名な栗駒山を過ぎ、贄野の池の邊の下司の家にとまつた。釜を盜まれては大變だといふので、その家の者が夜通し起きてゐた事などが見えてゐる。歸り途の事である。奈良坂で盜人の家に泊つた。女主人が怪しい擧動をしてゐた事などを聞かされた。當時の旅行には强盜の心配が非常にあつた。奈良坂の怪しい事は已に知つてゐた。

初瀨には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、關寺こえていとおそろし。鞍馬は、さる山、ゐていでむいと恐ろしや。(長元年中)

かういふ様な危險が隨分と伴つてゐた事であらう。『土佐日記』の海賊の事と共に、當時の世相の具體的な證據として注目すべきものである。京都にあつては藤原氏を中心にして安佚の夢を貪つてゐたが、一歩京都を出ると世情は騷然たるものであつた。平安時代の文藝の中でも、地方との關

係の深い日記などといふものは、かういふ意味でも注意してよいものであると思ふ。

6

孝標女の結婚が何時であつたかははつきりしないが、物語などの世界から次第に現實を見る様になつて來たのも家庭の事におはれたが爲であるらしい。夫との仲に出來た子供の事などによつて全く現實的の人となつたものと思はれる。『蜻蛉日記』の道綱母が一人の子供のために夫兼家に對する態度が變化したやうに。

幼き人々を、いかにもいかにも、我があらむ世に見おく事もがなと、臥し起き思ひなげき……。（天喜五年）

幼き人々が何人であるか分らないが、長男は夫に伴はれてその任國信濃に下つた事がある。亡き夫の思ひ出を多く包んでゐるのがこの子であつた。自分の子供のみでなく、一體に子供好きの女であつたことは、姉の遺兒をよく育んだ事によつて知れる。

孝標女はこの日記の中に相當多くの人を登場させてゐるが、その中で父に對してはかなり色々と述べてゐる。上總から上京する時に父と一緒であつた事は勿論であるが、父が常陸介になつた時には作者は已に二十五歳で一緒には下向しなかつた。その時の悲しさが細々と日記に書き綴ら

れてある。道綱母が父の赴任の時と相通ずる悲しみである。父が任果てゝ歸京した時の嬉しさは大變なものであつたが、父はこれ限りで引退を決意してしまつた。そして父の花々しい出世の夢も見事打ちひしがれてしまつた。實母は已に出家して居る關係上、一家の事が娘の上に否應なしにのしかゝつて來た。「父はただ、我をおとなにしすゑて」しまつたのである。母といふ人は父に比較してこの中に出て來る事は少い。只一緒に清水にこもつた事があつたのと、作者のために初瀬に鏡を奉らせた事がある許りである。「いみじかりしこだいの人」であつて、早くより佛教に歸依してゐたものらしく、物語にあこがれてゐた娘の切な心も、或は母によつて左右されたものかも知れない。「こしのびの森」の事などによつても知れる樣に、母よりは父の方が親しい人であつたらう。孝標女が實母と同じ親しみをもつてゐたのは繼母である。父と一緒に上總に行つた時にも繼母はついて行つた。物語に興味をおぼえさせる端著をひらいたのはこの繼母であつた。繼母は後に孝標と別れて宮仕をした。姉の死を悼んでくれ、花咲く折には來るよと言つて別れたのも繼母であつて、所謂繼母らしくない繼母で、或は母よりも親しい人であつたかも知れない。

以上の外で親しかつたのは乳母である。乳母はやはり一緒に上總に行つたらしく、上京の途中で出產してゐる。この乳母からは離れ難い心がついてゐた。後に亡くなつたが、花咲き花散る度

毎にその亡くなつた事を思ひ出すと言つてゐる。かういふ樣に孝標女には親しい人々が割合に多くあり誰にでも愛せられる樣な人であつたらしい。そのために物語などにも單純に耽つたのであらう。文藝といふものに對する態度も單純に環境に左右されてゆく性格の人だつた事を反映してゐる樣に思はれる。交つて居れば居る程その人の盡きない或物を人に與へるといふ樣な人ではなかつたと思ふ。引退した父と出家した母のあとを受けて、家を切りもりする樣になつたのも、環境に順應させられてゆく人であつた事を示してゐる。嫌々乍らも孝標女が宮仕などする氣になつたのもかういふ性質であつたからである。根本的理由は經濟にあつたのであらうが。

こだいの親は、宮仕人はいとうきことなりと思ひて過ごさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さても自づからよきためしもあり。さても試みよ。」といふ人々ありて、しぶしぶに出だしたてらる。(長暦三年)

今時の女で宮仕をしない樣な者は一人前の女でない樣に言つたのが清少納言であつた。然し浮舟や夕顏を理想にした孝標女には宮仕の花やかさは魅力がなかつた。かういふ事に積極的でない所に、明日に生きる人でなく、昨日に思ひふける退嬰的の人である事が示されてゐる。一つには東國育ちの田舍者であるといふ引目も手傳つたものか。とにかく宮仕の孝標女はおど〳〵した世間不見の田舍娘である。衣服の事を記する事の少いこの作品の中で、宮仕に行く時の自分の着物の事

を書いてゐるのは、はじめて町に行く田舍娘が晴着をきた喜びにも似てゐる。さて宮仕をして見ても田舍育ちゆゑうまくゆく筈がない。思はれるのは自分の家の事のみ。孝標女の家がどんなものであつたか。宮仕當時の家ではないが、姉の死んだ頃、その遺兒と共に住んでゐた家は「あれたる板屋のひまより月のもり來て」幼兒の顔にあたつたといふ程度の家であつた。最初奉伺の時は直に歸宅したが、二度目の時は十日許り居て歸つた。父母は炭櫃に火などおこして待つてゐた。年越か正月に藪入りで父母の許に歸つて來る女中などの事が想像せられる。望んだ宮仕ではなかつたのでひつきりなしに伺候はしなかつた。

から立ち出でぬとならば、さても宮仕の方にも立ち馴れ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし。親たちもいと心えず、ほどもなくこめすゑつ。さりとてその有樣の、たちまちにきらきらしき勢などあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすずろ心にても、ことの外にたがひぬる有樣なりかし。(長暦三年)

宮仕にしろ、主婦代りにしろ、環境のまゝになり、さうさせられゝばさうなつてゆかねばならなかつたのが孝標女であつた。そこに又誰にでも親しみを持たれ、又持てる性格があつたものであると思はれる。

孝標女は自分が田舍育ちの女であるといふ事を自ら認めてはゐたが、丸つきりの田舍者であるとは思つてゐなかつたらう。父が其子を京に殘して常陸に赴く時にも、田舍に連れて行つて田舍人にしてしまひたくないと思つたので、京に止めておいたのである。初瀨詣をした時、田舍より物見にやつて來る人々を皮肉の目で見てゐる中に孝標女の京都の文化人らしい立場の若干が示されてゐる。然し決してそれを誇つた人ではなかつた。そのために自分が女であり乍ら遊女などにも同情が持てたのであると思ふ。上京の途次、月もなく眞暗闇の足柄山に泊つた夜、三人の遊女が出て來た。器量よく、然るべき人の召使などにしてもよい様な女であつた。いゝ聲で歌をうたひ、やがて暗い山の中にはひつて行つた。それを人々と一緒に悲しく見送つたのであつた。野上といふ所に來た時、やはり遊女達が出て來て一夜歌を唄つたので、足柄の時が思ひ出されて哀れに戀しかつた。是等は陸の遊女であるが、後に和泉に下つた時の事である。高濱といふ所に泊つた夜、大變に暗いのに夜がずつと更けてから舟の楫の音が聞えた。何だか尋ねて見ると遊女がやつて來たのであつた。人々は面白がつてその舟を此方にこぎつけさせた。ぼんやりした燈火のもとで、單衣の袖を長やかに着て、扇で顏をかくし乍ら歌をうたつてゐる樣子はひどく可憐に見えた。是等の遊女に對する作者の心持は和やかで、女同志の間に往々見る皮肉が見られない。

『更級日記』の中では和歌が割合に重要な地位を占めてゐない。その歌も、贈答歌もあるが、又自分一人で詠んだといふ形のものが相當に多い。これは『更級日記』が『蜻蛉日記』の樣に主人公が二人でないからであり、『土佐日記』の貫之の樣に、孝標女が歌人でないからである。何處までも作者一人を中心にしてゐるからかういふ結果になつたのである。そして作者の書かうとする事が必ずしも歌を必要としなかつたからである。

7

この日記の文章は全體から言つて賞讃に値するものかどうか分らない。もろこしが原にやまと撫子が咲いたなどといふ『土佐日記』的の洒落もあるが、惣じてねりきらない文章と言はねばならないかと思ふ。最も文章のいゝ惡いはその文章の背景になつてゐる、文字を裏付けてゐる作者にある事は勿論である。『更級日記』を讀んでしまつて何となく物足りない樣な感じを少しでも抱かせるのは、孝標女の觀念形態が深いものでない上に、それが讀者に何物かを殘させる表現を十分にとつてゐないからである。何となく、こくのない文藝だといふ樣な氣がされるのである。『更級日記』は田舍育ちの、相當經濟的には苦しい家庭の女の、物語によつて誘發された夢多い青春の憧憬

が現實生活によつて次第に破れて行くといふ、單純な文學少女の幻滅を描いたものに過ぎない。家系によると代々學者が出てゐて、その方面の血は承けてゐたであらうが、文藝作品としてのこの日記が、『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『紫式部日記』以上のものでない事は言ひ得ようと思ふ。幻滅から何程かの甦生をしようとする順序は分るが、その間に『蜻蛉日記』に見る樣なすぐれた心理が描かれてゐない。描かうとはしてゐたであらうが、それを描き得なかつた事にかなりの缺陷があるのではなからうか。かういふと『更級日記』は實につまらない作品の樣になつてしまふが、田舍女であつた自分の夢が段々に破れて行くことを、老後にもそれを是認する態度で書き足して行つた所に、平凡な觀念形態を平凡なものとして描いてゐる所に一つの特色があるとも言へよう。この日記の心理的變化は『蜻蛉日記』のそれよりも深みはないが、發展的のもので、『源氏物語』のそれに似てゐるものを持つてゐる。月並の觀念形態が餘りにうき上つたものでないのは、この作品の著作が晩年であると想像されるからで、その晩年から過去を全く否定しきらないで振り返つてゐるからである。それに取材が幾分思想的のものだから、描寫の不備の所を幾分補つてゐるのではないかと思ふ。少女時代の感傷的な戀愛などをこの手で書かれなくてよかつたかも知れない。同一作者の手に成ると言はれる、『濱松中納言物語』などを讀むと、この點が幾分分る樣な氣がする。と

にかく『更級日記』に示された孝標女の心理的推移、又は文藝的雰圍氣が讀む者に鋭く迫つて來ないのは惜しむべきである。これは愛すべき作品である。

第五　讃岐典侍日記

1

『讃岐典侍日記』は讃岐典侍が乳母として堀河帝及び鳥羽帝に奉仕した事を記してゐる。就中堀河帝の崩御に際して親しくお仕へしたことが詳しく誌されてゐる（一一〇七－一一〇八）。この日記が讃岐典侍（生歿未詳）の著作である事はこの日記や『今鏡』などによつて考へられるのであるが、その閲歷は殆んど分つてゐないし、作品としてもこの日記以外勅撰集に僅かの歌があるのみである。この作品の名稱は讃岐典侍の書いた日記といふ所から生じてゐるのであらう。成立時期は明瞭ではないが、極大體から言つて、堀河帝崩御の後、幾何か經つて後に思ひ出して、日記全體を引きつゞいて誌したものであらうと推定せられる。

2

讃岐典侍は堀河帝が崩御になつてから再び宮仕をし、鳥羽帝に奉仕したのであるが、事每に思ひ

出すのは先帝の事であつた。鳥羽帝に奉仕する樣になつてからも中心點は常に自分が乳母として御面倒申上げた先帝の事にあつた。子供の養育に母の當るのは當然のことであるが、その當然の事が當然の事とされてゐなかつた。平安時代に乳母といふものがかなり大きな存在であつた事の理由は色々あるであらう。『讃岐典侍日記』には讃岐典侍をはじめとして幾人かの乳母が出て來るが、母といふものゝ存在が語られて居ない。乳母の書いたものであるから削除したのであるとも考へられない事はない。然し『更級日記』の孝標女が、母と同程度に、又は其以上に乳母に關心を持つてゐた事によつても推察出來る樣に、この當時に於ては、母と子との距離が相當に大きい例が多かつたと考へてもよい。從つてそれに反比例して乳母と子供との關係が深められてゆく事になると思ふ。即ちこの場合には堀河帝と讃岐典侍とは君臣の關係であると共に、親子らしい關係でもあるのである。『讃岐典侍日記』の後半では、殊に故帝の思ひ出にのみ耽り勝ちであつたのも、かういふ點が根本的に存在したからである。そこに單に主人を失つた悲しみ以上の悲しみが出て來るのである。讃岐典侍の歎きの一通りでないのはその爲である。そしてそこにこそこの作品がものせられねばならなかつた理由があつたのである。亡き主を悼む言葉以上の深刻な言葉が綴られねばならなかつたのである。

今この作品の冒頭にある序文ともいふべき部分を見るに、

五月の空もくもらはしく、田子の裳裾もほし侘ぶらむと、ことわりも見え、さらぬだに、物むづかしき比しも、心のどかなる里居に、つねよりも昔今のことおもひ續けられて、物あはれなれば、はしを見出して見れば、雲のたゞずまひ、空の氣色、思ひ知り顏に、村雲がちなるを見るにも、雲居の空といひけむ人も、ことわり見えて、かきくらさるゝ心地ぞする。軒のあやめの雫にことならず、山郭公も、もろともに音をうち語ひて、はかなく明くる夏の夜なく〱過ぎもて、石の上ふりにし昔の事を思ひ出でられて、涙とゞまらず。思ひ出づれば、我が君に仕ふまつる事、春の花、秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪の朝、御ともに待ひて、もろともに八年の春秋、つかうまつりし程、常はめでたき御事おほく、あしたの御行、夕の御笛の音わすれ難きに、慰むやとしいづる事ども、書きつゞくれば、筆のたちども見えず、霧りふたがりて、硯の水に涙落添ひて、水莖の跡もながれあふ心地して、涙ぞいとゞ增るやうに、書きなどせむにまぎれなどやするとて、書きたる事なれば、姨捨山に慰めかねられて、堪へがたくぞ。

これによつてこの作品が追憶的のものであることが分る。思ひ出して書くといふ所に自分が主になつてゐるが、書かれてゐる內容から言ふならば、決して自分の事が主であるとは言へない。自分が思ひ出して書いてゐるのだから、自分が中心であるには異ひなからうが、內容する所のものは堀

河帝であつて作者ではない。このどちらか一方を缺いてもこの日記は成立しないのだから二人が中心であるに違ひない。形の上からは、作者が主であるが内容は堀河帝が主である。『紫式部日記』に於て紫式部といふ人の存在は微々たるものである樣に見受けられた所があつたが、それとは反對に、この作品は自分の回想であるといふ如くであり乍ら、作者の根本的對象は自分にはなくして堀河帝にあるのである。紫式部は他處の事を書き乍ら自分といふものを明白に示さうとしてゐるのに對し、讃岐典侍は自分といふものを通して堀河帝の御事を細々と書き誌してゐるのである。

3

『讃岐典侍日記』の中心的存在は作者である樣に見えるが實は堀河帝である。鳥羽帝に奉仕する樣になつてからも鳥羽帝を通じて堀河帝の御事を記すといふ樣になつてゐる。何かきつかけがゐると直にそれが先帝と結びついてしまふ。或時鳥羽帝のお相手をして居た時の事、「抱いて障子の繪を見せて、」と言はれたので、朝餉の障子の繪などを御覽に入れてゐる内に、夜の御寢の壁に先帝のお好みになつた笛の譜があつた。不圖昔を思ひ出して悲しく、つひ涙が出て袖を顏におしあてた。それを帝が不思議相に御覽になるので、おしらせしまいと思つて、何氣ない樣な樣子で欠伸を

して、「まあこんな風に涙が出ました。」と申し上げると、「皆知つてゐるんだよ。」と仰せになるので何といふことなしに悉くなつて、「どんな風に御存じなのですか。」と申上げると、「ほ文字のり、文字(堀)の事を思ひ出したんだらう！」とおつしやつた。私が堀河帝の御事を思ひ出して泣いたのだとよく御存じになつてゐるのだと思ふと、ほゝゑまれた。自分で書いてゐる事ではあるが、これなどによつても如何に堀河帝を忘れる事が出來なかつたかゞ分る。堀河帝の御病氣が何であつたのか知らないが、何でもひどく身體がはれたものらしい。崩御になる二日程前には一層ひどく、はかばかしく耳も聞えないといふ有樣であつた。帝は崩御の前に受戒せられた。その時御冠など持つて來たのでやうやうの事に頭に押し入れて、御直衣をひき掛け、御紐をさゝうとお思ひになつたのであらう。さゝうとなさるのであるが、御手がひどく腫れてゐるのでよく出來ない。これを見てゐる悲しい心持、目もうるんでよくも見えない。堀河帝は遂に崩御になつた。當時の治療法といふものが、加持や祈禱をしたり、護摩をたいたりする位のものであつたから、精神的に治る病氣ならとにかく、重態になれば大抵治らなかつたらう。僧正などが「頭より黒煙を立てゝ祈」つても氣休め位にしかならなかつたらうと思ふ。この時は立派な僧が澤山に一心にやつたので遂に物の怪が現れた。物の怪が現れ、それが調伏させられたからと言つて、かほどの重病は仲々治り難かつた

であらう。萬策つきて遂に堀河帝は崩御になつた。

4

讃岐典侍は故帝を偲ぶ一つの形として古人の詠歌をとり出してゐる。帝の喪があけて段々に普通の衣服になつて來る。かの僧正遍昭が深草帝に後れ奉つた時、法師になつて一生をすごしたが、人々が皆喪服をぬぐのを見て、

みな人は花のたもとになりぬなり苔の衣よかわきだにせよ

と詠んだといふ事を引いてゐるし、又御春有輔が、

君が植ゑし一叢すすき蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな

と詠んだのを出し、その背景を自分に見出さうとしてゐる。或晦の夜のこと、宮中に參上するとき堀河院の傍を過ぎるに、二條の大路・堀河などひつそりとしてゐて、騷しさうに人の出入した樣な樣子も見えない。ぢつとあたりが見まわされて、

ぬしなしと答ふる人もなけれども宿のけしきぞいふにまされる

といふ故事さへ思ひ出された。これ等の歌が其場合々々にうまく適用されてゐるとは言へない。

歌につられてあてはまる場合をつくつた樣に感じられる點がないでもない。一體この作品の中には歌は割合に少い。數にして二十餘首。その中には前記の樣な讃岐典侍以外の人の作も含まれてゐる。そしてその歌も悉くがすぐれてゐるとは思はれない。當然自分の歌があつてもよい樣な場合に人の歌を借りて來てゐる。借りて來ねばならない程作者自身に創作力がなかつたと解釋するのは氣の毒であらうか。二十餘首の内にはかういふ故人の歌もあれば、他の人の詠んだのもある。この作品が歌を中心にしたものでない事は無論であるが、時と場合によつてもう少しいゝ歌がほしかつた。『紫式部日記』なども歌は少いけれ共、この作品よりは其取扱ひなり、歌そのものなりが良い。結局は二作家の腕の差といふ事になるのであらう。

この作品に歌の少いといふ事は、同時に贈答歌の少いといふ事になる。贈答歌は歌の對話であると見る事が出來る。贈答歌と對話を同一と見てしまふ事は出來ないが、この日記に對話のある事は注目しておいてよいと思ふ。それだけ自己一點張りで押し通さうとしないで、包含力を大きくしてゐるからである。主觀といふものを直接的にぶつゝけないで、自己以外のものも豐かに取入れようとしてゐる所があるからである。この作の目的が堀河帝崩御に關する自己のものだけを書かうとしたものでなく、故帝を偲び奉る空氣を出さうとしたものであるから、何も自分一人に限

る事はなかつた。そこに對話などといふものが相當澤山に取入れられ得るのであるが、そのために、或は作者の存在性の曖昧になつてゐる樣な箇所がないとも言へない。かういふわけだから、この作と割合に似てゐる『紫式部日記』などとも、その目的の上にかなりの距離があつたと思ふ。

『紫式部日記』の著述目的は明白に示されてはゐない。この作品が堀河帝の事を書いてゐるとは言つても、客觀的立場にあつて書いてゐるのではない。主觀的立場になければ思ひ出などといふ事はない筈である。『紫式部日記』などに比較すると、一つの事實なり回想なりがしつかりと作者に裏付けられてゐるといふ點の反映が少い樣に思ふ。從つて『讃岐典侍日記』の作者の性格といふ樣なものが割合に淡然として居る樣な結果になつてゐる。故帝の事を忘れかねた忠實な乳母であつた事は分るけれ共、それ以上深い事は幾何も分らない。それに心理的な發展なり變化なりが、これ程の作品であるならばもつと明白に出てゐてもよいのであるし、又心理解剖ももつと鋭くされてもよいのであるが、事實といふ事に力を注いだのかどうか、比較的平坦な迫力のない作品となつてしまつてゐる。作者といふものが端的に示されてゐる所を一二あげて見ると、

寢入らせ給へる御顏をまもらへ參らせて、泣くより外のことぞなき。いとから何しに馴れ仕うまつりけむとくやしく覺ゆ。

我にもあらぬ心地しながら上りしこそ、我れながら目暮れて覺えしか。手をかけさする眞似して、かみあげより帳さしつ。我が身出でずともありぬべかりける事の樣かなとかくし置きたる事にかと覺ゆ。

讃岐典侍が何故に自己といふものを一つの事實の中に盛り上げる事が出來なかつたかは力の足なかつた事によるは勿論であるが、又そこに多くの力を入れなかつたのにもよるのである。堀河帝を思ひ出しさへすればそれでよかつたのである。が思ひ出も自分一人のものではなく、第三の何ものかゞ豫想せられてゐた事が所々に見える詞で推察される。

5

『讃岐典侍日記』の著作目的が如何なるものであつたかは前述の通りであつて、その最もよく、且意識的に示されてゐるのが序文らしきものである。然し是等のもの以外にもこの作品の著作動機が伺はれる。その最も顯著なものは讃岐典侍がこれを書く時に、この作品をよむ人を考へてゐたらしい事である。尤も序文めいたものを書く事に已にさういふ意識が若干働いてゐた事は見逃せない。序文ともいふべき所を除いた所にも、かういふ態度が少からず現れてゐる。例へば、

おびたゞしさは、推し量るべし。

まゐりし夜より今日までの事おもひつゞくる心地、たゞ推し量るべし。

うつゝにけさ〳〵と見る心地、唯おし量るべし。

是等は讀む人をして私の心持を推量して貰ひたいといふ意味であらうと思ふ。若し讃岐典侍が全く讀者といふものを考慮に入れてゐなかつたならば、かういふ文章は如何解釋すべきものであらうか。更に、

有樣おなじ事なればとゞめつ。

大嘗會の事書かずとも思ひやるべし。皆人知りたる事なれば、細に書かず。

などを見ると、作者が讀者を考へてゐた事は疑ひがない。この作品が故帝への追憶の情を十分にもつてゐ乍ら、大膽にそれを出せなかつたのは、こんな所にも理由があるのではなからうか。同じ藝術の內で、繪畫について、「繪かく身ならましかば、露たがへず書きて、人にも見せまほしかりしかど、」と書いてゐることは、同時に文藝にも、この作品にもあてはまる事ではなからうか。

『讃岐典侍日記』の描かうとしたものが、どこまでも自分と堀河帝の事であり、或は堀河帝の事であつて、其外は勢ひ客觀的のものとなつた。祈禱の時の僧は誰と誰とであつたとか、御神樂の時の配役はどうであつたとかいふ樣な類である。登場人物は多いのであるが、僅かの人々を除いては

只名前をそろへてゐるだけで、文字となつてゐるだけで、生きた存在とはなつてゐない。この點なども『紫式部日記』には及ばないと思ふ。人物の性格などは勿論のこと、登場人物が人間として動いてゐない。只事務的に報告されてゐるといふ樣な形になつてゐる。作者の最も力を入れて書いた堀河帝は決して單なる客觀的存在ではない。作者を通して生きてゐる。例へば、

御前に、金椀に氷のおほらかに入りたるを、御覽じて、「あれ見れば、心地のさわやかに覺ゆる。氷の大きならむ、提子に入れて、人ども集めて食はせて見む。」

と仰せられたので御意に從つた。そして帝も一つおとりになつた。これは中間的に小康を得られた時の事であつて、病む者の儚い、子供らしい欲望が具體的に說明なしに示されてゐる。鳥羽帝が「ほ文字のり文字の事を思ひ出したんだらう。」と仰せられたあたりなどもこの日記の中では一寸面白い記事である。又同帝がこん〳〵と降る雪を御覽になつて童謠をうたはれた所などもあげておいてよいと思ふ。或朝早く起きて見ると雪が大變降つてゐる。色々と故帝の御事を思ひ出してゐた時、「降れ〳〵粉雪、」とがんぜない御樣子にておうたひになつてゐるのが聞えた。「こは誰ぞ、誰が子にか、と思ふほどに、誠にさぞかし思ふに淺ましく、これを主と打ちたのみ參らせて侍はむずるか、と賴もしげなきぞ哀なる。」と作者は感想をもらしてゐる。

以上二三の例は別にたくらんだ所のある文章ではないが、作者は文章に對して相當に苦心をしてゐる。文章をねつたあとの見える所は認めてやらねばならないが、又多くの無駄の努力をしてゐると見える樣な所も少くないのではなからうか。一體日記の文章などは率直でたくまない所にいゝ所がある。粗雜な文章にそれだけの味はひを含んでゐるのである。讃岐典侍は讀者といふものに對して相當の注目をはらつてゐたから、勢ひ文章といふ樣なものに引きづられたのではなからうか。技巧といふ樣なものが出て來たのは、主にそんな所が理由であるかも知れない。序文と見られる文章がかなり苦心したものである事は、「石の上ふりにし昔の事」が思ひ出されるとか、奉仕した八年を述べるのに春夏秋冬を出し、朝の御行、夕の音樂など、又「硯の水に涙落添ひて、水莖の跡もながれ合ふ心地」がするとかいふ樣な所にも見られる。相當苦心してゐるには相違ないが、何だか平坦で物足らなく、妙に潤ひのない文章である。『蜻蛉日記』にも序文の樣な一節があつた。それとこれとを比較して見ると、二つの間にどれだけの差があるかゞ分ると思ふ。勿論二つの作品の間には時間的に百二三十年の距離があり、その間には『源氏物語』や『枕草子』の樣な作品があるのである。『蜻蛉日記』の率直さにくらべると、この方は何だか實情といふものが移つて來ない樣な氣がする。これは何も、この日記のこの部分にのみ限つた事ではない。「藻にすむ蟲のわれか

らとのみ世にありて、かゝる目も見ること悲しけれど、」とあるなどもその一例である。かういふ事が何もこの作品にはじまつた事ではないが、日記にまでかういふ事がしみ込んで來てゐるのである。苦心した甲斐もなく―無意識に出たとされ得るかどうか―結局實感の件はない不利を結果してゐる。技巧的な例として一つあげて見ると、

伊勢御神も、守りはぐくみ奉らせ給ふらむ、と位保たせ給はむ年の數そひ、末は長井の浦のはるぐ〵と、濱の眞砂のかずも盡きぬべく、みもすそ川のながれ．いよ〳〵久しく、位の山の年經させ給はむ。誠に白玉椿八千世に千世を添ふる春秋まで、四方の海の浪の音しづかに見えたり。

『讃岐典侍日記』がその内容の上から他の日記と異つてゐる所があると同じく、その文章もそれに應じたゞけの變化が出來て來た。技巧といふものがねられねばならなくなつたのは或は當然である。後の作品ではあるが『東關紀行』といふ樣なものゝ文章がひどく技巧にからんだものである一つの過程がこの日記などに見られるのであるのかも知れない。

6

『讃岐典侍日記』は作者讃岐典侍といふ乳母を通じて堀河帝の御事を書かうとしてゐるものでは

あるが、作者が文藝的に本當に自己のものとなつてゐない堀河帝を描いてゐるので、作者と對象との間には可分性が認められる。その可分性がこの作品をして訴へて來るものを少くさせてゐるのである。作者が悲しいと書けば讀者は悲しいといふ言葉は知る事が出來るが悲しいといふアトモスフィアを味ふ事は出來ない。言葉に作者の呼吸が通じてゐなければ、只言葉のみが移つて來て實情が迫つて來ない。この作品の力のない點はかういふ樣な所にあるのではないかと思ふ。言葉の背後に、又は其中に作者と不可分のものゝ存する限りその言葉は生きて我々に迫つて來る。結局この日記に現れてゐる作者自身が、この作品の中で言葉と共に生きてゐない事がこの作品を傑作としなかつた所以であると思ふ。書いてゐる作者に何となく隙のある樣な氣がするのである。渾然と盛り上つて來る何等かの雰圍氣が割合に稀薄なのは、この作品に生き〳〵した力がないからで、もう一と呼吸といふ所で挫けてしまつた樣に思はれる。然しこの作品は全く失敗した作品だとは思へない。

讃岐典侍はこの作品を文藝的立場に立つて書いてゐるのであるが、只他の日記に比較して必要な丈引き下げられねばならないと思ふ。全體に創作力の鈍りつゝあつたこの時代に於て、以前から存在した日記といふ形式をとつて書いたのであるから、他作品と同樣に不活潑なものも見ねば

ならないのである。それが自然に一人物を通して自己を語るといふ態度ではなく、自己を通して他を語るといふ、言はゞ歴史物語的な傾向をとらねばならなかつたのであると思ふ。從つて從來この日記が歴史的資料としてのみ扱はれて來たのは尤ものことである。單に讃岐典侍の事のみが中心で、自己のことのみを描いてゐるならば、今迄の樣な研究態度に於ける所謂歴史の材料にはならないのであるが、この作品によつて堀河帝なり、鳥羽帝なりの事が歸納されて來るから歴史の資料になるのである。『讃岐典侍日記』を文藝作品として見直さうとしはじめたのは最近のことであるらしいが、これが歴史の材料に取扱はれたのには、それだけの理由が存在した事をまづ知らねばならない。むしろ歴史の材料にされてゐたといふ事をヒントにしてこの作品を文藝として見てよいのであると思ふ。歴史の材料とされる程の一般性がこの中に描き出されてゐることがこの作品を見る一つの鍵であると思ふ。この日記に取扱はれてゐる歴史的事實も、極めて部分的のものであるが、又この作品が他の日記にくらべても其視野が非常に限定的のものである事が分る。宮中生活以外のものは殆んど誌されず、從つて內容の進展にも限られた變化しかつける事が出來ず、讀んで行つてかなり退屈を感ぜさせるのは一つの缺點でもあり、又讃岐典侍の樣な立場の人としては當り前の事でもあつたのである。この日記によつて知り得るものは元氣のない宮廷生活であり

そして只それのみである。當時存在し得たもつと大きな面は全く觸れられないでしまつてゐる。『紫式部日記』にもさういふ所はないでもなかつた。然しあれに於ては當時の生きた生活が見られた。宮廷生活を通して可能的に其以外のものを演繹する事が出來得る。そこには渾然とした紫式部の觀念形態の表現があつたからである。讃岐典侍には自己の觀念形態がある筈であり、表現されて然るべきであつたのだが、十分にそれをなし得なかつた所にこの作品を力のないものとしてしまつた。單なる思ひ出の悲しみに止つてしまつて、それ以上人に迫る表現といふものにまで進み得なかつたのである。文學史的にこの日記の意義は、文藝作品であり乍ら、歴史の材料に取扱はれ勝ちであつたといふ事實によつても認めて然るべきであると考へられる。

第六　和泉式部物語

一

『和泉式部物語』はある女―和泉式部（生歿未詳）が帥宮敦道親王（九八一―一〇〇七）と戀を語りはじめ、それが成立して遂に宮の邸に引きとられ、そのために宮の北の方は居たゝまれず里に歸る事を描いてゐる（一〇〇三―一〇〇四）。この作品には二つの名稱―『和泉式部物語』（古寫本・刊本・『扶桑拾葉集』）と『和泉式部日記』（『本朝書籍目錄』・『群書一覽』・『群書類從』）とがある。どちらが原名であるのか不明であるが、何れにしても和泉式部を主人公にした作品といふ意味であると思ふ。この作品が何時書かれたのであるかは分らない。和泉式部が敦道親王と戀を語つたのは淸少納言や紫式部のゐた頃の事である。此事件の描かれる樣になつたのは、多分事件後若干の時間の經過した時であると考へてよいから、平安時代の中期から後期にかけての作品ではないかと考へられる。今の所この作品の成立事情を明白にするだけの材料がないから、かういふ推定のみに止めておく事にする。

2

『和泉式部物語』の著作態度は日記と言はれる他の作品に比較するとかなり大きな差異がある。他の日記と言はれるものは殆んど凡て作中の人物―主人公即ち日記の著者で、其主人公の目から見た記事のみをのせてゐるのであるが、『和泉式部物語』には、主人公の觀點に對するさういふ統一が缺けてゐる。主人公である和泉式部の目から見た世界のみが描かれてゐない。例へば、

日頃のおこなひに苦しうて、うちまどろみたる程に、門たゝくを聞き咎むる人もなし。聞し召す事もあれば、人などのあるにやと思し召して、やをら歸らせ給ひぬ。

帥宮が式部を尋ねて來たが戸をあけなかつたのでかへつてしまつたといふだけの事であるが、「聞き咎むる人もなし。」までは式部の立場として書いてゐるとされるが、「聞し召す事もあれば、」と相手帥宮の方が主となり、その次には宮の心を推量した言葉が見えてゐる。宮が全くの客觀的存在であつて、自己といふ主觀の立場が示されてゐない。即ち前半の主人公は式部であり、後半の主人公は帥宮である。書いてゐる人はこのどちらの立場の人でもない。式部の所に宮が來て只歸つた事をもう一つ例にとつて見ると、

又の夜おはしましたりけるを、此方には聞かず。かた〴〵に人の住む所なりければ、其方に人の來りたる車を御覽じて、「人の侍るにこそ。車は侍り。」と聞ゆれば、「よし歸りなむ。」とておはしましぬ。

帥宮が來て、何か理由があつて歸つた事位は式部にも分る筈であるが、お伴の者が、「誰か別に好い人でも來てゐる樣です。車がありますから。」と言ふと、「ぢや歸らう。」と言つて歸つたなどといふ事が、事實として通常式部に分る筈がない。尤も誰かお伴と宮との話をきいて、それを式部に話しでもすればであるけれ共、此處はさうまで詮索の必要はない。若しこの作品が式部の手に成るものとすれば、實際の經驗のみではなく式部の想像によつて創作した部分があると見ねばならない。和泉式部の立場から言へば知り得ない事が筒拔けになつてゐる。かういふ例がこの作品中に相當に多く見うけられる。主人公である和泉式部が第三人稱の形になつて現れて來てゐる上に、又その第三人稱が客觀的に見てゐる人物が存在する。然しそれが間接的描寫となつてゐないで、直接の經驗の形で示されてゐる。少し繁雜ではあるが、かういふ場合の例をもう二つ三つあげておきたいと思ふ。

ひすまし童して、「右近のぞうに、さし取らせて來ね。」とてやる。宮は、御前に人人して物語しておはします程なりけり。人罷出などして入らせ給ふに、右近のぞうさし出でたれば、「例の車に裝束せさせよ。」とて、おはし

ます。女、端にながめて居たる程に、……。

使に文を持たせてやつた。丁度宮はこれ〳〵であつた。女が端にながめてゐる程に宮がやつて來られた。童・右近のぞう・宮・女・是等の人々を扱つてゐるのは果して女の位置にあるものだらうか。宮が尋ねて來る迄の事情を手にとる樣に見すかしてゐる。又和泉式部の所には源少將や兵部卿が通ふといふ噂のあるといふ記事の所も、決して式部の實際の經驗を基礎にしたものではなからう。

九月十餘日ばかりの有明の月に、御目さまして、いみじく久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかしとおぼせば、例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたゝかせたまふに、目を覺まして、よろづを思ひつつ臥したるほどなりけり。

これなども單なる想像にしては餘りに實が入りすぎてゐる。以上幾つかの例に示した樣に、式部の立場から先方の帥宮の事がはつきりと見えてゐるのである。宮がやつて來た事を書くにしても來る以前の事はよく分らないから、來てから以後の事を詳しく書くといふのが日記といふ形式から言つて當然である。然しこの作品では主人公の目のとゞかない事が單なる想像としてゞはなく實在性又は經驗性をもつて書かれてゐる。日記の主人公が第三人稱の形で現れる例はあるが、そ

の第三人稱は常に第一人稱の代辨である。今『和泉式部物語』のこの第三人稱を假に第一人稱として考へて見ても、相手の男の行動のみならず、或行動を起す心持まで把握する事は出來ない。從つて相當の矛盾があるものと思ふ。以上の樣な人物の記し方に示されてゐる矛盾乃至非妥當性の解決はどんな工合に考へればよいのであらうか。多分『和泉式部物語』は和泉式部以外の人が和泉式部になつたつもりで著したものではなからうかと思はれる。主人公の第三人稱である事もかういふ解釋によつてより可能性妥當性があるわけである。和泉式部が作品の中で第三人稱であると同時に、他の凡ての人物も作者から言へば第三人稱であるわけである。從つて帥宮の事情に如何程の描寫が加へられやうとも差支へはないのである。和泉式部になつた心算でゐる作者が、事實和泉式部ではないのであるから、從つて不知不識の間にその立場を離れて、相手の帥宮の方にまで描寫が及んで行つたものと考へるのが妥當である。作者の態度がかういふものであつたがために本人が書くよりも傍系的の事件の織込みが少くなつたのだとも考へられる。當人が筆をとつたのであつたならば、この作品が歌の羅列に終始しなかつたかも知れない。この作品が歌を中心にしたもので、その筋は極單純なものである點からも、この作の著作者が主人公―和泉式部自身でない事が想像せられて良い。實際の所和泉式部の樣な奔放な歌人が散文的のものを書くには餘程落付か

なくては書けるものではなからう。『和泉式部集』位が精々の所ではなからうか。この作品が『和泉式部集』と關係のある事は否定する事の出來ない事實である。一例を示して見ると、

和泉式部集

つく〴〵となげく氣色を御覽じて、

なほざりのあらましごとによもすがらおつる
涙は雨とこそふれ

とのたまはすれば、こゝろぼそきことのたまはせつるを心みだれて、

うつゝにて思へばいはんかたもなし今宵のこ
とを夢になさばや

和泉式部物語

いとかなしくて、物もきこえでつく〴〵となげくけしきを御覽じて、

なをざりのあらましごとに夜もすがら

との給はすれば、

おつるなみだは雨とこそふれ

御氣色例よりもうかひたる事どもの給はせて、明ぬればおはしましぬ。何の賴もしげなき事なれどつれ〴〵も慰めに思ひたちつることをさらばいかにせましなど思ひ亂れて聞ゆ。

現にて思へばいはんかたもなし今宵のことを
夢になさばや

これによつても『和泉式部物語』の材料は『和泉式部集』が提供してゐるのではないかと想像せられる。從つてこの作品の持つ內容と、『和泉式部集』及び『和泉式部物語』との關係などの上から考へて、この作品は和泉式部になりすました或人が、和泉式部を第三人稱として描いたものであることが推定せられてよいわけである。

3

ある女―和泉式部は以前帥宮の兄宮の戀人であつたが、その宮の薨後、徒然である內に以前兄宮に仕へ、今は帥宮に仕へてゐる童の手引によつて帥宮と關係するといふ事になつた。女と帥宮との歌の贈答が中心になつて筋が動いて行き、地の說明的な文章よりも、歌の方が大きな要素となつてこの一篇の日記乃至物語を形作つてゐる。『蜻蛉日記』などは戀の成立するまでの過程は極めて簡單に記してゐるが、『和泉式部物語』は反對に戀の成立までを主に描いてゐて、成立以後の事は殆んどふれてゐない。それは、この作品が歌を中心にしたものであつて、歌は戀しはじめて二人が一緖になるまでにこそ最も多く交されるのであつて、完全に夫婦になつてしまつた仲や、歸のはひつた二人の仲には少い事は當り前である。この作品が戀の成立期を描き、且その形が歌中心である

事は當り前の事である。この作品の中の人物は主人公の二人―和泉式部と帥宮の外は、二人の仲に立つ小舍人童や右近や乳母などの人々が若干ある許りで、女の別の戀人も登場してゐない。即ちこの作品の人物は外の日記に比較すると著しく少いといふ特色があり、式部と帥宮以外には人物はないと言つても過言ではない。從つてこの作品は變化に乏しく、一律的に歌の贈答が二人の間に行はれて進行してゆく物語である。

この頃の戀は多く乳母とか女房とかの手引でもつて結ばれるのが通常である。この場合には和泉式部の以前の戀人の所の小舍人童がその役をつとめてゐる。四月の或夕暮の程に其童が帥宮の戀文を持つて來て式部に示した。これで二人の戀の糸口はついた。以後はこの童が兩方の戀のお使ひをした。戀のお使ひは此童であるが、帥宮の戀のお伴をして種々策動したらしい人がゐる。それは、

すべて〳〵よからぬことは、この右近のぞう某がはじむるなり。故宮も、これこそはゐてありき奉りしか。

と乳母ににらまれてゐる右近である。この人は宮が式部を尋ねはじめる時にお伴をした人でもあり、又帥宮の兄君が式部に通つた時にも、お供仰せつけられた者である事もこの作品によつて知る事が出來る。當時の人々の戀がどんなに本能的に强いものであつても、自由に外出の出來ない生

活にはめこまれてゐる以上、かういふ媒介的、中間的存在を必要とした。從つてもしかういふ種類の人々がゐなくなつたとしたら、當然彼等の關係も解消に近くなるのである。式部が石山に行つた時、京都の帥宮と式部との連絡に當つたのは例の童であつた。二人の痴話の中では生死の境を彷徨した童であつた。

和泉式部と帥宮との戀が如何にして結ばれ、二人は何故に戀し合つたかを見ると、當時の一女流歌人と貴公子との戀愛といふに不止、平安時代に於ける戀愛の一般的根本的要因の一つを見る事が出來ると思ふ。この作品が戀の成立までの經緯を割合に細かに誌しゐるから尙更さういふ事が見易いわけである。式部の所にはじめて宮の手紙がとゞいた時、式部は故宮をなくして哀れに物思ひに耽つてゐた時であつた。戀の相手をなくしてしまつて、何となく心に滿されない淋しさをもつてゐる時であつた。そこに亡き戀人に仕へてゐた童が亡き戀人の弟宮の文をもつて來た。

かく屢々のたまはするに、御返しもときぐ\聞ゆ。又つれぐ\も少し慰む心地してある程に、又御文あり。

これによつて式部の方で宮に戀する樣になつた動機の主なるものが徒然を慰めるためであつた事が分る。徒然を慰めるためにとらへたのが宮であつた。が一方宮の方でも、餘り外出がちの所から乳母に忠告された時の返事を見ると、

何方か往かむ、徒然なれば、はかなきすさび事などするにこそあれ。ことノヽしう人のいふべきにもあらず。

と言つてゐる事によつて、同じく戀愛の動因が徒然にもある事が示されてゐる。二人の戀は、現實の生活を定める上から戀をせずには居られないから成立したのであるとも見得よう。止むにやまれぬ戀ではない。戀をしてはじめて知る徒然の佗しさではなく徒然を醫やすための戀である。二人は共に戀の前科者である。故宮に對する式部の戀がどれ程强かつたのか明かでないが、故宮に關係する以前式部は已に道貞と結婚した事があるのだから、相當烈しかつたものと思はれる。帥宮に北の方のある事がこの作にも見えてゐるから、少くとも戀の經驗者ではある。この二人は共に滿されない現實の徒然から結ばれた。二人の戀がかういふ動機から成立した事は、又一方から考へて、かういふ戀を成立させる客觀的情勢が當代一般的にあつたからに外ならない。卽ち平安時代の人々にかういふ戀を求める程生活を徒然にしたものは、生々とした生活力の失はれた、衰へ行く不安と、頽廢した文化を飽滿しつくしたあとの、求めるものゝない佗しさである。生新な創造に富んだ文化を享受し、又はそれに積極的に參加してゐる、明日の生活に何等かの期待をかけてゐる生活からは、徒然といふものは出て來ない。何程かの美しい希望のもとに最初の異性と關係したであらう二人の男女は、その生活を現實的に否定せずには居られない時、求めるものゝなくなつ

た時、徒然といふ佗しさが出て來る。夫婦生活の不滿を味つた男と女がお互に滿されない徒然を醫やすために戀する樣になつた。然しその間にどれ程の眞劍味があつたであらうか。帥宮は多分式部よりは年下であつたであらう。そしてこの年下の男からもちかけたといふ形になつてゐるのがこの戀である。帥宮は乳母に向つてあゝいふ返事をしてはゐるが、戀に對しては式部の方が遙かに古强者であつたと思はれる。はじめは徒然の慰めにと遊戯的にした戀が、次第に年下の男の情にほだされて女の方でも段々に眞劍になつて來たものと思はれる。そして亡き戀人の一周忌も過ぎない内に、その弟宮と關係する樣になつた身に對しての自省が起つた。故宮があんなにおつしやつたものを、この身は一體どうしたのだらう、と思ひ亂れてゐる所へいつもの童が來た。あるだらうと思つた文がない。何てまあ好色な私なんだらう。式部は自省しねばならない程已に帥宮とは離れがたくなつてゐた。こゝに見える和泉式部は、完全に帥宮の戀のとりこになつてゐる式部である。

哀れにはかなく賴む人もあらず。斯樣のはかなしごとにて、世の中を慰めてあるも、うち思へば淺ましう。

世の徒然への慰めにもと思つた戀は案外慰めにもならず、深みにはまればはまるだけ、それは苦しいものであつた。遊戯的な戀愛ならば初から賴まないのだから「賴む人」といふ事はないわけで

ある。頼む人があつたからこそこの言葉が出たのである。戀も遂には世の徒然を慰めてはくれない。では宗教は。戀に見切をつけて、「徒然慰めむとて、石山に詣」でたことが前の文につゞいて出て來る。

式部が宗教に對して如何なる程度の認識をもつてゐたかは分らないが、この作品によつて見ると、出家を願ふ程の誠意はもつてゐなかつたのではなからうか。和泉式部は「物へ參らんとて精進などしたるに、いと間遠なる、御志のなきなめりかしと、情なからじとばかりにこそはと見れば、殊にものなども聞えで、佛にことづけ」て明し暮した。精進などしても宗教的な心持はなく、只それは生活に一つの變化を與へるものに過ぎず、中心が戀愛の事にあるのは事實である。あるものは詣でゝ二三日許り在つて歸つたといふ簡單な經過報告のみである。石山に詣でた折の記事も、特に宗教に對しての敬虔の念は示されてゐない。

佛の御前にはあらで、故鄕のみ戀しくて、かゝるありきもひきかへたる身の有樣と思ふに、いと物悲しうて、まめやかに佛を念じ奉りてある程に、…………。

帥宮の戀のお使ひが來たといふのである。この文は意味の明瞭を缺く所もあるが、「まめやかに佛を念じ」てゐたのにすぐにお使ひの方に心が傾いた。式部にとつて物詣や精進は、そのものに宗教

的な魅力を感ずるのではなくして、不滿な生活の空氣を一寸かへるための手段に過ぎない。現實の結婚生活に多大の不滿をもつて物詣を頻りにした『蜻蛉日記』の道綱母には宗教的な空氣に對する魅力はもつてゐた。言はゞ同じ現實逃避でもそれだけ眞面目であつた。式部の心持の方がより享樂的で頽廢的であつた。現實生活に對して不滿乍らも何程かの力を見ようとした。より積極的であつた。以上は『和泉式部物語』に示されてゐる和泉式部であつて、或は部分的の觀察によつて得た結論であるかも知れないが、この作品に現れてゐる限りの和泉式部はかういふ女であつたと考へられる。

4

和泉式部には帥宮以外にも多くの戀人があつたらしい。今この作品より帥宮の兄宮以外の人を一二抄出して見ると、

好事する人々は數多あれど、只今はともかくも思はぬを、世の人は樣々いふべかめれど、身のあらばこそとのみ思ひてすぐす。

すき事どもする人々のもとより、棚機彥星などいふ事どもあまた見ゆれど、目もたゝず。

この外源少將、兵部卿なども實際に關係してゐた人々であつたらう。かういふ人々をさしおいて、只管帥宮との戀の事を思つてゐた。和泉式部の一生の中で、自分から最も心をこめた、從つて惱みも多かつた戀は、多分帥宮との關係であつたらう。『榮花物語』などによると、帥宮も丁度式部の樣に色好みの人であつたらしい。當時の典型的とも言ふべき好色の男女が奇しくも心がとけ合つたので、それがかういふ作品となつたのであらう。

戀愛に成功した式部も家庭の人としての生活に失敗したであらう事は想像出來る。この作品の中にも家庭に關した記事は殆んどない。僅かに、

近くてだに、親はらからの御有樣も見聞えむ。又ほだしのやうなる人々の上も見定めむと、思ひ立ちにたればあいなし。

位の事がある許りである。これによつて和泉式部には親兄弟があり、又自分にも子供があつたことが察せられる。この子供の一人は道貞との間に出來た小式部であつたらう。して見ると道貞とは離緣したが、子供は育て乍ら帥宮と戀に耽つてゐた事になる。式部がも少し家庭的の人であつたならば、道貞と別れなかつたかも知れないし、若し別れたとしても子供への愛を只管守りつゞけたであらう。『蜻蛉日記』の道綱母や『更級日記』の孝標女の樣に。さうしない所に和泉式部の本當

の姿があると思ふ。徒然に堪へられなくて享樂的になつた式部であつたからこそ歌人として完成する事が出來得たのであらう。自分に關係ある人が遠方に行くので歌をやりたいから一つ代作をしてくれないかと帥宮に賴まれたのも尤ものことである。式部が當代の優れた歌人であつた事は『和泉式部集』が最もよく之をしてゐてくれる。その頃已に評判の歌人であつたことは、『紫式部日記』の批評によつても知る事が出來る。

和泉式部といふ人こそ、面白う書き交しける。されど、和泉はけしからぬ方こそあれ。うちとけて文走り書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと、ものおぼえ、歌のことわり、まことのうたよみざまにこそ侍らざめれ。口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの目とまる詠み添へ侍り。それだに人の詠みたらん歌なん、ことわりゐたらんは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるゝなめりとぞ、見えたるすぢに侍るかし。恥づかしげの歌よみやとは覺え侍らず。

（紫式部日記）

5

『和泉式部物語』が和泉式部自身によつて著はされたものではなくても、和泉式部時代より遙かに後

の人の作とは思はれないから、この作品に現れてゐる觀念形態は依然として平安時代のそれである事と考へられる。式部の出生などに關しては不明の點が多いが、とにかく餘り上流の人であつたとは思はれない。この作品を見ると、侍從の乳母が帥宮に忠告する所で、式部といふ女は別に身分のよいといふのでもないし、それに好色で有名な女ですよ、と言つてゐる。身分のちがふのは勿論であるが、このちがつた身分の、然も年上の子持ちの女を家に引き入れる程熱烈な戀であつたから、宮は乳母の言ふ事などをきく筈がない。式部は宮の所に行つてからこの身上故にかなり肩身のせまい思ひをした。

何の高き人にもあらず。

式部は宮の邸に行くのを澁つてゐた。それは或はこの身上故であつたかも知れない。とにかく名義だけは召使といふ事で宮の邸に行つたのであつた。

平安時代は藤原氏を中心にして固定した時代であつた。固定した時代と言ふ事は、一面から見るならば色々の方面で整備された時代といふことでもある。從つて身分云々といふ事などは發達してゐたものと見てよく、この作品に現れてゐる事は、當時としては最も普通の事であつたと思ふ。和泉式部の地位などに比較して見ると、案外勢力のあつたのは乳母であつて、侍從の乳母が

帥宮に忠告する態度は、決して皇子といふに多くとらはれない、徹底したものであつた。乳母の實力の反面には母といふものゝ實質的存在理由のない事を示してゐる。

よし北の方はおはすれど、たゞこと御方にて、御乳母こそは萬の事すなれ。

平安時代の上流の人々は育兒といふ事をさけて、それを特別の專門の人—乳母にゆだねてゐた。之は一面上流の人々の生活をらくにさせるものであると共に、又一面には當時の早婚と衞生思想や設備の普及しない狀況にあつて、出產といふ事が如何に大問題であつたことかを暗示してゐると思ふ『紫式部日記』に誌されてゐる出產前後の仰々しさを見ればこの事はうなづけると思ふ。

6

『和泉式部物語』を創作者の立場から考へて見ると、前述の如く、どうも和泉式部自身の作ではないらしく思はれる。この作品の中に歌が多いことゝ、その多くが贈答歌といふ形をとつてゐる所に、その創作者の態度の何物かゞ存するのである。歌を中心にして、其つなぎ目をこしらへる爲に地の文がはひり込んでゐるといふ形で材料さへあれば最も簡單に出來る作品の形である。この作品が全體として和泉式部と帥宮との歌の贈答より成つて居り、筋の單純さと同時に、『蜻蛉日記』に

見た様なあの鋭い心理解剖はなく、迫力のないものである。一つ〳〵の歌は別問題として、一つのまとまつた作品として見る時、必ずしも生氣のみなぎつてゐる文字のみであるとは言へない。『和泉式部物語』は物語としての筋の發展にも乏しく變化もない。作者に關して已に相當の疑問が附せられてゐるのであるから、之が決定しない内は、之を日記として他の日記と同樣の取扱ひを受けるべきものではない。然し作者が誰であるにしても大して成功した作品とする事は出來ない。歌人としての和泉式部の力に幻惑させられてはならないと思ふ。この作品の價値を決定するものは其中にある歌のみではない。むしろ歌以外の文字―歌と歌との間にある融合的な雰圍氣の表現にある。歌は日記乃至物語を構成する一つの要素ではあるけれ共、歌は決して日記でも、物語でもない。この作品を見る時には歌以外の文字も見ねばならない。歌に價値があらうとも、それによつてこの作品の價値が決定的に左右されねばならないとは限らない。

この作品の主人公である和泉式部は、客觀的にも、主觀的にも鋭い存在とはなつて居らず、時に不分明をさへもたらしてゐる。それはこの作品の作者が主人公自身でないことを暗示してゐる。主人公が作中で積極的存在性を有し得なくなつてゐるからである。そこにこの作の意圖を不明瞭なものとし、從つて人に迫つて來る何物かを十分に把握せしめないのであると思ふ。二人の戀愛

が苦しいものなら苦しい様に、樂しいものなら樂しい様に、當然人に迫つて來る何程かの力がなければならないのに、全體を通じて散慢な感じを抱かせ勝ちである。結局作者の和泉式部になりおほせなかつた不徹底な結果とも見られよう。又若しこの作品が和泉式部の自作とするならば、歌には得意の才をもつてゐたのに、散文には甚だ拙かつたと言はざるを得ない。何れにしてもこの作品が、古來日記と物語と兩様の名稱を附せられて來てゐるだけの本質をもつてゐるが故に、文學史的には相當高く評價されるとしても、これを一つの作品として文藝的地位を高く評價する事は出來難い。作品として見る時、或は『和泉式部集』の方が文藝的に優れてゐると言はねばならないのではなからうか。

第七　參考作品

一　庵主

『庵主（いほぬし）』といふ名稱はどうしてついたのかよく分らないが、この作品の中に「我身の罪をもほろぼさむとある人（すイ）ありけり。いほぬしとぞいひける。」とあるに因んだものである事は明かである。『庵主』は又『增基法師集』とも言はれてゐる。この作品は二つの部分から成つてゐる。『扶桑拾葉集』によると、『庵主』なる名稱はなくて、『熊野紀行』と『遠江の道記』の異つた二つの部分より成つてゐるが、『群書類從』所收の『庵主』によると、『遠江の道記』を「とをたあふみの日記」と記してゐる。この作品の著者が誰であるか確證はないけれ共、作中に見える歌と勅撰集の歌との比較や、二三の記錄によつて、大體庵主―增基法師の作であると考へられる。增基法師の經歷を明かにする事は出來ないが、大體紀貫之頃の人であつたらうと思はれる。

いつばかりの事にかありけん。世をのがれて、心のまゝにあらむと思ひて、世中にきゝときく所々、おかしきを尋ねて心をやり、かつはたうとき所々拜みたてまつり、我身の罪をもほろぼさむとある人有けり。

これが『庵主』の書きはじめである。この作品の內容は大凡三つの部分から成つてゐる。最初は庵主とよばれる佛敎的厭世觀を抱く男が、一人で十月の頃京都を出發して熊野に詣でた事が誌され、次にはこの旅から歸つて後の京都での生活が斷片的に書かれてゐる。終りの部分は主人公が明記してないから、果して庵主と同一であるか否かを明かにすることは出來ないが、やはり庵主としておくより外はない。三月の頃の東國への旅―濱名までの記事である。この作品を見てゆくと歌といふものが重要な地位にあり、それが中心をなしてゐるものである事は直に分る。少し長い詞書の樣な地の文があつても、それが多くの場合歌への準備となつてゐる。即ち若干の地の文があつて歌があり、地の文があつて歌がありして、歌でもつて大體一節をなしてゐる。これは比較的長い地の文をもつてゐる最初の『熊野紀行』の所のみではなく、第二、第三の部分にも同一傾向が一層はつきり出てゐる。自然に關した文字の多い事はかういふ作品として當然の事であるが、又中には言葉を遊戲的にした所も見うけられる。

庵主、なにごとにかあらむ、ものうたがひは罪うなりとて、拾ひたる貝を手まさぐりになり遣たればゝ、ものあら

がひぞまさるなる。かうなあらがひ給ひそとて、かうなの殼をなげをこせたり。又浪に藻うかびて打よせらるゝを、かれ見給へ、入ぬるいそのといへば、歸る人、こふる日はと、心有がほにいへば、施主、くまのおのづからといへば、浦のはまゆふといらふる。

言葉といふものに特殊の興味をもたない限り面白くない文字であると思ふ。かういふ言葉の洒落は『土佐日記』にも幾つかあつた。『土佐日記』が歌を中心にしなくてもよかつた事は前に述べておいたが、この作品では歌を除いてしまつたならば、その形は全くくずれてしまふ。『土佐日記』は初めから歌は大して問題にしてゐない。然るにこの作品になると、歌の存在は明白で決定的のものであるために、歌の善惡がこの作品にとつて大切な事になつてくる。從つてこの作品が一に『增基法師集』と言はれる樣に歌集乃至は家集としての取扱ひを受けるべき資質を具へてゐる。發生的意味に於ける日記乃至紀行ではあつても、完成的意味に於ける日記乃至紀行ではない。この作品では土地と歌とを劃一的に記してゐるが、一つ〳〵の歌のよしあしは暫く別として見る時、例へば『更級日記』の上京の記事などと比較して見ても、非常に形式的な退屈さを感ぜさせる。これは後の『十六夜日記』等と共通する所で、『伊勢物語』の所謂「東下り」とも通ふ點があるやうである。

增基法師が熊野に出掛けて行つた動機は初頭の文に示されてゐる通りであるが、もう少し別の

方面から引いて見ると、社々に參つてお祈りするには、

この世はいくばくにもあらず。水の泡草の露よりもはかなし。さきの世の罪を亡して、行末の菩薩をとらんと思ひ侍る心ふかうて、世を厭ふを、思ひをこたらずあらんによりてなり。願はくは吾、春は花を見、秋はもみぢを見るとも、匂ひにふれ色にめでつる心なく、朝の霧夕の月をみるとも、世間のはかなきことを敎へ給へ。

庵主が法師であつたと考へられるから、かういふ佛敎的厭世觀をもつてゐる事は當り前の事であると思はれる。増基法師はかういふ人生觀から漂泊の旅に出たのであるが、旅と言つても歌枕を尋ねてゆく樣なものであり、自然觀の多い事などから、引いては西行などの一つの先驅の樣な形になつてゐるとも言へよう。この法師の佛敎觀が如何なるものかは、その輪廓のみしか知り得ないのであるが、法華八講などの事を記してゐる所でも「そのありさま常ならず。あはれにたふとし。」といふ位の事であとは書いてゐない。法師の書いたものとしては物足らない。御山籠りの樣子などども、決して宗敎的嚴肅さは書いてゐない。

『庵主』の作者が誰であるにしろ、そしてその著作年代が何時であるにしろ―平安時代以後の作とは思へないが―この作品の文學的地位といふものも一應は考へておかねばならないと思ふ。この作品は讀んで行つてぐんぐん惹きつけられる作品ではない。まとまりのない不自然さは所々に

目立つし、旅をするにつれて動く作者の心境なども不分明である。從つて一概に言へば散漫なものになつてしまつてゐる。顯著な所がない。『土佐日記』などには紀貫之といふ人間が生々と示されてゐた。この作品を增基法師自身の作とすれば、人間としての作者がもう少し生きて描かれてもよかつたと思ふ。只あるのみであつて、その基礎といふものがかなり漠然としたものになつてゐる。若し又この作品が增基法師以外の他の人が書いたにした所で、成功した作品であるといふ事が出來るであらうか。この作品などが最近相當に注意されてゐるのは、決して文藝的地位が大きく評價されようとするのみではなく、文學史的地位を得させようとしてゐるのであらうと思ふ。然しそれには增基法師の自作であるといふことが必要になつて來る。何故ならば、多くの優れた日記や紀行の出た後の他人の作であるならば、只日記なり紀行なりが發展してゆく一つの具體的な例にはなるが、文學史的にも要求すべきものは少いと思ふ。この作品の與へられてよい地位といふものは、その作者が誰であるか、從つて著作年代が何時であるかによつて略〻決定せられるのである。作者が庵主即ち增基法師であるならば、『土佐日記』に前後して類似の作品の出た事によつて、文學史的に有價値とせられるのである。『庵主』が文學史的に意義があるといふ事は、直に其文藝的地位を高めるものでない事は言ふまでもない。

二 篁物語

『篁物語』といふ名稱は小野篁を主人公にしてゐる物語といふ意味であつて、篁の書いた物語といふ意味ではなからう。この作品には『篁物語』（彰考館藏本）・『篁日記』（『河海抄』所引）・『小野篁集』（宮内省圖書寮藏本）といふ三種の名稱が傳へられてゐる。この作品の著作者が誰であるかは知る由もない。只内容の上から考へて、篁自身の著でない事だけは推定される。この作品の主人公小野篁（八〇二―八五二）は參議岑守の子で、平安時代初期の代表的詩人である。年少の頃は文事にたしなまなかつたが二十一歳の頃文章生に補せられてから次第に文才をあらはし、『令義解』の撰定にもたづさはつた。後遣唐副使に任ぜられて渡唐しやうとしたが風浪に遮られて果さなかつた。生來人と相容れない篁は、再度渡唐を命ぜられた時大使の專横を憤慨し、病と稱して赴かなかつた。そのため隱岐に流されたが數年にして召還され、遂に參議從三位にまでなつた人である。篁の生存中にこの作品が出來てゐたかどうか、北村季吟は紀氏以前に『篁日記』ありと言つてゐるが、恐らくこの作品の出來たのは平安時代中期、或は其以後であらうと思はれる。

小野篁が異腹の妹に漢文學を敎へてゐる內に戀を語る樣になり、女は遂に身重になつた。親の方ではもと〳〵この娘を內侍にしやうとしてゐたのであるから、篁と戀仲になつてゐるといふ事を知つて二人を裂いた。このため妹は煩悶の餘り亡くなつてしまつた。そして死後も魂は篁を慕つて來た。篁は悲しみの淚を集めて硯の水となし、法華經を寫して供養した。これが『篁物語』の二つの部分の內の最初の部分で、稲荷參詣や兵衞佐の橫戀慕などがからませてある。次の部分はこれと全く關係はなく、小野篁が右大臣に求婚狀を送り、三人の娘の內、末娘を得た事を記し、篁との結婚を拒否した二人の姉娘は結局不幸な結婚をしたとつけ加へてある。この二つの話の中で後の方は量も僅かであるし、物語としてもさう良いものではない。前の部分の方が良い。どちらも篁の事であるのは文中に篁なる語の見える事によつて察せられる。殊に後のは『本朝文粹』所載のものと同一內容をもつてゐるから、事實的要求のもとに書かれたものと思はれる。この作品は大體以上の樣な內容のものであるが相當難讀の作品である。

この物語は日記といふ名稱で『河海抄』に引用せられてゐる。それは第一段の話の所二ヶ所である。卽ち、

しはすのもちころ月のいとあかきに、物語しけるを人みて、たれぞ、あなすさまし、しはすの月夜ともあるかなといひければ、

春をまつ冬のかぎりとおもふにはかの月しもぞあはれなりける

このおとこ涙つきせずなく。その涙をすゞりのみづにて法華經をかきて、ひえの三昧堂にて七日のわざしけり。

女一通りの素養をつみ、更に漢文學を習得させるために、赤の他人よりはよいといふので異腹の兄篁を先生にし、簾越し、几帳を立てゝ勉學してゐたが、元々赤の他人も同様の二人、遂に關係が成立してしまつた。言つて見れば當時の戀愛の成立する一つの型ともいふべきものである。これは篁が三十歳になるかならない時分の事であつたらしい。これにくらべて後の話の求婚の態度は、或は當時としては型破りのものであつたのかも知れない。これを書いた人が篁であらうとなからうと、とにかく興味の中心は、前の所では女の悶死から篁の涙の法華經書寫の事であり、後の所ではこの求婚とそれの成功的結果とであらうと思はれる。何れの場合にも漢文學といふ事がつきまとつてゐる。即ち女の親が娘を内侍にしやうと目論んだために篁に漢文學を教授させたのであり、又篁の求婚の成功も漢文學故であつた事は『本朝文粹』と合せ考へるならば首肯される事である。

第二話は格別の變化も認められないが、第一話は相當の變化がある。その著しいものは稻荷詣での時に兵衛佐に懸想され、果ては尾行までされた事である。このため篁との仲が一寸まづくなつた樣であるが、文章が相當亂れてゐて明白に解せられない所もある。女の姙娠した事を知らせる手段として、夢に關した歌を取り交したあとで、

かく夢のことある人は、はらみにけり。文よむこゝちもなし。れいのさはりせずなど、うたてあるけしきをみて、人かくいふ。このせうともいとをしとみて、春のことにやありけん、ものもくはで、はなかうじたちばなをなむねがひける。

猫の夢によつて女三宮の懷姙を暗示したのは『源氏物語』であるが、こゝでもその事が言はれてゐる。そしてこゝに引いた文によつて、當時の人々の姙娠に對する理解がかなりよく出てゐると思ふ。女は身重のまゝで亡くなつてしまつた。身重で精神が興奮し易くなつてゐる所に相手の男との仲を裂かれたのであるから、悶死する必然性といふものは理解し得るのであるが、この作品はそれ程の分析は勿論やつてゐない。死んだ筈の女は篁と話をし、又歌の贈答をもやつてゐる。どういふわけか、女の葬送は篁と三四人の從者、それに僧一人の簡單な寂しいものであつた。この話の終りは別に敎訓的の所を含んではゐないが、第二話の終りにはそれが出てゐる。篁の求婚の相手

にならなかつた姉二人は、「いとわろき人の妻」になつたのであるが、篁の求婚を心よくうけた末娘は篁の出世と共に出世したといふのである。そしてそのあとにもつてきて、

いまの人まさに大學のせうをむこにとる大しもあらむや。

と書きつけてゐる。大學文章生の社會的地位が下つた後の作であることがこれによつて考へられるが、その時期を確定する事は出來ない。それに同時代人でも大學生觀が異つてゐる事を豫想せねばならないから。

『篁物語』の殆んど全部である初の部分の中で、二人の戀が芽生えて次第に成長し、結局は女の死といふ事になるまでの順序は割合に平面的で表面的であつて、女が何故に死なねばならなかつたかといふ樣な銳い解剖にまで筆が進んでゐない。そこまで充分に筆が行屆いたならば、この作品はもつと深刻なものになつたかも知れないが、その方面は深くほりさげられなかつた。女の悶死の必然性の描かれてゐない點がこの作品の缺點の一つであると思ふ。もつと心理的に突込んで行つて描寫したならばと思ふ。それに物語としての筋の構成上の面白さも平凡である。この作品は篁が經驗を描いたものであるならば、もう少しよくなつたかも知れない。篁の自作でないであらうといふ事は、彼自身が第三人稱の形となつて現れてゐる事によつてその一半が知れる。そして

凡ての事柄が篁の立場からのみ描かれてゐない事が最も決定的の點である。然し篁の作か否かの問題は『篁物語』の藝術的地位に大きな變化を要求するものではないと思ふ。若しこの作品が篁の自作であり、又著作時代が篁に最も近い時代であるならば、文藝的にはともかくも、文學史的に相當の問題を提供する事になる。著作時代が著しく下るとするならば、文學史的に大きな地位を占むべきものではない。只現在考へられてゐる樣に、平安時代の中期又は後期の作品とすれば、創作力の次第に鈍くなつて行く時代の一つの現象の標本として取り上げられねばならないのである。『伊勢物語』的な歌物語であると言へない事はないが、二つの部分の歌の地位についてはかなりの距離が認められねばならない。殊に第二段目の如きは決して歌が中心的存在となつてはゐない。この作品が私家集又は日記といふものとは內容上又は著作態度上から言つてかなりの差異のある事は一見して分ることである。然し一に集又は日記といふ名稱をもつてゐてもよいといふ理由は內容が事實に即したものだからであらう。從つて歷史物語や說話物語が物語であると同じ樣な意味で、篁を中心にした事實を描いてゐるといふ意味で、『篁物語』と言はれるのが最もふさはしいのではなからうかと考へられる。

三　平仲物語

『平仲物語』は平中即ち平貞文のことを書いてあるためにこの名があるものゝ様である。好色の噂の高かつた平貞文(?—九二三)の詳細な經歷は分つてゐない。『大和物語』には、この人についての話が幾つか傳はつてゐる。この作品が彼自身の手に成つたものかどうかについてはかなり疑問がある。主人公以外の何人かの手によつて成立したものらしいが、その著作時期も不明で、平安時代中期又はそれ以後のものらしい事が推定されるのみである。この作品と同一內容をもつものと推察されるものは、『平仲物語』(靜嘉堂文庫藏本)・『平中日記』(『本朝書籍目錄』)・『貞文日記』(『河海抄』所引)である。『平仲物語』は『河海抄』所引の『貞文日記』と同一のものらしく、同書に引用せられてゐる所は、

たちてゆくゆくゐもしらすかくのみをみちのそらにてまとふへらなる。
さたかにはあらすなまほきたる物から、……。
かの文つたへたるは人はもとよりすみしほきたるやうに覺えければ、……。

『平仲物語』は三十數段より成つてゐる長短の話を集めたものであつて、それらは全體一貫した筋といふものを持つてゐない。別々の話が一つ一つとしてまとまつてゐるが、その一つ一つの話には主人公が共通であるであらうといふ以外に共通したものがない。そこにこの作品が『伊勢物語』や『竹取物語』又は『大和物語』などの様な形となつてゐるのである。『伊勢物語』や『竹取物語』は一貫した首尾はとゝのへてゐたが、『大和物語』にはそれがない。共點で最も『大和物語』に近い形をもつてゐる。一段の長短は様々である。短い一例を示すと、

又このおなしをとこ女ともありけり。それきにけり。よふくるまてものかたりなとしてかへりていひたる。

さ夜更けてなけききにしをいつのまにゆめに見えつゝこひしかるらん

かへし、

なけくてふことそことはりおもひせはよはにきてねすかへるましやは

男と女とがあつてこれ〳〵の歌を交したといふだけのものであつて、別に話となる程のものではないが、長い段になると、とにかく一貫した筋をもつた話になつてゐる。そして長いものは短いものゝ様に、必ずしも歌といふものを中心にしてはゐない。中には歌といふものが全く省みられな

い様な形のものもある。短いものは多く歌が中心になつてゐる。ある場合には歌のみで進行して行く様なものもある。さういふある段は『伊勢物語』の様な形となつてゐるが、全體がさういふもののゝみではない事は長い段を見れば明かになる。そこには歌を中心にしない物語的のものゝある事を知る。

この作品と『大和物語』との關係が云々せられるのは、單に素材關係のみではなく、もつと根本的な著作態度に共通のものが見られるのである。然し、この作品には一貫した主人公平仲がある。『大和物語』には一貫した主人公はないが、或場合には同じ主人公の事をまとめて書かうとしてゐる所が見える。『大和物語』に平仲の事が見えてゐる所から特にこの作品との關係が云々せられてくる。二つを讀み合せて見て、その書かれてゐる事が事實の話であるとされてゐる所が共通的で、又注目すべき點でもあると思ふ。この作品の主人公が平仲であることは、この中に、

またこのおなしをとこともたちともあまたものして、ひのくれにけれはかへりくるに、みちのほとにある人のいひける。なもあるものをこゝらきてやたゝにかへらむ。このはなのあかぬにかへることよまむ。けに〱さいはれたり、とてあつまりて、まつへいちう、

はなにあかてなそかへるらむおみなへし多かる野へにねなましものを

とよみけり。いまかたへの人々もよみけり。

とあるのや、最後の段に、

これをのちにへいちうきて女にいひたてまつる。

とあるによつて分る。其他は平仲と明示してないが、全卷殆んど各段と思はれる冒頭に、又この男とか、又この同じ男とかいふ樣に書いてゐる事によつて分ると思ふ。

『平仲物語』と『貞文日記』とを同一のものとして見る時、この作品は物語であり乍ら又日記でもあるのである。この作品を平仲が自ら書いたものでない事は分るが、日記であつて自己の著作でないのは外にも例があるから問題はないにしても、斷片的小話の集成が日記であるといふ事は、『伊勢物語』などにも見る事の出來る樣に、一寸考へると奇異の事である。この作品の中には假空の物語、又は假空らしき物語は殆んど見當らない樣である。好色の噂の高かつた平仲の樣な人には當然あつて然るべきものと思はれるものが殆んど凡てゞある。即ちこの作品の中にあるのは平仲の經驗の客觀的描出であり、好色男の實話である。この事は『大和物語』の平仲に關した部分によつても反證させられるのであると思ふ。即ち一個の人物を終始一貫して主人公にしてゐる實話の集成である所に、一方では日記と言はれ得る理由が存在するのである。『大和物語』が日記と言

はれ得ないのは、主人公が終始一貫してゐないのと、當時の人々には事實として納得出來難いが故に昔話として示した樣な、即ち實話的要素の稀薄なものが混合してゐるからである。この作に最もふさはしい名前はやはり物語である。平仲などと明白に名前を出してゐる所は、かの『篁物語』などと通ずる所であつて、所謂實話的の所がはつきりと示されてゐるわけである。

『篁物語』とか、この物語とかゞ製作年代を明白にしてゐないでも、旺盛な創作力の充滿してゐた時代の產物と考へる事は出來ない。平安時代末期の文藝の表現形式として說話物語や歷史物語が一般的傾向となつた、その一つの先驅的、又は傍證的現れであると思はれる。『平仲物語』が文藝的に如何程の價値があるかについてはよくは分らないが、大體『大和物語』にいたく勝るものでないい事は確かであらう。『平仲物語』の硏究は今後に殘された一つの問題ではあるが、その重要な價値は、文學史的で、その創作時代の如何によつて決定されるのではなからうか。『篁物語』が現存のものので完全であるか否かは知る由もないが、篁を主人公にした小話が二つであるのに比較して、『平仲物語』の方はとにかく平仲を主人公にして長短三十數節の話を集めてゐる。多分兩方共に所謂歌物語の範疇にはひるものであらうとは考へられるが、凡ての段が必ずしも歌を中心にしてゐない事も二つの共通點である。この二作品は殆んど同傾向のものであつて、只一方が零細の作品で

あるといふに過ぎない。尤も『平仲物語』の方が讀んで分り易いが。そして共に說明的な平面的な手法をもつて書かれてあつて、讀んで强い迫力が感ぜられない。『平仲物語』は其創作年次が決定せられるならば、或は文學史的に相當の地位を要求して然るべき作品であらう。が作品として文藝的にどれ程の地位が與へられて然るべきかは、今後に殘された大切な問題であると思ふ。

四 多武峰少將物語

『多武峰少將物語』は多武峰少將即ち藤原高光の事を記した作品であつて、其著作者が主人公自身でないことは其內容の上から大體考へられてよい事であるから、名稱も他の人がつけたものであらう。この作品には、『多武峰少將物語』(『群書類從』)・『高光日記』(『河海抄』・『仁和寺目錄』)の樣な別の名前が傳へられてゐる。是等の名稱の作品が全く同一內容のものであるかどうかについて確證はないのであるが現存の『多武峰少將物語』と『高光日記』とは異つたものではないかとも思ふ。又『榮花物語』の中に、

これは物語につくりて、世にあるやうにぞ聞ゆめる。哀れなる事には、この事をぞ世にはいふ。(榮花物語)

とあつて、この作品の存在を消極的に示してゐる。それと共に『榮花物語』の記事によつてこの作品の著作成立時期を決定するわけであるが、『榮花物語』の成立事情が確定してゐないために、この作品のそれを決定する事も出來ないわけである。只漠然と平安時代中期以後としか言へない。主人公藤原高光（？―九九四）は師輔の子で、『蜻蛉日記』作者の夫兼家の弟に當る人である。應和元年に出家し、翌年多武峰に移つて草庵を結んだ。多武峰少將と稱せられるのはこのためである。文藝にはかなり豐かな天分を持つてゐた人の樣である。

『多武峰少將物語』は高光が出家して横川にこもつた以後の事を書いてゐる。長篇の堂々たる作品ではなく、それに作者が高光自身でないらしいので、一層この作品の内容に對する興味が殺がれる。この作品は大體が歌を中心にしてゐる。勿論必ずしもさうとは限らない場合もあるけれ共、この作品より歌を除いてしまつた場合を考へるならば、歌の重要性が分るであらう。そしてその歌も主人公と思はれる高光の歌が必ずしも最も多く示されてゐるのではなく、高光に關係のある人々の歌がかなり重要な地位を占めてゐる。從つて登場人物の動きから言ふならば、高光が中心であるには違ひないが、それはかなり浮遊的存在となつてゐて、實際的には高光の存在が相當漠然

としたものである事は否めない。即ち出家後の高光の事は當然横川に舞臺が移つて然るべきであるのに、舞臺は依然として高光邸を中心にしてゐる。これによつても高光の存在が客觀的である事が分る。凡てのものを高光自身の目を通して見るのではなく、大體は他の目を通して高光が見られるといふ形になつてゐる。

本よりかゝる御心ありけれど、ちゝおとゞおはしけるほどは、せいし聞え給ひければ、えおぼしたゝざりけれど、うせ給ひて後、はら〳〵の君だちは、みな、ころおはしませば、おとゞおはしまさねども、殊にものしき事もなし。………只この事のみ御心にいそがれ給ひつゝ、いで給ふたびごとには、女君にほうしになりに、山へまかるぞと聞え給ひければ、れいの事と、たはぶれにおぼしてなむ聞え給ひける。

この作品の初の文であるこれによつて見ても、高光は客觀的に取扱はれてゐる。それに文中高光に對して敬稱を用ゐてゐる事などから考へて、高光を尊敬してゐた人の作であらうと想像せられる。高光を第三人稱にしてゐるのみではなくその上に何等かの意圖が存在するものらしい。こゝに記されてゐる事が假空のものでなく、かなり信用すべき史實を背景にしてゐる事は、當時の記錄類と合致する所が多い點によつて考へられてよい。『榮花物語』に問題とされてゐるのはこの點から考へて當然のことであると言ひ得、又或は『榮花物語』の材料の一部がこの作品によつて提供せ

られてゐないとも限らないのである。

『多武峰少將物語』によつては高光の出家の原因が明白に示されてゐない。以前から出家の意志を持つてゐたが、父の生前には思ひ止つてゐたといふ書き出しである。出家の志をもつといふ事は、その客觀的情勢を除いては、極めて主觀的の事である。他の人の心を忖度して書いた作品としては、出家の必然が書かれないのは當然かも知れない。思ふに母の死、父の死、村上帝の崩御などが打ちつゞいたために、世の中を儚く考へて出家したものであらう。出家後の高光室の事がこの作品ではかなり重要な地位を占めてゐる。高光の性格其他はそんなにはつきりと具體的には泛び上つて來ないが、高光室の方は或程度までに描かれてゐる。その室も高光出家の理由を知つてゐたかどうか。高光女は父を戀ひて、

かの入道の君の御子は、太刀はきたまへる人を見給ひては、てゝ君かとの給ふに、あらずとの給へば、母君こそてゝきにはあらず。などか、てゝきのひさしく見えざらむ、……。

となくと、母高光室もよゝと泣いて、頭などなで乍ら、「お父さまは比叡山においでです、」といふ。この母が高光出家の後の苦しみは相當のものであつたらしく、

此ひめぎみ身をやなげてましとおぼせど、きむだちのおはしければ、われなくては、いかゞせむとおぼして、山

に出え給ふ。世をのがれだになくは、いかゞせむとおもふに、すこし露の命をもとめいづる。

かうして夫高光の所へ長歌をおくつてゐる。それに對して返事があつた。二人の子を思ふ心は察せられるが、遂に高光は下山せず、後多武峰に草庵を結んでしまふ。

『多武峰少將物語』と最もよく似た作品は『和泉式部物語』であらう。兩方共に歌といふものがかなり重要な役目を果してゐるし、その主人公といふものが第三人稱の形となつて表れて來てゐる。この作品の如き著作態度の作品が連續的に長いものとなる時、或は歴史物語の様なものになるのであるかも知れない。『和泉式部物語』に登場人物が少いのに比較すると、この作品には遙かに多い。それは二つの著作態度に相違があるからに外ならない。がこの點から言ふと『和泉式部物語』の方は所謂歌物語的の所があるわけであるし、この方は歴史物語的になるわけである。そして共に事實といふ事が基礎になつてゐるのである。この作の出たのは少くともこの事件以後の事であるから、作品でいふと大體『蜻蛉日記』以後のものとなる。その時代の文藝の傾向が如何なるものであつたかは、やがて歴史物語や說話物語が一つの代表的表現形式になつてくることによつて分明であると思ふ。初期又は中期の創造的な力が、段々に藤原氏を中心とする文化の衰微につれて失はれ、文藝の素材も創作に求めるよりは從來あるものゝ整理に向ひつゝあつた時である。その

大きな成果が歴史物語であり、說話物語であるが、さういふ傾向の一つの形として出現したのが『多武峰少將物語』の樣な實話的な作品となつたのではあるまいか。この作品が平面的な說明的な筆致であるために、高光出家以後の周圍の空氣の描寫に深刻味が乏しく、文藝的に十分成功したと言はるべき作品ではないと思ふが、文學史的には當時の文藝の傾向を示してゐる作品として相當の意義を發見すべきであらうと考へられる。從つて多くのこれに類似した傾向の作品が持つのと同じ樣に、高い文藝的地位が占められるべき作品ではなく、この樣な作品が現はれねばならなかつた平安時代中期以後の文藝の動向を指示してゐる一つの大きな流れの中の一つの現象を表してゐるものとして、文學史的地位が與へられて然るべきものではないかと思ふ。

五　成尋阿闍梨母集

『成尋阿闍梨母集』は成尋阿闍梨の母が書いた家集である。成尋阿闍梨の傳記も、その母の傳記も、この集以外に分つてゐる事は極めて僅かである。成尋阿闍梨は姓が藤原氏といふだけで詳細は不明である。寛弘長和の頃生れ、密敎を受け、延久四年渡宋し、天台に登り、五臺に遊び、汴京に

入り、太平興國寺の傳法院に館した。翌年大旱あり、神宗の勅を奉じて祈雨の密法を修し、大いに雨ふり、ために善慧大師の號を賜はり、宋に於て寂した。成尋阿闍梨の母の傳記に關する事は勅撰集にのつてゐる我子渡宋の別れを悲しむ歌がある許りで詳しい事は更に分つてゐない。從つてこの作品の成立時期も、『千載集』・『新勅撰集』以下所收の十首許りの歌が、この作品を出所としてゐるらしい事から、平安時代末期の作であるといふ事が考へられるのみである。

この作品は五六年間の記事である(一〇六七―一〇七三)。渡宋した我子に對する細かい情を描いてゐるこの作品の序ともいふべき所に、

はかなくてすぎはべりにけるとし月のことども、をかしうもあやしきもかずしらずつもりはべりにけれど、それをしるしおきて人の見るべきことにもはべらぬを、年八十になりて、よにたぐひなきことのはべれば、心ひとつにみはべるかしはしかきつけてみ侍まほしうて。

とあつて、大體この作品の著述態度を明かにしてゐる。序文の如きものゝある事は、例へば『讃岐典侍日記』などにも見る事の出來る所であつて、これによつてこの作品が誰か讀者を考慮に入れてゐた事が知れる。この事は只この部分のみの事ではなく、この作品の隨所に發見出來る根本的な

一事實である。『讃岐典侍日記』などに現れてゐたと同じ様な手法がこの作品にも表れてゐる。即ち、

かどでし給とてさはぐに、こゝろのうちをしはかるべし。

あみだ佛にすくひたまへとねんじて、くるまにかきのせらるゝほどの心ちをしはかるべし。

などがそれで、相手が誰であるかは勿論分明でないが、とにかく相手のあつた事は認められて然るべきである。前の序文めいたものにもまして、かういふ態度を明白に示してゐるのは、次の文である。

かやうのことをかしおもふ（う?）にもはべらず、たゞいふかたなく、ひとにとふともかひありてよひ（本三本）らしきこえて見すべきならねば、たゞなく／＼もおぼゆるまゝにいひはべるなり。よに侍らずなり侍りなんに、なちらしそといひをけど、それもおもひしる人かならずしもはべらじ。もしあはれしり給はん人は、あはれともおぼせかし。

作者の意圖がかういふ子のことであるから、單に自分の愛子に對する思慕の情をひとりひそかにもらした作品であるとは考へられない。この作品は成尋の母が自分を通して得た經驗を凡て自分の立場から描いてゐるのであつて、主人公は勿論作者自身であるが、『蜻蛉日記』の道綱母が夫兼家

や一子道綱に對してとつたと同じ様な態度をこの作者は必ずしもとつてはゐない。この作者の成尋に對してとつてゐる態度は、『讃岐典侍日記』の作者が堀河院にとつた、それと類似のものであると言へる。即ち母が子に對する思慕の情を述べてゐる點に於ては母が中心であるけれ共、子によつて母が引きづられて行く點で子が中心である。何れが主であるかを明白に區別することは出來ないが、何れかと言へば作者の方が主になつてゐるとも見られる。

この作品を通してうかゞはれるものは、親を置いて去つて行く子に對する母の悲しみである。修法などにも驗の顯著であつた高僧が何故に泣き悲しむ母を殘して行つたのかはつきり分らないが、成尋がとつた様な態度は平安時代が末になるに從つて、宗教的に佛教が考へられねばならない様な客觀的情勢になつて來た一つの現れと見るべきであらうか。母の悲しみは一つ一つあげるまでもない。只母が如何なるものであるかを示した最もよい例を一つ引いておくに止める。

たかきもいやしきも、はゝのこをおもふこゝろざしは、ちゝにはことなるものなり。はらのうちにて、みのくるしう、おきふしもやすうせねど、我身よくあらんとおぼえず、これを見るめよりはじめて、人よりよくてあれかしと思ひねんじて、うまるゝおりのくるしさもものやはおぼゆる。

母の愛といふものは決して並一通りのものではない。この子が生れてからといふもの、人に抱か

せると泣き、自分が抱くとなきやむので、少しでもなかせまいと苦心した。夜なども膝の上にねかせて、百日過ぎるまでは乳母にもあづけなかつた。かうして慈しんだ我子がすげなくも自分を置いて渡宋の決意をして行つてしまつた。身は宗教に關係あるものとは言へ、如何なる母でもこれを悲しまずには居ない。その結果は死への憧憬をする樣になつた。この作品に死にたいといふ事は何箇所となく出て來る。そしてその死への希望も自殺ではないらしく、佛教の加護によつて早くこの世を去りたいのであるらしい。がこの死への希望が何だか漠然とした、稀薄なもの丶樣な氣がするのは、その由つて來る所が自殺といふ特異な形でないためもあらう。死をも佛に賴まねばならない程この時分の人の心は他の助力を求めたのである。今は阿彌陀の事のみを心にかけて早く極樂に行きたいとのみ思つて明暮西方を見てくらしてゐる。この心持がやがて最後の、

あしたの日のくもをはらひていづるにも、日にそへてつくりけむつみを、つゆのこさずきやし給へとねんじ
ゆふべの月のひかりを見ても、にやせんまでさそひ給へとたのむ。

といふ心持になるのである。

この作品には歌が相當にはひつてゐて、かなり重要な役目をしてゐるが、それにもまして重要な地位にあるのは消息文である。母が出發以後の成尋の樣子を知つたのは只この消息文のみである

と言つてもよい。それ程この消息文は母にとつて大きなものであり、子に對する一喜一憂がこれによつて動かされて行つた。この消息文は他の作品で言へば歌にも相當すべきものである。然しこの消息文につれて動いて行つた母の氣持がどれ程までによく描かれてゐるかは尙考へるべき餘地がある。

この作品に含まれてゐる時代から言へば、思ひ出の形として表れてゐる成尋の生誕の事などもあるのだから非常に廣いわけであるけれ共、主に渡宋前後の事が誌されてゐる。克明に母としての悲しい思慕の情が描かれてはゐるが、何となく渾然として迫つて來るものがないのは、一つは、子に對する悲しい思慕が次から次にと重疊して來るのではなくて、同じ様な事が繰返して出て來る事に原因してゐるのではなからうか。『讃岐典侍日記』などよりはもう少し主觀的の作品であるが、幾分力が足りない様に思ふ。この作品の主な記事は『更級日記』の記事が終つてから凡十年位後、『讃岐典侍日記』より三四十年前のことである。作者が主人公と同一であつて見れば、その著作時期もその內容とひどい距離をもつものだとは思へないから、この作品が前記二作の中間のものだと言へよう。この作品などでも、主觀的に自分の事を書いてゐる様であり乍ら、一方には他の事を書かねばならなかつた一つの過渡的存在、當時の文藝の流れの全く埒外にあることの出來なか

つた作品と見てよいと思ふ。この作品には集といふ名稱がついてゐるが、『讃岐典侍日記』を日記といふ意味に於て、日記として取扱つてよいものであるが、そのために無理に日記にかへてしまふ必要はないと思ふ。

（本文終り）

文獻

一、この文獻は自分の研究の便宜のためにとつておいた備忘録(ノート)より拾ひ出したもので、少しでも研究家諸氏の參考になればと思つてつけ加へたものである。

一、未見のものも多く、粗漏のものである。諸賢の示敎を仰ぎ逐次訂正増補につとめたいと思つてゐる。

一、日記全般に關した項と、各作品の項とを設け、後者は更に詞章(テキスト)と論文との項に分けた。尙外國又は外國人の研究も二三加へた。

一、各項は出來るだけ年代順に排列した。

文獻

日記一般

日記に就いて	和田英松	史學雜誌	（大正二年十月）
日記文學と女性	久松潜一	日本文學聯講	（昭和二年）
宮廷女流日記文學	池田龜鑑		（昭和二年）
日記紀行文學の本質	池田龜鑑	國語と國文學	（昭和二年四月）
自照文學史	池田龜鑑	國文學體系	（昭和五年）
平安朝に於ける日記の研究	和田英松	日本文學講座	（昭和六年）
平安朝の日記紀行	西下經一	岩波講座日本文學	（昭和七年一月）
日記紀行文學概說	宮田和一郎	月刊日本文學	（昭和七年一月）
日記と和歌	玉井幸助	短歌講座	（昭和七年五月）
平安朝の日記文學	岩永胖	國漢	（昭和七年八月）

王朝時代の日記文學　池田龜鑑　日本文學講座　（昭和七年）

日記文學の創作性　藤井　毅　九大國文學會々報　（昭和八年七月）

日記文學の成立と和歌　久松潜一　短歌研究　（昭和八年十二月）

日記文學と紀行文學　池田龜鑑　日本文學講座　（昭和九年十一月）

平安朝の日記文學　土居光知　日本文學講座　（昭和九年十一月）

日記文學と國語教育　坂口玄章　日本文學の本質と國語教育　（昭和十年）

土佐日記

土佐日記抄　北村季吟　（萬治四年）

土佐日記附註　人見卜幽　（萬治四年）

首書土佐日記　（寛永四年）

土佐日記燈　富士谷御杖　（文化十三年）

土佐日記考證　岸本由豆流　（文政二年）

考異首書土佐日記　加藤磯足　（文政三年）

土佐日記創見　香川景樹　（文政六年）

土佐日記解　田中大秀　（文政十二年）

土佐日記地理辨　鹿持雅澄　（文久三年）

土佐日記舟の直路　橘守部　（天保十三年）

土佐日記註　加藤宇萬伎

土佐日記　楫取魚彦

土佐日記地理辨　早崎益

土佐日記地理辨追考　松本弘蔭

土佐日記見聞抄　小野山隱士樂紫

土佐日記（書入校正）　契沖　下河邊長流

土佐日記　扶桑拾葉集

土佐日記　群書類從

標註土佐日記　久留間璵三　（明治十六年）

校正土佐日記　船曳銕門　（明治十六年）

土佐日記俚言解　佐々木弘綱　（明治十七年）
定本 土佐日記　林甕臣　（明治十八年）
參考標註 土佐日記讀本　鈴木弘恭　（明治十八年）
土佐日記註釋　富田銀次郎　（明治十九年）
土佐日記講義　服部元彥　（明治二十三年）
土佐日記　日本文學全書　（明治二十三年）
校訂標註 土佐日記　增田于信　（明治二十四年）
標註 土佐日記講義　小田清雄　（明治二十四年）
標註 土佐日記講義　三木五百枝　（明治二十四年）
土佐日記地理考　福島成行　（明治二十五年）
校註 土佐日記　佐々木信綱　（明治二十五年）
校訂 土佐日記讀本　橋本光秋 石田道三郎　（明治二十五年）
土佐日記講義　石田道三郎　（明治二十六年）
考異冠註 土佐日記讀本　井上喜文　（明治二十六年）

文章解剖 標註土佐日記　小田清雄（明治二十六年）
土佐日記講義　今泉定介（明治二十九年）
文法詳解 土佐日記要義　逸見仲三郎 神崎一作（明治二十九年）
土佐日記讀本　落合直文（明治二十九年）
土佐日記講義　館森鴻（明治二十九年）
土佐日記講義　猪熊淺麿（明治三十一年）
訂正増補 土佐日記考證　鈴木弘恭 吉野弘隆（明治三十一年）
土佐日記　國文大觀（明治三十六年）
土佐日記讀本　篠田直道（明治四十二年）
土佐日記註釋　富田豐彥（明治四十三年）
頭註 土佐日記通解　有馬與藤太（明治四十三年）
新釋 土佐日記・十六夜日記　中村德五郎（明治四十五年）
土佐日記　國文叢書（大正二年）
土佐日記　國民文庫（大正二年）

國文講義 土佐日記　池邊義象　（大正四年）
土佐日記新釋　豐田八十代　（大正六年）
土佐日記　大野政虎　（大正七年）
土佐日記　日本文學叢書　（大正七年）
譯註 土佐・十六夜・方丈記　飯田潮春　（大正八年）
土佐日記　國文新釋文庫　（大正十年）
校定 土佐日記評釋　吉川秀雄　（大正十一年）
新註對譯 土佐日記　池邊義象　（大正十二年）
新しい解釋の 土佐日記と其口譯　三浦圭三　（大正十三年）
校註 土佐日記　島野幸次　（大正十四年）
土佐日記　校註日本文學大系　（大正十四年）
土佐日記（藤原定家筆）　白石勉　（大正十四年）
土佐日記　有朋堂文庫　（昭和二年）
土佐日記　新釋日本文學叢書　（昭和二年）

土佐日記		全譯王朝文學叢書	(昭和二年)
土佐日記新釋	森山右一		(昭和二年)
土佐日記		日本古典全集	(昭和三年)
定家本土佐日記	育德財團		(昭和三年)
土佐日記	橘純一		(昭和四年)
土佐日記		博文館叢書	(昭和四年)
土佐日記新講	永田義直		(昭和五年)
土佐日記		岩波文庫	(昭和七年)
定本土佐日記 異本研究並に校註	中村多麻		(昭和十年)
土佐日記中海賊の辨	伊藤乘興	日本學會雜誌(九號)	
たてばたつ(土佐日記正月十五日のくだり)	小田清雄	日本學會雜誌(九號)	
土佐日記元日の條の事	赤松景福	大八州學會雜誌(一四二號)	
土佐日記摘評	星川清成	大八州學會雜誌(一四二號)	

土佐日記の宗教觀　來馬琢道　大帝國(十三號)
俳眼より見たる土佐日記　麻衣生　俳味(四ノ六)
土佐日記の地理　喜田貞吉　歷史地理(二ノ七)
土佐日記大港に關する先輩の考證を評す　服部精四郎　歷史地理(三ノ十二、五)
土佐日記中の一節　三宅米吉　國學院雜誌(一ノ四)
土佐日記の地理的研究　松澤卓郎　國語教育(大正十五年二月)
貫之と土佐日記　山崎剛平　國文學(昭和二年八月)
土佐日記の本文批評　池田龜鑑　國語と國文學(昭和四年十一月)
先驅者としての紀貫之の表現　齋藤清衛　國語と國文學(昭和五年四月)
本文批評の史的考察及び批評法(土佐日記)　金子岩吉　國漢研究(昭和六年九月)
土佐日記の歌を通して見たる紀貫之　吉原俊夫　眞人(昭和六年十二月)
土佐日記縣居說　倉野憲司　文學(昭和七年一月)
紀貫之の年齡に就いて　谷馨　槻の木(昭和七年十月)
紀貫之新論　波多江種一　國學院雜誌(昭和八年四月)

蓮華王院藏貫之筆土佐日記の本文に關する研究　池田龜鑑　國語と國文學（昭和八年九月）
紀貫之論　石井直三郎　短歌研究（昭和八年十月）
土佐日記中の貫之の歌　武島羽衣　綜合詩歌（昭和九年一月）
土佐日記概說　森本治吉　二松（昭和九年二月）
紀貫之論　藤田德太郎　文學（昭和九年八月）
土佐日記の研究　小宮豐隆　日本文學講座（昭和九年）
土佐日記に地理の誤あるか　山田孝雄　文學（昭和十年一月）

蜻蛉日記

蜻蛉日記考證　契沖
蜻蛉日記解環　坂徵（天明五年）
蜻蛉日記解環目錄　小山田與清
蜻蛉日記解環旅寢　五十嵐篤好
蜻蛉日記紀行解　田中大秀

蜻蛉日記註釋　萩原宗固

蜻蛉日記　日本文學全書（明治二十三年）

蜻蛉日記　國文大觀（明治三十六年）

蜻蛉日記　國文叢書（大正三年）

蜻蛉日記　日本文學叢書（大正七年）

蜻蛉日記　校註日本文學大系（大正十四年）

蜻蛉日記　新釋日本文學叢書（昭和二年）

かげろふの日記　全譯王朝文學叢書（昭和二年）

蜻蛉日記　有朋堂文庫（昭和二年）

蜻蛉日記　日本古典全集（昭和三年）

校註蜻蛉日記　石川佐久太郎（昭和四年）

蜻蛉日記作者傳　櫻井秀　わか竹（大正三年十二月以下）

蜻蛉日記に現はされた愛欲の世界　齋藤清衞　國語教育（昭和二年十一月）

天暦期を背景として見たる蜻蛉日記の作者	齋藤清衛	國語と國文學	（昭和四年十月）
蜻蛉日記新考	植松安	言語と文學	（昭和五年七月以下）
蜻蛉日記に關する二三の考察	荒木田楠千代	國語と國文學	（昭和六年四月）
寫實小説としての蜻蛉日記	久松潜一	日本文學講座月報（二號以下）	
稿本「蜻蛉日記註釋」	正宗敦夫	文學	（昭和七年一月）
蜻蛉日記に關する新發見	岡田稔	國語と國文學	（昭和七年五月）
蜻蛉日記人物考	坂口玄章	國語と國文學	（昭和七年六月）
校註かげろふ日記契冲本の解説	吉川理吉	月刊日本文學	（昭和七年十月）
傳大納言殿母上集	荒木田楠千代	國語と國文學	（昭和八年一月）
蜻蛉日記考	坂口壽子	文學	（昭和八年五月）
蜻蛉日記の一觀點	市村平	國學院雜誌	（昭和八年九月）
蜻蛉日記概説	志賀喜久政	二松	（昭和九年八月）
蜻蛉日記の研究	喜多義勇	日本文學講座	（昭和九年）
蜻蛉日記風俗略考	和田倫子	風俗研究	（昭和九年十月以下）

蜻蛉日記と和泉式部日記とを通してみる兩著者の傾向と日記の意義　多胡順子　國語・國文（昭和十年三月）

紫式部日記

紫式部日記傍注　壺井義知（享保十四年）

紫式部日記解　足立稻直（文政二年）

紫式部日記釋　清水宣昭（天保五年）

紫式部日記分段（寫）

紫式部日記標目（寫）

紫式部日記　扶桑拾葉集

紫式部日記　群書類從

紫式部日記　日本文學全書（明治二十三年）

校正首書　紫式部日記　鈴木弘恭（明治二十七年）

紫式部日記講義　長田致孝（明治二十八年）

紫式部日記講義　三木五百枝（明治三十二年）

評釋紫女手簡　木村正三郎　（明治三十二年）

紫式部日記　國文大觀　（明治三十六年）

紫式部日記　國文叢書　（大正二年）

紫式部日記繪詞　丹鶴叢書　（大正二年）

新譯紫式部日記　與謝野晶子　（大正五年）

紫式部日記繪卷　風俗繪卷圖畫刊行會　（大正六年）

紫式部日記　日本文學叢書　（大正七年）

紫式部日記繪卷物　森川勘一郎　（大正十年）

紫式部日記繪卷物　大和繪同好會　（大正十年）

紫式部日記精解　關根正直　（大正十三年）

紫式部日記　校註日本文學大系　（大正十四年）

紫式部日記　有朋堂文庫　（昭和二年）

紫式部日記　新釋日本文學叢書　（昭和三年）

紫式部日記　日本古典全集　（昭和三年）

紫式部日記　　博文館叢書　（昭和四年）
紫式部日記評釋　永野忠一　（昭和四年）
紫式部日記　　岩波文庫　（昭和五年）
紫式部日記全釋　小室由三　（昭和五年）
紫式部　關谷眞可禰　わか竹（四ノ四、五）
紫式部傳　櫻井秀　わか竹　（大正六年三月―十月）
紫式部日記の傳記　與謝野晶子　わか竹　（大正六年十二月）
紫式部の人生觀　梅澤和軒　帝國文學（五ノ五、七）
紫式部と淸少納言に就いて　三上參次　日本大家論集（二ノ四）
源氏物語著作の時期　手塚昇　國語と國文學　（大正十三年九月）
源語及日記より見たる紫式部　手塚昇　國語と國文學　（大正十四年四月）
古式に則る讀書鳴絃の儀　佐野惠作　國語敎育　（大正十四年八月）
紫式部の物語の製作上及本質上の主義　志田義秀　國語と國文學　（大正十四年十月）

紫式部日記に見えたる御湯殿讀書の儀の條について　元田修三　國語と國文學　（大正十五年一月）
紫式部日記に表はれた服裝　中島幸枝　風俗研究　（昭和二年六月）
紫式部と大貳三位　石村貞吉　國語と國文學　（昭和二年十二月）
紫式部新考　與謝野晶子　太陽　（昭和三年一月、二月）
紫式部と淸少納言　市村平　國學院雜誌　（昭和三年八月）
紫式部日記考　星加宗一　日本古典全集　（昭和三年）
紫式部宮仕年代考　今小路覺瑞　國語・國文の研究　（昭和四年三月―五月）
紫式部の文學論　三木幸信　國史と國文　（昭和四年四月）
源氏物語に描く作者の自畫像いろ〳〵　島津久基　國語と國文學　（昭和四年十月）
紫式部の人としての生涯　河岡新兵衞　國語と國文學　（昭和四年十月）
紫式部の觀照と思索　西片伹三　國語と國文學　（昭和四年十月）
源氏物語成立史序說　西田正一　言語と文學　（昭和五年五月）
紫式部私考　岡一男　文學思想研究　（昭和五年）
日記に表はれた紫式部の苦惱　岡田稔　鹿兒島日本文學　（昭和六年七月）

紫式部日記に表れたる服装　中島幸枝　風俗研究（昭和六年八月以下）

紫　式　部　石村貞吉　岩波講座日本文學（昭和六年）

紫式部の歌評釋　小金井素子　短歌講座（昭和七年）

紫式部の教育觀と婦人觀の一面　市村平　國學院雜誌（昭和七年五月以下）

紫式部日記の消息文混入説の否定並に零本説への疑ひ　吉川理吉　國語・國文（昭和八年六月）

紫式部日記と更級日記　西下經一　國語と國文學（昭和八年十月）

紫式部私解　河岡新兵衛　水可美（昭和八年五月以下）

紫式部日記に於ける「こまかに」就いて　渡邊榮　國漢會誌（昭和八年十二月）

紫式部日記雜考　今小路覺瑞　立命館文學（昭和九年七月以下）

紫式部についての覺書　池田勉　昧爽（昭和九年七月）

紫式部の越前羇旅歌　たべのつかさ　水甕（昭和九年十一月）

紫式部日記雜考　曾澤太吉　京都帝國大學國文學會記念論文集（昭和九年）

紫式部日記の研究　今小路覺瑞（昭和九年）

紫式部の研究　望月世教　日本文學講座（昭和九年）

更級日記

更科日記　扶桑拾葉集

更科日記　群書類從

更科日記　日本文學全書（明治二十三年）

校註 更科日記　佐々木信綱　明治二十五年）

更科日記講義　大塚彦太郎（明治三十二年）

改訂 更科日記略解　關根正直（明治三十二年）

更科日記　國文大觀（明治三十六年）

更科日記　國文叢書（大正三年）

更科日記　日本文學叢書（大正七年）

更級日記（定家卿筆）　佐々木信綱（大正十四年）

更級日記　校註日本文學大系（大正十四年）

更級日記錯簡考　玉井幸助（大正十五年）

更級日記新註　玉井幸助　（大正十五年）

校本更級日記　佐々木信綱　（大正十五年）

校註更級日記　關根正直　（昭和二年）

更科日記　有朋堂文庫　（昭和二年）

更級日記　日本古典全集　（昭和三年）

更級日記　新釋日本文學叢書　（昭和三年）

更級日記　博文館叢書　（昭和四年）

更級日記　八波則吉　（昭和四年）

更級日記　岩波文庫　（昭和五年）

更級日記講義　國文學講座　（昭和五年）

更級日記評釋　宮田和一郎　（昭和六年）

評釋更級日記　友田宜剛　鎗田龜次　（昭和七年）

更級日記の著者　玉井幸助　國語教育　（大正十二年十二月）

定家卿手寫の更級日記	玉井幸助	國語教育	（大正十三年十月）
更科日記錯簡考に就いて	佐々木信綱	心の花（二八ノ九）	
更級日記について思ふこと	廣瀬數子	國語教育	（大正十五年八月）
環境の生める幻想の人孝標女	林　謙治	國語教育	（大正十五年）
更級日記冒頭の句	石村貞吉	國語と國文學	（昭和二年七月）
更級日記詞章研究	白石　勉	國語國文の研究（九號以下）	
濱松中納言物語と更級日記	齋藤清衛	國語教育	（昭和三年六月）
御物本更級日記に關する報告	玉井幸助	國語教育	（昭和五年十二月）
更級日記に於ける浪漫思想の考察	大内義郎	國漢研究	（昭和六年五月以下
本文批評の史的考察及び批評法（更級日記）	金子岩吉	國漢研究	（昭和六年八月）
更級日記内容の一解釋	佐山　濟	國語と國文學	（昭和六年九月）
「まの」・「いまたち」其他について	今井卓爾	文學	（昭和六年十二月）
更級日記作者の靈生活	市村　平	國文學誌	（昭和六年十二月）
「更級日記評釋」を讀みて	松田好夫	國漢研究	（昭和六年十二月）

更級日記の夢に現れた二元的欲求の相剋　谷　亮平　歴史と國文學　（昭和七年七月）
更級日記中の疑問　今井卓爾　國語・國文　（昭和八年二月）
更級日記の雙關　小川壽一　國漢研究　（昭和八年六月）
紫式部日記と更級日記　西下經一　國語と國文學　（昭和八年十月）
更級日記と俳句精神　村瀬英二　槻の木　（昭和九年三月）
更級日記の一考察　木内靜子　眞人　（昭和九年七月）
更級日記の研究　宮田和一郎　日本文學講座　（昭和九年）
更級日記概說　長野重三　二松　（昭和十年三月）

讃岐典侍日記

讃岐典侍日記　群書類從
讃岐典侍日記標目　（寫）
讃岐典侍日記　日本文學全書　（明治二十三年）
讃岐典侍日記　國文大觀　（明治三十六年）

讃岐典侍日記　有朋堂文庫（昭和二年）

讃岐典侍日記　萩野由之　國學院雜誌（一ノ二號）
讃岐典侍考　櫻井秀　國學院雜誌（明治四二年七、八月）
歴史上に於ける乳母の勢力　和田英松　國學院雜誌（明治四十五年一月）
讃岐典侍日記の作者に就て　櫻井秀　わか竹（大正六年二月）
讃岐典侍日記の印象　玉井幸助　國語教育（十二ノ六）
「讃岐典侍日記」の作者について　玉井幸助　史學雜誌（昭和四年九月）
讃岐の典侍の日記　玉井幸助　國語教育（昭和四年十月）
讃岐典侍日記通釋　玉井幸助　國語教育（昭和七年三月以下）
讃岐典侍評論　戸部秀濟　國漢會誌（昭和八年十二月）

和泉式部日記

和泉式部物語　扶桑拾葉集

和泉式部日記		群書類從	
和泉式部日記標目		（寫）	
和泉式部日記		日本文學全書	（明治二十三年）
和泉式部日記		國文大觀	（明治三十六年）
和泉式部日記		國文叢書	（大正四年）
新釋和泉式部日記	與謝野晶子		（大正五年）
和泉式部日記		日本文學叢書	（大正七年）
和泉式部日記		校註日本文學大系	（大正十四年）
和泉式部全集		日本古典全集	（昭和二年）
和泉式部日記		全譯王朝文學叢書	（昭和二年）
和泉式部日記		新釋日本文學叢書	（昭和二年）
和泉式部日記		有朋堂文庫	（昭和二年）
和泉式部物語（應永本）	小川壽一		（昭和三年）
校定和泉式部日記新釋	竹野長次		（昭和五年）

異本和泉式部日記（三條西本） 文學 （昭和八年八月）

和泉式部傳の研究 岡田希雄 國語國文の研究 （昭和二年一月以下）

和泉式部とその同輩 吉川るげ生 宗教と藝術 （昭和二年六月）

和泉式部日記と戀歌 齋藤清衞 國語教育 （昭和二年十二月）

和泉式部小論 須藤明夫 眞人 （昭和三年一月）

應永本影寫和泉式部日記について 岡田希雄 國語國文の研究（二五）

和泉式部日記の複製本 池田龜鑑 國語と國文學 （昭和四年八月）

和泉式部とその歌 上田英夫 國語と國文學 （昭和四年十月）

和泉式部の作家態度に就て 苫野三郎 奏波 （昭和六年一月）

和泉式部 岡田希雄 岩波講座日本文學 （昭和六年）

和泉式部集觀照 上田英夫 歌と觀照 （昭和六年八月、九月）

和泉式部日記の本文意義趣味考 五十嵐力 綜合世界文學研究 （昭和六年）

異本和泉式部日記 池田龜鑑 文學 （昭和六年十二月）

和泉式部の歌　與謝野晶子　短歌講座　（昭和七年）
和泉式部の歌評釋　谷鼎　國民文學　（昭和七年七月以下）
和泉式部の歌一首　谷鼎　文學　（昭和七年九月）
和泉式部集の歌と和泉式部日記　清水文雄　文學　（昭和七年十月）
和泉式部家集評釋　加藤順三　帚木　（昭和七年十一月）
和泉式部日記中の戀愛と時代風俗　和田倫子　風俗研究　（昭和八年五月以下）
和泉式部日記「おしたるあし」考　青敏夫　九大國文會會報　（昭和八年七月）
和泉式部日記書史　青木はる　國漢研究　（昭和八年九月）
和泉式部日記は果して斷簡か　青木はる　歴史と國文學　（昭和八年十月）
和泉式部小論　次田潤　短歌研究　（昭和八年十月）
和泉式部正集に於ける重複歌について　村松鐘一　國漢會誌　（昭和八年十二月）
和泉式部の歌風につきて　中島貞子　潮音　（昭和九年一月）
和泉式部日記中の五首贈答歌　玉井幸助　文學　（昭和九年一月）
和泉式部日記を見る　間宮俊男　歌と評論　（昭和九年二月、三月）

和泉式部日記の研究　岡一男　日本文學講座　（昭和九年）

和泉式部試論　宇和川匡助　國文學誌要　（昭和九年十一月）

蜻蛉日記と和泉式部日記を通して見る兩著者の傾向と日記の意義　多胡順子　國語・國文　（昭和十年三月）

和泉式部日記の和歌に關する考察　田中榮三郎　國語と國文學　（昭和十年三月）

庵主

熊野紀行・遠江の道記　扶桑拾葉集

庵主　群書類從

庵主　國文大觀　（明治三十六年）

庵主のこと　山田孝雄　國語・國文の研究　（昭和五年二月）

篁物語

新たに知られた小野篁日記　後藤丹治　國語と國文學　（昭和二年十二月）

篁の配流と其歌の傳說に就て　小野秋風　鄉土研究　（昭和六年八月）

篁物語（彰考館本）　文學　（昭和八年四月）

篁物語　宮田和一郎　國語・國文　（昭和九年八月）

平仲物語

大和物語の異本と平中物語の發見　川瀨一馬　國文學誌　（昭和六年十一、十二月）

別本大和物語と平仲物語の異本　鈴木脩一　文學　（昭和八年六月）

多武峰少將物語

多武峰少將物語　群書類從

多武峰少將物語考證　丸林孝之

多武峰少將物語　日本文學全書　（明治二十三年）

多武峰少將物語　國文大觀　（明治三十六年）

多武峰少將物語の文學史的意義　岩永胖　國語と國文學　（昭和六年十一月）

多武峰少將物語の成立年代と高光の歿年　坂口玄章　國語と國文學　（昭和七年十二月）

多武峰少將物語に現はれたる貴族文學的特質　岩永胖　文學（昭和八年十月）

成尋阿闍梨母集

成尋阿闍梨母日記　史學論叢（昭和五年）
成尋阿闍梨母日記解説　佐々木信綱　史學論叢（昭和五年）
成尋阿闍梨母集　文學（昭和八年五月、六月）
成尋阿闍梨母集（複製）

歐文文獻

Aston, W. G. : The Tosa Nikki. Yokohama. 1876.
Pfizmaier, A. : Das Tagebuch von Sara-Sina. Wien. 1880.
Pfizmaier, A. : Erklärung des Tagebuches Idzmi-Siki-Bu. Wien. 1885.
Harris, F. R. : Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital. Tokyo. 1910.

Porter, W. N. : The Tosa Diary. London. 1912.

O. A. Shepley & Kochi, D. : Diaries of Court Ladies of Old Japan. Boston & New York. 1920.

——文献終——

—索引終—

な

に

の

は

ひ

さ

し

か

き

索　　引

〔表音的五十音順〕

あ

い

昭和十年十月三日印刷
昭和十年十月九日發行

平安朝日記の研究　奥付

定價貳圓七拾錢

著作權者



著者　今井卓爾

發行者　生地龍太郎
東京市本郷區元町二ノ二一

印刷所　山村印刷所
東京市芝區新堀河岸三十一

發行所
東京市本郷區
元町二ノ二一
啓文社
振替東京三八七七六番
電話小石川五五二九番

啓文社出版書目

日大教授・文學士 大和資雄先生著

新刊 教育的文學理論

▽菊判特製 ▽四百餘頁 定價二・八〇 送料廿二錢

教育界の寶玉

文學教材の取扱に際して文學好きな教授者は漠然と氣分や直覺に頼りすぎ、然らざる者は機械的な辨釋をして通りすぎ、その鑑賞・批評及び創作の指導については、確乎たる理論的根據を缺いてゐるやうに見うけられる。從來の文學論は或は難解、或は雜駁或は文學青年的知識を供給するのみで、直接に教授上の參考にならないのである。著者は現代英文學界に獨自の地步を築きつゝある青年學徒にして東京高師・東京帝大等に學べる頃より多年詩歌を創作し、今や教壇に立つて文學教材を日々取扱ひ、その經驗に基づき更に我が大師空海の文鏡秘府論をはじめ泰西諸文豪の文學理論を研究し、文學は如何なる題材を取つて如何に表現傳達すべきかを考察してこゝに妥當な理論を展開せしめた。文學愛好の教授者は本書によつて確乎たる根據を得べく、また文學が分らぬといふ人も本書によつて始めて興味を持ち文學的識眼を開かれることであらう。實にこの著者にしてこそ初めてこの企をなし得る所である。今や國家が師範教育に一層高い教養を期待しようとする折から、全國の小學校・中等學校において國語科及英語科の文學教材を取扱ふ教授者諸氏の座右に本書を薦める。

◆國語教授者待望の名著!! 忽ち重版


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03013 1395